評議員

文學博士 萩野由之
文學士 笹川臨風

文學博士 黑板勝美
文學士 菊池謙二郎

文學博士 松本愛重
文學博士 三宅米吉

（イロハ順）

黑川真道編

國史叢書

源平軍物語 一

國史研究會藏版

解題

源平軍物語　十五卷（本卷は前編として十二卷迄を收め十三卷以下は之を後編に收む）

本書は序文に記して云、「平家物語に洩れたるを拾ひ、或は載すると雖、委しからざるは再び記す。元より詳なるは、平家物語に讓りて悉く記すに及ばず。然りとて記さゞれば、事の始終明かならざる故に、大意を取りて記しぬ。治承四年の頃より始めて、平家亡びし後、源家世を治むるに終りぬ。されば源平の榮枯を交へ記して、源平軍物語と名づけ侍る」と見えたるにて、本書編纂の作意のある所を知るべし。要するに平清盛一家の繁昌より筆を起し、源賴朝平家を討伐し、尋で弟義經を逐ひ、朝許を得て諸國に守護地頭を置き、玆に始めて幕府が政權を掌握するに至るまで、悉く其の事蹟を記して筆を擱きたるなり。されば本書は平家物語と對照せんに、彼の足らざるを補ひ、委しからざるものは更に之を詳載しあれば、是

彼互に參觀すれば、覺えず讀者をして興味津々として盡くる事なからしむべし。憾むらくは作者の詳ならざることを。されど卷尾に明暦二年丙申孟春吉旦と明記しあれば、出版時代は此の時ならん。恐らくは本書も同時代の作なるべしと思考せらる。猶後考を竢つことゝせん。

大正三年八月

黑川眞道識

例言

一、原本十五卷なるも、頁數の都合に因り、本編には十二卷迄を採收して之を第一卷とし、十三卷以下は、第二卷として分冊收載する事となせり。

一、讀誦を平易ならしむるが爲め、全卷を通じて、語格を正し假名遣を改めたりと雖、行文の流麗典雅なる、假名を漢字に改むるの却て原本の價値を毀くるやを慮り、必らずしも漢字を補塡するに努めざりき。

一、原本の特徴文字、たとひば「猿物(さるもの)ぞと心得て」云々の如きは、却て原本の儘を存して振假名を施し、其特徴保存に力めたるが如き、其一例なり。

目次

源平軍物語一

卷第三

卷第四

卷第五

卷第六

卷第九

卷第十

卷第十一

卷第十二

目次終

源平軍物語

序

天の道は、盈てるを虧き驕れるを惡む。太政入道淸盛は、押して天子の外祖父となりて、四海を我まゝにし、王公をなみし奉り、一族の昇進六十餘人、卄餘年の間は、官階天下にみち〳〵たり。樂去りて悲來る。積惡のいたす所、禍子孫にながれ、逆罪の招く所、科家門に及ぶ。人背き心替りて、三年のうちに亡びぬ。されば十二卷の物語に載せたりと雖、記す所に詳略あり。或は時同じくして載せざるあり。今集むる十五卷は、平家物語に洩れたるを拾ひ、或は載すると雖、委しからざるは再び記す。元より詳なるは、平家物語に讓りて悉く記すに及ばず。然りとて記さゞれば、事の始終明かならざる故に、大意を取りて記しぬ。治承四年の頃より始めて、平家亡びし後、源家世を治むるに終りぬ。されば源平の榮枯を交へ記して、源平軍物語と名づけ侍る。

源平軍物語卷第一

清盛行二大威德法一附行二陀天一幷淸水寺詣の事

抑淸盛打續き繁昌し給ひける事、幼少の昔、中の御門の家成の卿の許に、局ずみしてありけるに、彼卿の祈の師に、大納言の阿闍梨祐眞とて、貴き眞言師あり。家成の持佛堂にて、護身加持しておはしければ、淸盛も常に對面ありて、問ひ給ひける事は、眞言上乘の祕法の中に、如何なる法か、斯樣の在家の者の行ひ奉り、揭焉の利生にあづかる事候やと申されたりければ、阿闍梨答へて曰く、信心至りて修行すれば、何れの法も成就すべし。但威を一天に振ひ、德を萬人に抽んずるは、五大明王の其一つ大威德の法こそ成就あれば、必ず天子の位に昇るとは申したれといひければ、則ち阿闍梨を師匠と賴みて、件の法を傳受して、七ヶ年の間、一向淸淨に齋戒し、可曾が

滋味をも斷じ、玄石が美しき酒をも禁じて、勇猛精進し信心勸行し給ひけり。七ヶ年に滿ちたる夜、道場の上に聲ありて、

つとめんと思ふ心の清盛は花は咲きつゝ朶も榮えん

といひければ、淸盛後賴もしく思ひて、彌精誠をいたし、祈念しけれども、餘りの貧者なりければ、倩案じて思ひけるは、我れ諸國庄園の主なり。たとひ何となければども、生得の報とて、身一つ助くる分はあるぞかし。況や淸盛が身に於てをや。希代の果報かなと怪む處に、或時蓮臺野にして、大なる狐を追出し、弓手に相付けて、既に射んとしけるに、狐忽ちに黃女に變じて、につこと笑ひ立向ひて、やゝ我命を助け給はゞ、汝が所望を叶へんといひければ、淸盛矢をはづし、如何なる人にておはすぞと問ふ。女答へて曰く、我は七十四道の中の王にてありといふ。さては貴狐天王にておはしますにやとて、馬より下りて敬ひ屈すれば、女又本の狐となりて、こう〳〵と鳴いて失せぬ。淸盛案じけるは、我れ財寶に飢ゑたる事は、荒神の所爲にぞ。荒神を鎭めて財寶を得んにはゝ、辨財妙音にはは如かず。今の貴狐天王は、妙音の其一つ

なり。偖は我れ陀天の法を成就すべき者にこそとて、彼法を行ひける程に、又返して案じけるは、實(まこと)や外法成就の者は、子孫に傳へずといふものを。いかゞあるべきと思はれけるが、よし〳〵當時の如く、貧者にてながらへむよりは、一時に富みて名を揚げんにはとて行はれけれ共、遉(ゆくすゑ)が後いぶせく思ひて、豫て清水寺の觀音を賴み奉り、御利生を蒙らんと、千日詣を始めたり。雨の降るにも風の吹くにも日をかゝず、千日既に滿じける夜は通夜したり。夜半計りに、兩眼拔けて、中に廻りて失せぬと夢を見る。覺めて後淺ましと思ひて、實や佛神は、來らざる果報を願へば、還つて災を與へ給ふといへり。あはれ是は分ならぬ幸を願ふに依つて、觀音が罰に、我魂を拔き給ふが、見えぬるやらんと現心(うつゝごころ)もなし。さるにても人に尋ねんとて、我眼の拔けて、中に廻りて去せぬると夢に見たるは、善きか惡しきかと札に書きて、清水寺の大門に立てゝ、人を付けて是を聞かしむ。參り下向の人多く札を見て、心得ずとのみいひて、誰も善惡をばいはず。兩三日を經て後に、或人これを見て打うなづきて、實に目出度き夢なり。吉事をば目出たしといふ。目出度しとは目出づると書け

り。眼の拔くるは目の出づるなり。此夢主は、日來心苦しく、佗しき事をのみ見けるが、此觀音に歸依し奉るに依つて、難の眼を拔捨て、吉事を見んずる新しき眼を、入替へ給ふ御利生にや。あつぱれ夢や〳〵と、兩三度嘆めて去りぬ。使歸りて斯くと申しければ、淸盛大に悅びて、偖は好き相なりけりとて、彼札を深く納めて、天に仰ぎて果報を待つ。

賴朝伊豆にて艱難に遇ふ事

前の右兵衞の佐賴朝は、去る永曆元年に、義朝の罪に依つて、伊豆の國に流罪せられたりけるが、武藏・相模・伊豆・駿河の武士共、多くは父祖重恩の輩なり。其好忽ち忘るべきならねば、當時平家の恩顧の者の外は、賴朝に心を通はして、軍を起さば、命を捨つべき由申す者、其數あまたありけり。賴朝又心に深く思ひ萌す事なりければ、世の有様を窺ひて、年月を送りけるこそ怖しけれ。伊豆の國の住人伊藤入道祐親法師は、重代の家人なりけれども、平家重恩の者にて、當國には、其勢人に勝れたり。

娘四人あり。一人は、相模の國の住人三浦の介義明が男義連に相具したり。一人は、同國の住人土肥の次郎實平が男遠平に相具したり。第三の女、未だ男もなかりければ、頼朝忍びて通ひける程に、男子一人出來にけり。頼朝殊に悦んで寵愛す。字をば千鶴とぞ申しける。三歳の春、少(おさな)き者共數多引具して、乳人に懷れて、前栽の花を折りて遊びけるを、祐親法師、大番果てゝ國に下りたりける折節見付けて、此稚き者は、誰人ぞと尋ねけれども、乳人答ふる事なくして逃去りにけり。入道内に入りて妻女に問ひければ、あれこそ京上りし給ひたりし隙に、いつき娘の殿して設けたる少人(おさなきひと)よといひければ、入道瞋りて誰人ぞと責め問ふ。兵衞の佐殿とぞ答へける。祐親申しけるは、商人修行者抔を男に持ちたらば、中々さでもありなん。源氏の流人聟に取りて、平家の御咎あらん折は、いかゞは申すべきとて、雜色三人・郎等二人仰付けて、彼少子を呼出して、伊豆のまつ川の奥白瀧の底に、罧(ふしづけ)にせよといひければ、三つなる少き心にも、事柄懶(ものう)くや覺しけん、泣き悶えて逃去らんとしけるを、取留めて郎等に與へけるこそうたてけれ。みめ事柄淸らかに、さすが物に紛ふべくも

見えざりければ、雜色郎等共、何として殺すべしとも覺えず、悲しかりけれども、否といはゞ、思ふ處ありとて、首を切られん事疑なければとて、泣々懷き取りて、彼所に具し行きて、䑓にしてけるこそ悲しけれ。娘をば呼取りて、當國の住人江間の小次郎を聟に取りてげる。賴朝此事ども聞き給ひ、嗔る心も猛く、歎く心も深うして、祐親法師を討たんと思ふ心、千度百度進みけれども、大事を心に懸けて、其事をなさずして、今私の仇を報いんとて、身を亡し命を失ふ事愚なり。大きなる志あるものは、小怨を忘るとて、思ひ宥めてぞ過されける。入道が子息伊東九郎祐兼、竊に賴朝に申しけるは、父入道老狂の餘り、便なき事をのみ振舞候ひし上に、猶も惡行を企てんと仕る。心の及ぶ處制し仕れ共、若し思の外の事もこそ出で來侍るべければ、立忍ばせ給へと申しければ、賴朝は、嬉しくも申したり。是年來の芳心なり。入道に思ひ懸けられては、何處へか遁るべき。身に過なければ、自害をすべきにも非ず。只命に任せてこそはあらめとぞ答へられける。野三刑部盛綱・藤九郎盛長なんどに仰含められけるは、賴朝一人遁出でんと思ふなり。是にて祐親法師に、故なく命を

頼朝、北條時政に頼る

失はれん事、言甲斐なし。汝等斯くてあらば、頼朝なしと人思ふべからずとて、大鹿毛といふ馬に乘り、鬼武といふ舍人計りを具して、夜半に遁れ出でられける。道すがらも、南無歸命頂禮八幡大菩薩、義家朝臣が由緒を忽に捨て給はずば、征夷將軍に至りて、朝家を守り神祇を崇め奉るべし。それ猶叶ふべからずんば、伊豆一國が主として、祐親法師を召捕つて、其怨を報い侍るべし。何れも宿運拙うして、神恩に預るべからずんば、本地は彌陀如來にて在します。速に命を召して、後世を助け給へとぞ祈誓申されける。盛綱・盛長は、頼朝遁れ出でられて後は、一筋に敵の打入らんずるを相待ちて、名を留むる程の戰、此時にありと思ひける程に、夜も漸く明けにければ、各出去りにけり。其後北條の四郎時政を頼みて過し給ひける程に、又彼が娘に、偸に嫁してけり。北條の四郎、京より下りける道にて、此事を聞きて大に驚き、同道として下りける前の檢非違使兼隆を、聟に取るべき由契約してける。國に下着しければ、知らざる體に持成して、彼娘を取りて、兼隆が許へ遣しける。されば共件の娘、兵衛の佐に志殊に深かりければ、白地(あからさま)に立出づる樣にて、足に任せて何處を指

すともなく、兼隆が宿所を逃出でにけり。良程經れども見えざりければ、怪をなして尋ね求むれども、向後も知らずなりにけり。彼女は夜もすがら伊豆の山へ尋ね行きて、頼朝の許に籠りにけり。時政・兼隆、此由を聞えてければ、各憤をなしけれども、彼山は大衆多き所にて、武威にも怖れざりければ、左右なく押入りて、奪ひ取るにも能はず過行きける。懷島の平權の頭景義此事を聞きて、頼朝の許に馳行きて、給仕用心しけり。藤九郎盛長、或夜夢に見けるは、頼朝足柄の矢倉嶽に尻を懸けて、左の足には外の濱を踏み、右の足にては鬼界が島を踏み、左右の脇より日月出で光をならぶ。伊法法師金の瓶子を抱きて進み出で、盛綱銀の折敷に金の盃をすゑて進み寄り、盛綱銚子を取りて酒を受け進らすれば、頼朝三度飲み給ふと見て、夢は覺めにけり。盛長此事を頼朝に語りければ、景義申しけるは、夢最上の吉夢なり。征夷將軍として、天下を治め給ふべし。日は主上、月は上皇とこそ傳へ奉れ。今左右の御脇より、光を延べ給ふは、是國王猶將軍の勢に包まれ、東は外の濱、西は鬼界が島迄、歸伏し奉るべし。酒は是一旦醉をなし、終にさめ本心になる。近くは三月、遠く

は三年に、醉の御心醒めて、此夢の告、一つとして相違ふ事はあるべからずとぞ申しける。北條の四郎時政は、外には世間を恐れて、兼隆を聟に取ると雖、頼朝の心の勢を見てければ、内には深く頼みてけり。頼朝も又賢人にて、謀ある者と見てければ、大事をなさんずる事、時政ならでは其人なしと思ひければ、上には恨むる樣にもてなして、相背く心はなかりけり。扨も廿一年の春秋を送りて、年頃日頃何となく過ぎけるに、今年斯る謀叛を發しける事、後に聞えければ、高尾の文覺の勸にぞありける。

文覺由來の事

彼文覺は、渡邊黨に、遠藤左近の將監盛光が一男、上西門院の北面の下﨟なり。母其未だ子なし。夫妻共に家の絶えなん事を歎きて、長谷寺の觀音に詣でて、七ヶ日祈り申しければ、左の袖に、鳶の羽を給はると夢に見て、懷姙して儲けたる子なり。父は六十一、母は四十三にて生れたる一男なり。母は難產にて死しぬ。父赤子を抱き

て歎きける程に、事の縁ありける上、便宜の方人にもと思ひて、丹波の國保津の庄の下司、春木の二郎入道道善といふ者養ひけるが、三歳の時、父盛光も死にゝけり。堅固の孤子なりけれども、血の中より手馴れたれば、さすが捨難うして、道善育みけり。面帳牛皮の童にて、心しぶとく聲高にして、親の敎訓をも聞かず、人の制止事をも用ひず、庄内の童を催し從へて、野山を走り田畠を損じ、馬牛を打はり、目に餘りたる不用仁なりければ、上下如何せんと持餘したり。十三になりける年、一門に遠藤三郎・瀧口遠光といふ者を呼寄せて、元服せさせて烏帽子子とす。父盛光が盛を取り、烏帽子親遠光が遠を取りて、盛遠と名を付け、父が跡を追うて、上西門院の北面に參る。遠藤武者盛遠とぞいひける。少より時々物狂はしくありけり。容顏は勝れざりけれども、大の男の力强く心剛なり。武藝の道人に勝れて、道心もさすがありけるとかや。常には母が難產して死にける事をいひて泣き、父が事を戀うて悲しむ。生年十八歳にて、いとほしき女に後れて、髮を切りて遁世しき。

文覺發心附東歸節女の事

文覺道心の起を尋ぬれば、女故なり。文覺が爲に內戚の叔母一人あり。其昔、事の緣に付きて、奧州衣河にありけるが、歸り上りて故鄉に住む。一家の者共、衣川殿といふ。若く盛なりし時は、みめ容人に勝れ、心ばへなども優にやさしかりけるが、今は盛過ぎて世中も衰へ、寡にて物淋しき住居なり。娘一人あり、名をばあとまとぞいひける。されども衣川の子なればとて、異名には袈裟と呼ぶ。親に似たる子とて、靑黛の眉の渡、丹華の口つき愛々しく、桃李の裝、芙蓉の瞼、いと氣高くして、綠の簪雪の肌、揚貴妃・李夫人は見ねば知らず、愛敬百の媚一つも缺けず。さしも嚴しき女房の、心さへ淸深うして、物を憐れみ咎を怖るゝこと斜ならず。毛嬙・西施が再誕か、觀音西施の垂跡か、深窗の內に扶けられて、旣に人となるなり。軒端の梅の匂いと香しく、庭上の花殊に細にして、十四の春を迎へたり。榮花名聞、人々我も〳〵と心を通はす其の中に、並の里に、源左衞門の丞渡とて、一門なりけるが、內外に付けて

申しければ、恥かしからぬ事なりとて是を遣す。互の心淺からずして、早三年になりぬ。女今年は十六なり、盛遠は十七になりけるが、其の年の三月中旬に、渡邊の橋供養あり。盛遠紺叢濃の直垂に、黑糸縅の腹卷に袖付けて、折烏帽子を着、白金の蛭卷二筋通して卷いたる長刀、左の脇に挾み、其の日の奉行しければ、辻々固めたる兵士共下知し廻して、橋の上に立渡り、ゆゝしくぞありける。供養既に終つて、方々へ下向しける中に、北の橋詰より、東へ三間隔てありける棧敷の中より、女房達數多出でて下向しける中に、十六七にもやあらんと見ゆる女房、輿に乘らんとて、簾を打擧げけるを見れば、世にあり難き女なり。盛遠目くれ心消えて、何處の者やらん、いかなる人の妻子なるらんと、行末見たく思ひければ、輿に付きて行く程に、並の里に渡といふ者が家に見入りたり。是は聞えし衣川の女房の女や。過失なき美人なりけり。如何すべきと、春の末より秋の半迄、臥しぬ起きぬぞ案じけり。思ひ澄して九月十三日の朝、母の衣川が許に伺ひ行き、則刀を拔き、是非なく母が立首を取りて、腹に刀を差當てゝ害せんとす。女現心なし。よく〳〵見れば、甥の遠藤武者盛遠な

り。女泣々申しけるは、抑和殿は我には甥、我は和殿におばなり。此中には殊なる仇なし。就中御邊の母死して後は孤子なれば、孫子を思ふ樣にいとほしう奉る。父とも母とも賴み給ふべし。何人がいかにと讒言したれば、斯く憂き振舞をばし給ふぞ。身に誤ありと覺えず、暫く命を助けて、怨の通を宣へ。晴れ申さんと手を摺りて泣く。盛遠は慈悲なく、目を大に見張りて、おばなりとても、我を殺さんとし給ふ敵なれば遁すまじ。渡邊黨の習として、一目なれども敵を目に掛けて置かず。すはすは只今刺殺さんとて、腹に刀をひやひやと差當てたり。おばは肝魂もなし。わなくわなく、誰人の申したるぞ。我寡にして夫なし。和殿に於て意趣なし。思ひ寄らぬ事をも宣ふ物かな。是はいかなる事ぞやと申す。盛遠は、人の申すにあらず。袈裟御前を女房にせんと、內々申傳へしを聞き給はず、渡が許へ遣したれば、此三箇年人知れず戀に迷ひて、身は蟬の脫殼の如くになりぬ。命は草葉の露のやうに消えなんとす。戀には人の死なぬものかは。是こそおばの甥を殺し給ふなれ。生きて物を思ふも苦しければ、敵と一所に死なんと思ふなりといふ。衣川は、せめての命の

惜しさに申しけるは、旁申しゝ中に斯くとは聞きしかども、さまでの事とも思はず、身貧なれば、何方とも思ひわかざりしを、渡奪ふが如くして取りしかば力なし。斯程に思ひ給はゞ、安き事なり。刀を納めよ。今宵呼びて見せんといふ。盛遠は、なほざりに口を堅めては悪かりなんと思ひて、そらごとせじ。渡が方へ返忠せじなど、能々堅めて刀をさし、今宵參らんとて歸りにけり。衣川は涙を流し、如何はせんとぞ悲しみける。此盛遠が有樣、いふ事を聞かずば、一定事にあひぬべし。さて又呼びて逢はせなば、渡が怨いかゞせんと思ひけるが、案じ廻らして、娘の許へ文をやる。此程風の心地候。打臥す迄の事はなければ、披露までは事々しく候。忍びておはしませ。申合すべき事侍り。寡なる身には、墓なき事のみ侍り。返す〴〵忍びて、唯一人おはしませと書きたり。娘文を取上げ見て、心細き御文の樣かなとて胸打さわぎ、女の童一人具して、假初に出づる樣にて、母の許に來れり。母つく〴〵娘の顔を見て、はら〳〵と泣きて、良久しくありて、手箱より小刀を取出していひけるは、是を以て我を殺し給へとて與へければ、娘大に騷ぎて、是は何事にか。御物狂はし

くなり給へるかとて、顔打あかめて居たり。母がいひけるは、今朝盛遠が來て、樣々振舞ひつる事共、ありの儘にいひつゞけて、此事いかにも〳〵盛遠が思の晴れざらんには、我れ終に安穩なるべしとも覺えず。さればとて渡が心を破らんとにもあらず。由なきわこせ故に、武者の手に係つて亡びんよりは、憂目を見ぬ先に、わこせ我を殺し給へとて、さめ〴〵と泣く。娘是を聞きて、誠に樣なき事なり。心憂き事かなと、なのめならず歎きけるが、つく〴〵是を案じて、親の爲には、さらぬ孝養をするも習なり。御命に代り奉らん。結ぶの神も哀と思召せとて、口には甲斐々々しくいひけれども、渡が事を思ひ出でつゝ、目には涙をこぼしけり。日も既に暮れぬ。盛遠は一人咲して、鬢をかき鬚を撫で、色めきて早來り、女と共に臥し居たり。小夜も漸く更行きて、曉方になりければ、鷄既に鳴き渡る。女暇を乞ふ。盛遠申しけるは、會はずば逢はぬにてあるべし。弓矢取る身と生れて、飽かぬ女に暇を取らせて、戀する習なし。逢はで思ひし思は數ならず。いかなる目に合ふとても、暇奉らんとは申すまじ。今より後は長き契、是だにあらば何事かあるべきとて、太刀を拔いて傍

に立てたり。あゝ今は世の亂ぞ。思ひ儲けし事なれば、會ひぬる後は命くらべ、わこぜの爲には命も惜しからず。わこぜの不祥、盛遠が不祥、渡が不祥、三の不祥が、一度に來るべき宿習にてこそありつらめとて、惣じて思切りたる氣色なり。女良案じていひけるは、暇を乞ひ奉るは女の習、志の程を知らんとなり。斯く申すも打付心の中は、末頼まれぬ様なれば、憚あれども、何事も此世の事に非ずと聞き侍れば、實にも前世の契にこそ侍らめ。さらば我が思ふ心を知らせ奉らん。渡に相馴れて、今年三年になり侍りけれども、折々に付けて、心ならぬ事のみ侍れば、思はずに覺えて、何處へも走り、失せなばやと思ふ事度々なり。され共母の仰の背き難さに、今迄候計りなり。誠淺からず思召す事ならば、只思切りて左衞門尉を殺し給へ。互に心安からん。さらば謀を構へんといふ。盛遠悦ぶ色限なし。謀とはいかにと問へば、女いひけるは、我れ家に歸りて、左衞門尉が髮を洗はせ、酒に醉はせて内に入れ、高殿に伏せたらんに、濕れたる髮を搜つて殺し給へといふ。盛遠悦んで夜討の支度しけり。女暇を得て家に歸り、酒を儲け渡を請じて申しけるは、母の勞とて忍びて呼

び給ひし程に、昨日罷りて侍りしに、此曉よりよくならせ給ひぬ。悦び遊ばんとて、我身も飮み夫にも强ひたりけり。元來思ふ中の酒盛なれば、左衞門尉前後不覺に飮み醉ひたり。夫をば帳臺の奥にかき臥せて、我身は髮を濕らし、たぶさに取りて、烏帽子を枕に置き、帳臺のはたに臥して、今や〳〵と待つ所に、盛遠夜半計りに忍びやかに狙ひ寄り、濡れたる髮を搜り取りて、只一刀に首を斬り、袖に包みて家に歸り、空伏して思ひけり。あゝ終に禍事故なく、肝もつぶさず鎭めぬるこそ嬉しけれ。年來日來、諸々の神々に廻り行ひ、祈る祈の甲斐ありて、本意を遂げぬる嬉しさよ。昔も今も、神の御利生嚴重なり。春日・八幡・賀茂下上・松尾・平野・稻荷・祇園に參りつゝ、賽（かへりまうし）せんとぞ悅びける。爰に郎等一人馳せ來りて申すやう、不思議の事こそ候へ。何者の所爲やらん。今夜渡左衞門殿の女房の御首を、切り參らせて侍る程に、左衞門は口惜しき事なりとて、門戶を閉ぢて臥沈み給へりと披露あり。弔には御渡り候まじきやらんといひければ、あな無慙や。此女房が、夫の命に代りけるにこそと思ひて、首を取出して見れば、女房の首なり。一目見るより倒れ伏し、聲も惜しまず叫

びけり。三年の戀も夢なれや。一夜の眤も何ならず。落つる涙に搔暮れて、身の置所もなかりけり。其日も暮れぬ。盛遠起き居て、つく〴〵と諸法の無常を觀じけり。生ある者は、必ず死すればこそ、三世の佛も、炎の煙を示し給ふらめ。會ふ事ありて別るればこそ、上界の天人も、退歿の雲には悲しむらめ。況や下界をや、凡夫をや。夫婦の契、前後の怨、世の習なり、人の癖なり。されば是は然るべき善知識なり。歎くべきに非ず。あかぬ別れの妻故にこそ、道心を發す例は多かりけれ。神明三寶の御利生なりと思切り、明けゝれば、例よりも尋常に出立ちて、郎等數多相具して、渡が家へ行きたれば、門戸を閉ぢて音もせず。門を叩きて、盛遠參りたりといはすれば、戸を閉ぢながら、内より答へけるは、御渡悅ばしく存候。但面目なき事なる間、向後は人々に見參せじといふ願を發せり。御歸あるべしといふ。盛遠重ねていひけるは、女房の御首切つて候奴を聞出して、彼處へ打向ひつゝ、搦め取りて參りつる程に遲參仕候。急ぎ門を開き給へといひければ、歎の中にも嬉しくて、門を開きて入れたり。左衞門尉は首もなき女房の傍に伏沈みたり。盛遠は走り寄り、御敵具し

遠藤盛遠遁世

て參りたり。先づ御首御覽ぜよとて、懷より女房の首を取出して、其身に差合せて、腰刀を拔いて左衞門尉に與へて、盛遠が仕業なり。和殿の首を搔くと思ひたれば、斯る事を仕出したり。餘りに心憂ければ、自害せんと思へども、同じくは御邊の手に懸りて死なん。さこそ本意なく思ひ給ふらめ。とく〳〵切り給へとて、首を延べてぞ居たりける。渡は、刀は我も持ちたれば、人の刀によるべからず。但斯程に思はん人の首を切るに及ばず。又自害し給ひても其詮なし。是も然るべき善知識にこそありけめ。只御邊も我も、亡き人の後世を弔ひ、一佛土の往生こそあらまほしけれ。今生我執を起して、來世の苦難を招かん事、自他互に由なし。倩是を案ずるに、此女房は、觀音優婆夷の身を現じて、我等が道心を催し給ふと觀ずべしとて、渡自ら刀を拔きて先づ髮を切つてけり。盛遠是を見て、渡を七度禮拜して、是も髮をぞ切つてける。此有樣を見ける者、男女の間に、卅餘人ぞ出家しける。衣川の女房も尼になりて、眞の道に入りけれども、恩愛前後の悲しみは、いつ晴るべしとも覺えず。彼女房消息細々と書きて、手箱に入れて形見にとゞむ。是を開き見れば、さら

ぬだにも、女は罪深かしと承り侍るに、浮身故に、數多の人の失せぬべければ、我身一つを失ひ候ひぬ。一人殘り留りおはしまして、歎き思召さん事こそ痛はしく侍れ。何事も然るべき事と申しながら、先立ち參らせぬる悲しさよ。相構へて後の世、よく弔ひて給はらん。佛になり侍りなば、母御前をも渡をも、必ず迎へ奉るべし。萬づ細かに申度侍れども、落涙に水莖の跡見え分かずとて、

露深きあさぢが原に迷ふ身のいとゞ闇路に入るぞ悲しき

と、母是を披見に付けても、目もくれ心も消えて、悶え焦れける有樣は、實に詮方なくぞ見えける。深淵の底、猛き炎の中なりとも、共に入りなんとこそ思ひしに、こは何としつる事やらん。老いて甲斐なき露の身を、葎の宿に留め置き、いかにせよとて殘すらん。昨日を限と知りたりせば、などか飽く迄見ざるべき。同じ道にと口說きけれども、歸らぬ旅の癖なれば、更に答ふる事なし。せめての事に母なく〳〵、

闇路にも共に迷はで蓬生に獨り露けき身をいかにせん

と、娘の文に書添へて詠じける。其後母は尼になり、天王寺に參籠して、只疾く命を

召し、淨土に導き給へ。救世觀音太子聖靈の悟を開きて、なき人の生所を求め、一佛蓮臺の上にして、再び行合はんと祈念しければ、次の年十月八日、生年四十五にて、目出度き往生を遂げにけり。左衛門尉渡は、僧を請じ髮を剃り、三聚淨戒を受け持ちて、俗名に付けたりし渡といふ文字にて、渡阿彌陀佛とぞ申しける。生死の苦界を渡つて、菩提の彼岸に屆かん事を志し、渡阿彌陀佛ともいひけるにや。遠藤武者も入道して、在俗の時の盛遠の盛を取り、盛阿彌陀佛といひけり。失せにし女の骨を拾ひ、後園に墓を築き、第三年の間は、行道念佛して、斜ならず弔ひけるとぞ承る。さればにや、夢に墓所の上に蓮花開けて、袈裟聖靈其上に座せりと見て、さめて後歡喜の涙を流しけり。其後盛阿彌陀佛、日本國を修行して、求法の志い と懇なり。斯りしかば智者になり、盛阿彌陀佛を改めて文覺といふ。利根聰明にして、有驗世に勝れたり。去る持法功驗の時迄も、昔の女の事思出して、常に衣の袖を絞りけり。若しや慰むとて、彼女の影を移して、本尊と共に首に懸けて、戀しきにもこれを見、悲しきにもこれを弔ひけるこそ、せめての事とあはれなれ。斯る例は異國にもあり

けり。昔唐(もろこし)に、東歸の節女といひけるは、長安の大昌里人といふ者が妻なりけり。其夫に敵(かたき)あり。常に窺ひけれども、殺すこと叶はず。敵、節女が父を縛つて、女を呼びていふ。汝が夫は、我が大なる敵なり。其夫を我に與へずば、汝が父を殺さんといひければ、女答へて曰く、妾夫を助けん爲に、いかでか生育の父を殺させん。速に妾が夫を殺さしめん。妾常に樓上に寢ぬる。夫は東枕に臥し、妾は西を枕とす。來りて東枕なるを切れと敎へて、家に歸りて思ひけるは、父に恩愛の慈悲深し。夫に偕老の情淺からず。夫の命を助けんとすれば、父の命危し。父が身を育まんとすれば、夫の身亡びなんとす。如かじ父を助けんが爲に、夫を敵に與へつ。我れ又夫が命に替らんとて、自ら東枕に伏して、夫を西枕に臥さしめ、敵窺ひ入りて、忽に東首なる者を切つて、家に歸りて朝に是を見れば、夫の首にあらず、妻が首なり。敵大に悲しみて、此女の、父の爲に孝あり、夫が爲に忠あり。我いかゞせんといふ。終に節女が夫を招きて、長く骨肉の睦をなしけり。夫婦の語らひとり〱なり。彼は今生の契を結び、是は菩提の道に入りにけり。されば文覺發心して、金剛八葉の峯より

始めて、熊野・金峯・大峯・桂木・天王寺・愛宕山・高尾・嵯峨・はうりん寺・止觀院・れうごん院・比良・高峯、凡て日本一州、至らぬ靈地もなく、七日・二七日・三七日・百日籠り行ひけり。十八歲にて出家して、二十三年の間は、或時は斷食し、或時は持齋せり。春は霞に迷へども、峯に登りて樒を取り、夏は叢繁けれども、柴の扉に香を燒き、秋は紅葉に身を寄せて、野分の風に袖を翻し、冬は肅索たる寒谷に、月を宿せる水を結びなんどして、山伏修行者の勤懇なり。彼首陽の翁にはあらねども、蕨を折りて命を延べ、原憲が扉にほして、草を綴りて膚を隱せり。座禪淸淨の室の內には、本尊持經の外は物なし。斯くて抖藪修行の後、再び高尾の神護寺に居住す。

文覺流罪の事

文覺伊豆へ流さる

去程に文覺、高尾の神護寺勸進の事に付きて、院の御所にて狼藉しける科により、伊豆の國へ流罪すべき由敕宣ありて、鳥羽の南門より舟を出す。水主楫取共、事に觸れて情なくこそ當りけれ。其夜は渡邊に着きぬ。水主楫取も、同じく一所に宿りけ

り。文覺は内にあり、楫取は縁に伏したり。遣戸一つを隔てたり。夜さし更けて楫取がいひけるは、哀れ此上人は、勸進の用途は、多く持ち給ひたるらん。敕勘の人なれば、いつか歸り上り給はんずらん。何とかなして枉惑し取らんなど、樣々に私語きて、其後は音もせず。文覺は惡き奴原かなと思ひて、曉方に念珠押揉み、忍聲にて南無歸命頂禮、高尾山の護法天童神護寺造營の爲、勸進の用途にて金百兩を買ひ、五條の天神の鳥居の左の柱の根、三尺が底に埋みて候。文覺上洛の程、夜の守晝の守と守護せしめ給へと祈誓しけり。楫取共目を覺して、互に頭を振合ひて悦びけり。明るや遲し、四五人京へ上り、夜に入りて五條の天神の鳥居の左の柱の根を、三尺掘りたれども金もなし。五尺計り掘りたれどもなかりければ、一人がいひけるは、夜の耳にてはあり、而も忍聲にいひつれば、右の柱を、左と聞きてもやあるらんとて、右の柱を四五尺掘りたれども、鳥居は倒れて金はなし。あさましとて逃げ下りぬ。明日は五條あたり、西洞院の在家人集りて、これは不思議の勿怪ぞ。我は夢に見たり。我は鳥の此邊に集りたるを見たりなどいひて、いか樣にも天神を宥め奉るべし

とて、臨時の祭し鳥居を造り替へ、ゆゝしき經營にぞありける。伊豆守仲綱が下知に依つて、國澄暫く渡邊に逗留す。又文覺大事の召人なり。よく〳〵守護すべきと言下したりければ、渡邊黨番を結んで是を守り、夜は夜もすがら寢ず、內へ外へ出入りて、晝はひねもすに、立ちぬ居ぬ、湯よ水よといひて、人をも安く置かず。聊も命に背けば、さん〴〵に惡口して、親しき者も持扱へり。親類共いひけることは、あな無慙や少きより、無道なりと見えし者は、終に果して憂目を見るぞとよ。故鄉には錦の袴を着て歸るとこそいふに、さまでこそなからめ。生れ所に來て、親類骨肉に守護せられ、恥と思ふ心もなく、猶不當の惡口に振舞ひて、我等をさへ心憂目見する事の口惜しさよといふ處に、ありし楫取が進み出でて、惣じて不當の大虛言の御房なり。金百兩五條の天神の鳥居の下に埋みたりと宣ひし程に、人にも知らせず、親しき者計り少々相連れて、夜もすがら掘れども〳〵終になし。結句は鳥居の柱掘倒して、淺猿しさに逃下りたりといふ。文覺、親しき者に誘られて、大に腹立しける中に、楫取奴等を賺し課せたりと嬉しくて、やあ舟子共よ。此大地の底は、金輪

際とて、金を敷き滿ちたり。などてこ迄は掘らざりけるぞ。但法師が埋みたる金は、北野の天神の鳥居の事なり。五條の天神には非ず。今一度上りて掘直せとて、伏轉びてぞ笑ひける。其後一門の者共に向ひて目を見張り、瞋聲にていひけるは、法師は若きより千手經の持者にて、廿八部しゆ、ばんを結んで守護し給へば、友ほしと思はず。己等に守られずば、法師佗ぶべきか。いかに守るとも、逃げ失せんと思はゞ安かるべし。一門の內に斯る貴き上人が出來て、院の御所迄も、さる者ありと知召されたるは、親しき奴原が面目に非ずや。是こそ錦の袴着て、故鄕に歸りたるにてあれ。それに不當なりなど、聊も思ひ申す條奇怪なりといひて、又さん〴〵に惡口しけり。斯くて文覺は、渡邊に四五日居ける。是より舟に乘り、國澄に相具して、住吉・住の江・わか吹上・玉津島の明神を伏拜み、日前・黑懸を餘所に見て、由良の湊・田邊の沖・新宮の浦々に舟を着け、熊野山を伏拜み、南海道より漕廻して、遠江の國灘の沖にぞ浮びたる折節、黑風俄に吹起り、波蓬萊を上げければ、こはいかゞせんと、上下周章騷ぎけり。思々に佛を念じ、口々に祈事して泣き悲しみければ、水主楫

取帆を引き錨を下し、荷をはね舟を直しけれども、いとゞ波風烈しくして、詮方なければ、聲をあげてぞ喚き叫びける。されども文覺は、舷を枕として、高鼾かきて臥したり。楫取等文覺が側に寄り、やあ上人御房、いかに斯程の大風に、打解け眠り給ふぞ。起きて祈し給へと、起せども〳〵働らかず。あまりに強く起されて、頭ばかりを持上げて、久しく物は食はず身は痩せたり。所作すべき力なし。但いたくな騷ぎそ。法師があらん限は、よも苦しからじ。波風の止む程は、只誰々も共に寢よとて、又引被きて臥す。淺ましき中にも、惡まぬ人はなし。風は愈吹しぼり、舷に浪越えければ、今は櫓を取り楫を直すに及ばず、舟底に倒伏して、聲を揚げて喚きければも、文覺は泣きもせず起きも上らず、伏せり乍ら、あな面白しと謠ひ囃してぞありける。口々に申しけるは、あな不當の僧の事樣や。無慙なり〳〵。出家染衣の容となりなば、叶はぬ迄も經を讀み念珠を爪繰りて、慈悲を起し祈誓すべき事ぞかし。それに我身をさへ思はずして、只今浪の下に沈まんとする者が、いかなる心なれば起きも上らず。剩へあな面白などいふ事。不思議さよ。誠や無智も無行も、僧は國の

盜と、佛の仰にてありけるぞ。あの不當の心にてこそ、敕勘を蒙り遠國へも下るぞかしなど申合へり。文覺聞きて、良ありて這ひ起き、あゝいふも道理なり。命共が惜しければ、臥すも理と思へ、悶ゆるも理なり。物がくさければ起きず。但餘りに歎くが不便なるに、波風やめて見せんとて、舟の舳に立跨がつて、沖の方を睨んで、龍王やあるく。いかに海龍王共はなきか。曳々とぞ呼うだりける。舟の中の者共、こはいかなる事ぞや。淺ましや。斯る折節には、龍王御前ともこそかしづき申すべきに、惡口申して、いとゞ龍神の御腹立し參らせなんず。中々詮なく起きにけりと、悲しき中にも、今少し怖しさぞ增りける。されば斯くな宣ひそと制しけれども、文覺は念珠押揉み、大の聲の皺枯れたるを以て申しけるは、海龍王神も慥に聞け。此船中には、大願興したる文覺が乘つたるなり。我れ昔より千手經の持者として、深く觀音の彼岸を賴み、龍神八部正しく、如來說敎の砌にして、千手の持者を守護せんといふ誓を發すに非ずや。されば文覺を守らずば、誰をか守るべき。我舟をば手に捧げ頭に載せても、行くべき所へは送るべきに、さまでこそなからめ、浪風を起す條

奇怪や〳〵。忽に風を和らげ波を靜めよ。いふ事を聞かずば、第八外海の小龍めら、四大海水の八大龍王に仰付けて、なくなすべしとて瞋りける。是を聞く者共が、いや〳〵此僧は、あへて物狂にてありけり。聞くとも聞かじ。斯樣の者が乘りたれば、斯る惡風にも逢ふぞかしとつぶやきけり。されども文覺がいふ事、龍神の心にや叶ひけん、沖吹く風も和らぎて、岸打つ浪も靜なり。其時にこそ、舟の中の者共は安堵しつゝ、あなたうと〳〵。是程に龍王を隨へ給ふ上人を、忝くも舌の和かなるまゝに、口に任せて謗り申しける事の淺ましさよ。いかに斯樣の貴き人をば、流し奉るやらんとてこそ悅びけれ。是又觀音利生ひぐわんの目出度き故なり。故に法華經には、縱ひ巨海に漂流すといふとも、觀音を念ぜば、波浪に歿する事なからんといへり。文覺大悲の本誓を仰ぎ、千手の神兒を持つ故に、內德外にあらはれて、風波の難を遁れける。斯くて文覺いひけるは、いかに殿原、爾今以後は知るべし。勤行精進の在俗よりは、無知無行の比丘は勝れたり。懶惰懈怠なれども、僧をば敬ふ習ぞ。法師此舟に乘らずば、誰か一人も助かるべきとて氣色して、千手陀羅尼を誦し

ければ、其後は楫取以下の輩、手水を捧げ履を取り、主從の禮よりも深うして、事の外にぞ敬屈しける。

頼朝、家人を催す評議の事

抑文覺はいるせられて、なごやといふ所に籠居せり。或時頼朝に對面して後、謀叛を勸め、隱れて福原の京へ上り、平家追討の院宣を請受けて、頼朝に與へけるとかや。去程に頼朝は、北條を召して、平家追討の院宣を給はりたれども、折節無勢なり、いかゞすべきと宣へば、時政悦び申しけるは、東八箇國には、黨も高家も大名小名、君の御家人ならぬ者は一人も候はず。されども平家世を取るに依つて、暫く身命を繼がんとて、一旦平家に相從ふ計りなり。思召立ち給はゞ、誰か參らざらん。就中今便を得たりと覺ゆる事は、伊藤右衞門尉忠淸配流せられ、上總の國の時介の八郎廣常、志を盡し思を運びてせうくわんし、愛養する事甚し。然るに忠淸、厚免を蒙りて上洛の後、忽に廣常が報恩を忘れて、却て仇をなし、廣常を平家に讒して、所職を

奪はんとする間、子息能常參洛して、仔細を申すと雖、猶廣常を召す間、憤を含み恨をなす折節なり。甘言を以て召されんに、是よき隙なり。千葉の介常胤・三浦の介義明は、其性義ありて戻らず、其心信ありてくねらず。一族の長たり。已に衆兵の頭たり。何ぞ新舊の主を背き奉り、豈違敕の賊に與すべけんや。早く專使を遣され、院宣の趣を仰合さるべし。土肥・土屋・岡崎の輩は、元來きうし奉る上は、廣常・常胤・義明三人御方に參りなば、八箇國の輩、縱ひ危む心ある者多しといふとも、皆身の勢なければ、一人拔出でて背き奉らんと仕る者あるべからず。八箇國歸伏し奉らば、北國・西國の輩、手を出し參らせん事疑なし。是に相模國の住人大場の三郎景親は、旣に三代相傳の御家人なれども、當時平家重恩の者にて、其勢國に蔓れり。又武藏の國の住人畠山の庄司重能・小山田の別當有重、平家の大番勤めて候なれば、重能が男重忠・有重が男重成、同じく背き奉るべし。其勢景親に劣るべからず。今事を企て勝負を決せんこと、彼輩にありとぞ申しける。其言葉實ありて、其詞辯ありければ、賴朝も深く信じ給ひけり。時政若しは天の時を知るか、將又兵の法を得るか、其

詞一事も違ふ事なかりけり。今頼朝と時政と合體同心して、謀を氈帳の中、烏合群謀の賊に廻らして、手を軍門に束ね、勝つ事を東夷の外狼戾反逆の徒に決して、首を京都に傳へば、天下遂に平定し、海内永く一統せん。誠なるかな、其人を得る則ば、其國以て興り、其人を失ふ則ば、其國以て亡ぶといへる事を。治承四年八月三日、頼朝北條に仰せられけるは、今軍立ならば、國々忩々にして、在々所々の八幡の御放生會、違亂に及ぶ事冥の恐あり。十五日以後、其の沙汰あるべしと下知せられけり。斯りければ重代の家人等、內々此事聞く者は、忍びて夜々に參り集まりける。

佐々木高綱伊豆下向附馬を取る事

其中に故左馬頭の猶子に、近江國の住人佐々木の源三秀義が子供、平治の亂の後は、此彼にかゞみ居たり。太郎定綱は、下野の宇都宮にあり。次郎經高は、相模の波多野にあり。三郎盛綱は、同じき國澁野にあり。四郎高綱は都にあり。五郎義清は、大場の三郎が妹聟にて相模にあり。其中に高綱は、心も剛に身も健なり。おばに付

きて都の東吉田邊にありければ、世に隨ふ習にて、平家に奉公もすべかりけれども、思ひけるは、父秀義は、故六條判官爲義に、父子の義をなされて、代々一門の好をなす。淵は瀨となる世の中なりとも、平家に仕ふる道なしとて、おばに養はれて居たりけるが、賴朝謀叛を起し給ふと聞きて、嬉しき事に思ひつゝ、おば計りに暇を乞ひ、竊に田舍へ下りけり。世になき身なれば、馬もなき次第、脚胖に編笠を着、腰の刀に太刀かづき、京をば未明に出でたれども、習はざる徒道なれば、漸々其日は守山の宿に着き、知りたる者に馬をも乞ひ、乘らばやとは思へども、都近き程なり。世の中つゝましく思ひければ、さもなくて曉に守山を立ち、やすの河原に出でぬ。曉の事なれば、旅人も未だ見えざりけるに、草鞍置きたる馬追うて、男一人見え來る。高綱、和殿は何處の人ぞ、何方へ渡るぞと問へば、是は栗太の者にて候が、かまふ郡小脇の八日市へ行く者なりと答ふ。名を誰といふぞと問へば、男怪氣に思ひて、さうなく明さず。兎角欺き問ひければ、紀の介とぞ名乘りたる。高綱は、やあ紀の介どの、此河渡らん程、御邊の馬貸し給へかし。紀の介、叶ひ候はじ。遙の市より、重荷を

負せて歸らんずれば、我も勞りて乘らざる馬なり。又今朝の水の冷たき事もなし。只渡り給へといふ。紀の介殿たゞ貸し給へかし。悅は思ひ當らんといひければ、紀の介思ふやう、此人の馬の借りやう心得ず。徒跣にて誰とも知らず、我身だにも合期せぬ人の、何事の悅をかし給ふべき。され共貸さずして惡しき事もやと思ひければ、貸してけり。高綱馬に打乘り、此馬こそはや我物よと思ひつゝ、空悅してやす河原を渡りつゝ、鞭を打ちてぞ步ませたる。紀の介は馬に後れじと走りけり。はや下り給へ〳〵。河計りこそと宣ひつるにといへども、是にて下れう、彼にて下れうとて、篠原堤まで乘りて行く。商人馬の癖なれば、肢爪堅うしてなづまざりけり。哀れ是だにもあるならば、下り着きなんと思ひけるに、紀の介馬を乞侘びて、下り給はぬ物ならば、馬盜人と叫ばんといふ。高綱此事穩便ならず。左樣にもいはれなば、恥がましき事ありなん。さらば下りなんとて、馬より下りけるが、馬なくては叶ひ難し、いかゞすべきと案じて、兵衛佐殿世におはしまさば、近江國は我物なり。紀の介が後生をこそ弔はめ。刺殺して馬を取らんと思ひて、やあ紀の介どの、馬奉らん

とて、近く呼寄せたり。八月上旬の事なり。秋の習の癖なれば、朝霧籠めて餘所見えず、上下の旅人もなかりけり。高綱脇の刀を拔持ちて、紀の介を取つて引寄せつつ、太腹二刀刺通し、側なる溝に打入れて、荷鞍に乘りて鞍を打ち、むさの宿にて、知りたる者に鞍を乞ひ、夜を日に繼ぎて下りけり。馬も屈竟の逸物なり。更になづむ事なくて、伊豆國へぞ下りにける。さてこそ今の世迄も、紀の介が後世をば弔ふとかや。

佐々木高綱伊豆に下る

賴朝の見參に入り奉りたれば、おほぢ故六條の判官、各の親父佐々木殿と、父子の義をなし奉る上は、萬事阻なく賴み存ずれども、世になき身なれば、思ひ出で侍らぬに、聞あへ給はず下向の條、返々神妙なり。平家を亡して世に立つ事は、併しながら人々の力を賴み存ずるなり。さて兄弟の殿原達を尋ね給へと仰せられければ、高綱遍く人をぞ遣しけり。太郎定綱は、下野宇都宮より馳上り、次郎經高は、相模國波多野より馳せ參る。三郎盛綱は、同じき國澁谷より馳せ來る。兄弟四人、賴朝を守護し奉る。誠に一人當千の武者、邊を拂つて見えたりけり。五郎義淸はいかにと尋ね給へば、大場の三郎が妹に相具して候へば、人の心知り難く侍り、志思ひ參らせ

ば、定めて參らんずらん。左右なく知らせじと存ずるなりとて呼ばざりけり。

源平軍物語卷第一終

源平軍物語 卷第二

八牧夜討の事

治承四年八月九日、佐々木の源三秀義と、大場の三郎景親と見參しける次に、景親、佐々木に語つていひけるは、駿河國長田入道・上總介忠淸を以て、太政入道殿に訴へ申しけるは、北條の四郎時政は賴朝を取立て、謀叛を發すべきの由、結構の所存承り及ぶ。急ぎ御沙汰あるべきかと申しければ、入道殿の仰には、近頃源三位入道、三條の宮を進め奉り、南都に發向して國家を亂し、當家を亡さんといふ企あるに依つて、宇治にして討たれ畢んぬ。今又此事を聞く上は、惣じて源氏の種を諸國に置くべからずとの御氣色なり。されば賴朝の御事も、定めて御沙汰あるべし。其意を得らるべきなり。此間の在京に、委しく承りたりと語る。秀義淺ましと思ひて、急ぎ歸り

て、定綱を以て、竊に此事を頼朝に申したれば、頼朝の返事には、年來契り申し、本意既に顕はれぬ。宜しくも告げ畢せられたり。相計らひて、左右を仰せらるべきなりと、同じき八月十五日、國々八幡の放生會も過ぎぬ。十六日に北條を招きて、和泉の判官兼隆といふは、平家の傍親和泉守信兼が嫡男なり。八牧の館にあれば、八牧の判官といへり。院宣を給はる上は、先づ兼隆を夜討にすべし。急ぎ相計らふべしと宣ひけり。北條最も然るべく候。但今夜は、三島の社の御神事にて、國中には弓矢を取る事候はず。明日十七日の夜討にすべし。内々人々に仰せ含めらるべしとて出でにけり。十七日の午の刻に、佐々木の太郎定綱を召して、額を合せて仰せられけるは、頼朝謀叛を起すべき由を、京都既に披露あるなれば、定めて兼隆・景親等に仰せて、其沙汰ありぬと覺ゆ。されば先づ試に兼隆を誅すべし。我れ天下を取るべくば討ち得べし。運命限りあらば、討ち得る事難かるべし。吉凶唯此事にあらん。今夜即ち夜討を入るべし。舍弟等を相催し給へ。事成就あらば。方々の世なるべし。深く頼み思ふなりとありければ、定綱は、忝なく仰せ合せらるゝの條、身の面目

頼朝、平兼隆を夜討にす

を極むる上は、更に命を惜むべからずと申して、舍弟經高・盛綱・高綱等を招き集めて、日の暮るゝをぞ待ちける。ゆゝしく見えたり。十七日の夜は、忍び〳〵に兵共集まりけり。時政は、夜討の大將給はりて、嫡子宗時に先駈させ、弟の小四郎義時・佐々木の太郎兄弟四人・土肥・土屋・岡崎・眞田の與市等を始として、家の子も郎等も、すゝぎ揃へたる者の、手に立つべき兵八十五騎にて、八牧が館へぞ寄せたりける。頼朝は時政を呼返して宣ひけるは、抑軍の勝負をば、爭か知るべしと問ひ給へば、時政申しけるは、味方勝の軍ならば、城に火を放つべし。負軍になりて、人々討たるるならば、急ぎ使者を參らすべし。靜かに御自害と、申捨てゝぞ出でにける。八十五騎を二手に造る。佐々木兄弟四人は搦手に廻る。北條・土肥・岡崎等追手なり。兩方より鬨を作つて寄せたれば、城の内にも鬨を合す。八牧には折節勢こそなかりけれ。よき者共のありけるは、伊豆の國島田の宿にて遊ばんとて、十餘人出でぬ。殘る者共十人計りには過ぎざりけり。そも俄事にて、物の具着るにも及ばず、大肩脱にて、櫓より落し矢に、散々に射る。其中に河内の國の住人關屋八郎と名乘りて射

ける矢ぞ、物にて強く當り、あだ矢もなかりける。寄手も多く射殺され、手負ひければ、五六度迄、引返し〳〵休らひ居たり。佐々木搦手に廻りたりけるが、次郎經高、後の木戸口まで攻入りて、散々に戰ひける程に、痛手負うたりけれども、猶一人城の内に打入りて、兼隆が後見に、權の頭といひける者が、首を取つてぞ出でたりける。定綱兄弟命を捨てゝ、攻詰め〳〵戰ひけれども、館は究竟の城なり。追入れ追出し戰ひければ、ごかくの軍にて勝負なし。是に當國の住人に、加藤太光胤・加藤次景廉とて兄弟二人あり。是は能因入道には四代の子孫なり。彼能因が子息に、月なみの藏人といひける者、伊勢國に下つて、柳の馬入道が聟になりて儲けたりし子を、加藤五景貞といひき。後には使の宣を蒙りて、加藤判官とぞいひける。其子供なりければ、加藤太・加藤次といふ。本伊勢の國に住みけるが、父景貞に敵あり、平家の侍に伊藤といふ者なり。彼敵を殺して、本國には安堵せず、東國に落下つて、武藏の國秩父を賴みけれども、平家に恐れて辭退す。千葉を賴むといへども、同じく恐れて置かざりけり。伊豆の國の公藤介を賴みければ、甲斐々々しく受取り、妹に合せて、用

心の爲め頼み置く。其故は公藤介、三戸の次郎といふ者と中惡うして、常に軍しければ、剛の者は一人も大切なり。加藤兄弟心ぎほふ敵なりと見て、軍の方人にせんと思ひければ、平家にも憚からず、親しくなりたりけるが、常に頼朝へ參りて頼み申しければ、阻なく思召されけり。兄弟共に兵なりけれども、景廉は殊更切もなき剛の者、そばひら見ずの猪武者なり。折節頼朝には、御不審のことありければ、催には漏れたりけれども、世間も怱々なる心地しける上、頻に胸騷のしければ、何事のあるやらんと覺束なくて、宿直申さんと思ひて、紫緘の腹卷に、太刀計りを佩き、乳人子の洲崎の三郎を相具して、鞭を上げて馳せ參る。門外にして馬より下り、頼朝の館の内へつと入り、頼朝は小具足付けて、緣の上に小長刀つき立ち給へり。仔細はありけりと覺ゆる處に、頼朝の仰には、此間不審の事ありて、催す事なけれども、見え來り給ふ條神妙なり。高倉の宮より、平家追討の令旨を給はりしかども、宮既に亡び給ひぬれば、さて過ぐる處に、平家を誅すべき由、一院院宣を給はりし間、先づ兼隆を討てとて、北條と佐々木等を遣しぬ。打勝ちたらば、館に火をかくべしといひ

つるが、未だ煙も見えず。討損じぬるやらん覺束なし。折節人のなきに、景廉は是に候へと宣へば、加藤次聞敢ず、あな心う。參らずば知らせ給ふまじかりけるが、世間も何となく急々なりつれば、馳せ參れり。斯様の御大事を思召立ちけるに、など景廉には仰せ含めざりけるやらん。殿中に人多く候へば、我も〳〵とこそ存ずらめ共、斯様の夜討には、さすが景廉こそ侍つらめ。君に命を奉る兼隆をば、速に討つて參らすべしとて、傍若無人に申散らして出づる處に、頼朝、景廉を呼返して、火威の鎧に、白星の兜取具して、其上に夜討には、太刀より柄長き物よかるべし。是にて敵の首を取つて參らせよとて、小長刀を給ふ。是は故左馬頭義朝の祕藏の物なりけるを、流罪の時、父が形見にも見んとて、池尼御前に申請けて、下し給ひたりけるなり。銀の小蛭巻に、目貫には螺を透して、義朝身を放たず持たれたりし寶物なれども、且は軍を進めん爲、且は事の始を祝はんと思して給ひにけり。景廉是を給はりて、頼朝の雜色一人・洲崎の三郎下人二人、已上五騎にて、八牧城に押寄する。見れば時政、南表に引退いて控へたり。景廉を見て、いかに御邊は、當時御勘當にておはするに

と問へば、俄に召されて、八枚が首貫いて參らせよとて、御長刀を給はれり。是を見給へとて差出す。抑北條殿の、宵より寄せ給ひたれば、城の案内知り給ひたるらん。ありの儘に語り給へ。私の軍に非ず。君の御大事なりといふ。時政、城の内の構樣をば知らず。門より外に櫓あり。兵共櫓より落し矢に射る。櫓の前は大堀なり。橋を引きたれば入る事叶はず。互に堀を隔てゝ遠矢に射れば、宵より今まで勝負なし。佐々木の人々は搦手に廻りぬ。時政は、家の子郎等散々に射られて、五六度迄引退いて控ひたりといふ。加藤次申しけるは、殿原は宵より軍に疲れたるらん。休み給へ。景廉新手なり。一當當てゝ見べし。健ならん楯突を一人たび候へ。其外楯二三枚橋に渡さんとて、取聚めて、弓の換弦を以て筏に組み、堀に打入れて、北條が雜色に源藤次といふ男に楯突かせて、歩立になり、洲崎相具し、長刀をば下人に持たせ、寄手の弓征矢乞取りて堀を渡り、城の內に進み入り、櫓の下にたゝずみたり。櫓にありける者共も、宵より軍に疲れぬ。矢種も盡きにければ、或は落ち、或は內に入りてなかりけり。門の戸を押開きて攻入りけるに、箭面に立ちたりける者三人、

大庭に射倒し、加藤次、頼朝の雜色に下知しけるは、心苦しく思召しつるに、先づ櫓と門とに火をさせといひければ、雜色下知に依つて火を差してげり。爰に武者一人進み出でて名乘りけるは、河内の國の住人石川郡の關屋八郎とは我事なり。櫓の上にて射殘せる中差一筋こゝにあり。今夜の夜討の大將軍は、北條・佐々木か、土肥・土屋か、加藤が黨か。乘名つて我矢受取つて、名聞にせよと呼ばはつて內へ入りぬ。加藤次門外に引退いて、乳人子を招いていひけるは、關屋が詞聞きつらん。彼が箭に當らん者、命生くる者あるまじ。我は矢に當らん事安き事なり。但我討たれなば、此軍鈍かるべし。頼朝を世に立て奉らんと思ふに、汝景廉と名乘つて、敵の矢に中つて射させんや。さもあらば思ふ事をいひ置け、更に違ふ事あるまじといふ。洲崎是を聞きて、我少きより殿に育まれ奉りて、其恩を忘れ難し。軍に出づるよりして、命生くべしと存ぜず。代り奉るべし。思ふ事とては、老いたる母が事計り、それは、とても乳の恩忘れ給はじなれば、よく育み給へとて、門の內に進み入り、伊勢の國の住人に、加藤判官の次男景廉是にあり。關屋八郎と聞きつるは。いはるゝ言葉には

似ず、落ちぬるかといひて、楯を前に差翳して居たりけり。闕屋然るべきと悅びて、三人張に大の中差取りて番ひ、十五束よく引堅めて放ちたれば、楯を通し、胄の胸板後の蛭卷へ射出でたり。洲崎西枕に倒れ伏す。景廉死人を舁出して、樣々に口說言して、今一度物いふべきやといひけれども、事切なれば物いはず。藤次も淚を流して、汝が母をば疎にすべからず。草の陰にてもかゞみよ。敵をば討つて取らすべし。南無阿彌陀佛とて、洲崎を閑所に投げ置きて、進み入りていひけるは、昔は加藤次は一人、今は源氏繁昌の御代となつて、加藤次といふ者二人あり。闕屋が音のしつるは落ちぬるか。返合せて組めや〳〵とぞ呼ばはりけり。闕屋是を聞きて、敵のたばかりたるを知らずして、矢を放ちける本意なさよ。人に詞を掛けられて、さてあるべきに非ずとて、甲の緖を强くしめ、三尺五寸の太刀を拔き、何方へか落つべき。闕屋爰にありとて、につこと笑ひて出合ひたり。互に打物の上手にて、切つたり請けたり、大庭を二度三度ぞ廻りたる。加藤次は、斯くては勝負きつともあらじと思ひて、態と請け、其隙を伺ひて、我太刀をば投捨てゝつと寄り、鎧草摺引寄せて、得た

加藤景廉關屋八郎を討つ

りやをうとぞ組んだりける。上になり下に轉びける程に、雨打際の窪かりける所にて、關屋下になり、加藤次上に乘懸つて、押へて頸を掻きにけり。首を太刀の先に貫きて、鬼神の樣にいひつる關屋が首、景廉分捕にしたりやといひて投げ出す。下部是を取つて持ちたりけるを、北條乞取りて、鞍の鞍にぞ付けたりける。去程に景廉は太刀をば投捨て、下人に持たせたる長刀を取り、甲をしめ錏を傾け、緣の上へつと上り内を見入りたれば、高燈臺に火白く掻立てたり。さしも人ありとも見えず。景廉進み入る處に、狩衣の上に腹卷着たる男の、大の長刀の鞘はづして立向ひたりけるを、景廉走違ふ樣にして、弓手の脇より、妻手の脇へ差貫きて投臥せたり。京家の者と覺えたり。やがて内へ攻入りて、寢殿を差覗いて見れば、額突あり。燈白く掻立て、障子を細目に開けて、太刀の帶とり、五寸計り引殘せり。見れば兼隆なり。紺の小袖に上腹卷着て、太刀を額に當て、膝付いて敵つと入らば、はたと切らんと覺しくて待懸けたり。加藤次過せじとて、さうなくは入らず、甲を脱いで長刀の先に懸けて、内へつと差入れたり。待儲けたる兼隆なれば、敵の入るぞと心得て、太刀を入

景廉平兼隆を討つ

れてはたと切る。餘りに強く打つ程に、甲の星二なみ三なみ切削り、鴨居に鋒打立て、拔かん〳〵とする處に、傍の障子を踏倒し、長刀の柄を取直して、腹卷がけに、胸より背へ差貫き、やがて捕へて首を搔く。こゝに八牧を賴みて筆執してありける古山法師に、某の注記といひけるが、萌黃縅の腹卷に、三尺二寸の太刀を拔いて、飛んで懸りければ、景廉走り違うて、長刀をしたゝかに打懸けたり。左の肩より右の乳の間へ打さかれて、其儘やがて死にゝけり。卽兼隆が首片手に提げ、障子に火吹付けて、暫待ちて躍り出づる。北條に向ひて仕たりとて、敵の首を捧げたり。賴朝は遙に燒亡を見給ひて、景廉はや兼隆をば打ってげり。門出よしと獨言して、悅び給ひける處に、北條使を立て、八牧の判官は、景廉に討たれ候ひぬ。高名ゆゝしくこそと申したれば、神妙々々と感じ給へり。北條、兼隆が首を見て、

法華經の序品をだにも知らぬ身に八牧が末を見るぞ嬉しき

と。景廉は宵よりの仰なりければ、首をば、給ひたる長刀に指貫き、高らかに差上げて參りたり。ゆゝしくこそ見えけれ。賴朝大に悅びて、八牧が首を谷河の水にすゝ

がせて、長櫃の蓋に置かれて、一時是をぞ見給ひける。謀叛の門出に、さこそ嬉しく御座しけめ。

小兒諷誦をよむ事

兼隆討たるゝ後日に追善あり。修行者を招き請じて、唱導を勤めけるに、色々の捧物に、思ひ〳〵の志をのせたり。其中に一紙の諷誦あり。法華經開八巻心成佛身と計り書きたる諷誦あり。導師是をよみ煩ひたりけるに、聽衆の中に五歳の小兒(ちご)あり。此諷誦をよまんといひけるを、乳人いかにとしてかと制しければ、膝の上より頽下(よりお)り、高座の下に歩み寄りて、

法の花終にひらくる八牧には心佛の身とぞなりぬる

と、不思議なりける事なり。

頼朝・大場勢揃の事

頼朝諸將を召す

頼朝謀叛を起し、兼隆判官討たれぬと聞えければ、伊豆の國には工藤の介持光・子息狩野五郎親光・宇佐美平太・弟の平六・平三すけもち・藤九郎盛長・藤内遠景・弟の六郎・新田の四郎忠經・義藤ほう成じやう・堀の藤次親家・七郎武者信親・中四郎これしげ・中八これひら・橘次よりとき・鮫島四郎むねふさ・近藤七國平・大江の平次家秀・新藤次としなが・小中太光家・澤の六郎宗家・城の平太等馳せ參り。相模の國には、土肥の次郎實平・子息太郎遠平・岡崎四郎義眞・子息與市よしさだ・土屋の三郎宗遠・同次郎義淸・中林の太郎・同次郎・築井の次郎義行・同八郎義安・新開の荒太郎實重・平左近の太郎爲重・多毛三郎義國・安田三郎明益等馳せ集る。廿日は頼朝、彼輩を相具して、相模の土肥へ越し給ひ、此にて軍の談義あり。實平申しけるは、軍は謀と申し乍ら、いかにも勢により侍るべし。先づ廻文の御敎書を以て、御家人を召さるべしと勸め奉りければ、然るべきとて、藤九郎盛長を使にて、院宣の案に、頼朝の施行書を添へて、方方へ觸遣す。盛長是を給はりて、先づ相模の國の住人波多野馬之允に觸るゝに、良案じて、是非の御返事申さず。源平共に豫て勝負を知らざれば、後悔を存ずる故なり。

同國懷島の平權頭景義に相觸れたり。此景義と申すは、保元の合戰に、八郎爲朝に膝の節射られたる大場の平太が事なり。弟の三郎景親が許へ行きて、斯る院宣の案と御敎書を給はりたり。和殿はいかゞ思ふと問ふに、景親申しけるは、源氏は重代の主にて御座せば、尤參るべきなれども、一年四になりて、旣に切らるべかりしを、平家に宥められ奉り、其恩山の如し。又東國の御後見し、妻子を養ふ事も、爭か忘れ奉るべきなれば、平家へこそといふ。和殿は誠に平家の恩にて世にある人なれば、さもし給へ。景義は源氏へ參らんと存ず。但軍の勝負豫て知り難し。平家猶も榮え給はゞ、和殿を賴むべし。若又源氏世に出で給はゞ、我をも賴み給へとて、弟の豐田の次郎景俊を相具して、賴朝へ參じ加はりけるなり。大場は俣野の五郎と二人平家に付きぬ。同國山の内の須藤刑部の丞俊道が孫瀧江俊綱が子に、瀧口三郎利氏・同四郎利宗兄弟二人に相觸れたり。折節一所に雙六打ちて居たり。烏帽子子に手綱うたせて、筒を手に取り、御使にも憚からず、弟の四郎に向つていひけるは、是れ聞き給へ。人の至つて貧になりぬれば、あらぬ心も付き給ひけり。賴朝の當時の寸法

を以て、平家の世を取らんとし給はん事は、いざさ富士の峯とたけ比べ、猫の額の物を、鼠の窺ふ喩にや。身もなき人に同意せんとえ申さじ。恐し〳〵、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とぞ嘲りける。利宗逆順の分を知らず、利害の用を辨へず、只强大の敵を恐れ、忽ちに眞舊の主を反き、口に妄言を吐き、心に誠信なし。頗る勇士の法に非ず。偏に狂人の體に似たり。三浦の介義明が許へ相觸れたり。折節風氣ありて平臥したりけるが、賴朝の御使と聞きて、悅び起きて、白き淨衣に立烏帽子着て出合ひたり。廻文の御敎書とて出されたりければ、手洗ひ口滌なんどして、御文開き、老眼より涙をはら〳〵と流して申しけるは、故左馬頭殿の御末は果て給ひぬるやらんと、心憂く思ひつるに、此殿計り生殘り御座して、七十餘りの義明が世に、源氏の家を興し給はん事の嬉しさよ。只是一身の悅なり。子孫催し聚めて、御敎書拜み奉るべしとて、三浦別當義澄・太田三郎よしなり・佐原十郎よしつら・和田太郎義盛・同次郎義持・同三郎義實・多々羅の三郎義春・同四郎明季・佐野の平太等を始として、郎等雜色に至る迄、催し集めて是を拜ましむ。各聞き給へ。義明今年七十九、老病身

を侵して、餘命旦暮を待つ。今此仰を蒙る事老後の悦、我家の繁昌なり。倩事の心を案ずるに、廿一年を一昔とす。それ過ぎぬれば、淵は瀨となり、瀨は淵となる。然るを平家、日本一州を押領して、旣に廿餘年。非分の官位心に任せ、過分の俸祿思の如くなり。集惡年を積り、猥藉日を重ねたり。其運末に臨んで、滅亡期極まれり。源氏繁昌の折節、何の疑かあるべき。一味同心して賴朝へ參るべし。御冥加なくして討死し給はゞ、各首を並べ奉りて、冥途の御伴仕れ。山賊海賊して死にたらば、瑕瑾恥辱なるべし。相傳の主君、逆臣追討の院宣を給はりて、軍し給はん御伴して、身を亡さん事、家の爲め君の爲め、永代の面目なり。賴朝又冥加ありて、世に立ち給ふものならば、子も孫も、打殘されたらん輩は、恩賞に誇り、などか繁昌せざるべきと申しければ、口々に仔細にや〳〵とて、皆賴もしげにぞ申しける。いか樣にも悅の御使なれば、祝ひ奉るべしとて、酒肴尋常にして、馬一疋に太刀一振相添へて引き、參上仕るべきとて、內々其用意あり。義明敎訓の趣、義ありて私なく、勇ありて戾ることなかりければ、聞く者是を感じけり。昔晏嬰發二勇於崔杼一、程嬰顯二義於趙武一。今

義明、賴朝の爲に、忽ち舊恩を報じ、遂に新功を立て、譽を四方に彰し、名を百代に振ひけり。藤九郎盛長、其より下總に越えて、千葉介に相觸れたり。院宣の案御敎書拔き見て、此事上總介に申合せて、是より御返事申すべしとて、盛長を返す。千葉介が嫡子小太郎は、生年十七になりけるが、折節鷹狩に出でて歸りけるが、道にて盛長に行合ひたり。互に馬を引へて對面して、いかにと問ふ。盛長しか〳〵と答へたり。小太郎心得ず思ひて、盛長を相具して館に歸り、父に向ひいひけるは、恐れある事に候へども、院宣の上御敎書なり侍りぬ。先度の御催促に、參上の由御返事申されず。其上上總介に隨ひたる御身にあらず。彼が參らば參らん、參らずば參らじと仰せ候べきか。全く其下知に依るべからず。只急度參るべき由御返事申させ給ふべしといひければ、賢々しく計らふ者かなと思ひて、誠に然るべきとて、參るべきと御返事申しけり。其より上總介に相觸れければ、生きて此事を奉る、身の幸にあらずや。忠を表し名を留めん事、此時にありとぞ申しける。昔魯連、辯言を以て燕を退け、包胥單辭を以て楚を存す。盛長既に使節を戰術に全うして、三寸の舌を動かし、

深く二人の心をとらかす。經胤等威勢を振ひ、八箇國の兵、既に四夷の亂を治めけり。夫れ辯士は國の良藥、智者は朝の明鏡なりといへり。此事誠なるかな。各馳せ向はんとしけれども、廻れば渡り數多あり。直には海を隔てたり。八月下旬の頃なれば、浪荒く風烈しくして、心の外にぞ遅參しける。

石橋合戰の事

八月廿二日には、兵衞の佐賴朝、北條・佐々木を先として、伊豆・相模二箇國の住人同意の輩、三百餘騎を引具して、早川尻に陣を取る。早川黨進み出で、爰は軍場には惡しく侍り、湯本の方より敵山を越えて、後を打圍む。中に取籠められなば、由々しき大事なり。更に一人も遁れ難しと申しければ、其より米かみ石橋といふ所に移つて陣を取り、上の山の腰に垣楯をかき、下の大道を切塞いで引籠る。此事斯くと聞えければ、大場の三郎景親は、武藏・相模の勢を招き、相從ふ輩舍弟俣野の五郎景尙・長尾新五・同新六・八木下の五郎・漢楊の五郎以下、鎌倉黨は一人も漏れず、海老名の源

八・權の頭季定・子息の荻野の五郎季重・同彥太郎・同小太郎・河村三郎能秀・曾我の太郎祐信・佐々木の五郎義淸・澁谷の庄司重國・山の內・瀧口三郎經俊・同四郎・稻毛の三郎重成・久下權の頭直光・子息次郎實光・熊谷の次郎直實・岡部の六彌太忠澄・淺間の三郎・廣瀨の太郎・笠間の三郎等を始として、宗徒の者共三百餘騎、家の子郎黨相具して、三千餘騎なり。同廿三日の辰時に、大場の三郎景親大將軍として、三千餘騎を相具して、石橋の城に押寄せ、谷を前に隔てゝ、海を後に當てゝ陣を取る。落日西山に傾きて、其日も既に暮れなんとす。稻毛の三郎重成進み出で、日既に暮れぬ。夜軍は敵味方見分けず。されば明日を期すべきやらんと申しければ、大場申しけるは、明日を相待つならば、敵に大勢附重なりて、輙く攻落し難し。後には三浦の者共馳せ來るなれば、兩方を防がん事、由々しき大事なり。道狹うして足立惡しき城なれば、小勢におはする時、賴朝を追落して、明日は一向三浦に向つて勝負すべきと申す。此義然るべきとて、三千餘騎聲揃へて鬨を作る。源氏も同じく鬨を合せて、鳴矢（やつめのかぶら）を射通しければ、山神答へて、敵も味方も大勢とこそ聞えけれ。大場進み出でて弓杖

石橋山合戰

をつき、鐙ふんばり立上つて、抑平家は、桓武帝の御苗裔、葛原親王の御後胤として、代々將軍宣を蒙り、遙に朝家の御守たり。天下の逆亂を和げ、海內の賊徒を隨へ、武勇の名他家に勝れ、弓矢の譽當家に傳ふ。就中太政入道殿の、保元・平治の凶賊を鎭治せしより以來、公家の重臣として、其身太政大臣に昇り、子孫兼官兼職におはします。一天是を重んじ、萬民誰か輕しめん。是に依つて南海・西海の鱗に至るまで、其威應に隨ふ。東國・北國の民、何ぞ忽諸し奉るべき。爰に今容易くも平家の御代を傾け奉らんとの合戰の企、誰人ぞ。恐らくは蟷螂が手を擧げて、龍車に向ふ譬かは。名乘れ〳〵とぞ攻めたりける。北條の四郎步ませ出して、汝知らずや。我君は是れ清和天皇第六の皇子、貞純親王の御子、六孫王より七代の後胤、八幡殿の四代の御孫、前右兵衞權の佐殿ぞかし。傍若無人の景親が申狀、頗る尾籠なり。平家は惡行身に餘りて、朝威を蔑にす。是に依つて彼一門を追討して、逆鱗を安め奉るべき由、太上法皇の院宣を下されたり。錦の袋に納めて、御旗の頭に挾み給へり。且は拜み奉るべし。されば賴朝こそ、日本の大將軍よ。平家こそ、今は朝家の賊徒よ。綸言の上

は、誅戮時刻を廻らすべからざる處に、彼家人と號する輩是あるに依つて、先づ其黨類を追討して後、花洛に上り、逆臣を誅せらるべきなり。景親慥に承れ。故八幡殿の、奥州の貞任・宗任を攻められしより以來、東國の輩代々相續いで、誰人か君の御家人にあらざる。隨つて景親も、父祖相傳の者なり。馬に乘りながら仔細を申す條奇怪なり。後勘兼て顧みざるべきか。下りて申すべきなり。御伴には時政父子一人も漏れず。佐々木の太郎定綱兄弟四人・加藤太光胤兄弟と澤六郎・近藤七・新田七郎父子・城の平太・小中太・公藤の介父子・土肥の次郎父子・新開荒太郎・土屋の三郎・岡崎の四郎と其子與一・懷島・豐田の次郎等侍ふなり。其外の人々、國々より院宣に任せ御教書に付きて、夜を日に繼ぎて馳せ參る。八虎の凶徒に諂ひて後悔すな。速に申を脱ぎ手を合せて參るべきなりといへば、大場重ねて申しけるは、昔八幡殿の後三年の軍の御供して、出羽の國仙北の金澤の城攻めらるゝ時、十六歳にて先陣をかけ、右の目を射させて、答の矢を射、其敵を討取つて、功を其場に施し、名を後代に留めし鎌倉の權五郎景政が末葉、大場の三郎景親大將軍として、兄弟親類已下三千餘騎

なり。是程の大事を思立ち給ひながら、勢のかさこと少なけれ。實に誰かは隨ひ奉るべき。只心にくき體にて落ち給へかし。命計り生け申さんといふ。北條又申しけるは、景親は、先祖は具に知つたりけり。いかに口は口心は心と、三代相傳の君に敵し申すぞ。忠臣は二君に仕へずといふ事あり。其上十善帝王に向ひ奉り、院宣を蹄にかけ弓矢を放たん事、冥加の程覺束なし。勅命を反く者は、劍を歩むが如しといふにや、旁以て無益の事なり。只急ぎ參れといふ。大場重ねて申しけるは、先祖は誠に主君。但昔は昔今は今、恩こそ主よ。源氏は朝敵となり給ひて後、我身一人さへ置所なし。家人の恩までは、沙汰の外なり。景親は、平家の御恩を蒙る事、海山の如く高く深し。恩を知らざるは木石なり。何ぞ世になき主を顧みて、今の恩を忘るべき。勇士は諂へるが如しといふ事あり。只今追落し奉るべきなりとて、三千餘騎我も〳〵と勇みけり。北條又申しけるは、欲は身を失ふといへり。まさなき大場が詞かな。一旦の恩に耽りて、重代の主を捨てんとや。弓矢取る身は、言葉一も輙すからず。生きても死しても名こそ惜しけれ。景親よ。權五郎景政が末葉と名乘

りながら、先祖の首に血をあやす、欲心の程こそ不當なれといひければ、敵も味方も道理なれば、一度に吐とぞ笑ひける。　賴朝仰せけるは、武藏・相模に聞ゆる者共は、皆ありと覺ゆ。　中にも大場・俣野兄弟先陣と見えたり。　此等に誰か與ぬべきと宣へば、岡崎の四郎義眞申しけるは、弓箭を取つて戰場に出づる程の者、敵一人に組まぬ者やは侍るべき。　親の身にて申す事、人の嘲を顧みざるに似たれども、存ずる處を申さゞらんも、還つて又私あるに似たるべし。　義貞は此間、大事の所勞仕りて、未だ力付かずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓箭取つては等倫に劣る可らず。其器に侍り、仰含めらるべきかと申しければ、賴朝宣ひけるは、趙武、擧するに私讎を以てし、祈奚、勸むるに己が子を以てせり。　忠ありて私なきには、或は敵を擧し或は子を勸むる事、皆義に叶ひ法に叶ふとて、義貞を召してけり。　與一其日の裝束には、青地の錦の直垂に、赤威の片白の冑に、裾金物打つたるを着て、端黑の箭負ひ、長覆輪の劔を帶きけり。　折烏帽子を引立て、弓を平め跪きて、將軍の前に平伏せり。　白葦毛なる馬をぞ引かせたる。　其體邊を拂つて見えたりける。　今日の選にあへる、誠に

ゆゝしく見えし。賴朝・佐奈田に宣ひけるは、大場・俣野は名ある奴原なり。今日の軍の先陣仕りて、彼等二人が間に組め。源氏の軍の手合なり。高名せよとぞ宣ひける。與一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安といふ者を招き寄せて、義貞が母、又子供が母にも語るべしとていひけるは、一昨日打出でしを最後と思ひ給ふべし。兵衞佐殿、今度の軍の先陣勤めよと、直に仰せたびたれば、多くの人の中に選ばれたる事、弓矢取る身の面目なり。されば命を限りに戰はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。豫て斯くと知り侍らば、何事も申置くべかりけり。其事今は力なし。我討たれぬと聞き給ひなば、母御前女房の御歎こそ、思ひ殘し奉れ。たとひ我れ死したり共、世の鎭まらん程は、二人の稚き者をば、いかならん野の末山の奥にも隱し置きて、賴朝の世に立ち給ひたらん時、先祖なれば、岡崎と佐奈田とをば申給はりて、兄弟に知らせてたび候へ。扨は女房も、子供が後見して坐しませ。佛に花香進らせて、後の世弔ひ給へ。父岡崎殿も、賴朝の御伴なれば、軍の習生死を知らず。又汝も、少き女性は何事かあるべきなれば、斯く申置くなりと、慥にいひ傳ふべし。

次郎、與一に組まんと志して、鹿毛なる馬に乘りて馳せ來る。與一は岡部とは思ひ寄らず、大場か俣野かと思ひ馳寄せて、甲のてへんに手を打入れて、鞍の前輪に引付けて、首を搔き取上げ、雲透に見れば、思ふ敵にはあらずして、岡部の彌次郎なり。あな無慙や。鹿待つ所の狸とは此事にや。何しに來つて、義貞に討たるらんとて、首をば谷へぞ投入れける。與一が乘りたる馬は、白葦毛太く逞しきが、七寸に餘りて、鼻の先瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顏といふ。東國一の强馬なり。もと三浦の介が許にありけるが、餘りに强くて、輙く乘る者もなかりけるを、岡崎所望して乘りけるが、それも進退し煩ひたりけるに、與一計りぞ乘り隨へける。されども岡崎持和げて、三浦へ返したれば、本の栖へ歸りたりとて、都返りと名付けたり。佐奈田折節馬なくて、又乞返したれば、古巢へ歸りたりとて、鶯とも呼びけり。元來强き馬なりけれども、己が力を賴みつゝ、出雲轡の大なるに、手綱二筋縫合せてぞ乘つたりける。岡部の彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。猿物ぞと心得て、引留めんくとしけれども、此馬の癖として、口をば主

に打くれて、胸にて走る馬なりけり。猶も留めんと引く程に、手綱三つに切れければ、左右の水付とらへたり。左右の水付引もぎて、心の儘に引いて行く。大場の三郎は、弟の俣野の五郎にいひけるは、構へて與一に組み給へ。景親も目に懸らば組まんずるぞといふ。俣野は餘りに暗くて、敵も味方も見え分かず、與一も何やらんといへば、與一が鎧は、裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き縨を懸けたりつれば、驗かりつるなりと敎ふ。俣野歩ませ出づ。與一馬に引かれて近付きたり。俣野、敵の寄すると思ひければ、佐奈田の與一義貞と名乘りつるは、落ちぬるかと呼ばはりけり。無下に近かりければ、義貞爰にあり。問ふは誰ぞ。俣野の五郎景尙と名乘るや遲き、押並べて馬の間へ落重なる。上になり下になり、彈返し持返し、山のそばを下りに大道まで、四段計りぞ轉びたる。今一返しも轉びなば、互に海へは入りなまし。俣野は大力と聞くに、いかゞしたりけん、下に推付けられて、俯伏に臥し、頭は下に足は上に、起きん〳〵としけれども、俣野力なかりける。與一は上にひたと乘り得て、義貞敵に組みたり。落重なれ〳〵と呼ばはりけれども、家安を始

として、郎等共押隔てられて續く者なし。俣野今は叶はじと思ひて、景尙佐奈田に組みたり。續けや〳〵と叫びけるに、長尾の新五、聲に付きて落合ひて、上や敵下や敵と問ふ。與一上に乘り乍ら、斯く宣ふは長尾殿か。上ぞ景尙下ぞ與一。謬し給ふなといふ。俣野下にて、上ぞ與一下ぞ景尙、誤すなといふ。頭は一所にあり、闇さは闇し、音は息突きて、分明に聞え分けず。上よ下よと論じければ、思ひ詫びてぞ立つたりける。俣野、あな不覺の殿や。聲にても聞知りなん。鎧の毛をも捜り給へかしといふ。長尾誠にと思ひて、鎧の毛をぞ捜りける。與一あらはれぬと思ひて、右の足を揚げて、長尾をむずと踏まふ。踏まれて下りに弓長三杖計り、とゞ走りて倒れにけり。其間に與一刀を拔いて、俣野が首を搔く。搔けども〳〵切れず。刺せども刺せども透らず。與一刀を持揚げて、雲透に見れば、鞘卷の栗形かけて、鞘ながら拔きたりけり。鞘尻咬へて拔かん〳〵としけれども、運の極めの悲しさは、岡部の彌次郎が首切つたりける刀を、拭はず鞘に指したれば、血詰して拔けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、與一が胡籙の間にひたと乘り得て、甲の手へんを引仰けて頸

を掻く。無慙といふも疎なり。俣野を引起して、いかに手や負ひたると問へば、首こそ重く覺ゆるといふ。首を搜れば、ぬれ〳〵としたり。手負ひたるにこそとて、與一が刀を見れば、鞘尻一寸計り碎けたり。强く刺したりと覺えたり。其後俣野は軍はせず。佐奈田の與一は、俣野の五郎止めたりと叫びければ、源氏方には惜みけり。平家方には是を悦びけり。家安は大勢に推隔てられ、主の與一が討たれたるをば知らざりけり。一所にていかにもならんと、主を尋ねて走り廻りけれども、敵は山に滿々たり。尾は一つ隔てたり。死生の行方知れず。高聲にいひけるは、東八箇國の殿原は、誰か源氏重代の御家人にあらざる。平家追討の院宣を下さるゝ上は、今は兵衞の佐殿の御代ぞかし。源氏の御繁昌今にあり。明日は殿原悔み給ふべし。矢をも一筋放たぬ先に、參り候へかしとぞ罵りける。相模の國の住人澁谷の庄司重國、斯くいふは誰ぞと問ふ。佐奈田殿の郎等に、文三家安と答ふ。重國申しけるは、あゝあたら詞を主にいはせで、人がましきといふ。家安はあしき殿の詞かな。げに人の郎等は人ならず。されども家安、主は二人とらず。他人の門へ足踏入れず。腕

首取つて追從せず。殿こそ實の人よ。桓武帝の苗裔、高望の王の後胤、ちゝぶの末葉と名乘りながら、一方の大將軍をだにもし給はで、思ひ寄らず大場三郎が尻舞して、迷ひ行き給ふをぞ人とはいはず。家安人ならずとも、押並べて組み給へかし。手並の程見せ奉らんといひたりければ、敵も味方も吐と笑ふ。重國由なき詞つかひて、苦返つてぞ聞えける。家安はちゝぶの一門に、稻毛の三郎が手に合ひて戰ひけり。重成申しけるは、やゝ文三よ。己が主の與一は討たれぬ。今は誰をか育むべき。逃げよ助けんといふ。文三申しけるは、やあ稻毛殿。家安は幼少より、軍には萬け組むといふ事は習ひたれども、逃げ隱るといふ事は未だ知らず。主の死ぬればとて逃れんは、御邊の郎等をば、何にかはし給ふべき。まさなき殿の詞かな。與一討たれ給ひぬと聞きて後は、誰故身をばたばふべき。逃げよと宣はんよりは、押並べて組み給へかしとて進みければ、稻毛の三郎が郎等押阻て〳〵戰ひけり。家安分捕八人して、終に討死して失せたるは、譽めぬ者こそなかりけれ。岡崎四郎賴朝の御前に參り、與一冠者こそ、討たれ候ひけれと申せば、佐殿は、あな無慙や。よき若者を、

頼朝若し世にあらば、與一が後世をば弔ふべしと仰せられければ、岡崎は、たとひ五人十人の子をば失ひ侍るとも、君だに御世に立ち給はゞ、それこそ本意に候へと、心強くはいひけれども、さすが恩愛の道なれば、鎧の袖をぞ濕らしける。與一・家安討たれて後は、源平互に入替へ〳〵、終夜戰ひけるが、軍兵最早疲れぬ。敵は大勢なり。今はいかにも叶ひ難しとて、曉方に頼朝の勢は、土肥を指してぞ落行きける。頼朝も縱ひ引くとも、矢一つ射て落ちんとて、後陣に下り、返合せよ〳〵と下知し給ふ。是を聞きて三浦の大田の次郎義久・加藤次景廉、三崎の堀口といふ所に下り塞がつて、散々に戰ふ。敵は數千ありけれども、道狹ければ、一騎三騎づつ寄せけるを、引つめ〳〵射る。是にぞ多く射られける。矢種盡きければ、義久・景廉引退きけり。

頼朝落ち給ふ事附公藤の介自害の事

八月廿四日辰の刻には、兵衞の佐頼朝、上の杉山へ引き給ふ。荻野の五郎季重、兄弟子息五騎にて追懸け奉り申しけるは、此先に落ち給ふは、大將軍とこそ見え給へ。

まさなくも後をば見せ給ふ者かな。無益の謀叛發して、源氏の名折し給ひぬ。返し給へ〳〵とて馳せ來る。頼朝安からず思ひ給ひければ、只一人留まつて、一の矢番ひて射給へば、荻野が弓手の草摺縫様に射込まれたり。二の矢に、鞍の前輪を馬の背懸けて射渡し給へり。馬頻に彈ねければ、荻野馬より落つ。三の矢に、彦太郎が馬の胸帶盡射させて、是も馬跳ねければ、足を越してぞ立つたりける。伊豆の國の住人宇佐比の三郎助茂馳せ参りて、頼朝の前に指塞りて、昔より大將軍の戰なき事に侍り。疾々引き給へと申す。防箭射る者のなければこそと宣ふ時、相模の國の住人飯田の三郎家能馳せ來つて、よき箭三つ射ける程に、杉山へこそ懸り給へ。軍兵共山峨々として登り難かりければ、鎧に太刀計り帶びて、此彼より落上りけり。伊豆の國の住人澤の六郎宗家是にて討たれぬ。同國の住人公藤の介茂光は、元より肥え太りたる男なり。悪所に懸けて身苦しく、氣絶えて登りやらず。伴したりける子息の、狩野の五郎親光にいひけるは、此山烈しくて落延び難し。一定敵に討たれぬと覺ゆ。人手に懸けずして我首を切れ。佐殿は末頼もしき人ぞ。構へて二心なく奉公

公藤介茂光自盡

して、助け奉れといふ。親光、恩愛の名殘を憐みて、肩に引懸け上りけれども、我身だにも行兼ねたるに、父をさへ斯くしければ、更に延び得ず。公藤の介は、やゝ親光よ。我を育まんとて、父子共に人手に懸つて、兎角いはれん事、なき跡迄も心憂かるべし。敵は既に近付きたり。只急ぎ我首を切つて孝養せよ。全く逆罪になるまじ。急げ〳〵といひけれども、恩愛の命を絶たん事の悲しさに、暫く案じける間に、茂光は腹搔切つて臥しにけり。田代の冠者信綱は、茂光には孫なりけるが、心剛に身健なりけり。祖父が自害を見てつと寄り首搔落して、それ孝養し給へとて、伯父狩野の五郎に與へけり。親光、鎧の袖に引陰して、泣々山に登りけり。北條の次郎宗時・新田の次郎忠俊、馬の鼻を返して戰ひける程に、甲斐の國の住人平井の冠者義直と、伊豆の國の住人新田の次郎忠俊と馳せ並べて組んで落ち、刺違へて死にゝけり。北條の次郎宗時は、波打際を歩ませ落ちけるを、伊豆の五郎助久、係並べて、取組んで落ちにけり。兩虎相戰ひて、互に命を亡し名を留めけり。兵衞の佐賴朝は、猶も落延び給はざりけるを、大場の三郎景親・佐々木の五郎義淸等、大勢にて先陣に進みて追懸

けたり。佐々木の五郎義淸は、大場の三郎が妹聟になりければ、景親が勢にぞ打具したる。鍇月毛に赤皮縅の鎧着て、著しくこそ見え渡れ。兄の四郎高綱申しけるは、義淸慥に承れ。父の秀義は、故六條判官殿に、父子の義をなされ奉りて、御子孫の今までも、賴み賴まれ奉る。これに依つて兄弟四人味方にあり。汝一人一門を引分れて、思ひ懸けぬ大場が尻舞して、同心する條心得ず。勳功の賞には、他人の手に懸くべからずといひければ、存ずる旨のありけるにや、是非の返事はせざりけり。大場の三郎も佐々木の五郎も、鞭を打つてぞ攻懸けゝる。

高綱に姓名給はる事附紀信高祖の名を借る事

兵衞の佐賴朝は、又射殘し給ひたりける箭を取りて番ひ、既に引かんとし給ひける處に、佐々木の四郎高綱、矢面に塞がりて、大將軍たる人の、さうなく弓を引き矢を放ち給ふ事侍らず。御伴の者共一人もあらん程は、かるゞゝしき事あるべからず。郎等乘替其詮なり。とくゝゝ落延び給へ。定綱・高綱兄弟御身近く侍り、防ぎ矢仕る

べし。但姓名を給はれかしといひければ、賴朝、仔細にや、暫く高綱に預け給ふと宣へば、佐々木姓名を給はりて、弓矢取て番ひ、坂を下に向つて、大音揚げて名乘りけるは、清和帝の第六の皇子貞純親王の苗裔、多田の新發意滿仲の後胤、八幡太郎義家に三代の孫子、左馬頭義朝の三男、前の右兵衛の權の佐源の賴朝爰にあり。東國の奴原は、先祖重代の家人等なり。馬に乘りながら、御前近く參る條、狼藉なり奇怪なり。罷退けといひかけて、暫く固めて、態と馬をぞ射たりける。先陣に進みける大場が童、馬の太腹を射通したれば、屛風を返すが如く、馬は山の細道に、横ざまに倒れ伏す。童は馬に敷かれたり。道狹ければ、乘越え進みて上る者なし。馬を取退け、童を起さんとする間に、賴朝遙に落延び給ひぬ。其後大場、遁すな者共とて、打て上りけるを、定綱・高綱兄弟返し合せて、散々に防ぎ戰ふ。矢種も盡きければ、四郎高綱兄弟太刀を拔き、坂を下に返し合せ〳〵、七ヶ度まで切下しければ、大場が大勢、坂を下りに追返され、此間に深く杉山にこそ籠り給ひけれ。高綱跡目に付きて、尋ね逢ひ奉りたりければ、賴朝の仰には、汝が忠節に依つて、遁れ難き命を全うせり。世

を打取らんに於ては、必ず半分を分け給ふべしとぞ仰せける。古人いへる事あり。疲れたる兵の再び戰ふをば、一人當千といへり。何に況や佐々木疲れて七ヶ度の戰をや。世靜りて後、七ヶ度の忠を感じて、備前・安藝・周防・因幡・伯耆・日向・出雲七ヶ國を給はりたりけれども、高綱は杉山に入り給ひし時は、日本半國とこそ約束はありしに、七ヶ國は數ならずとて、代を恨み髻切つて、高野山にぞ籠りにける。善にも惡にも猛かりける心なり。昔楚國の項羽と、漢朝の高祖と、位を諍ひ戰ひけるに、項羽は多勢なり。高祖は小勢なり。されども合戰牛角にして勝負なし。項羽を討たんが爲に、高祖楚國へ入ると聞えければ、楚國の大勢悅びて高祖を待つ。高祖は革車に乘つて、官兵を從へたり。項羽が兵に圍れ、高祖遁れ難かりけるに、紀信といふ者、高祖の車に乘替つて、帝を遁し奉り、我は是れ高祖なりと名乘りければ、敵誠と思ひつゝ、革車を圍みて是を搦め見れば、高祖にはあらず、紀信といふ者なり。項羽是を捕へて、我に從ひ降人にならば、赦さんといひければ、忠臣は二主に仕へず、勇士諂言を得ずといひて、從はざりければ、兵共革車に火を付けて、紀信を燒き死しける。

佐々木の四郎高綱も、此事を思ひけるにや、姓名を給はつて敵を返し、頼朝を延し奉る。彼は死して名を殘し、是は生きて恩を預かる。異國本朝替れども、例(ためし)は誠に一つなり。

源平軍物語巻第二終

源平軍物語 卷第三

賴朝臥木に隱る附梶原賴朝を助くる事

兵衞の佐賴朝は、土肥の杉山を守つて、搔分け〱落ち給ふ。伴には土肥の次郎實平・北條の四郎時政・岡崎の四郎義眞・土肥の彌太郎遠平・懷島の平權の守景能・藤九郎盛長已下の輩、相從つて落ち給ひけるを、大場ぞが案內者として三千餘騎にて追懸けたり。杉山は分內狹き所にて、忍び隱るべき樣なし。田代の冠者信綱は、大將を延ばさんとて、高木の上に昇つて、引取り〱散々に射る。敵三千餘騎、田代に防がれて、さうなく山にも入らざりけり。其隙に賴朝は、とびの岩屋といふ谷に降下り見廻せば、七八人が程入りぬべき大なる臥木あり。暫く爰に休みて、息をぞ繼ぎ給ひける。去程に味方の者共、多く跡目に付きて來り集まる。爰に賴朝仰せける

は敵は大勢なり。而も大場そが案内者にて、山踏して相尋ぬべし。されば大勢惡かりなん。散々に忍び給へ。世にあらば互に尋ね尋ぬべしと宣へば、兵共、我等既に日本國を敵に受けたり。遁るべき身に非ず、兎にも角にも一所にこそと、各返事申しければ、賴朝重ねて宣ひけるは、軍の習、或は敵を落し、或は敵に落さるゝ、是定れる事なり。一度敵に敗られ、永く命を失ふ道やはあるべき。爰に集まり居て、敵になづられて、命を失はん事、愚なるに非ずや。昔范蠡會稽の恥を悔えず、終に勾踐の仇を返す。曹沫三敗の恥に死せず、已に魯國の恥を報ず。こゝを遁れ出で、大事を成立てたらんこそ、兵法には叶ふべけれ。いかにも多勢にては、遁れ得べからず。各心に任せて落つべし。賴朝山を出で、安房・上總へ越えぬと聞えば、其時急ぎ尋ね來り給ふべしと、言を盡して宣へば、道理遁れ難うして、各思ひ〳〵にぞ落行きける。北條の四郎は、甲斐の國へ越えにける。賴朝に相隨ふ人々には、土肥の次郎實平・同男遠平・新開の次郎忠氏・土屋の三郎宗遠・岡崎の四郎義眞・藤九郎盛長なり。兵衞の佐賴朝は、軍兵ちり〴〵になりて、臥木の天河に隱れ入り給ひにけり。其日の

裝束には、赤地の錦の直垂に、赤威の鎧着て、臥木の端近く居給へり。金物には銀の蝶の丸をきびしく打つたりければ、殊に輝きてぞ見えける。其中に藤九郎盛長申しけるは、盛長承り傳へ侍り。昔後朱雀院の御宇天喜年中に、御先祖伊豫の守殿、貞任・宗任を攻められけるに、官兵多く討たれて落ち給ひけるに、僅に七騎にて山に籠り給ひけり。されども終に逆賊を亡して、四海を靡かし給ひけり。今日の御有樣、昔に相違なし。吉例なりと申しければ、賴朝も賴もしく覺えて、八幡大菩薩を心の内に念じ給ひけり。田代の冠者は、矢種既に盡きぬ。賴朝今は遂に落延び給ひぬらんと思ひければ、木より飛下りて、跡目に付けて落行き、同じ伏木の天河にぞ入りにける。田代、佐殿に頰を合せて、いかゞすべきと歎く處に、大場・曾我・俣野・梶原三千騎、山踏して、木の下萱の中に亂れ散りて尋ねけれども、見えざりけり。大場伏木の上に登りて、弓杖を突き踏跨がりて、正しく賴朝は、此迄坐しつるものを。伏木不審なり。空に入りて捜せ者共と下知しけるに、大場が從弟に梶原平三景時進み出でて、弓脇に挾み、太刀に手かけて伏木の中につと入り、賴朝と景時と眞向に居向ひて、互

に眼を見合せたり。賴朝は今は限なり。景時が手に懸りぬと覺しければ、急ぎ案じて降をや乞はん、自害をやせんと覺しけるが、いかゞ景時程の者に、降をば乞ふべき。自害と思ひ定めて、腰の刀に手をかけ給ふ。景時哀れに見奉つて、暫く相待ち給へ。助け奉るべし。軍に勝ち給ひたらば、公忘れ給ふな。若し又敵の手に懸り給ひたらば、草の陰までも、景時が弓矢の冥加と守り給へと申しも果てぬに、蜘蛛の糸俄に天河に引きたりけり。景時不思議と思ひければ、彼蜘蛛の糸を弓の筈甲の鉢に引懸けて、暇申して、伏木の口へ出でにけり。賴朝然るべき事と覺しながら、掌を合せ、景時が後顏を三度拜して、我れ世にあらば、其恩を忘れじ。たとひ亡びたりとも、七代までは守らんと心中に誓はれける。後に思へば、景時が爲には、忝しとぞ覺えたる。平三伏木の口に立塞がりて、弓杖を突きて申しけるは、此內には蟻螻もなし。蝙蝠は多く騷ぎ飛び侍り。土肥のまなづるを見やれば、武者七八騎見えたり。一定賴朝にこそと覺ゆ。あれを追へとぞ下知しける。大場見やりて、彼も賴朝にてはおはせず。いかにも伏木の底不審なり。斧鉞を取寄せて、切破りて見べしといひ

けるが、其も時刻を移すべし。よし〳〵景親入りて搜して見んとて、臥木より飛下りて、弓脇挾み太刀に手かけて、天河の中に入らんとしけるを、平三立塞がり、太刀に手懸けていひけるは、やあ大場殿。當時平家の御代なり。源氏軍に負けて落ちぬ。誰人か源氏の大將軍の頸取りて、平家の見參に入れて、世にあらんと思はぬ者のあるべきか。御邊に劣つて、此臥木を搜すべきか。景時に不審をなして搜さんと宣はゞ、我々二心ある者と思へるか。豫て人の隱れたらんに、斯く甲の鉢弓の筈に蜘蛛の糸懸るべしや。之を猶も不審して、思ひけがされんには、生きても面目なし。誰人にも搜さすまじ。此上に推して搜す人あらば、思ひ切りなん景時はといひければ、大場もさすが入らざりけるが、猶も心に懸りて、弓を差入れて打ふりつゝ、からり〳〵と二三度搜り廻しければ、頼朝の鎧の袖にぞ當りける。深く八幡大菩薩を祈念し給ひける驗にや、臥木の中より、山鳩二羽飛び出でて、はた〳〵と羽打して出でたりけるにこそ、頼朝内におはせんには、鳩あるまじとは思ひけれ。されども不審なりければ、斧鉞を取寄せて切つて見んといひけるに、さしも晴れたる大空、俄

に黒雲引被ひ、雷夥しく鳴廻つて、大雨頻に降りければ、雨止みて後破つて見べしとて、杉山を引返しけるが、大なる石のありけるを、七八人して倒し寄せ、臥木の口に立塞ぎてぞ歸りにける。

聖德太子椋木附天武天皇榎木の事

昔聖德太子の佛法を興さんとて、守屋と合戰し給ひしに、逆軍は大勢なり、太子は無勢なりければ、いかにも叶ひ難し。大返しといふ所にて、只一人引へ給ひけるに、守屋の臣と勝溝の連と行會ひて、遁れ難くおはしけるに、道に大なる椋の木あり。二に割れて太子と馬とを、木の空に隱し奉り、其木卽ち愈合ひて、太子を助け奉り、終に守屋を亡して、佛法を興し給ひけり。天武天皇は、大伴の王子に襲はれて、吉野の奥より山傳して、伊賀·伊勢を通り、美濃の國におはしけるに、王子西戎を引率して、不破の關まで攻め給ひけり。天武危く見え給ひけるが、傍に大なる榎木あり、二に割れて、天武を天河に隱し奉りて、後に王子を亡して、天武位に卽き給へり。是も然る

べき賴朝の世に立つべき瑞相にて、斯る臥木の空にも、隱れけるにやと末賴もし。賴朝は、三千餘騎が引退きたる其隙に、內より石を轉ばし退け、臥木を出で、小道越といふ岩石を上り、土肥のまなづるへ向つて落ち給ひけり。雨歇みければ、大場馬を引へて、いかにも臥木覺束なし。搜して見んとて押寄せ見れば、口を塞げる大石を轉ばし退けて、落ちたる跡あり。さればこそ空の中におはしけり。是は梶原平三が計らひにて落しけり。されども時の間に、遠くはよも延び給はじ、續きて攻めよとて、跡目に付きて追懸けたり。

地藏堂にて賴朝以下佛壇の下に隱るゝ事

去程に主從八人の人々は、小道の峠に登つて、後を顧れば、敵間近く追上る。いかゞはすべき。此上は自害すべきかと宣へば、土肥申しけるは、物さわがしや、事の樣見んとて、高き所に上りて見廻せば、傍に御堂あり。小道の地藏堂といふ寺なり。八人堂に入りて見れば、法師一人、佛前に念珠繰りて居たりけり。土肥、上人にいふや

うは、是は源氏の大將軍に、兵衞の佐殿と申す人なり。石橋の軍敗れて、敵の爲に追懸けらる。忍ぶべき所やある。佛壇の中にも隱し置けと申しければ、上人思ふやう、有難き事かな。げに聞き奉る源氏の大將軍なり。軍に負け給はずば、今爭か斯樣の法師に、助けよと手を合せ給ふべき。助け奉りて世におはせば、奉公にこそと思ひて申しけるは、此堂は人里遠くして山深ければ、身の用心の爲に、佛壇の下に穴を構へて、人七八人入りぬべき程に用意せり。暫く忍び入りて御覽ぜよとて、八人の殿原を押入れつゝ、上に蓋して、其上に雜具取廣げて、我身は佛前に座禪の由にて眠り居たり。大場大勢引具して、御堂の前まで追懸けて、此寺に人やある。只今落人の通りつるは、知らずや否やと再三問へども、答ふる者なし。大場打寄り佛前を見れば、法師あり。いかに人の物を問ふに、答へざるぞ不思議なりと責めければ、僧の曰く、是は三ヶ年の間、四時に座禪する者なり。入定の折節にて、承らずと申す。重ねて問ふ、落人の此軒を通りつるをば、聞かずや知らずやといへば、斯樣に座禪して侍れば、外の聲耳に入らず。内心思慮なければ、聞えず知らずといふ。景親大に瞋

つて、爭か知らざるべき。拷問せよとて、軍兵堂內に打入りて、上人を搦(から)めて大庭に引出し、拷木にかけて、巳午の時より申の時計りまで、上げつ下しつ推問すれば、絕入りぬる事度々なり。只いふ事とては、全く知り聞かず。落人とは何者ぞ。骨肉の親類にもあらず。又一室の同朋にもあらず。其分にもあらぬ人を隱さんとて、佛法修行の身をや痛むべき。只御景迹といひけれども、死ぬれば水をふき、生返れば拷木に上げて責むる程に、四五度の時は、終に上人を責殺す。猶も面に水を灑ぎ、喉に漿(こんず)を入れければ、又蘇(よみがへ)りたりけり。上人思ひけるは、人を助けんとて、斯く憂目を見ることそ悲しけれ。何事も我身にまさる事なし。さらば落ちんと心弱く思ひけるが、やゝ案じて、生ある者は必ず死す。我身一つを生きんとて、爭か七八人を亡すべき。昔釋尊の、菩薩の行を立て給ひけるには、薩埵王子としては、飢ゑたる虎に身を任せ、尸毗大王としては、鳩に代つて命をも捨て給ひけり。たとひ身は徒に亡ぶとも、此人々を助けたらば、此堂をも建立し、我後生をも訪(とぶら)ひなんと思ひ返して、問へども問へども落ちざりければ、申の時には、上人終に責殺さる。大場申しけるは、不便々々、

上人は誠に知らざりけり。非業の死こそ無慙なれ。此間に敵は遙に延びぬらん。急げ〳〵とて、上人をば打捨てゝ、眞鶴へ向けて攻行きける。其日も既に暮れければ、遠近の入逢の野寺の螺鐘打響けども、小道の堂には音もなし。賴朝は實平が袖を控へて宣ひけるは、寺々の螺鐘は聞ゆれども、此寺の鐘の音もせず。上人法師は、いかなる目に遭ひたるやらん、覺束なし。出でて見よとありければ、壇の下よりはい出でて、堂の內外を見廻れば、責殺されて庭にあり。斯くと申しければ、賴朝も人人も、壇より出でて庭に下り、是を見給ひて、賴朝が命に變りたるこそ不便なれ。いかゞせんと歎き給ひ、膝の上に搔乘せ給ひつゝ、涙ぐみ給ふも哀れなり。七人の者共も、面々に袖を絞りけり。賴朝理に過ぎて泣き給ひける涙、上人の口に入りければ、喉潤ひて又蘇る。御堂の內に搔入れて、夜の更くる迄勞り、物語し給へり。斯くて賴朝此處に逗留ありしに、或時上人申しけるは、今迄は御命に代り奉りぬ。大場心深き人なり。又來りて、御堂の內外捜し尋ね侍らば、御心憂き目をも覽じぬと覺ゆ。夜中なれば、何事か侍るべき。忍び給へと申せば、賴朝實にもと思召し、我れ世を

取るならば、此堂の修理といひ、今の恩の報答といひ、心にかけて忘るべからず。さらば暇申さんとて、賴朝立出で給へば、七人の人々も、足を早めて落行きけり。斯くて兵衞の佐賴朝は、此山に隱れ居給へるが、嵐松を吹く聲を聞いては、敵の攻下るかと太刀の柄をとり、水谷川に流るゝ音に驚きては、兵の競ひ上るかと、腰の刀を拔き設けて、網代の氷魚の亡び易き命、籠の内の鳥の出で難き身、今こそ思ひ知られけれ。土肥の次郎が女房は、心さかしき者にて、僧を一人相語らひ、杉山に坐しましける程は、爺等に御料をかまへ入れ、上に樒をおほひ、閼伽の桶に水を入れて、上人法師の花摘む由にもてなして、忍び忍びに送りけり。地藏堂の上人も、夜々にさまざま訪らひ申しけり。さてこそ深山寂寞の中にして、五六日をば經たりけれ。されば賴朝、臥木に隱れんとし給ひける時は、土肥の次郎實平・子息遠平・新開の荒太郎實重土屋の三郎宗遠・岡崎の四郎義實・土肥が小舍人に七郎丸といふ冠者・佐殿、共に六人なり。跡目に付いて尋ね來りたりけれども、大勢にては忍び難し。何方へも各隱れ籠りて、後にはと宣ひければ、北條時政と子息義時とは、山傳ひして甲斐の國へ落

ちぬ。田代の冠者信綱と、加藤次景廉二人は、三島の社に隠れたりけるが、隙を窺ひ社を出でて落行く程に、加藤太に行合ひて、是も甲斐へぞ越えにける。

大沼三郎、三浦に遇ふ事

八月廿三日には、石橋の合戰と、豫て觸れられたれば、三浦は參るべき由申したれば、其日衣笠が城より門出し、舟に乘つて三百騎、沖懸りに漕がせけるに、波風荒くして叶はず。廿四日に、陸より參るべきにて出立でけるが、丸子川の洪水に、馬も人も叶ひ難しと聞きて、其日も延引す。廿五日に、和田の小太郎義盛三百餘騎にて、軍は日定あり。さのみ延引心元なし。打てや〳〵とて、鎌倉通りに腰越・稲村・八松が原・大磯・小磯打過ぎて、二日路を一日に、酒勾の宿に着きにけり。丸子川の洪水未だへらざれば、渡す事叶はずして、宿の西の外八木下といふ所に陣を取る。洪水のへるを待ち、曉渡さんとて控へたり。和田の小太郎は、源遠うして流深し。いつを限と待つべきぞ。日數遙に延びぬ。事のやう見て渡さんとて、高き所に打上り、雲透

に水の面を見渡せば、川の西の端に馬を控へて、武者一人ありて、東を守りてたゝずみたり。漲り下る洪水の習にて、流烈しくて水音高し。小太郎大音上げて、西の川の端におはするは誰人ぞと問ふ。聲に付いて、三浦黨に大沼三郎なり。佐殿の味方に參りたりき。軍は旣に散じぬ。參りて申さん。川の淵瀨を知らず。健ならん馬を給はらん。三浦の人々と見奉るは僻事かと喚ばはる。三浦はあな心苦し。急ぎ馬をやれとて、高く强き馬を渡したり。大沼是に乘りて川を渡り、陣に下りていひけるは、軍は廿三日の酉の時より始りて、ゆゝしき合戰なりき。されども敵は大勢三千餘騎、味方は僅か三百餘騎、終に味方の軍敗れて、遁るべき樣なし。三浦の與一は、俣野の五郎に組んで討たれぬ。大將軍も遁るゝ方なく、手を下して戰ひ給ひしかども討たれ給ひぬ。大將軍亡び給ひぬる上は、ちり〴〵に落失せぬ。我身も希有にして遁れたりしかば、此やう人々に披露せんとて落ちたりしかども、敵山々にみち〳〵、餘黨の人を尋ね捜る間、兎角隱れ忍びて紛れ來れりと、一つは誠一つは空事語りけり。此大沼は與一が討たるゝ迄こそ、軍場にはありけれ。大勢に恐れて、

急ぎ落ちたりしかば、爭でか兵衞の佐殿の實否をば知るべき。斯く語りたれば、三浦の輩是を聞き、さてはいかゞすべき。大將軍の慥におはしまさばこそ、百騎が一騎になる迄も軍はせめ。今は日本國を敵に請けたり。是より歸りても叶ふまじ。前には伊藤・梶原・大場・俣野等控へたりと聞ゆ。後には畠山五百餘騎にて、金江川の端に陣を取つて待つと聞く。前後の勢に取籠められなば、ゆゝしき大事なり。たとひ一方を打破りて通りたりとも、朝敵となりなん後は、安穩なるべきにあらず。されば人手に懸りて犬死せんよりは、爰にて自害せんとぞ申しける。三浦別當義澄、大沼に問ひけるは、賴朝の討たれ給ひたるをば、正しく認め給ひたりやといへば、自ら見奉りたる事はなし。傳に聞きつる計りなり。さては推量なり。只人が斯くといひたればとて、誠と思ふべきにあらず。平家の方人共が、敵をたばからん爲に、討たれ給ひぬといふにもやあるらん。又味方の者共、負軍になりぬれば、敵に心を通はして、斯くもやいひけん、不審なり。天をも地をも量れども、人の心は量り難し。其上賴朝は、御身健に心賢き人なれば、左右なく討たれ給はじ。たとひ自害などし

給ふとも、敵に物をば思はすべし。就中石橋といふ所は、浦近うして海漫々たり。舟に乘つて安房・上總へもや傳ひ給ひけん、峯續きて山深ければ、岩の迫り谷の底にもや隱れ忍び給ふらん。そも知り難し。憖に目に見奉らざる程は、自害すべからず。いかさまにも御身近き田代殿を始めて、佐々木・北條・土肥・土屋、此者共に尋ね遭うて、慥の說を聞くべきなり。一定討たれ給ひたらば、主の敵なれば、大場にも畠山にも打向つて、命を限に軍すべし。大將殿の死生聞定めざらん間は、相構へて身をたばへとて、其夜の中に、三浦へとて歸りけり。されども畠山五百餘騎にて、金江川に陣を取つて待つと聞く。いかゞあるべきといひければ、和田の小太郎は、大將殿の左右を聞かざらん程は、命を全うして、君の御大事に叶ふべし。さらば小磯が原を過ぎて、波打際を忍び通らんといひけるを、佐原の十郎は、何條さる事かあるべき。畠山は若武者なり。而も五百餘騎。思へば安平なり。我等が三百餘騎にて、駈散らして、馬共取りて乘りて行かんといひけるを、三浦の別當は、詮なき殿原の計りやうや。畠山は今日一日馬飼ひ足休めて、身をしたゝめたり。我等は此兩三日、彼方此

方馳せつる程に、馬も弱り主も疲れたり。人の强き馬を取らんとて、我が弱き馬取られて其詮なし。馬の足音は、波に紛れてよも聞えじ。轡を鳴らすなとて、水つき故、鎧腹卷の草摺卷上げなんどして打ちけるに、和田の小太郎は、本より强き魂の男にて、いつの習の閑道ぞ。彼が父庄司は、我等がおば聟なれ共、平家の方人なり。我等は源氏の方人なり。源氏勝ち給はゞ、畠山旗を上げて參るべし。平家勝たば、三浦旗を上げて參るべし。爰を問はずば、後に笑はれん事疑なし。人は波打際をも打ち給へ。義盛は名乘りて通らん。同心し給へ佐原殿とて、鎧の表帶しづ〳〵と結固め、甲の緒をしめ、弓取直して、鐙に幕付けさせて大音上げて、是は畠山の先陣か。斯くいふは三浦黨に、和田の小太郎義盛といふ者なり。石橋の軍に、兵衞佐殿の味方へ參りつるが、軍既に散じぬと聞けば、酒匂の宿より歸るなり。平家の方人して、留めんと思はゞ留めよと、高く呼ばはつてぞ打過ぐる。敵追ひ來らば、返し合せて戰はん。さらずば三浦へ通らんとて、馬を早めて行く程に、八松が原・稻村が崎・腰越の浦・由井の濱をも打過ぎて、小坪坂を上らんとぞしたりける。

小坪合戰の事

斯る處に畠山は、本田・半澤にいひけるは、三浦の輩にさせる意趣なし。されども斯樣に詞を懸けらるゝ上に、父の庄司・伯父の別當、平家に奉公して在京なり。矢一つ射ずば、平家の聞えも恐れあり。和田が詞も咎めたし。打立て者共と下知しければ、成淸は、仰の旨透間なし。急げ殿原とて、五百餘騎物具固め馬に乘り、打てや早めとて追ひければ、同じく小坪の坂口にて追付きたり。畠山進み出でて、重忠爰に馳せ來れり。いかに三浦の殿原は、口には似ず、敵に後をば見せ給ふぞ。返し合せよと罵り懸けて歩ませ出づ。三浦三百餘騎、畠山に懸けられて、小坪の峠に打上り、鏃を並べて控へたり。小太郎、伯父の別當にいひけるは、そこには東地に懸りて、あふすりに垣楯掻きて待ち給へ。かしこは究竟の小城なり。敵左右なく寄せ難し。義盛は平におりて戰はんに、敵弱らば、兩方より挾み、中に取籠めて、畠山を討たんにいと易し。若又味方弱らば、義盛もあふすりに引籠つて、一所にて軍せんといふ。別

和田義盛畠山重忠合戰

當然るべきとて、百騎を引分けて、後のあふすりに陣を取りて左右を見るに、畠山次郎は、五百餘騎にて、由井の濱・稻瀨川の端に陣を取つて、赤旗天に輝けり。和田の小太郎は、白旗さゝせて二百餘騎、小坪の峠より打下り、進め者共とて、渚へ向けて歩ませ出づ。爰に畠山は、横山黨に彌太郎といふ者を使にて、和田の小太郎が許へいひけるは、日頃三浦の人々に意趣なき上は、是まで馳せ來るべきにあらず。但父の庄司・伯父の別當平家に當參して、六波羅に伺候す。然るを各源氏の謀叛に與して軍を起し、陣に音信れて通り給ふ。重忠無音ならば、後勘其恐れあり。又伯父・親が返り聞かんも憚あれば、馳せ向ひ奉る計りなり。御渡りを待ち奉るべきか、又參り申すべきかと、牒の使を立てたりけり。和田の小太郎は、藤平實國を使に添へて返事しけるは、御使の申狀委しく承りぬ。畠山殿は、三浦の大介には正しき聟、和田の大介には孫にておはします。但なさゞる中と申さんからに、母方の祖父に向つて、弓引き給はん事いかゞ侍るべき。又謀叛人に與する由の事、未だ存知給はずや。平家の一門を追討して、天下の亂逆を鎮むべき由、院宣を兵衞佐殿に下さるゝ間、三

浦の一門敕定の趣といひ、主君の催といひ、命に從ふ所なり。若し敵對し給はゞ、後悔いかゞあるべき。よく〳〵思慮を廻らさるべきをやといひたりければ、畠山が乳人子に半澤六郎成清、和田の小太郎が前に下塞がつていひけるは、三浦と秩父と申せば、一體の事なり。兩方源平の奉公、世に從ふ一旦の法なり。兵衞佐殿未だ討たれ給はずと承る。世に立ち給はゞ、畠山殿も本田・半澤召具して、定めて源氏へ參らるべし。平氏世に立ち給はゞ、三浦殿も必ず御參りあるべし。是非の落居を知らずして、私の軍其詮なし。兩陣引退かせ給はゞ、公平たるべきかといひければ、和田の小太郎思ひけるは、半澤が斯くいふは、畠山がいふにこそ。人の穩便を存せんに、勝に乘るに及ばずとて、和田の小太郎は、小坪の峠に引返す。軍既に和平して、各歸り散らんとする處に、未だ和平せざる前に、和田の小次郎義茂が許へ、兄の小太郎人を馳せて、小坪に軍始まれり、急ぎ馳せよといひ遣したりければ、小次郎は聊少用ありて、鎌倉に立寄りたりけるが、是を聞き驚き騷ぎて、馬に打乘り、犬懸坂を馳越えて、名越にて浦を見れば、四五百騎が程打圍みて見えけり。小次郎片手矢はげて鞭をう

つ。小太郎は小坪坂の上にて、軍和平したれば、畠山に向ふべからずといふ心にて、手々に招きけれども、斯くとは爭か知るべきなれば、急げといふぞと心得て、猶も喚いて懸りける。畠山は、軍和平しぬる上はとて、馬より下り、稻瀨川に馬の足冷して休み居たりけるに、小次郎が馳するを見て思ひけるは、和平は搦手の廻るを待ちけるにこそ。知らずしてたばかられけるこそ安からずとて、馬に打乘り、小次郎に向つてさんざんに馳く。小次郎は主從八騎にて、寄せつ返しつ〳〵、火出づる程こそ戰ひけれ。敵六騎切落し、五騎に手負せて、暫く休みけるを、小太郎は、小次郎討たすな。始に手を開きて招くをば知らざるにこそ。大きなる物にて招けとて、四五十人手々に唐笠にて招きけるを、愈深入して戰へといふにこそと心得て、暫く氣を休め、又馳せ入りてぞ戰ひける。今は叶はじ。小次郎討たすな續け者共とて、和田の小太郎二百餘騎にて小坪坂を打下り、川を隔てゝ控へたり。小太郎、藤平に問ひけるは、義盛は楯突の軍には度々遭ひたれ共、馬の上は未だ知らず。いかゞあるべきといへば、實光今年五十八、軍に遭ふ事十九度なり。軍は最も故實に依るべし。馬

も人も弓手に遭ふ事なり。打とけ弓を引くべからず。あきまを守りてためらふべし。我内甲をば惜むべし。矢をはげたりとも、あだ矢を射給ふな。敵一の矢を放ちて、二の矢射んとて打上げたらん時、眞甲・內甲・首の廻り・鎧の引合せ、透間を守つて射給ふべし。矢一つ放つては、急ぎ二の矢を番ひて、人のあきまを守り給へ。敵もかくこそ思ふらめなれば、透間を取つて、常に鎧つきし給ふべし。昔は馬を射る事候はず。近年は敵のすきまなければ、先づ馬の太腹を射て、主を跳落して、立上らんとする處を、御物射にもする候。敵一人を、あまたして射る事あるべからず。箭だうなに相引して、過し給ふな。敵手繁く寄するならば、やうあるまじ。押並べて組んで落ち、腰刀にて勝負をし給へとぞ敎へたる。されば敵は、引つめ〳〵さん〴〵に射けれども、或は上り或は下る。自ら中る矢も、透間を射ねば大事なし。三浦は實光がいふに任せて、敵の二の矢射んとて、打上る透間を守りて、さしつめ〳〵射ければ、あだ矢一つもなかりけり。さる程にあふすりの城固めたる三浦の別當義澄、爰にて待つも心苦し。小坪の戰きびしげなり。續け者共とて、道は狹し、一騎三騎

畠山重忠敗る

づつ打下りけるが、遙に續きて見えければ、畠山是を見て、三浦の勢計りにてはなかりけり。一定安房・上總・下總の勢が、一つになると覺えたり。大勢に取籠められなば、由々しき大事。いざや落ちなんとて、五騎十騎引連れ〳〵落行きけり。三浦勝に乘つて、散々に是を射る。爰に武藏の國の住人綴黨の大將に、太郎・五郎とて兄弟二人あり。共に大力なりけるが、太郎は八十人が力あり、東國無雙の相撲の上手、四十八の取手に、暗からずと聞ゆ。畠山に向つていひけるは、和田に駈けられて、味方負色に見ゆ。思ひ切る郎等のなければこそ、軍にはゆるくなれ。和田の小次郎打取つて見參に入れんといひ捨て〻、肌には白き帷子に、脇楯白き袷の小袖一重、木蘭地の直垂に、赤皮威の鎧に、白星の甲を着、廿四さいたる黑つ羽の箙、四尺六寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れてぞ帶いたりける。重藤の弓の眞中取り、烏黑なる大馬に、金覆輪の鞍置いて乘つたりける。和田の小次郎は、陣に打勝つて弓杖突き、波打際に控へたり。綴の太郎近く步ませ寄す。小次郎是を見て、和君は誰ぞと問ふ。武藏の國の住人綴の太郎といふ者なり。畠山殿の一の郎等と名乘る。小次郎は、和君が主人

和田小次郎綴太郎格鬪

畠山とこそ組まんずれ。思ひも寄らず、義茂には合はぬ敵ぞ。引退けといへば、綴いひけるは、まさなき殿の詞かな。源平世に始まりて、公私に付けて勢を合する時、郎等大將に組む事なくば、何事にか軍あるべき。さらば受けて見給へとて、大の中ざし取つて番ひ、近付き寄りければ、射られつべく見えける。綴をたばかりていふやう、詞の程こそ尋常なれ。恥ある敵を、遠矢に射る事なし。寄つて組み、腰の刀にて勝負せよとぞいひける。綴然るべきとて、弓矢をば投棄て步ませ寄り、押並べて引組んで、馬より下へどうと落つ。綴は大力なれば、落ちたれどもゆらりと立つ。小次郎も藤の纏へるが如く、寄付いてこそ立直れ。綴の太郎は大力なる上、太く高き男にて、和田の小次郎が勢の小きかさに懸りて、押付けて討たんとしけり。和田は細く早かりければ、下を潜りて綴を打倒して討たんと思へり。勢の大小はありけれども、力は何れも劣らず。相撲は共に上手なり。綴は和田が鎧の表帶引寄せて、内搦みかけ詰めて、甲の錏を傾けて、十四五廿ぞ跳ねたりける。和田は綴に骨を折らせて、其後勝負と思ひければ、腰に付いてぞ廻りける。綴内搦みをさし外し、大渡し

に渡して跳ねけれども、小次郎働らかず、大渡りを引直し、外搦みにかけて、渚に向けて十四五度、えい〳〵と押せども〳〵轉ばざりけり。今は敵骨は折りぬらんと思ひければ、和田は綴が表帶取つて引寄せ、內搦みにかけ詰めて、甲の錏を地に付けて、渚へ向けてえい聲を出して跳ねたりけり。綴骨は折りぬ。强くかけて刎ねたれば、岩の高きにはね懸けられて、がばと倒る。跳返さん〳〵としけれども、弓手の腕を踏み付けて、甲の手へんに手を入れ、亂髮を引仰のけて、其儘首を搔落す。首をば岩の上に置き、綴が身に腰打懸けて、寄せ來る波に足を冷し、息を休めて居たりけるが、敵定めて落合はんずらんと思ひければ、綴が首を鞍の根に結ひ付けて、馬に打乘り弓杖つき、敵落合へとぞ呼ばりける。綴五郎、兄を討たして喚きてかく。小次郎いひけるは、和君は綴が弟の五郎にや。兄が敵とて、義茂に組まんと思ひけるか。汝が兄の太郎は、東國第一の力人。それに組みて取損ぜられたれば、今は力もなきぞ。とく〳〵寄つて、義茂が首を取れとぞいひける。五郎まのあたり見つる事なれば誠と思ひ、押並べてひたと組み、馬より下へ落つ。いかゞしたりけん、五郎下になり、

是も首をぞ取りにける。斯くて岩に尻掛け、波に足打たせて休む處に、綴小太郎、父と伯父を討たせて、三段計りに歩ませ寄せ、大の中ざし取つて番ひ、さしあて兵ど射る。鎧の胸板に中りておどり歸る。小次郎は射向の袖を振合せ、錏を傾け、苦しげなる聲していひけるは、やゝ綴小太郎よ。親の敵をば手取にこそすれ。然るに親の敵なり。人手に懸くるな、落合ひかし。近く寄らぬは恐ろしきか。和殿が弓勢として、而も遠矢にては、義茂が鎧をばよも通さじものを。但義茂は、昨日おとゝひより隙なく馳せ歩き、兵糧もつかはず、大事の敵にはあまた合ひぬ。既に疲に臨んで力なし。父が敵なれば、さこそ汝も思ふらめ。人に取られんより、寄りて首を切れ。延べて切らせんといひければ、小太郎誠顏に悅びつゝ、馬より飛下り、太刀を拔いて走り懸り、小次郎が甲の鉢を丁と打つ。一打打たせてつと立上り、取つて引寄せ抱き伏せ、てへんに手を入れて首を切る。三の首を、二つをば取付につけ、一つをば太刀の先に貫いて馬に乘り、差上げつゝ名乘りけるは、只今畠山が陣の前にて、敵三騎打捕りて歸る剛の者をば、誰とか思ふ。音にも聞くらん目にも見よ。桓武天皇の

苗裔、高望の王より十一代、王氏を出でて遠からず、三浦の大介義明が孫、和田の小次郎義茂、生年十七歲。我と思はん者は、大將も郎等も、寄つて組めとぞ呼ばはりける。畠山は小坪の軍に、綴太郎・五郞・同じく小太郎・河口次郎太夫・秋岡四郎等を始として、卅餘人討たれぬ。手負は五十餘人なり。三浦には多々良の太郎・同じく次郎・郎等二人、僅に四人ぞ討たれける。畠山は郎等多く討たれて、敵に組まんと招かれて、安からず思ひければ、重忠組まんとて打出でけり。紺地の錦の直垂、火威の鎧に、蝶の裾金物をぞ打つたりける。白星の甲に、廿四さいたる鵠の羽の胡籙、筈だるに取つて付け、紅の母衣かけ、薄綠といふ太刀の三尺五寸なるに、虎の皮の尻鞘入れてぞ帶いたりける。青葦毛の馬に、中は金覆輪に、耳は白覆輪の鞍を置き、燃え立つ計りの厚總の鞦かけ、武藏鐙に重藤の直中取つて步ませ出づ。本多・半澤左右に進み名乘りけるは、同じ流の高望の王の後胤、秩父の十郎重弘が三代の孫、畠山の庄司次郎重忠、童名氏王、同年十七歲。軍は今日ぞ始。高名したりと罵る和田の小次郎に見參せんとて進み出づ。本田の次郎中に隔りて、鏃を押へいひけるは、命を棄つ

るも由による。宿世親子の敵にあらず。只平家に聞えん計にこそ侍れ。就中三浦は、上下皆一門なり。秀づるを大將となし、後るゝを郎等乘換に仕ふ。されば一人當千の兵にて、親死に子死すれども是を顧ず、乘越え〳〵面を振らず、後を見せじと名を惜む。味方の勢と申すは、黨の狩武者一人死すれば、其親しき者共、よき事に付けとて、引連れ〳〵落つれば、いかなる大事ありとも、君の御命に變る者候はじ。成淸・近恒ぞ、矢先にも塞がるべけれども、是は公の軍なり。只引返し給へといひけれども、小次郎に組んで死なんとて打寄せければ、和田は度々の軍に、身をためしたる武者にて、畠山矢頃にならば、只一矢にと志し、中さし取つて番ひ相待つ。程近くなりければ、能引いて放つ。畠山が乘りたる馬の鞅盡しより、鞦の組違へ、矢先白く射出す。馬は屛風を返すが如く伏しければ、主は卽ち下立ちけり。成淸馬より飛下りて、主を抱き上げて我馬に乘す。弓取はよき郎等を持つべかりけり。半澤なかりせば、危なかりける畠山なり。成淸徒武者になりて、間に隔たる。小次郎太刀を額に當てゝ進み寄る。畠山同じく太刀を額に當てゝ、小次郎を待つ處に、三浦の介の

手より、小次郎は骨を折りぬと覺ゆ。討たすな者共とて、兄の小太郎義盛・佐原の十郎義連・大黨三郎・舞岡兵衞を始として、十三騎太刀を拔き、打つて向ひ進みければ、畠山も討たるべかりけるを、本田・半澤中に隔り、以前も申す如く、三浦の大介殿は祖父、畠山殿は孫にておはします。離れぬ御中なり。さしたる意趣もなし、我執なし。私の合戰其詮なく覺ゆ。本田・半澤に芳心ありて、御馬を返し給へといひければ。和田是を聞き、郎等の降を乞ふは、主人のいふにこそ。今はひけとて、和田は三浦へ歸りければ、畠山は武藏へ歸りけり。さてこそ右大將家の侍に、座を定められけるには、左座の一﨟は畠山、右座の一﨟は三浦、中座の一﨟は梶原と定まりける時は、畠山は、三浦の和田に向つて降を乞ひたりし者なり。左座謂れなしといひけるを、重忠全く存知せず、弓矢取る身の命を惜み、敵に降を乞ふ事やあるべき。若し郎等共が中にいふ事ありけるか。返す〲奇怪なりとぞ陳じける。

三浦の大介衣笠軍評議の事

義澄・義盛、小坪の軍に打勝つて三浦に歸り、軍の次第細々と語りければ、大介義明よく〳〵聞き、につこと笑ひて申しけるは、若殿原、弓矢の運は彌增に繁昌せり。中にも小次郎が振舞、神妙〳〵とて感涙を流し、孫引手物とて、大刀一振をぞ給はりける。さて大介いひけるは、敵は一定明日寄すべしと覺ゆ。佐殿もよも討たれ給はじ。急ぎ衣笠に引籠りて軍せよ。敵こはくとも、散々に駈破りて、今一度佐殿を尋ね奉るべし。遁れがたくば討死をせよといへば、義盛申しけるは、衣笠は馬の足立よき所なれば、寄手の爲には便あり、味方の爲には宜しからず。忽に追落されなん。只奴田の城に籠るべし。奴田の城と申すは、三方は石山高うして、馬も人も通ひ難き惡所なり。一方は海、口に道を一つあけたれば、よき者一二百人あらば、たとひ敵何萬騎寄せたり共、容易く攻落すべからずと申す。大介重ねて申しけるは、奴田は僅の所なり。人是を知らず。衣笠こそ聞えたる城よ。三浦の者共は、小坪の軍に打勝つて、やがて衣笠に引籠りて、散々に戰ひて討死しけりなどいはゞ、あゝさる名譽の城なり。それはよき所なりなど、人も沙汰すべし。奴田の城にて討死といはゞ、奴

田とは何處ぞ。未だ知らずといはれん事面目なし。たゞ衣笠に籠れ。急げ〳〵といふ。義盛いひけるは、奴田も三浦も皆御領内なり。就中軍と申すは、身を全うして敵に物を思はせ、日數を經て戰ふこそ面白けれ。衣笠に籠りたりとも、やがて追落されなば、無下に言甲斐なからん。よく〳〵御計らひ候へといへば、大介腹を立てゝ、やゝ義盛よ。今は日本國を敵にうけたり。身を全うせんと思ふとも、何の日何の月かあるべき。たとひ命生くべくとも、三浦こそ一旦命を延びんとて、さしもの名所をさしおいて、奴田の城に籠りたりなど沙汰せん事口惜し。若又百人が中に、一人なりとも生殘つて、佐殿世に立ち給ひたらん時、父や祖父がかばね所とて知行せんにも、衣笠こそ知行したけれ。軍といふは所にはよらず。手柄謀によるべし。あら野の中にて戰ふとも、よくあへしらはゞ、負くべからず。石の櫃に籠りたりとも、惡く戰ふならば叶ひ難し。命惜しくば軍なせそ。などや己は物には覺えぬ。且うは父の命なり。老者のいふ言はしるしあり。義明はたゞ一人なりとも、衣笠にて討死せん。敵寄せずば、干死にも彼處にてこそ死なめと、大に怒りいひければ

三浦一族衣笠城に籠る

ば、力及ばず孫引連れて、衣笠の城に籠りにけり。上總の介弘經が弟に、金田の太夫といふ者は、義明が聟なりければ、七十餘騎を引率して、同じき城に籠りにけり。都合其勢僅に四百五十三騎ぞありける。大介は、敵寄するならば暇あるまじ。先づ靜なる時、よく〳〵兵糧つかふべしとて、酒肴椀飯かきすゑて是を勸む。さて軍兵に下知しけるは、弓したゝかに射る者は、家の子も侍も、舍人草刈に至る迄揃へ置き、弓は一人して二張三張、矢は四腰五腰も用意せよ。弓得射ざらん者は、七八人も十人も、又四五人も徒黨して、好み〳〵の杖共を支度せよ。木戸を三重に拵ゆべし。敵は軍の法なれば、定めて追手搦手二手に分けて寄すべし。追手の方には道を作れ。廣七八尺に過ぐべからず。道廣ければ、大勢鑣を並べて押寄する故、城の中に隙なくして、防ぎ得ず。馬二疋計り通る程に作れ。道の片方は沼なれば、兎角するに及ばず。片方には大堀を掘れ、道をば三重に掘切りて、一の堀には橋を廣く渡せ。中堀には細橋を渡せ。三の堀には逆茂木を引き、堀毎に搔楯を構へ、矢倉をかけ、弓よく射る者共は、甲を着ざれ。腹卷・腹當・筒丸などを着て、矢倉に上つて、敵の鎧の胸板

をさしつめて射よ。又徒立の者共は、角きはりを拵へ置け。杖打の奴原は、西の方の小竹の中に籠り居よ。小竹の中より作道へ向けて細道を作れ。敵一の橋を打渡して、二の橋まで寄するならば、角きはりを持つて、馬の太腹を射よ。射られて跳ぬるならば、冑武者、左右の堀と沼とへ跳落されて、起きん〳〵とせん處を、小竹の中より杖打の奴原つと出でて、杖の先揃へて起しも立てず、能き者をば打殺せ、かゝり武者共をば、死ぬる程に打なして、生殺にして這ひ歩かせよ。それこそ軍の目ざましなれ。各不覺すなとぞ下知しける。

畠山重忠衣笠城を攻む

衣笠軍の事

去程に三浦の一族衣笠に籠りければ、畠山・河越等此由を聞きて、廿七日の小坪の軍の後中一日ありて、廿九日の早朝に、河越の又太郎・江戸太郎・畠山の庄司次郎等大將軍として、金子・村山・山口黨・兒玉・横山・丹の黨・綴黨を始として三千餘騎、衣笠の城へ發向す。追手は河越、搦手は畠山、二手に分つて押寄せつゝ、鬨の聲三ヶ度合せて、

少しためらふ處に、綴の一黨、當家の軍將三人まで、小坪の軍に討たして安からず思ひければ、二百餘騎先陣に進みて、木戸口近く攻寄せたり。城の内には、本より支度の事なり。搔楯の上の精兵共、一騎々々を主付いて、さしつめ〳〵射ける矢に、馬共射させて跳落され、深田に落入り、上らんとしける處を、小竹の中より杖打の冠者原、はなを並べて細道よりつと出でて、打殺し刺殺しければ、乘換郎等多く討たれて、生くる者は少く、死ぬる者は多かりければ、綴黨も叶はずして引退く。金子の十郎家忠、伏繩目の鎧に、三枚甲の緒をしめ、甲の上に萌黃の腹卷打かづき、一門引具し三百餘騎、入替へ〳〵戰ひける中に、人は退けども、家忠は退かず。敵は變れども、十郎は變らず。一の木戸口打破り、二の木戸口打破つて、死生知らずに攻めたりける。城中よりも散々に是を射る。甲冑に矢の立つ事廿一。折かけ〳〵攻入りつゝ、更に退く事なかりけり。三浦の大介城の中より、提子に酒を入れて、盃持たせ出し、家忠が許へ申送りけるは、今日の合戰に、武藏・相模の人々多く見え給へども、貴邊の振舞殊に目を驚かし侍り。老後の見物今日にあり。今は定めて疲れ給ひぬらん。

此酒飲み給ひて、今一際興あるやうに軍し給へと言遣したりければ、家忠甲振仰のけ弓杖突き、盃取り三度飲みて、此酒飲み待つて力付きぬ。城をば只今攻落し奉るべし。其意を得給へとて、使をば返してげり。軍陣に酒を送るは法なり。戰場に酒を請くるは禮なり。義明の所爲といひ、家忠が作法といひ、興あり感ありとぞ、皆人申合へり。家忠勇心の甚しきのみにあらず、專ら兵法の禮を存じけり。家忠わざと八をば具せざりけり。命を捨てんとの心なり。既に矢倉の本まで攻付けたり。大介いひけるは、あはれ金子は大剛の者かな。一人當千の兵とは是なるべし。軍は斯くこそあるべけれ。あれ射つべき者はなきか。惜しき者なれども、日頃の敵(かたき)なり。あれを射止めよと下知しければ、三浦の別當申しけるは、和田の小太郎は、弓勢も矢束も、はしたなく尻全く候。彼を召して仰せ候へと申す。大介、小太郎を招いて、あの家忠射止めよといふ。義盛仰承りぬとて、三人張に十三束三伏荒木の弓の、未だ削りおさめざるを押張つて、素引したりければ、ちと強きやらんと思ひけれども、かねよき征矢二つ取具し、矢倉に上つて見れば、十郎二段計り隔て、水車を廻し、次第次

第に攻寄つて、矢倉の內へ跳入らんとする處を、和田の小太郎義盛、十三束三伏、暫し固めて落し矢に兵と放つ。金子が甲に懸けたる腹卷の一の板、甲の鉢懸けて、がらと射貫き、額の方より、頤の下をつと通り、胄の胸板のはた覆輪に射付けたる痛手なれば、少しも耐らずどうと倒る。三浦の藤平落合ひて、首を取らんとする處に、金子の與一つと寄り肩に引懸け、木戶口の外へ出でけるを、三浦の與一追うて懸る。餘すまじきぞ〳〵とて、餘りに手繁く追ひければ、金子の與一、十郎をば打捨てゝ、太刀を拔いて返し合せて打つて懸る。與一と與一と立合ひて、太刀打にこそ戰ひけれ。三浦の與一打太刀になりければ、叶はじと思ひて、かいふつて逃げけるを、金子の與一追付いて、三浦の與一を抱き止め、虜にして首を切る。敵の首を手に提げ、十郎を肩に懸けて、陣の內にぞ入りにける。家忠が疵は痛手なれども、ふえ切れざれば死なざりけり。今日の高名、金子黨にぞ極まりたる。武藏の國の者共、入替へ入替へ戰ひけり。三浦の別當下知しけるは、城の內を放れずして、寄せん敵を引つめ引つめ射落せよ。與一も長追して、城を放れてこそ討たれぬれ。身をたばひて、敵に

物を思はせよといひければ、大介是を聞きて、若者共か軍の樣こそ可笑しけれ。いつの料に命をたばふべきぞ。京童部のむかひつぶて、川原印地の鑓なり。坂東武者の習として、父死ぬれども子顧ず、子討たるれども親退かず、乘越え〳〵敵に組んで、勝負するこそ軍の法なれ。されば廿騎も卅騎も、馬の鼻を並べて驅出で、案內も知らぬ者共を、惡所へ追詰め〳〵したるこそ、目ざましうして面白けれといひければども、別當は幾程もなき勢を以て、驅出でん事惡かりなんとて、出でざりければ、大介いひけるは、我年老い所勞折節再發せり。義明十三より以來弓矢を取り、今年七十九、今此軍に遭ふ事、老後の面目なり。殿原こそ出で給はずとも、いで〳〵義明驅出でて、最後の軍して見せんとて、白き直垂の袖狹さに、揉烏帽子を引立て〻、雜色二人に馬の口引かせ、中間六人に左右の膝押させ、太刀計りを腰に付けて、右の手に鞭を貫入れ、左の手に手綱かいくり、旣に打出でんとしけり。子息の別當是を見て、馬の口に取付きて、いかに斯くはおはするぞ。其御年にて打出で給ひたらば、何の詮にか立ち給ふべき。老い衰へて物に狂ひ給ふかといひければ、大介は、やあ義澄よ。

武者の家に生れて、軍するは法なり。敵の陣に向つて、命を惜むは人ならず。義明をば、老いて物に狂ふと笑へども、己等は若き物狂と覺えたり。軍といふは、駈出で駈出で、追うつ返しつ進み退き、組んづ組まれつ、討つつ討たれつ、敵も味方も隙のなきこそ面白けれ。いつを限といふ事なく、草鹿的など射るやうに、一所にて敵を射る事やはあるべき。其處退け奴原とて、鞭を以て打ちけれども、別當馬の鼻を取つて、城の內へ引持て行く。是は大介が、誠に軍場に出づべきにはなけれども、兵を進めん謀と覺えたり。ゆゝしき大將とぞ見えたりける。

源平軍物語卷第三終

源平軍物語 巻第四

三浦一族落行く事

去程に、日も漸く暮れければ、各軍に疲れつゝ、事の外弱々しく見えければ、大介、子孫郎等呼びするゑて、老眼より涙を流しいひけるは、軍はすべき程はしつ、人の笑れ草にはよもならじ。又義明も、見るべき程は見つ、各疲れ給へり。殿原左右なく自害し給ふべからず。兵衞佐殿御心賢き人にてましませば、よも討たれさせ給はじ。いかにも安房・上總の方におはすらん。相構へて尋ね參りて、義明が有樣をも語り申すべし。君に力を付け奉りて、一味同心に平家を亡し、頼朝を日本の大將軍になし參らせて、親・祖父が墓所とて、屍所を知行して、我孝養に得させよ。東國の人共、誰か君の重代の御家人にあらざる。されども今一旦の恩を蒙るに依つて、平家の方人

に似たれども、爭か昔の好を忘れ奉るべきなれば、終には皆參るべし。老いたる馬は道を忘れず。古人は言葉誤なし。必ず思ひ合すべし。宍賢自害すべからず。二心ある事なかれ。但義明をば爰に捨てゝ置き、只面々の身を助けて、急ぎ落ちよ。我れ既に老耄せり。行歩にも叶はず。馬にも乘り得難し。汝等今は落人にて、道狹き者ぞ。我を勞り具せんとせば、共に惡かるべし。延び得ずして打捨てなば、無益の恥を見るべし。大介は幾程命を生きんとて、終に死にける物故に、衣笠にては死せずして、尸を道に曝す無慙さよと、笑はれん事も口惜し。又三浦の者共が、父を具して落ちけるが、せめての命の惜しさに、老いたる親を道に捨てゝ、人手にかけし甲斐なさよと、いはれん事も心憂し。彼といひ是といひ、我が爲め人の爲め、口惜しき事なるべし。されば疾々落ちて行け。我をば爰に止め置け。老は悲しき物なりけり。あはれ子孫と相共に、兵衞佐殿の世に立ち給ひて、日本國を知行し給はんを見て死する物ならば、いかに嬉しからん。只今死なんずる義明が、是程君を思ひ參らするとは、知召されずもやあるらんとて、直垂の袖を絞りければ、家の子も郎等も、

三浦一族安房に遁る

最後の教訓を憐れみて、聲を上げてぞ叫びける。さても大介は、捨てよ〳〵といひけれども、子孫名殘を惜みつゝ、輿を寄せて具し申さんといひけれども、大介終に乘らず。剩へ怒れる色の見えければ、義澄以下の子孫は、泣々衣笠の城に捨て置き、別れけるこそ哀れなり。主君を尋ね奉り、夜中に栗濱の御崎に出でて、それよりも舟に乘りて、安房の方へ漕ぎ行きけり。其外は三騎五騎、ぬけ〳〵に落失せける中に、年頃の郎等共、主の名殘を惜しみ、手輿に載せて舁きて出づ。大介いひけるは、我は子孫に暇乞うて、爰にて死する者なり。いかに斯くはするぞ。只捨てゝ行けとて、扇を以て輿舁共を打ちけれ共、一里計りぞ舁きもて行く。敵既に近付きければ、輿を捨てゝ逃げけるを、いかにや〳〵下郎程、口惜しき者はなかりけり。さしも城中に捨てよといひつるものを、此輿を舁き助けよ。さらずば己等が手にかけて、恥を隱せといひけれ共、敵は無下に近付きければ、皆散々にぞ失せにける。敵の下部共來つて、輿の中より引出して、衣裳を剝取りければ、大介大に腹を立て、己等に遭ひて、名乘るべきにあらねども、知らねば斯く振舞ふか。恥ある者に恥を見すべからず。

我は三浦の大介なり。斯くなせそ〳〵といひけれども、赤裸にぞ剝ぎなしける。大介は哀れ同じくは、畠山に見合ひて切らればや。繼子孫なり、其の緣睦しと思ひけれども、願ふ所の畠山にはあらずして、すゞろなる江戶太郎に切られけるこそ口惜しけれ。大介豫ていひけるやうに、城中に捨てたりせば、さまでの恥はあらじものと、皆人申合へりける。

三浦義明討たる

土肥燒亡舞、同女房消息附大太郎烏帽子の事

去程に兵衞の佐賴朝、杉山を出でて、土肥の眞鶴へ落ちんとし給ふ。眞平は殘黨も猶いぶかし。我が太刀もいかゞあらんと思ひて、高き峯に上り、まかげをさして見渡せば、山の內には人ありとも覺えず。我が所領へは、伊藤入道三百餘騎にて押寄せて、土肥の在家一々に追捕し、爰彼處に火を放つて、一宇も殘さず燒拂ふ。七人同じく是を見る。眞平、賴朝の御前にて、一時亂舞ぞしたりける。土肥に三の光あり。第一には八幡大菩薩、我君を守り給ふ。和光の光と覺えたり。第二には我君平家を

土肥眞平亂舞

打亡し、一天四海を照し給ふ光なり。第三には、眞平より始めて、君に志ある人々、御恩に依りて、子孫繁昌の光なり。嬉しや水なるは瀧の水、悦び開け照したる、土肥の光の貴さよ。我屋は幾度も燒けば燒け。君だに世に立ち給はゞ、土肥の杉山廣ければ、緑の梢よも盡きじ。伐り換へ〳〵作らんに、更に歎にあらじ。君を始めて萬歳樂。我等も共に萬歳樂とぞ舞うたりける。人々は、あらまほしき祝事に、笑みまけて勇みけるに、兵衞佐殿は、土肥が舞は、今に始めぬ事なれども、只今殊にめでたく面白しと感じ給ふ處に、土肥が女房の許より消息あり。眞平是を開き見れば、三浦の人々は、廿三日に、舟にて石橋へ參らんと支度しければ、浪風荒くして叶はず。廿五日に、酒勾の宿まで參りけれども、軍破れぬと聞きて歸る程に、廿七日に小坪にて畠山に行合ひて、さま〳〵戰ひけるが、畠山軍に負けて引退く。三浦等衣笠に籠りて、相待ち侍りけるに、江戸・川越・畠山等三千餘騎にて、衣笠の城を攻落し、大介討たれ候ひけり。其外の人々は、君を尋ね參らせて、安房の國へ漕ぎ給ひけると聞え侍り。無勢にて御山隱れの御すまひ、心苦しくこそ侍れ。急ぎ三浦の人々を尋ねて、

安房・上總へ越し給ふべしといふ文なり。土肥此狀を以て、兵衞佐殿に斯くと申しければ、神妙々々と大に悅び給ふ。さらば疾々とて、夜のしのゝめに、眞鶴へこそ落ち給へ。軍將宣ひけるは、敵に攻められて、甲をば捨てつ。大童にては落人といはれなん。いかゞして烏帽子を着るべきと仰せられければ、折節甲斐の國の住人大太郎といふ烏帽子商人、箱を肩に懸けて道にて遭ふ。然るべき事なりとおぼして、何れの國の者ぞと問ひ給へば、甲斐の國の住人大太郎と申す烏帽子商人なりと答ふ。土肥申しけるは、あの男は眞平が家人、商人の爲に、所領に家作りして通ひ侍り。やあ太郎、人は七八人あり。皆大童なれば、民百姓までも、落人とや見るらん。其憚あり。烏帽子折りて參らせなんやといへば、安き程の事なりとて、宿所に請じ入れ奉つて、白瓶子に口つゝみ、樣々の肴にてもてなし奉る。酒宴の半に、烏帽子箱を取出し、中座に候ひて、是を折りて人々に配り奉る。取敢ざる折節なれば、急ぎあわてゝ折る程に、七頭は右に、一頭は左折なるを、而も賴朝に奉る。賴朝怪しとおぼして、七人が烏帽子を見廻し給へば、皆右に折りて世の常なり。我身一人左なりければ、

不思議なり。源氏の先祖八幡殿は、左烏帽子を着給ひしより、當家代々の大將軍、左折の烏帽子なるに、今流人落人の身ながら、是を着るこそ有難けれ。昔天竺にまがた國とて大國あり。阿闍世王より三代の孫に、頻頭沙羅王、國を治め給ひけり。王にあまた太子おはします。嫡子をば須子摩といふ。心ばせ柔和にして、引容端厳なりしかば、位をば此太子に讓らんと覺しき。次男をば阿育といふ。形醜惡にして、心根のふてうにおはしければ、位の事は思ひ寄り給はざりけるに、天の帝釋天降りし給ひて、善の寳冠を阿育に着せ給ひければ、終に天下の國王たりき。されば八頭の烏帽子の中、左折一つ、それしも賴朝に當りけるも不思議なり。然るべき八幡大菩薩の、商人太郎に入替り給ひて、着せ給ひけるにこそ。末賴もしく覺しければ、心の中に再拜して、土肥の次郎に當座取らせて着給ひければ、七人も面々に烏帽子着て出立ちけり。藤九郎盛長を使者にて、家の主が内へ悦び宣ひけるは、賴朝世に立つならば、此悦には名田百町在家三宇を計らひ給ふべしと、此旨盛長申含め畢んぬ。商人太郎畏り、承り候ひぬと返事申して、妻にさゝやきけるは、今日此頃身一つ安堵

し給はずして、尫弱の商人に烏帽子乞ふ程の人の、器量にも給はりつる百町かなとつぶやきければ、妻是を聞きて、人は一生、さても過ぎぬ事なれば、上臈の果報我等が運にて、さる事もやあるべかるらん。さらばあはれ此殿の世に立ち給へかしとぞいひける。されば平家亡びて後、甲斐の國石和といふ所に、百町三家給はりて、今の世迄も知行せり。

宗遠、小次郎に値ふ事

土屋の三郎宗遠は、甲斐の國へ越えけるが、足柄の山に關するゑたりと聞きて、宗遠夜に紛れて通りけるが、見れば峠に假屋打つて、前に篝を燒く者共、四五十人が程伏したりける。元來夜半の事なれば、關守眠りて驚かず。よき隙と思ひ、ぬき足して下りける。關をば斯くて過ぎたれども、行末にも人やあらんといぶせくて、木の下萱の中差覗き〳〵下る程に、雲透に見れば、者こそ一人出で來れ。搦手の廻りけるにやと思ひて、太刀拔きかけて、立煩ひてためらひたり。間二段計りを隔てゝ、峠へ上

る男も、太刀に手かけて立ちたりけり。互に物をばいはずして、良久しくありける。さてあるべき事ならねば、宗遠詞をかけていひけるは、源氏謀叛を起すに依つて、關守するて是を守る。只今爰を通り給ふは、誰人ぞといへば、名乘りはせで、却て問ふは誰ぞといふ。互に聞知りたる聲なりけり。小次郎殿か義清、土屋殿か宗遠と、共に答へて名乘りけり。宗遠は子のなかりければ、兄が子を養ひて、小次郎といひけるが、平家に奉公して都にあり。賴朝の謀叛に與して、父も同心の由聞えければ、竊に京を出でて下る。是も足柄山に關守ありと聞き、夜に紛れて通る程に、時日こそ多きに、只今爰にて行逢うたり。契の程も哀れなり。土屋、いかに小次郎といへば、義清申しけるは、賴朝謀叛と披露ある間、平家は一旦の主、源氏は重代の君。其上土屋殿も御供と承れば、旁急ぎ下らんと存じ、京をば三騎にて出でたりしかども、道にて聞き侍りしは、佐殿も岡崎殿も與一殿も、石橋の軍に討たれ給ひぬと申しゝ間、萬味氣なくて、二騎の者には暇をたび、我身一人國に下り、百姓共に牆の事をも承はらんと、夜に紛れて通りつるに、參り合ふ事の嬉しさよとて、淚をはら〳〵と流しけり。

土屋の三郎思ひけるは、いふ事誠に哀れなり。但當世は、親も子もなき作法なり。而も實子にはあらず。弱々しく語るならば、刺殺して、平家の覺增さらんと思ふらんも知らず。つよ〳〵と語らんと思ひて、聞敢ず下向の條、悦び入候。但兵衞佐殿討たれ給ひたりとは、誰人が申しけるぞ。あらいまし〳〵し。石橋の軍は、千葉・三浦が遲參に依つて、無勢にて始めたりし程に、味方負色になりし間、兵衞佐殿は、甲斐の國へ越え給ひぬ。岡崎殿は御供にあり。御邊の兄の與一殿は討たれたり。さて北條・佐々木を始めて、誰かは死したる者ある。甲斐の國より御催のあれば、宗遠も參るなり。但關守が居たれば、夜中に忍びて、一人は罷るなり。いざ和殿も、大將軍の見參に入り給へとて、それより打連れて、甲斐の國へぞ越えて行く。宗遠は道にても心許しせず。太刀拔きかけて、近代は、親も子もなき代なり。誤り給ふな小次郎殿。存ずる旨あり小次郎殿とて、當國の源氏邊見・武田・小笠原・河西・板垣に告廻り、一條殿の侍にてこそ打解けて、有の儘には語りけれ。

賴朝、三浦に會ふ事

土肥の次郎は、出富の小檢校といふ海人が小船を借りて、直鶴・岩が崎といふ所より、急ぎ舟を出さんとしける處に、子息の彌太郎申しけるは、萬壽冠者參るべき由承る。相待ちて召具せばやといふ。此彌太郎といふは、伊藤入道には聟なり。萬壽冠者とは、彌太郎に子なくして、妹が子を養子にしたれば、土肥にも伊藤にも孫なりけるが、養母方の祖父なれば、伊藤の入道に預け置き、娘にも聟にも養子なれば、入道不便にして育みけり。彌太郎が萬壽冠者を待たんといひけるを、父土肥の次郎が聞咎めて、大に不審せり。此間杉山に隱れ忍びて、七騎の外は人是を知らず。萬壽といふは、眞平にも孫なれども、敵人伊藤が許にあり。爭か存知すべき。御供仕らんと申しける條、存の外なり。哀れ彌太郎は、事を萬壽冠者に寄せて、一定舅の入道を待受けて、重代の主君を失ひ奉り、大恩の親を亡さんとたばかるにこそ。奇怪の奴なり。其首打切り給へ岡崎殿といひければ、岡崎は、いかなる舅なりとも、主や父に思ひ換

ゆる事あるまじ。知るべき樣こそありつらめ。但斯樣の身として、片時も逗留其詮なし。はや〳〵急ぎ舟を出せとて、四五町計り漕出して、浦の方を顧れば、萬壽冠者を始めとして、伊藤入道五十餘騎の勢にて馳せ來る。あれ〳〵とぞ呼ばはりける。後には大場の三郎千餘騎計りにて續きたり。今少し遲かりせば、危ふかりける人々なり。漕げや急げとて、安房の國洲の崎を志して落行きける程に、沖中にして俄に風起り波立ちて、何處とも知らず。くらき闇に渚に舟をぞ吹付けたる。人々舟に搖られて醉ひけり。兵衞の佐殿、爰は何處やらんと問ひ給へば、土肥見侍らんとて、舷に立ち、弓杖突きて見廻せば、相模の國早川尻にて侍る。然も大場の三郎、杉山の歸り足に、三千餘騎汀に幕引きて、七ヶ所に篝燒き、酒盛しける敵の陣に吹付けらる。敵は見もしぬらん、いかゞあるべきと思ひける。大將仰せられけるは、賴朝は杉山にて亡ぶべき者なれども、八幡の御加護に依りて遁れぬ。然るを今又敵陣に臨めり。終に見捨て給ふべきにやとて、祈念申されけり。眞平は、此邊は家人ならぬ者なし。酒肴尋ね參らせんとて、舟より飛下り、片手矢はげて走り廻り、我君此浦に着

頼朝、安房に着く

き給へり。眞平に志あらん者は、酒肴參らすべしと罵りいひければ、或は瓶子口つつみ、或は桶に入れて、我も〳〵と舟に酒肴を運びたり。舟の中暗しといへども、敵の大場が篝火の光にて、頼朝酒を飮み給へり。誠に八幡大菩薩の御計らひと覺えたり。飢を休めて、其後風歇み波靜にて、舟を出して、安房の國洲の崎へこそ漕ぎ渡り給ひけれ。三浦の輩は、軍將を尋ね奉らんとて、舟を海上に浮べて、安房・上總怪しき浦々漕ぎ廻りけるに、頼朝の舟も三浦が舟も、互に怪しく思ひて、沖中にて間近く漕合ひける。若又敵もやと思ひければ、彼も是も矢たばね解き、弓の弦しめして用心せり。頼朝をば舟底に隱し、上に柴を積みて、岡崎計り差顯はれて乘つたり。三浦舟を漕ぎ近付けて、岡崎と見てければ、いかに兵衞佐殿はと問へば、誰も君を尋ね奉る。三浦にもやと思ひ奉りつるに、さては何處におはしますらんといへば、三浦涙を流しつゝ、あな心うや。君の御行方の覺束なくてこそ、老いたる父をも振捨て、敵に後を見せて尋ね廻り參らするに、甲斐なき事の悲しさよ。豫て斯くとだに知りたらば、衣笠の城に引籠り、大介と一所にて、打死すべかりけるものをとて、各

袖をぞ絞りけり。兵衞佐殿は、舟底にて此事を聞き給ひ、世になき我を、あれ程に思ふらん事の嬉しさよ。心盡しに遲く出でて、怨みられじと思召しければ、舟底よりはひ出でて、賴朝爰にありと仰せられければ、大將軍是に御渡りありけりや。大介申しつる事、露違はずとて、三浦手を合せて悅びけり。さても岡崎は、石橋の合戰に、與一が討たれし事を語つて泣く。三浦は、小坪・衣笠の軍の事、大介が申せし事、老いたる父を捨て置く事共語りて泣く。一人は若きを先立て袖を濕らし、一人は老いたるを見捨て袂を絞る。恩愛慈悲の心、理とぞ聞えし。和田の小太郎申しけるは、殿原、今は泣き歎きても其詮なし。親も子も、死ぬる道は限あり。就中軍に遭はん者は、必ず死すべしと豫て存ずる所なり。始めて歎くに及ばず。語れば愈哀れ增す。君斯くておはしませば、今は一しほ思ひ入れて、平家を亡し本意を遂げて、君の御代になし參らせん事を評定し給へと申しければ、各歎止めてけり。斯くて賴朝は、當國洲の明神に參り給ひて、千返の禮拜奉り、終夜念誦し給ひて、一首の歌をぞよみ給ふ。

　みなもとは同じ流ぞ石淸水せきあげてたべ雲の上まで

と。彼明神と申すは、八幡大菩薩を祝ひ奉りたりければ、斯く思ひ續け給ひけり。
曉かけて、御寶殿より御返事あり。

千尋まで深く賴みて石淸水たゞせきあげん雲の上まで

其外樣々の夢想ありければ、兵衞佐殿、本意遂げぬと悅び給ひけり。

千葉・上總催促附俵藤太の事

兵衞の佐賴朝は、石橋山を出でて後、三百餘騎にて上總の國府に着き給ふ。千葉の介・上總の介等が許へ、使者を遣していふ。平家追討の事、院宣を蒙るに依つて、同心あるべきの旨、先度相觸れられ畢んぬ。參加すべきの由承伏の間、合戰を、石橋の城廓に遂げ畢んぬ。遲參の條、頗る其意を得ず。たとひ私の宿意たりといふとも、合力の義を存ぜらるべし。況や一院の御定、綸言明白なり。旁以てもだされ難きか。所詮弘經を以て父とし、胤經を以て母と賴み、賴朝天下を知行せんや否や。併し乍ら兩人の計らひにありと仰せられたり。本より領掌の上なり。千葉の介胤經三千

千葉胤經賴朝を迎ふ

餘騎にて、急ぎ杉浦といふ所に行向つて、やがて兵衞佐殿を相具し、下總の國府に入れ奉つて、ゆゝしくもてなし奉る。胤經申しけるは、爰に大幕百帳計り引散らし、白旗六七十流れ打立て候べし。是を見聞かん輩は、兵衞佐殿に大勢參りけりとて、江戸・葛西の者共、定めて皆參るべしと申しければ、賴朝は然るべきとて、卽ち胤經に仰せて、其定に構へたり。案にも違はず、我も〳〵と馳せ參る。上總の介弘經は此事を聞き、遲參に恐れて、當國に井の北・井の南・廳の北・廳の南・まう西・まう東より始めて、國中の輩反くをば打ち、從ふをば相具して、一萬餘騎にて下總の國府に來り申入れたりければ、兵衞佐殿は、土肥の次郎を以て仰せらるゝは、度々催促せらるゝの處に、領掌申しながら、遲參御不審あり。而うじて沙汰の次第、尤も神妙なり。暫く後陣にありて、催促に從ふべきの由仰下さる。此勢共を具して、一萬六千餘騎なり。弘經館に歸つていひけるは、兵衞佐殿は、一定日本の大將になり給ふべし。當時無勢の人にておはしぬれば、此大勢にて參りたらば、悅び出でて、耳に口を差合せて、追從言葉など宣はんずらんと存じたれば、思ひの外に眞平を以て大氣なく、遲參

其意を得ず。後陣にありて召に從ふべしと、問答の條恐ろしく、誰人にも、よも荒量には討たれ給はじ。必ず本意遂げ給ひなん。末頼もしき人なり。昔もさる例あり。平將軍平將門が、東八箇國を打塞げて凶賊を集め、王城へ攻入るべしと聞ゆ。平將軍貞盛敕宣を蒙りて下向す。下野の國の住人俵藤太秀郷は、名高き兵にて、多勢の者なりけるが、將門と同意して、朝家を傾け奉り、日本國を知らんと思ひて行向つて斯くといふ。將門折節髮を亂して梳りけるが、餘りに悦びて取りも敢ず、大童にて而も白衣にてあわて出で合ひ、種々の饗應どもいひければ、秀郷目賢く見咎め、此人の體たらく輕骨なり。はかぐ〵しく日本の主とならじとて、初對面に心變りしてけり。其上俵藤太をもてなさんが爲に、酒肴椀飯かき据ゑて是を勸む。將門が食ひける御料、袴の上に落散りけるを、自ら之を拂ひ拭ひたりけり。是は民の振舞にや、言甲斐なしと心の底に疎みつゝ、後には貞盛に同意して、秀郷が謀を以て、將門既に亡びけり。今頼朝は將門に引換へて、遲參不審と宣ひし心の中おそろしし〳〵。頼むべき人なりと、舌を振ひてぞ賞めたりける。

京都騷動の事

平家重恩の者、或は緣者境界、さすが東國にも多かりければ、飛脚櫛の齒をつぎて、六波羅へ申上げけるは、兵衞佐賴朝、石橋にして討たるゝの由披露ありと雖、其條無實なり。杉山を遁れ出で、安房の國に渡り、北條・佐々木・三浦の黨類を相具して、上總・下總に越えて、弘經・胤經以下の大名小名を召隨へ、旣に三萬八千餘騎に及ぶ。其外伊豆・駿河・甲斐・信濃同心の間、其勢雲霞の如し。また〳〵反く輩あれば、忽に誅罰を加ふに依つて、上下甲乙皆以て歸伏す。但源平未だ定まらざる先、勇士猶豫の刻、急ぎ討手を差下し、凶徒を鎭めらるべきかと申したり。是に依つて京中六波羅の騷動斜ならず。兵衞佐賴朝は、平治より以來、本望なりける上に、文覺が勸に、一院の院宣を蒙りし後は、此いとなみの外は他事なし。平家は斯樣に日頃源氏の內議支度のあるをも知らず。いかさまにも賴朝に勢の付かぬ其先に、追討使を下すべしと、樣々評定あり。

入道院宣を請ふ事

九月四日戊の時に、太政の入道手輿に乘り、新院の御所に參りて申しけるは、源の爲義・義朝父子は、法皇の御敵にて候ひしを、入道が謀にて、彼等二人を始めて、數の伴類皆手にかけて亡し候ひき。保元・平治の日記と申す物に見えて侍り。彼義朝が三男に、右兵衛の佐頼朝と申す奴は、近江の國伊吹が麓より尋ね出して侍りしを、入道が繼母池の尼と申し候ひしが、頼朝を見て一旦の慈悲を起し、彼冠者預け給へ。敵をば生けて見よといふ譬ありと、低伏(をりふし)申し侍りしかば、誠にも源氏の種をさのみ絶つべきにもあらず。入道が私の敵にてもなし。只君の仰を重んずる故にこそと思ひ存じて、流罪に申宥めて、伊豆の國へ下し候ひぬ。其時十三と承りき。かね付けたる小男の、生絹(すゞし)の直垂に小袴着て侍りしを、入道が前に呼び据ゑて、事の様を尋ね問ひ候ひしかば、いかゞありけん、事の起り知らずと申し候ひき。げにも哀れは、胸を燒く〳〵と申す譬に合ひて侍り。定めて聞召され候らん。彼頼朝、伊豆の國にて計り

頼朝追討の宣旨

なき惡事共を、此八月に仕りける由承る。されば追討の宣旨を下さるべき由相存ずと奏す。新院の仰には、さやうの事申す人もなし。始めてこそ聞召せ。但何事かはあるべき。法皇にこそは申されめと仰ありければ、其時入道重ねて申す様は、主上幼くおはします。君は正しき御親にておはします。差越え奉りて、何とか法皇に申參らせ候べき。源氏を引き思召して、平家を惡ませ給ふと覺え候と申しければ、新院少し笑はせ給ひて、宣下の條易し。速に大將軍をしるすべし。誰にか仰せ付くべきぞと仰せけり。入道計らひ申さるゝに依つて、卽ち宣旨を下さる。其狀に曰、

左辨官下　東海・東山道諸國

可㆑早追㆓討伊豆國流人右兵衛佐源朝臣頼朝幷與力輩㆒事

右大納言藤原實定奉㆓敕宣㆒、伊豆國流人前右兵衛權佐源頼朝、忽相㆓語凶惡徒黨㆒、欲㆘虜㆓掠當國隣國㆒、叛逆之甚㆖、既絕㆓常篇㆒。宜㆑令㆘右近衛權少將平維盛朝臣・薩摩守同忠度朝臣・參河守同知盛朝臣等追㆘討彼頼朝及與力輩㆖。兼又東海・東山道堪㆓武勇㆒者、同可㆑令㆑備㆓追討㆒。其中有㆘拔㆓殊功㆒輩㆖、可㆑加㆓不次賞㆒。依㆑宣行㆑之。

治承四年九月六日　　　　　　　　　　藏人左中辨藤原朝臣經房奉

とぞ書下されたる。入道是を給はり、大に悦び、同じき九日は吉日なりとて、賴朝征伐の官兵等門出あり。

源氏隅田河原に陣を取る事

兵衞の佐賴朝は、平家の軍兵東國へ下向の由聞き給ひて、武藏と下總の境なる隅田川原に陣を取つて、國々の兵を召されけり。爰に武藏の國の住人江戶の太郞・葛西の三郞、一類眷族引率して、賴朝の陣へ參る。兵衞の佐殿宣ひけるは、彼等は衣笠にして、味方を討ちし者共なりと聞く。今又賴朝が陣へ參る事、尤不審なり。大場・畠山に同意して、後矢射べき謀にやと宣ひければ、江戶の太郞・葛西の三郞樣々陳じ申すに依つて、宥められけり。兵衞佐殿、上總の介の八郞を召して、今一兩日爰に逗留して、上野・下野の勢を催し立て、渡瀨を廻りて打上らん事、いかゞあるべきと宣へば、弘經畏つて、其事惡く候ひなん。其故は小松の少將維盛大將軍として、侍には上

總守忠清等、數萬騎の勢を引率して下向と聞え候。齋藤別當實盛東國の案內者にて、一陣と承る。日數を經るならば、武藏・相模の勇士等、大場・畠山が下知に隨ひて、平家の方へ參るべし。されば急ぎ此川を渡して、足柄を後にあて、富士川を前にうけて陣を取るならば、武藏・相模の者共は、必ず御方へ參り候べし。此兩人の兵共、隨ひ參り候はゞ、日本國は我君のまゝと思召し候べし。上野・下野の輩は、とても追繼に馳せ參るべしと申しければ、然るべしとて、江戶・葛西と仰せて、浮橋渡すべしと下知せらる。江戶・葛西は石橋の合戰に、兵衞佐殿を討ち奉りし事恐れ思ひけるに、此仰を蒙りて悅びをなし、在家を毀ちて浮橋尋常に渡したり。軍兵是より打渡して、武藏の國豐島の上、瀧野川・松橋といふ所に陣を取る。其勢旣に十萬餘騎。斯りければ八ヶ國の大名小名、別當・庄司・檢校・允介なんどいふ迄も、廿騎卅騎五十騎百騎、白旗白印付けつゝ、爰彼處より參り集まる。兵衞佐殿はいとゞ力付き給ひて、先づ當國六所大明神に御參詣ありて神馬を引き、上矢を奉られたり。

源平兩軍富士川對陣

畠山推參附大場降人の事

斯る處に畠山の庄司次郎は、半澤六郎を呼びていひけるは、此世の中いかゞあるべき。倩兵衞佐殿の繁昌し給ふを見るに、唯事にあらず。八ヶ國の大名小名、皆歸伏する上は參るべきか。さしたる意趣はなけれども、父の庄司・伯父の別當、平家に當參の間、慾に小坪坂にて三浦と合戰す。されば參るも恐あり。參らざるもいかゞあるべき。相計らへといひければ、成淸申しけるは、たゞ御參り候へ。小坪の軍のやうは、三浦の殿原存知たるらん。弓矢取る身は父子兩方に別れ、兄弟左右にあつて合戰する事尋常なり。保元の先蹤近き例なり。且は又平家は當時一旦の恩、兵衞佐殿は相傳四代の君なり。御參り候はんに、其恐あるべからず。若し御遲參あらば、一定討手參るべし。然らばゆゝしき御大事なり。急ぎ御參りありて、何事も陳じ申させ給へといひければ、五百餘騎を相具して、白旗白弓袋を差上げて參りたり。生年十七歲、容儀事さま、誠に一方の大將軍と見えたり。兵衞佐殿宣ひけるは、父重能・

畠山重忠賴朝に屬す

伯父有重、平家に奉公して當時在京なり。定めて東國の案內者して、今度の討手にもや下るらん。されば一門を引分れて、父子敵對せんとは思ふべからず。就中小坪坂にして味方を射き。其上さす所の白旗、全く賴朝が旗に相違なし。兵衞佐だにもさす旗なり。重忠劣るべからずと思ふにや。參上の條旁以て不審なりと仰ありければ、重忠畏つて陳じ申しけるは、小坪の合戰の事、三浦に於て私の宿意なく、君の御爲に不忠候はぬ由、再三問答いたす處に、不慮の合戰に及び候ひき。三浦の人々に御尋あらば、其隱れ候まじ。旗の事は、是れ私の結構にあらず。君の御先祖八幡殿、宣旨を蒙らせ給ひて、武平・家平を追討の時、重忠が四代の祖父秩父の十郞武綱、初參して侍りければ、此白旗を給はつて先陣を勤め、武平以下の凶徒を誅し候ひ畢んぬ。近くは御舍兄惡源太殿、上野の國大藏の館にて、多古の先生殿を攻められける時、父の庄司重能、又此旗をさして、卽ち攻落し奉り候ひぬ。されば源氏の御爲には、御祝の旗なりとて、吉例と名を付けて、代々相傳仕る。されば君御代を知召さるべき御軍なれば、先祖代々の吉例を差して參りたりと申せば、兵衞佐殿は土肥・千葉を

召して、此事如何あるべきと仰せければ、御返事には、當時畠山を御勘當、ゆめ〳〵あるべからず。就中陳じ申す處、一々に其謂候。極めて實法の者に候へば、向後も御賴みあらんに、一方の大將軍をば承るべき者にて侍り。それに御勘當あらば、武藏・相模の者共、是は人の上にあらず、畠山だにも斯く罪せらる。まして我等はとて、更に參り候まじ。誰々も是等を守り候らんと申しければ、兵衞佐殿は、陳じ申す所聞召されぬ。賴朝日本國を鎭めん程は、汝先陣を勤むべし。但汝が旗、餘りに取かへもなく似たるに、是を押せとて、藍皮一文を給はり下し給へり。それより畠山が旗の印には、小紋の藍皮を押しけるなり。畠山旣に參りて、先陣を給はると披露ありければ、武藏・相模の住人等、我も〳〵と參りけり。大場の三郎景親は、此由を聞きて、今は叶はじと思ひて、三千餘騎にて、平家の御迎として上洛しけるが、足柄山を立つて、相澤の宿に着く。前には甲斐源氏二萬餘騎にて、駿河の國に越えて東國の勢を待つ。後には兵衞佐殿、雲霞の如く攻上ると聞えければ、中間に取籠められて、いかゞせんと色を失ひて仰天しければ、家人郎等賴みなくて、思ひ〳〵に落失せ

大場景親賴朝に降る

ぬ。景親心弱くなりて、鎧の一の草摺切落して、二所權現に奉り、足柄より北星山といふ所に逃籠りて、息繼ぎ居たり。其外石橋の軍に、兵衞佐殿を射奉りし輩、皆首を延べて參り集る。重科の者は、忽に切らるべきにてありけれども、宗徒の大場を賺し出さん爲に宣ひけるは、罪科遁れ難しと雖、降人として參る上は、咎を行ふに及ばず。但各軍に忠を盡すべし。忠に依り却て賞あるべしなど御沙汰あつて、馬鞍などたびて、宥め具し給ひければ、命計りは生くべきにとて、各先陣に進みて、忠を抽んでんと思ひけり。斯りしかば大場も、終に首を延べて參りけり。源氏は斯樣に大勢招き集めて、足柄山を打越えて、伊豆の國府に着き給ひ、三島大明神を伏拜み、木瀨川の宿・車返し・富士の麓野・原中宿・多胡の宿・富士川の端・木の下草の中迄滿々たり。其勢廿萬六千餘騎とぞ記しける。

平家東國へ討手に向ふ事

去程に東八箇國の大名小名、皆賴朝に歸服し、既に京都へ攻上る由、頻に風聞ありけ

維盛忠度等頼朝追討の爲め發向

れば、一門僉議して、さらば打立てとて、大將軍には小松の權の介少將維盛、副將軍には薩摩守忠度、侍大將には上總の守忠淸。都合其勢五萬餘騎と聞えける。中にも長井の齋藤別當實盛は、東國の案内者として、先陣を給はりけり。治承四年九月十八日に、福原の新都を立ち、其日はこや野に宿し、十九日に故京につき、五六日逗留して、各鎧甲より弓箭馬鞍に至る迄、輝く計りに出立ちければ、見る人皆目を驚かす。廿五日故京を立つて、十月十日に駿河の國淸見が關に着きにける。先陣は蒲原、富士川に進み、後陣はうつのやに支へたり。然るに實盛は、東國の案内者として、先陣を給はりしかども、一定勝軍とも覺えざりければ、大將軍の御前に參り申しけるは、元來實盛は、宗盛公の御恩、山よりも高く海よりも深く蒙りて候。今度如何なる事もあらんには、見奉らん事難し。御暇を給はつて罷上り、大臣殿を今一度見參らせ、又こそ歸り參らめとて、一千餘騎を引分けて京へ上る。權の介少將維盛は、東國の案内者に賴み給ひける實盛は、叶はじとて上りぬ。心弱く思はれけれども、軍兵に力を添へんとて、よしよし實盛がなき所には、軍はせまじきかとて止まり給へり。

平軍水鳥の羽音に潰走

上總の守忠淸を先陣に差向け給へども、ためらひて進み戰ふ事なし。維盛は忠淸が計らひに從ひて進み給はず。斯りければ、猛く思ふ者も少々ありけれども、一人駈出づべきならねば、富士川に支へて待つ程に、味方には附副ふ勢なく、源氏は日に添へ時を逐うて、雲霞の如くに集まる。されども此川を、何方よりも渡すべきやうなければ、平家の方には、宿々より傾城共を迎へて、帶解きひろげて、歌詠み酒盛して居たりけり。源氏の方には、明日廿四日の卯の刻に、富士川にて矢合あるべしと定めける。平家の兵共、廿三日の夜に入りて、源氏の陣を見渡せば、夜もすがら篝の火をぞ燒きたりける。宿々浦々にみち〳〵て、澤邊の螢の飛び集まりたるに似たり。又夜半計りに、富士の沼に群れ居たりける水鳥の、いくらともなくありけるが、源氏の兵共の物具のさゞめく音、馬の鳴く聲などに驚きて、一度にばつと立ちける羽音、雷大風などのやうに聞えければ、平家の兵驚いて、源氏の近付きて鬨を作るぞと心得て、すはや敵の寄せたるはといふ程こそありけれ。大將軍を始として、取る物も取敢ず、甲冑を忘れ弓箙を落し、長持・皮籠・馬鞍共に至る迄、捨てゝ迷ひ逃上る。

親は子をも知らず、従者は主をも顧ず、只我れ先に〳〵にとぞ落ちたりける。此日頃呼び集めて遊びつる遊君共、或は踏殺され、或は手足踏折られて、はう〳〵泣き逃去りにけり。見逃といふ事こそ、昔より申傳へたり。それだにも心憂かるべきに、是は聞逃なり。源氏は斯くとも知らずして、廿四日の曉に、鏃を揃へ瀬踏して、鬨を作り寄せたれども、平家の陣には人もなし。其跡を廻つて見るに、忘れたる物ども多し。大に怪しみをなす。若京都にて、源氏の方人の惡事を始めたるに依つて、馳せ上りたるやらんといふ處に、頭を踏みわられて、病臥せる女一人あり。こはいかにと問へば、此日頃爰にて遊びつるが、過ぎぬる宵迄は、さりげもなかりつ。夜半計りに此殿原俄に騷ぎあわて、震ひ迷ひて立ちづる時、馬に踏まれて斯く侍り。さればく水鳥の羽音夥しくありつるに、驚かれつるにやといふ。源氏の兵申しけるは、げにも今夜の鳥の羽音は、常よりも夥しかりつるなり。それに驚きて、敵の鬨を作るかとて、京家の者共なれば、寢ぼれて逃げたるよなど、口々に笑ひ合へり。去程に賴朝は、猶も續いて攻むべかりしか共、さすが後も覺束なしとて、鎌倉へ歸られける。

新院嚴島の御幸附清盛奉レ勸ニ起請一事

治承四年九月廿一日、新院又嚴島へ御幸あり。抑此御祈誓は、一年法皇の鳥羽殿に打籠られさせ給へる時、御祈誓ありけるが、御願成就して、法皇事故なく鳥羽殿より都へ還御ありき。從つて入道も思ひ直さると聞えし。されば彼明神の驗にやとぞ覺えける。此度の御幸も、其御かへりまうしの爲なるべし。さしも深き御志なり。神明も爭か御納受なかるべき。御願文御自ら遊ばして、攝政淸書せられけるとかや。されば新院、始は熊野御參詣のことに思召しけれども、仰せ出す御事もなかりけるに、賴朝追討の宣下の後、入道又夜に入りて參りたりけるに、新院の仰には、東國の兵亂の事、賴朝は一人なり。討手の使は三人なり。別の事あらじ。心安く思召せ。早く其祈いたさるべし。先づ嚴島へ參られよかし。さらば我も思ひ立たんと仰下されければ、入道餘の嬉しさに手を合せ、悅び泣して、關東へは若者共を差下して候へば、誠に何事かは侍るべき。鳥風ならばこそ。此等を差越えては、賴朝に勢附

くべきとも存ぜず。皆々防ぎ止めなん。賴もしく候。敕定の如く嚴島へ御供仕りて、天下安穩の事を祈り申すべしとて、俄に出立ち參らせて御幸あり。御供には入道大相國・前の右大將宗盛・大納言邦綱・藤の大納言實國・源の宰相中將通親・頭の左中將重衡・宮内の少輔棟範・安藝の守在經以下八人なり。彼島に着かせ給ひて、御參社以前に、入道と宗盛と父子二人、院の御前に參り寄りて、自餘の人々をば退けられて、入道申されけるは、東國の亂逆に依つて、賴朝を追討すべきの由御宣下の上は、不審は候はねども、源氏に二心あらじと御起請遊ばして、入道に給はりおはまし候へ。心安く存じ、愈御宮仕申候べし。此言葉聞召し入れられずば、君をば此島に捨置き參らせて、歸り上り候ひなんと申しければ、新院少しも騷がせ給はず、良御計らひあつて仰せけるは、今めかし、年頃何事をか入道の申す事を背きたる。今明始めて二心ある身と思ふらんこそ本意なければ、彼起請いと易し。いかにもいふに隨ふべしと仰ありければ、前の右大將硯紙取り參らせり。入道近く參りてさゝやき申しければ、其まゝ遊ばして給ひぬ。入道是を開き拜みて、今こそ賴もしく候へとて、大

將に見せらる。宗盛、此上は左右の事あるべからずと申す。相國取りて懷に入れて立ち給ひけるが、世にも心地よげにて、各御前へ參らせ給へと申しける時、邦綱の卿參られたり。怪しと思はれけれども、人々口を閉ぢて申す事もなかりけるに、重衡の朝臣、いかにぞやと、阿翁にさゝやきければ、打うなづきて心得たる體なりけれども、御供の人々は其心を得ず、國庄を給はりたるか、いか計りの悅し給へるぞ、いと覺束なく思はれたり。其後御社參ありて、神馬神寶參らせて御啓白あり。新院御宸筆の御願文にいはく、

蓋聞、法性山靜十四十五之月高晴。權化地深一陰一陽之風旁扇。方便力用不レ可二測量一者歟。夫嚴島者名稱普聞之場、効驗無雙之砌也。遙嶺之廻二社壇一也、自顯二大悲之高峙一。巨海之及二祠宇一也、暗表二弘誓之深湛一。仰レ之明德在レ頂、現當之望必滿歸レ之。答貺隨二心鏡谷之應惟新一也。凡率土之濱靡然向レ風。伏惟初以二庸昧之身一、忝蹈二皇王之位一、握二乾符一兮。顧二微分一、鎮二迷南面之理一、政望二四海一兮。恥二薄德更無二萬民之威仁一。仍守二謙遜於厲鄉之訓一、樂二閑放於射山之屬一。而後偸抽二一心之精誠一、先詣二孤島之幽一、遂二

機感純熟一、欽仰彌切者也。是宿善之所レ致也。豈非二深信令一レ然乎。況瑞籬之下、仰二冥恩一擬二懇念一而、流二汗寶宮之裏一。垂二靈託一有二其告一之銘レ肝。就中殊指二佈畏謹愼之期一、專當二季夏初秋之候一而、間病痾忽侵、彌思二神威之不一レ空。萍桂頻轉猶レ無二醫術之施一驗、雖レ求二祈禱一、難レ散二霧霞一。不レ如レ抽二心府之志一重欲レ企二斗藪之行一。因レ玆白藏已闌之律、玄英漸近レ之。天殊專二齊肅一。遂次豫參。漠々寒嵐之底、臥二旅泊一而破レ夢。凄々微陽之前、望二遠路一而極レ眼。遂就二枌楡之砌一、敬展二淸淨之筵一。奉レ書二寫色紙墨字妙法蓮華經一部八卷・開結般若心・阿彌陀等經各一卷一、手自奉レ書二寫金泥提婆品一卷一。文々之盡二懇精一、正施二紫磨於瑠璃之上一。字々之隔二妙跡一、未レ疊二漂波於張池之中一。冲襟之至世垂二哀愍一。于レ時蒼松蒼柏之陰、共添二善利之種一。潮去潮來之響、暗和二梵唄之聲一。法會得處隨喜雙催。抑弟子辭二北闕之雲一八箇日矣。雖レ無二涼燠之多一、廻二凌西海之浪一二箇度焉。誠知二機緣之不一レ淺二歸依之思一。此故增二進竭仰之志一。因レ玆堅固如レ之。今度忝至二茵庭一、奉レ添二松府神一、而有レ知レ莫レ棄二我願一。殊以二白葉一奉レ祈二紫宮一。一日萬機之化、廣被二神圖鳳扆之運一惟久。弟子病患忽散、傳二淮南道士之方・壽算無疆論・山中射若之命一。抑嘗社

者混二俗塵一而、濟レ生利二人界一而振レ德。或三公九卿之臣、或芻蕘耋齡之輩、朝祈之客匪レ一。暮賽之者且千。但尊貴之歸敬雖レ多、院宮之往來未レ有レ之。禪定法皇初貽二其儀一、弟子眇身徐運二其志一。彼嵩高山之月前、漢武未レ拜二和光之影一。蓬萊洞之雲底、天仙空隔二垂跡塵一。如二當社一者曾無二比類一。仰願大明神、伏乞一乘經、新照二丹祈一忽彰二玄應一。敬白。

治承四年九月廿一日　太上天皇御諱敬白

とぞありける。御供の人々參社の神女迄も、隨喜の思をなして、いよ〳〵明神の効驗を尊みける。

新院嚴島より還御附御起請に恐れ給ふ事

十月六日、新院嚴島より還御あり。遙々の海路を、御舟にて事故なく歸り上らせ給ふ。源中將通親の卿、御前に參りて申されけるは、哀れ面影に立ち給ふ西海の波路かな。和光の惠とり〴〵にこそ侍れ。或は深山岩窟に瑞籬をしめて、野獸を導く神

新院、淸盛の橫暴を歎かせ給ふ

明もあり。或は海岸水邊に社壇を並べて、淵魚を助くる靈應もあり。誠に嚴島の景氣、拜み奉り候ひし思出にこそ侍れ。さるにても彼島にては、何文を遊ばし、大相國には給はり候ひしにやと申されければ、新院はら〳〵と御淚を流し給ひて、去事ありき。彼文書かずば、朕を捨てゝ上らんといひしかば、源氏に同心ならじと、入道が申す儘に、起請を書きてたびたりしなり。ながらへば見るらめ。我は入道にせため殺されんずるぞ。爲義・義朝が惡事とかやも、見ねば知らず。それも一天の主に、直に起請書けとはよも申さじ。是を目ざましと思ふに、我身の起請にうてゝ、世にあるまじき故なりと、泣々さゝやかせ給ひけり。通親の卿も淚ぐみ畏つて、其事御歎きに及ぶべからず。人の持てる物を、心の外に賺し取り、人を威して、思ふやうの文を書かせんと仕るをば、乞素壓狀と申して、政道にも用ひず、神も佛も棄てさせ給ふ事にて候ぞ。左樣に申行ふこそ、卻て其身の咎にて侍れば、空恐ろしく候。何かは御苦しみ候べきと、忍びやかに慰め申されけり。去程に十一日に、夢野といふ所に新しき御所を作りて、御渡りあるべき由、入道相國申されければ、法皇御輿に召し

て御幸あり。左京の大夫脩範一人、御供に候ひける。名もいま〳〵しき樓の御所を出でさせ給ひて、尋常の御所に移り入らせおはしまして、御心安く渡らせ給ふも、嚴島の御幸の驗なりとぞおぼしめしける。

源平軍物語卷第四終

源平軍物語 卷第五

賴朝義經に對面附伊勢三郎義盛義經に相隨ふ事

抑義經は、母は九條の院の雜仕常盤なり。故下野の守左馬頭義朝に相具して、三人の男子を生む。義朝平治の兵亂に、言甲斐なくなりし後、大貳淸盛の許より使を立てゝ、常盤を尋ねければ、中々に逃れ隱れても惡かりなんとて、十歳に未だ滿たざる子供三人かい持ちて、泣々淸盛に會ひたりけり。容貌事樣より始めて、心立に付きて、思ひ增す樣なりければ、情ある女なりとて、淸盛通ひける程に、娘一人儲けたり。廊の御方とて、花山の院の內大臣の北の方にておはしける。姉公の體に候はれけるは是なり。淸盛心に情ありて、彼繼子三人を憐れみ、中々に披露あるまじ。我子といはんとて、各法師になれとて敎訓しければ、常盤悅びて、太郎をも法師になして、

後には鎌倉の惡禪師といひき。次郎をも僧になして、義圓といひき。三郎は義經なり。此の義經幼きより、鞍馬寺に仕へさせせ、沙那王殿といひける。學文などせんといふ心なく、只武勇を好みて、弓矢・太刀・刀・飛越・力業などして谷峯を走り、稚子共弱輩招き集めて、碁雙六隙なかりければ、師匠も持あつかひて過しける。十六になりける正月に、師の僧のいひけるやうは、今は僧になりて、父の後生をも弔ひ給へかし。男にならんと思ふ志なんどおはするか。さあらば此世の中におはしますべきにあらず。世になからんに取りては、男の義あるべくもなしなんど、懇に語りける時、此兒打笑ひて答へけるは、僧は聖敎を讀み學し、書籍を傳へ習ひたるこそ、さるやうにてよけれ。斯樣に文盲の身にては、法師になりたりとも、非人にてこそあらめとて、いと心入なかりける。師の僧、此氣色を見て申しけるは、人の果報は、凡夫の知らざる事なり。いかにも覺さん儘にし給へとて、笑ひて止みにけり。さて七八日、此兒物思ふ樣にてありければ、彼師怪しと思ひて、慰めなどする處に、少くより持習ひたりし弓矢を取り、夜の間に此兒失せにけり。東西尋ねけれども、兒見え

ず。母の常盤も同じく尋ねけり。其年の二月に、此師の弟子なりける僧の、尾張より上りたりけるが、萬の物語申しける次に、誠や不思議の事侍ふ。爰におはしませし沙那王殿こそ、男になりて、金商人に具して、奥の方へ下り給ひしが、僻目かとてよく〳〵見しかば、未だかねも落さずしておはしき。忍びやかに物申さんと思ひて、忍びに如何にやと申し候ひしかば、少し物はゆげに覺して、其事に侍ふ。師の御房、僧になすべき由、懇に仰せ候ひし旨、其謂候ひき。されども人間に生るゝ事は、有難しと申すぞかし。いかにもして父の恥を雪がんと、年頃鞍馬寺の毘沙門に祈り申しき。身の果報を天道に任せ參らせて、東の方へ罷るなり。坂東に名ある者、一人として父祖父の家人ならぬはなしと承はれば、さりとも頼みて見んと思ひて罷るなり。事の次のあらん時、此由師の御房に語り給へ。文なんどにては落ちる事もあり。必ず人傳ならで直(ちき)にと語りて、はら〳〵と涙を流し候ひしとぞと語りければ、彼師も袖を絞りつゝ、いかにして其迄は下り付かれんとて、忍びて母の許に行き、此由をいひければ、常盤手をあがひて、いや〳〵努々此事又人に語り給ふな。空恐

ろしとて止みにけり。其頃伊勢の國の住人江の三郞義盛とて、心猛き者ありき。あたゝけ山にして、伯母聟に與權の頭といひけるを殺したりし科に、禁獄せられけるが、赦免せられて後、東國に落行きて、上野の國荒卷の鄕に住みけるが、旅人一人來つて遊ぶ。義盛、我も本は旅人なりき。慰めんと思ひて、何となく睦しくて、日頃遊びけるに、いかにも直人と見えざりければ、義盛兎角勞りけり。又此旅人も、義盛をよき者と見てけるにや、互に馴れ遊びて、年經る程に、義盛申しけるは、我をば義盛と知り給へるにや。殿をば誰とも知り奉らず。今更問ひ奉るべし。よも義盛が敵にてはおはせじといひければ、旅人答へけるは、人は家をば賴まずして心を賴む。見慣れ參らせて久しくなりぬ。是は父母もなし、親類もなし。天より天降りたる者なりとて過しける程に、鎌倉にて、流人源の兵衞佐の謀叛起して、罵る由聞えければ、旅人義盛にいふやう、下人一人やとはかし給へ。四五日が程に返すべし。年頃の本意に侍りとありければ、義盛是非の言葉なく、藤太冠者といひける奴子を召して、己をば此殿に奉るなり。いかにも仰に隨へといひてけり。さて彼下人と此旅人と、懇

に耳語き物語して、終夜消息書きて、明くる朝に出し立て、旅の殿の敎の儘に、藤太冠者は鎌倉に行付きて、兵衞の佐の坐しける館を見るに、容易く人の行至るべき様もなかりければ、身の毛よだつて門に佇む。暫しこそあれ。いつとなく佇む程に、人々怪みて、あはれ何者ぞと尋ねありける時、懷より文を取出し渡しければ、暫ある程に、返事を持ちて出でて、九郎御曹子の御使と呼びけれども、藤太冠者心得ずして居たりしに、文を取次ぎたる人出で來て、あれこそはとて、藤太冠者を呼びて返事を取らせ、詞には、疾々御渡り候へと申せとぞいひける。藤太冠者急ぎ歸りて、旅の殿に返事渡して後に、此有様を義盛に語る。義盛志淺からざりつる上に、愈睦しくて、九郎御曹子と申して冊き、主從の禮をなす。扨義經取る物も取敢ず、郎等廿餘騎打連れて、鎌倉へ上られけり。義盛一の郎等たり。夜に入りて鎌倉に着く。明くる朝、義盛を以て申入れられけるは、是は故左馬の頭殿の子息、九條の曹子常盤腹に、牛若と申侍りしが、後には沙那王とて、京の北山鞍馬寺にありしか共、世の中住詫びて、奧州に落下りて、九郎冠者義經と申す者にて侍る。兵衞佐殿、一院の御諚を蒙らせ給

ひて、平家追討の披露あるに依つて、一門の我執を存じ、御力を付け奉らん爲に、夜を日に繼いで馳せ參りて候。申入れさせ給へと宣ひければ、兵衞の佐聞きも敢ず、淚を流し請じ入れ給ひて、いかに〳〵さる事候らん。賴朝敕勘を蒙りし身なれば、音信叶ひ難し。平家追討の院宣を下し給はつて後は、他事なく其營の間、急と思ひ寄らざりつるに、聞敢ず御渡り、嬉しとは事も疎に侍る。昔八幡殿の、後三年の合戰の時、弟に兵衞の尉義綱は、折節帝王に仕へ候ひけるが、兄の行方の覺束なさに、御暇を給はりて罷下るべき由奏聞しけれども、御許なかりければ、陣家に弦袋を掛けて逃下りて、金澤の館へ參向したりければ、八幡殿殊に悅び給ひて、故賴義の朝臣のおはしましたるとこそ覺ゆれとて、淚を流し給ひけり。只今御邊の御渡り、それに少しも違はず。故左馬の頭殿とこそ見奉り候へとて、互に袖を絞り給へば、大名も小名も、皆鎧の袖を濕らしけり。

賴朝勸賞附平家の方人罪科の事

大場景親切らる

兵衛の佐賴朝は、先づ勸賞を宛行ふべしとて、遠江をば、安田の三郎義定に給ぶ。駿河をば、一條の次郎忠賴に給ぶ。上總をば、介の八郎に給ぶ。下總をば千葉の介に給ぶ。其外奉公の忠により、人望の品に從つて、國々庄々を分け給ひけり。次に罪科の輩、其沙汰あるべしとて、大場の三郎景親をば、介の八郎預つて、禁め置きたりけるを、繩付け引つぱり、御前の大庭へ引出で參りたり。舍兄に懷島の平權の頭、人手にかけんよりとて、申給はつて切つてげり。其子の太郎をば、足利の又太郎承つて切り、俣野五郎は遁れ難き身なりとて、忍びて京へ逃上りにけり。海老黨に荻野五郎末重は、石橋の軍の時、源氏の名折に、いかに敵に後をば見せ給ふぞ。返し給へ返し給へと申したりし者なり。裸になし引張つて、引出で參れり。兵衛の佐殿は、いかに末重、石橋の合戰の時の詞忘れずやとて、門外にて切られけり。舍弟二人子息一人、同じく切られぬ。斯樣に首を刎ねらるゝ者、六十餘とぞ聞えし。山の內・瀧口の三郎・同じく四郎は、廻文の時、富士の山と丈比べ、猫の額の物を、鼠の伺ふ定やなんどと、惡口したりし者なり。大庭に召出されたり。兵衛の佐殿宣ひけるは、汝が

荻野末重追放

父俊綱並に祖父俊通は、共に平治の亂の時、故殿の御供に候ひて、討死したりし者なり。其子孫とて殘り留まれり。我れ世を知らば、如何にもいとほしみして世にあらせ、祖父親が後世をも弔はせんとこそ深く思ひしに、盛長に遭うて種々の惡口を吐き、剩へ景親に同意して、賴朝を射し條は、いかに富士の山と長比といひしかども、世を取る事もありけりとて、土肥の次郎に仰せて、速に首を刎ねよと下知し給ふ。實平仰に依つて引張つて出でぬ。暫く館に置きて、歸り參りて申しけるは、瀧口三郎兄弟が事、惡口と申し合戰と申し、忽に首を刎ぬべけれども、彼等が親祖父は、御諚の如く故殿の御命に代りし輩なり。愚なる心に、思慮なく申したる者にてこそ侍れ。只所帶をめして、命計りを生けられて、彼恩分に報はせ給はゞ、俊通・俊綱が魂魄も喜び、故殿の御菩提の御追善ともならせ給ひなん。追放ち候はばや。命生けて侍るとも、謀叛など起すべき仁にも候はずと、細々に申しければ、兎も角も相計らふべしと宣ひければ、實平宿所に歸りて、事の仔細申含めて、兩人が髻切り出家せさせて、追放ちければ、手を合せ喜び出でにけり。長尾の五郎は、佐奈田の與一が敵な

り。召出して、與一が父岡崎の四郎に給ぶ。義實めし縛めて、明日首を刎ぬべきにてありけるが、最後の所作と思ひ入りて、終夜法華經を讀みけり。岡崎人を呼びて、經の聲するは、何者が讀むぞと問ふ。四人長尾の五郎なりといふ。轉讀功積りたりけるにや、今夜を限りと思ひける哀れさに、信心を致して讀みければ、岡崎肝に銘して尊く聽聞しける。後朝に、兵衞の佐殿に參りて申しけるは、長尾の五郎、今日切るべきにて候が、終夜法華經を轉讀し奉る。世に尊く覺え候ひき。在俗の身として、空に讀覺え、あれ程に功を入れ參らせて候ひける事、有難く覺え候。忽に首を切らん事、冥衆の照覽其恐あり。譬ひ切りたりとも、與一再び生返るべからず。いとゞ罪業の基となりて、惡趣に沈み候ひなん。然るべくば與一が孝養に、追放し候ひ侍らばやと相存候。其事叶ひ難く候はゞ、他人に仰せて、罪せらるべく候と申せば、兵衞の佐殿稍案じて、與一が敵なれば、汝に給びぬ。又其上は、如何やうにも義實が計らひなるべし。左樣に咎を法華經に許し奉らん事、誠に神妙なり。汝が悼み申す事を、我れ亦罪すべからずと仰せければ、岡崎悦びて罷歸りて、長尾の五郎を呼びするゑ、

長尾五郎死さる

御邊は大方に付けても、罪科輕からず。義實に於ては與一が敵なり。時刻廻らすべからず、切るべき者なれども、終夜法華經を讀み給ひつれば、兵衞の佐殿に參りて、死罪をば申宥め候ひぬ。御邊に組し與一を殺され、御邊互に然るべき善知識にこそありつらめ。今は出家し給ひて、片山里に閉籠り、靜に經讀み念佛して、與一が後世を弔ひて給べとて、則ち僧を請じ入道せさせて、袈裟衣たち着せ、僧の具足共調へたびて、許し出しけり。岡崎の四郎、情ありとぞ申しける。瀧口の三郎は、父祖の忠に報いて命を生き、長尾の五郎は、轉讀の功に依つて死を許されたり。刀杖不如毒不能害、今こそ思ひ知られけれ。凡そ忠ある者をば賞し、罪ある者をば誅し給ふ。八箇國の大名小名、眼前に打隨へて、四角八方に並居つゝ、非番當番して守護せられ、其勢四十萬餘騎とぞ記しける。吳王の姑蘇臺にありしが如く、始皇の咸陽宮を治めしに似たり。靡かぬ草木もなかりけり。

若宮八幡宮を祝ふ事

鶴岡八幡宮造營

兵衛の佐殿は、賴朝運を東海に開き、其上天下を手に取る事、所々の靈夢、折々の隨想。併しながら八幡大菩薩の御利生なり。都へ上る事は容易すからず。大菩薩を勸賞し奉るべしとて、鎌倉の鶴が岡といふ所を打開きて、若宮を造營して、靈神を祝ひ奉る。社殿金を鏤めて、馬場に砂をいろへたり。朱の玉垣照り光り、綠の松風影すさまじ。祭禮四季に怠らず、神女日夜に再拜せり。其外堂塔僧坊繁昌、供佛施僧不斷なり。入道相國是を聞きて、いとゞ安からず思はれける。

鎧の奏・吉野の國栖の事

斯くて太政入道淸盛の計らひにて、去ぬる六月二日に、都を福原に移されけれども、山門の訴頻なりければ、力及ばず、十一月二日に、俄に都歸ありけり。去程に其年も暮行きて、治承五年正月一日になりにけり。改の年立返りたれども、內裏には、東國の兵革、南都の火炎に依つて朝拜なし。節會計り行はれけれども、主上出御もなし。關白以下藤氏の公卿一人も參らず。氏寺燒失に依つてなり。只平家の人々少々參

つて、執行はれけれども、それも物の音も吹鳴らさず、舞樂も奏せず、吉野の國栖も參らず、鮭の奏もなかりけり。たま〳〵行はれける事も、皆々形計りにありける。

鮭の奏の事

鮭の奏とは魚なり。天智天皇の未だ位に卽き給はざりける時、君は乞食の相おはしますと申しければ、我れ帝位に卽きて、乞食すべきにあらず。備へる相又遁れ難きか。御位以前に、其相を果さんとて、西國の御修行あり。筑後の國江の崎小佐島といふ所を通らせ給ひけるに、疲れに臨み給ひたれども、供御參らする者もなかりければ、網を引く海人に魚を召されて、御疲れを休めさせ給ひ、我れ位に卽きなば、必ず供御に召されんと思召され、其名を御尋ねありければ、鮭と奏し申したり。帝位に卽かせ給ひて、思召し出でつゝ、召されて供御に備へけり。其よりして此魚は、祝の例に備ふるとかや。

吉野の國栖の事

吉野の國栖とは、舞人なり。國栖は人の姓なり。淸見原の天皇、大伴の王子に襲はれて、吉野の奥に籠り、岩屋の中に忍びおはしましけるに、國栖の翁、栗の御料にうぐひといふ魚を具して、供御に備へ奉る。朕帝位に上らば、翁と供御とを召されんと、思召されけるに依りて、大伴の王子を誅し、位に卽きて召

されしより以來、元日の御祝には、國栖の翁參りて、桐竹に鳳凰の裝束を給はつて舞ふとかや。豐の明の五節にも、此翁參りて、栗の御料にうぐひの魚を持參して、御祝に進る。殿上より國栖と召さるゝ時は、聲にて御答を申さず、笛を吹きて參るなり。此翁の參らぬには、五節始まる事なし。斯る目出度き事共も、兵革火炎に依つて奉らず。

春日垂迹の事

二日天慶の例とて、殿上の宴醉なし。男女打潛みて、禁中の有樣、物も淋しくぞ見えける。禮儀もことごとに廢れぬ。佛法王法、共に盡きぬる事こそ悲しけれ。四日南都の僧綱解官せられ、公請を止め所領を歿收せらる。東大寺・興福寺・堂舍佛閣も塵灰となり、若きも老いたるも、衆徒多く滅して、たまたま殘る輩は、山林に身を隱し、便を求めて跡を消し、止住の人もなかりけるに、上綱さへ斯くなれば、南都は併し乍ら亡び畢りぬるにこそ。法相擁護の春日大明神、いかなる事思召すらんと、神慮誠

に知り難し。此明神と申すは、昔稱德天皇の御宇、神護慶雲二年戊申に、白き鹿に鞍を置き、鞍の上に榊を載せ、榊の上に五色の雲棚曳き、雲の上に五所の神鏡と現はれて、常陸の國鹿島郡より、此大和の國三笠山の本宮に垂跡し給ひし時は、御手に法相唯識卅誦を捧げ給ひて、跡を占めおはします。今斯く人法共に亡びぬれば、冥慮爭か安からんと覺えたり。

大佛造營奉行勸進の事

東大寺炎上の後、大佛殿造營の御沙汰あり。左少辨行隆朝臣、奉行すべき由選ばれけり。彼行隆、先年八幡宮に參つて通夜したりけるに、示現を蒙りけるは、東大寺造營の奉行する時は、是を持つべしとて、笏を給ふと靈夢を感ず。打驚きて傍を見るに、誠に現にも是あり。不思議に覺えて、其笏を取つて下向したりけれども、何事にか當世東大寺造替あるべき。如何なる夢想やらんと、心計りに思ひ煩ひて、件の笏を深く納めて、年月を送りけるが、此燒失の後、辨官の中に選ばれて、行隆奉行すべ

き由仰下されけるこそ、思ひ合せて感涙を流しけれ。されば我れ敕勘を蒙らずして昇進あらましかば、今は辨官を過ぎなまし。敕勘に依つて多年を送り、老後に再び辨官になり、歸つて奉行の仁に相當れり。前世の宿緣、今生の面目、來世の値遇迄も、喜ぶに猶餘りありとて、大菩薩の示現に給はりし笏を取出して、造營の事始めの日より、持ち給ひたりけるとかや。又東大寺の大勸進の仁、誰にか仰付くべきと議定あり。當世には、黑谷の源空は、戒德天に覆ひ、慈悲遍うして、人擧つて佛の恩をなす。彼法然房に仰含めらるべきかと、諸卿推擧し申しければ、法皇卽ち行隆朝臣を以て、大勸進を勸むべきの由仰下さる。法然房、院宣の御返事申されけるは、源空山門の交衆を止めて、林泉の幽居を占むる事、偏に念佛修行の爲なり。若大勸進の職に候はゞ、定めて劇務萬端にして、自行成就せずと、堅く辭し申されけり。重ねたる院宣には、門徒の僧中に器量の仁ありや、擧し申すべしと仰下す。法然房、上の醍醐に在しける俊乘房重源を招き寄せて、院宣の趣申含め給ひければ、左右なく領掌し給へり。卽ち是を擧し申されければ、俊乘房、院宣を給はつて、大勸進の上人に定ま

りにけり。法然房宣ひけるは、相構へて御房大銅に食つてゝ一大事の往生忘るべからず。若勸進成就あらば、御房は一定の權者なりと申されけるが、事故なく遂げ給ひにけり。されば勸進俊乘房・奉行行隆、共に只人にはあらじと、皆人頭を傾けゝり。されば笠置の解脫上人貞慶・大佛の俊乘和尙重源兩人は、道念内に催し、慈悲外に遍し。人皆佛の思をなしけるに、重源和尙は深く觀音を信じ給へり。菩薩の慈悲とりどりなりと雖、普門示現の利生悲願は、觀音大士に過ぎたるはあらじ。されば生身の觀音を拜み奉らんと、年來祈念し給ひけり。解脫上人は、釋迦を信じ給ひけり。三世の如來まち〱なりと雖、濁世成佛の導師なり。聞法得脫、偏に如來の恩德にあらずといふ事なし。然れば生身の釋迦を拜み奉らばやと、祈誓し給ひける程に、同じ夜に夢を見給ひけるは、俊乘房は、解脫上人は卽ち觀音なりと見、解脫房は、俊乘和尙は卽ち釋迦なりと見給ひけり。斯りければ、解脫上人は、笠置寺を出でて、東大寺に行き給ふ。俊乘和尙は、東大寺を出でて、笠置寺へ渡り給ふ。兩上人、平野の三間卒都婆といふ所にて行合ひて、共に夢の告を語り、互に淚を流しつゝ、貞慶は、

俊乘和尙を三禮し、重源は解脫上人を三禮して、契りていはく、先立ちて臨終せん者は、自他生所を示すべしと。然るに建久元年六月五日の夜、解脫上人の夢に、重源こそ娑婆の化緣旣に盡きて、只今靈山へ歸り侍ると示し給へり。夢に驚きて、急ぎ人を遣して尋ね問ひ給へば、此曉旣に和尙、東大寺の淨土堂にて、入滅の由答へけり。誠に法界唯心の華嚴の敎主を、再び造鑄の爲に、大聖釋迦如來の、化現し給ひけるこそ尊けれ。

木曾謀叛の事

信濃の國安曇の郡に、木曾といふ山里あり。彼所の住人に、木曾の冠者義仲とて、故六條の判官爲義が孫帶刀の先生義賢が次男なり。父義賢は、武藏の國多胡の郡の住人、秩父の次郞太夫重澄が養子なり。義賢、武藏の國比企の郡へ通りけるを、去ぬる久壽二年二月に、左馬の頭義朝が嫡男、惡源太義平、相模の國大倉の口にて討つてげり。義賢は、義平には叔父なれば、木曾と惡源太とは從弟なり。父が討たれける時

は、木曾は二歳、名をば駒王丸といふ。惡源太は、義賢を討つて京へ上りけるが、畠山の庄司重能に言置きけるは、駒王をも尋出して、必ず害すべし。生殘りては、後惡かるべしと。重能慥に承りぬとはいひたりけれども、いかゞ二歳の子に、刀をば振るべき。不便なりと思ひて、折節齋藤別當實盛が、武藏へ下りけるを、喜びて、駒王丸を母に抱かせて、是れ養ひ給へといひやりければ、實盛受取りて、七ヶ日おきて案じけるは、東國は皆源氏の家人なり。慭に養ひ置きて討たれたらんも、賴まれたる甲斐なし。討たせじとせんも、身の煩たるべし。兎も角も叶ひ難しと思ひて、木曾は山深き所なり。中三權の頭は、世にある者なり。隱し養ひて人となしたらば、主とも賴めかしとて、母に抱かせて、信濃の國へ送り遣す。齋藤別當情あり。母懷に抱へて、泣々信濃へ逃越えて、木曾の中三權の頭に見參して、抱き出していふやうは、我れ女の身なり。甲斐々々しく養ひ立てんとも覺えず。深く和殿を賴むなり。養ひ立てゝ子にもし、百に一も世にある事もあらば、かこち草にもし候へ。惡くば從者にも仕ひ候へといふ。兼遠哀れと思ひける上、此人は、正しく八幡殿には四代の

木曾義仲平家を窺ふ

御孫なり、世の中は、淵は瀬となる譬あり。今こそ孤にておはしますとも、世の末には、日本國の武家の主ともなりやし給はん。いかさまにも養ひ立てゝ、北陸道の大將軍になし奉つて、世にあらんと思ふ心ありければ、賴もしく請取りて、木曾の山下といふ所に隱し置きて、廿餘年が間、育み養ひけり。然るべき事にや、弓矢を取つて人に勝れ、心剛なりけるが、保元・平治に、源氏悉く亡びぬと聞えしかば、木曾七八歳の幼心に、安からず思ひて、あはれ平家を討失うて、世を取らばやと思ふ心出來て、馬を馳せ弓を射るにも、是は平家を攻むべき手習とぞあてがひける。成人して後、兼遠にいひけるは、我は孤なりけるを、和殿の育みに依つて成人せり。斯る便なき身に、思ひ立つべき事ならねども、八幡殿の後胤として、一門の宿敵を、他所に見るべきにあらず。平家を誅して世に立たばやと存ず。如何あるべきと問ふ。兼遠悅んでいひけるは、殿を今迄養ひ奉る本意、偏に其事にあり。憚り候事なかれといひければ、其後は、木曾種々の謀を思ひ廻らして、京都へも度々忍び上つて窺ひけり。片山陰に隱れ居て、人にもはかばかしく見知られざりければ、常は六波羅邊に佇み

窺ひけれども、平家の運盡きざりける程は、本意を遂げざりけるに、高倉の宮の令旨を給はりけるより、今は憚るに及ばず、色に顯はれて謀叛を起し、國中の兵を驅從へて、既に千騎に及べりと聞ゆ。木曾といふ所は、究竟の城郭なり。長山遙に續いて、禽獸猶稀に、大河漲り下つて、人跡又微なり。谷深くかけはし怪しくして、足を跱て歩む。峯高く巖きびしうして、眼を乘せて行く。尾を越え尾に向つて心を碎き、谷を出で谷に入りて思を費す。東は上野・武藏・相模に通つて奥廣く、南は美濃の國に境ひ、道一つにして口狹し。行程三日の深山なり。譬ひ數千萬騎を以ても、攻落すべき樣なし。況や懸橋引落して楯籠らば、馬も人も通ふべき所にあらず。義仲爰に居住して謀叛を起し、攻上つて平家を亡すべしと聞えければ、木曾は信濃に取りても南の端、都もむげに近ければ、こはいかゞせんと、上下皆騷ぎけり。

兼遠起請の事

平家大に驚き、中三權の頭を召し上せて、いかに兼遠は、木曾の冠者義仲を扶持し置

き、謀叛を起し、朝家を亂らんとは企つるぞ。速に義仲を搦め參らすべし。命を背かば、汝が首を刎ねらるべしと下知せられければ、兼遠陳じ申して曰く、此條且聞召され候ひけん。義仲が父帶刀の先生義賢は、去ぬる久壽の頃、相模の國大倉の口にて、甥の惡源太義平に討たれ侍りき。義仲其時は二歲になりけるを、恩愛の道の憐れさは、母惡源太に恐れて、懷に入れていかゞせんと歎き申しゝかば、一旦哀れに覺えて、請取つて今迄養ひ置きて侍れ共、謀叛の事ゆめ〳〵虛言なり。人の讒言抔に候か。但御諚の上は、身の暇を給はつて國に下り、子息共に心を入れて、搦め參らすべしと申す。右大將家重ねて仰には、身の暇を給はらんと思はゞ、義仲を搦め參らすべきの由、起請文を書き參らすべし。然らずば子息家人等に仰せて、義仲を搦め參らせん時、本國に返し下すべきなりとありければ、兼遠思ひけるは、起請を書かでは逃れ難し。書きては年來の本意空しかるべし。いかゞすべきと案じけるが、縱ひ命は亡ぶとも、義仲が世を知らんこそ大切なれ。其上心より起つて書く起請ならず。神明よも惡しと思召さじと思ひなして、熊野の牛王の裏に起請文を書き參ら

す。其狀に曰、

謹請　再拜再拜。

早依レ有二謀叛企一、可レ搦二進木曾冠者義仲一由起請文事

右上奉レ始二梵天・帝釋・四大天王・三光・七耀・九星・二十八宿、下内海・外海・龍神八部・堅牢地祇・冥官冥衆・日本國中・七道諸國・大小諸神・鎭守王城・諸大明神一驚申而白。木曾冠者義仲者、爲二六孫王之苗裔一、繼二八幡殿後胤一、弓馬之家也。武藝之器也。依レ之被レ引二源家之執心一、爲レ謝二宿祖之怨念一、相二語北陸諸國之凶黨一、擬レ滅二平家一族之忠臣一之由有二其聞一。甚以濫吹也。早仰二養父中三權頭兼遠一而、可レ搦二進彼義仲一云々。謹蒙二嚴命一畢。任下被レ仰下一之旨上、速可レ搦二進彼義仲一。若僞申者上蒙二件之神祇冥衆之罰一、於二兼遠之八萬四千之毛孔一、現世當來、永神明佛陀之利益可レ奉レ漏之起請之狀如レ件。

治承五年正月日　　中原兼遠

とぞ書きたりける。是に依つて平家賴もしく思はれければ、中三權の頭を返し下さる。兼遠國に下りて思ひけるは、起請文は書いつ、冥の照覽恐あり。又起請に恐れ

ば、日頃の本意無代なるべし。いかゞせんと案じけるが、義仲を世に立てんと思ふ心の深かりければ、本望をも遂げ、起請にも背かぬやうに、當國の住人根井滋野行親といふ者を招き寄せていひけるは、此木曾殿をば、幼少二歳の時より抱き育み奉りて、世に立て候はん事をのみ、深く存じ侍りき。成人の今、高倉の宮の令旨を給ひて、平家を亡さんとする處に、兼遠を召上せて、起請文を召され畢んぬ。此事默止せん條、本意にあらず。されば木曾殿を和殿に奉らん。子息共は定めて參り侍るべし。心を一にして、平家を討亡して、世に在せよとて取らせける、志こそ恐しけれ。行親木曾を請取つて、異計を當國隣國に廻らし、軍兵を木曾の山下に集めけり。斯りければ故帶刀の先生義賢の好(よしみ)にて、上野の國の勇士足利の一族以下、皆木曾に相隨ひ、平家を亡さんと犇きけり。平家此事を聞きて沙汰ありけるは、越後の國の住人城の太郎資永は、當家大恩の身として、多勢の者なり。縱ひ木曾、信濃の國の兵を相語らふといふとも、資永が勢に並べんに、十分の一に及ぶべからず。只今討つて參らせなん。穴勝に驚き騒ぐべからずといひけれども、東國の背くだにも淺ましきに、北

國さへ斯りければ、唯事にあらずと申合へり。

美濃の目代早馬の事

行家兵を擧ぐ

正月廿四日亥の刻に、美濃の國の目代早馬を立てゝ、六波羅殿へ申しけるは、熊野の新宮の十郎藏人行家、東國の源氏等を催して、數千騎の軍兵を引率して、既に當國に打入候間、國中の土民安堵せず、當國幷に近江を相隨へて、都に攻上るべき由披露あり。急ぎ討手を下さるべし。又御用心あるべしとぞ申したる。六波羅には、一門馳せ集りて此事を聞き、こはいかゞせんと、只今敵の都へ打入りたるやうに、鎧・腹卷・太刀・刀、馬よ鞍よと犇きければ、京中の貴賤、資財雜物を東西に運び、途を失ひて、詮方なく見えける處に、武士共人家に走り入りて、目に見ゆる物を奪ひ取りければ、安き人更になし。廿五日、前の右大將宗盛の卿、近江の國の惣官に補せらる。大平三年の例とぞ聞えし。

知盛行家を攻む

平家美濃國發向附知盛所勞上洛の事

二月一日、征東大將軍左兵衞の督知盛の卿・中宮の亮通盛の朝臣・左少將淸經・薩摩の守忠度。侍大將には越中の次郎兵衞盛繼・上總の五郎兵衞忠光・尾張の守實康・伊勢の守景綱を先として、都合其勢三千餘騎、美濃の國へ發向す。今日東塞りなり。時日こそ多きに、如何あるべきと申す者もありけれ共、今一日も、源氏に勢の附増さぬ先にとて、斯く急ぎ給ひけり。去程に十郎藏人行家は、美濃の國板倉といふ所に楯籠りけるを、平家の軍兵押寄せて、後の山より火をかけて攻めければ、行家怺へずして追落されて、同じき國中原といふ所に陣を取る。其勢千餘騎には過ぎざりけり。平家又中原へ攻め寄せたり。されども征東將軍左兵衞の督知盛の卿、病氣に冒され、同じき十二日に上洛せり。其故は近江の國小野の宿を立ち、鮫井に着き給ひける時、比良の高根の殘雪、餘寒烈しき折節に、伊吹が嶽の山颪、身に入るよと覺えけるより、心地例ならずとて、道すがら勞して、是迄は下り給ひたれども、いかにも叶ひ

難うして上られければ、副將軍の左少將淸經朝臣も、同じく入洛せられけり。其外の人々は、猶美濃の國に止まる。討手の使は、度々下されけれども、はかぐ〳〵しき事もなくて、皆々歸り上りければ、東國にも北國にも、日に從ひて大勢附增すと披露しければ、淺ましき事なりとて、右大將宗盛、今度は我下らんと宣ひければ、君の御下向あらば、東國も北國も、誰かは違背すべき。ゆゝしく候ひなんと、上下色代して、我も〳〵と出立ちける。其上或は武官に備はり、或は弓矢に携らん輩、宗盛の下知に從ひて、東夷北狄を追討すべきの由宣下せられければ、面々其用意あり。

宇佐公通飛脚附伊豫の國飛脚の事

同じく十三日、宇佐の大郡司公通が飛脚、六波羅に到來していはく、九國の住人菊地の次郎高直・原田の大夫種直・緒方の三郎惟義・臼杵・部槻・松浦黨を始として謀叛を起し、東國の賴朝に與力して、西府の下知に從はずと申したり。平家の人々手を打つて、こはいかなる事ぞ。東國の亂をこそ歎きて、西國は手武者なれば、催し上せ

て、官兵に差遣さんと思ひつるに、承平に將門、天慶に純友、東西に鼻を並べて亂逆せしに、少しも違はずとて騷ぎ迷ひ給へば、肥後の守貞能申しけるは、是は僻事にて候らん。斯樣の時は、空事多き事なり。東國・北國の輩は、誠に義仲・賴朝に相隨ふ事も侍るらん。西海の奴原は、平家の御恩の者共なり。爭か君をば背き參らすべき。貞能罷下つて誡め鎭め侍るべしと、賴もしげにぞ申しける。同十六日に、近江・美濃兩國の山賊等が首、七條川原にて、武士の手より、檢非違使受取りて大路を渡し、東西の獄門に梟けられければ、近國の勇士等、皆平家に隨ひけり。同じき十七日、伊豫の國より飛脚到來していはく、當國の住人河野の介通清、去年の冬の頃より謀叛を起して、備前・備後の境、高縄の城に引籠る。備後の國の住人額の入道西寂、鞆の浦より數千艘の兵船を調へて、高縄の城に押寄せ、通淸をば討取りて侍りしかども、四國猶靜ならず。西寂、又伊豫・讃岐・阿波・土佐四箇國を鎭めんが爲に、猶伊豫に逗留す。爰に通淸が子息に四郎通信、高縄の城を遁れ出でて、安藝の國へ渡つて、奴田の鄕より卅艘の兵船を調へ、漁船の體にもてなし、忍びて伊豫の國へ押渡り、竊に西寂を

窺ひける。西寂是を知らず、今月一日室・高砂の遊君集めて、舟遊する所に押寄せて、西寂を生捕つて、高繩の城に引いて行いて、八付にして、父通清が亡魂に祭りたりとも申す。又鋸にてなぶり切に、首を切つたりとも申す。異說口多しと雖、死亡決定なり。是に依つて當國には、新井・武智が一族、皆河野に相隨ふ。惣じて四國の住人、悉く東國に與力して、平家を背き奉ると申したり。又聞えけるは、熊野の別當田部法印堪增以下、那智新宮の衆徒、吉野十津川の輩に至る迄、花洛を背きて、東夷に屬する由披露あり。東國・北國のみにあらず、南海・西海も騷動せり。我朝只今失せなんとす。こは心憂き事かなと、平家の一門ならぬ貴賤迄も、各歎き申しけり。同じき十七日、太政入道、子息前の右大將宗盛を以て奏せられけるは、天下の御事、本の如く聞召さるべきの由、法住寺の御所に申入れ候ひけれども、法皇は政務に口入すればこそ、心憂き事も辛き目をも見聞すれ。よしなしとて聞召入れさせ給はざりければ、底いぶせくぞ思ひ給ひける。同じき十九日、東國・北國の賊衆、賴朝・義仲與力同心の凶徒等、征伐すべきの由宣旨を以て、越後の國の住人余五將軍が末葉城の太

郎平の資永が許へ下し遣されけり。

清盛逝去附東國發向の事

同じき廿七日、前の右大將宗盛、數萬騎の勢を引具し賴朝以下の凶徒を追討せんとて門出して、既に打立たんとしける處に、清盛入道違例の心地出來給へりとて、止まり給へり。然るに清盛入道、病付き給ひし日より、湯水も咽へ入れられず、悶絶僻地して、閏二月四日に、終に逝去し給へり。今年六十四歳にてぞありける。同七日、愛宕にて燒き奉る。其頃怪異なる事共多かりけり。又三月十日、尾張の國の目代、早馬を以て都へ申しけるは、源氏既に尾張の國迄攻め上り、道を塞いで、人を通さゞる由申したりければ、重ねて僉議あつて、本三位の中將重衡・權の亮少將維盛兩人を、大將軍に定め仰せられける。

墨俣川合戰附矢矯川軍の事

重衡維盛東國へ發向

治承五年三月十一日、賴朝追討の爲に、頭中將重衡・權の亮少將維盛、都合其勢七千餘騎、東國へ發向す。前後の追討使、美濃の國にて一つになり、尾張の國墨俣の西の川原に陣を取つて、東國の源氏を防がんとす。新宮の十郞藏人行家は、千餘騎の勢にて、東の川原に陣を取つて、西國の平氏を下さじとす。兩方川を隔てゝ控へたり。是は九郞義經の故下野の守義朝の子息、常盤が腹の子に、卿公義圓といふ僧あり。是は九郞義經の一腹の兄なり。十郞藏人に力を合せよとて、兵衞の佐殿、千餘騎の勢を付けられたりけるが、是も墨俣川原に馳せ付きて、十郞藏人の陣、二町を隔てゝ陣を取る。平家は西の川原に七千餘騎、源氏は東の川原に二千餘騎。既に十六日の卯の刻には、源平の矢合と聞ゆ。是に行家と義圓と、互に先を心に懸けたり。卿公義圓は、十郞藏人に先を懸けられては、兵衞の佐に面を合すべきかと思ひて、人一人も召具する事なく、只一人馬に乘つて、陣より上二町計り步ませ上つて、川を西へ渡す。敵の陣の前、岸の下に控へたり。行家夜の曙に、鬨を作つて川をさつと渡さん時、爰より義圓、今日の大將軍と名乘つて、先陣を懸けんと思ひて、東や白む夜や明くると待ち居た

り。平家の方には、源氏夜討にもや寄するとて、夜廻を始めて、十騎廿騎計り、手々に續松捧げて、河の端を見廻りけるに、岸の下に馬を引立て丶、其傍に人一人立ちたり。夜廻是を見咎めて、何者ぞと問ふに、義圓少しも騷がず、是は味方の者にて候が、馬の足冷し候と答ふ。味方ならば、甲を脱いで名乘れといひければ、馬にひたと乘つて陸へ打上り、兵衞の佐賴朝の弟に、卿公義圓といふ者なりと名乘つて、夜廻の中へ打入つて、竪ざま横ざまに散々に戰ふ。三騎討取つて、二人に手を負はせて、義圓是にて討たれにけり。十郎藏人是をば知らず、卿公や先に進むらんと思ひて、使を遣して見せけるに、大將軍見え給はずといひければ、さればこそとて、十郎藏人打立ちけり。千騎の勢を、八百騎をば陣に止め、今二百騎を相具して、川をさつと渡し、平家の陣へ駈入りたり。夜の明方の事なりければ、未だ世間も暗かりけり。平家は敵多勢にて、夜討に寄すると心得て、火を出して見れば、僅に二百餘騎と見てければ、七千餘騎入替へ〳〵戰ひけり。行家も少しも引かず、大勢の中に駈入りて戰ふ程に、軍兵多く討たれければ、川を東へ引退く。行家は、赤地の錦の直垂に、小櫻を黃に返

したる冑着て、鹿毛なる馬に、黄覆輪の鞍置きて乘つたりけり。大將軍とは見えけれども、平家は續いても追はざりけり。行家が子息に、惡禪師といふ者あり。尾張源氏泉太郎重光等同心して、七百餘騎筏に乘り、夜半計りに、淀より上を竊に越えて、夜討にせんとて向ひけるを、平氏の軍兵豫て此由悟りにければ、淀らんと志す所をば引退きて、思ふやうに西の岸の上におびき出して、中に取籠め戰ふ。宵の程は雨烈しく降りけるが、夜半計りには雨降らざりけれども、雲のはだへ天に覆ひて、暗き事は、目の前なる物をも見分けべくもなかりけるに、只鬨の聲をしるべにて、兩軍亂れ合ひて相戰ふ。甲の鉢を打ち太刀は打違へる時、火の出づる事電の如くなりければ、自ら明かに便となつて、敵を取る輩あり。多くは共討にぞ亡びける。弓を引き矢を放つ事は、何れを敵とも見分けざりければ、太刀を拔き刀を拔いて、取組み刺違へてのみぞ死にける。源氏の兵三百餘人討たれにければ、殘る輩、川の端へ引退く。筏に乘らんとしけるを、平氏の軍兵追懸けて、筏の上にて戰ひけり。果は筏を切破りければ、空しく川に入りて、命を失ふ者其數を知らず。藏人頭重衡の朝臣の手に、

二百十三人討取つてげり。生捕には、惡禪師・泉太郎重光・同じく弟高田の四郎重久を始として、八人とぞ聞えける。維盛朝臣の手には七十四人、通盛の手には六十七人、忠度の手には廿一人、知度の手には八人、讃岐の守維時の手に七人、以上三百九十人、首川の端に切懸けたり。即ち首の交名を記して、京へ奉りたりければ、平家の一門寄合せて、悦ぶ事限なし。十郎藏人行家は、墨俣川の軍に打負けゝれば、引退きて、墨俣川の東、小熊といふ所に陣を取る。平家は七千餘騎を五手に分け、一番飛騨の守景家大將軍にて、千餘騎川をさつと渡して、小熊の陣に押寄せたり。一時戰うて射白まされて引退く。二番に上總の守忠清千餘騎喚いて懸る。源氏矢衾を造つて射ければ、怺へずして引退く。三番に越中の前司盛俊千餘騎、鑣を並べて押寄せたり。源氏鏃を揃へて射ければ、暫し戰うて引退く。四番に高橋判官長綱千騎、鐙を傾けて、聲を上げて押寄せたり。源氏差詰め引詰め散々に射ければ、是も叶はずして引退く。五番に頭中將重衡・權の亮少將維盛、二千餘騎にて入替へたり。進み退き追うつ返しつ、一味同心に、揉みに揉うてぞ攻めたりける。十郎藏人行家も、命

も惜まず面も振らず、平家の大將ぞ。洩らすな餘すなとて、爰を最後と戰うたり。矢叫の音、馬の馳違ふ音、隙ありとも聞えず、源平旗を差並べて、勝負牛角に見えたりけり。　一陣景家、二陣忠淸、三陣盛俊、四陣長綱、合せて四千餘騎、重衡・惟盛二千餘騎に押合せて、七千餘騎が一手になつて、入替へ〳〵攻めけるに、行家心は武く思へども、無勢にて防ぎ兼ね、小熊の陣を落されて、尾張の國折戸の宿に陣を取る。平家は隙なあらせそと、勝に乘つて攻下りければ、折戸をも追落されて、熱田の宮へ引退き、在家を毀ち垣楯を搔き、爰にて暫く防ぎけれども、熱田をも追落されて、三川の國矢矯川の東の岸に、城構して陣を取る。　平家續いて攻下り、川より西に控へたり。　當國額田の郡の兵共、思ひ〳〵に馳せ來つて、源氏に力合せたり。　十郎藏人謀を構へけるは、年老いたる雜色三人召寄せ、簑笠具し、糧料馬糟負せて、京上りの夫に作り立て、心を入れて平家の陣の前をぞ通したる。平家夫男を召留めて問ひけるは、源氏軍に負けて、東國へ落下る。　是何程延びぬらん。　其勢如何程かありつると問ふ。　夫男申しけるは、箭作川の東の陣の內の勢は、爭か知り侍るべき。　落下り給

重衡維盛敗走

ひつる勢は、僅に四五百騎、大將軍とこそ見え給ひつれ。爰より幾程も經給はじといふ。平家又問ひけるは、さて東國より上る勢はなしやと。夫男申しけるは、勢は雲霞の如く上り侍る。先陣は菊川、後陣は橋本の宿、見付の國府に着く。程近き高志二村は、軍兵野にも山にも、隙ありとも見えずといつて過ぎにけり。平家此事を聞き、いかゞあるべき。東國の大勢に取籠められなば、ゆゝしき大事、一人も遁れ難しとて、取る物も取敢ず、思ひ〳〵に逃上る。大將軍行家は、平家をたばかり、人を方々へ馳せ遣していひけるは、落上る平家を、一矢も射ざる者は、源氏の敵ぞと披露ありければ、美濃・尾張の兵共、後勘を恐れて追懸け〳〵、散々に射る。平家も返し合せ〳〵戰ひけれども、落武者の習なれば、只身を助けんと計りの防ぎ矢にて、西を指してぞ落行きける。されば平家の方には、年頃恩顧の輩の外に、隨ひ付く者更になし。源氏には日に隨ひて勢の付きければ、東國には爭ふ者なく、草も木も皆頼朝に靡きける。

行家太神宮へ祭文并神馬を引く事

十郎藏人は、所々の軍に負けて、三川の國府に息繼ぎ居て、是より伊勢太神宮へ祭文を進らする。其狀にいはく、

再拜々々。

伊勢の渡會の五十鈴の川上の、下津盤根に大宮柱を廣敷立て、高天原に千木高く知れて、祝ひ申し定め奉る天照皇太神の廣前に、恐々申給へと申す。

右正六位源朝臣行家、去治承四年之頃、蒙最勝親王敕云、入道大相國清盛、自平治元年以降、誇無理之威勢、昇不當之高位、相從一天於一門之雅意、不任百官於百王之理政之間、去治承元年終雖非敕定、正二位權大納言藤原成親・同子息成經等、稱有謀叛之結構、宛行遠流之重科、其外院中近習上下諸人、或蒙死刑、或趣配流。加之智臣前大相國已下四十餘人、停止官職、奪取庄園、或退今上國主之御位、讓謀臣不忠之孫、或閉太上法皇之御座、止治天有道之政。然則早誅罰清盛入

道、且奉休法皇之叡慮而、備孝德之禮、且默止萬人之愁吟而、致撫育之惠所思召也云々。而行家依親王之敕命、催勇士之合力刻、平家議云、一院第二皇子、是爲我國萬機之器、早可奉出花洛也。仍同五月十四日夜、俄可配流土佐國之由、依令風聞、爲遁一旦之難、暫令退入園城寺之處、以左少辨行隆、恣構濫宜、或制與力於北嶺四明之一山、或滅法命於南都三井之兩寺、速絶王法失佛法矣。謹尋天武天皇之舊儀、討王位押取之輩。倩訪上宮太子之古跡、亡佛法破滅之類。是以國政如元。奉任一院而、諸寺之佛法令繁昌、諸社之神事無相違、以正法治國土、撫萬民與天恩也。爰行家先跡者、昔天國押開給而後、清和天皇王子貞純親王七代孫、自六孫王下津方、併勵武弓專護朝家、高祖父賴信朝臣者、搦忠常蒙不次之賞。曾祖父賴義朝臣者、康平六年鎭奥州之逆黨、後代爲規模。祖父義家朝臣者、寛平年中、雖不經上奏、爲國家討不忠武士平家衡等、振威於東夷、上名於西洛。親父爲義者禦還南都大衆之發向、奉休北闕聖主之逆鱗。鎭護王法寶位無驚、照四海於掌內懸百司於心中、皇威及夷域、仁恩普一天。而自去平治元年、源

家被レ止二出仕一之後、入道偏誇二于威勢一、驕二於高位一、都城之内蔑二官事一、洛陽之外放二謀宣一。然則行家が先祖を訪へば、天照の太神の、初めて日本國の磐戸を押開きて、新に豐葦原の水穗に濫觴し給ふなり。彼の天降り給ふ聖體は、忝く行家が卅九代の祖宗なり。御垂跡より以降、鎭護國家の誓嚴重にして、冥威隙なき處に、入道、神慮にも恐れず叡情にも憚らず、遙昇二高位一。是雖レ似二朝恩一、濫企二逆亂一。併所レ致二愚意一也。又行家親父朝臣者、如二大相國一誇二私威一、非レ起二謀叛一。依二上皇之仰一、參二白川御所一計也。而稱二謀叛之仇一、依レ不レ仕二朝廷一、相傳之所從、塞二於耳目一、不レ隨二順譜代之所領一、被レ止二知行一無二衣糧一。獨身不屑之行家、彼入道萬の一にも不レ及所、而入道忽依レ起二謀叛一、行家爲レ防二朝敵一東國に下向して、頼朝朝臣と相共に、且は源家の子孫を誘へ、且は相傳の所從を催して、上洛を企つる所なり。案の如く意に任せて、東海・東山の諸國、已に同心し畢りぬ。是朝威の貴きが致す所なり。又神明の守、然らしむるなり。風聞の如きは、太神宮より神鏑を放ち給ふ。入道其身に中つて亡べりと。彼を見是を聞くに、上下萬人宮中民烟、何れの人か靈威を畏れざらん。誰の人か源

家を仰がざらん哉。抑東海諸國之太神宮御領事、依先例分神役、可備進御年貢之由、雖加下知、或恐平家不下使者、或有濟納、依路次之狼藉不能運送歟。源家者縱雖爲神領、僅宛催兵糧米計也。然而早可停止之。又始自院宮諸家臣下之領等、國々庄々年貢闕如事、全不悞。或云源氏、或云大名、數多之軍兵參會之間、不慮之外難濟歟。就中國郡村閭住人百姓等之愁歎、誠以難抑。但行家雖切撫民之志、未遂退敵之節。而徒送日數、尤所哀歎也。然者早行家者、歸參王城近隣、奉護北闕之王尊。賴朝者居留東州之邊境、奉耀西洛之朝威也。神明必垂哀愍、天下忽鎭叛逆矣。縱云平家之兄弟骨肉、於護國家之輩者、速絕神恩。又云源家之子孫累葉、於有二意之輩者、必加冥罰。羨天照太神此狀を平げ安らげ聞召して、無爲無事に上洛を遂げ令めて、速に鎭護國家の衞宮をなし給へ。天皇朝廷の寶位動くこと無く、源家の大小從類恙無くして、夜の守り日の守りに、護り幸し給へと、恐れ〳〵申し給へと申す。

治承五年五月十九日　　　　正六位上源朝臣行家

とぞ書きたりける。此の祭文に、神馬三疋・銀劍一振・上矢二筋相具して、太神宮へ奉進す。

天下餓死の事

さる程に去年諸國七道の合戰に、諸寺諸山の破滅もさる事にて、天神地祇怨を含み給ひけるにや、春夏は旱し、秋冬は大風洪水斜ならず、懇に東作の勤を致し乍ら、空しく西收の營絶えにけり。三日雨風起り、麥苗ひてず、多く黄死す。九月霜降り、秋早く寒し。禾穗未だ熟せず、皆青く乾くといふ本文あり。斯樣によからぬ事のみありしかば、天下大に飢饉して、人民多く餓死に及べり。僅に生ける者も、或は地を捨て境を出で、爰や彼に行き、或は妻子を忘れて山野に流浪し、憂の聲耳に滿てり。斯くて年も暮れにき。明年はさりとも立直る事もやと思ひしに、今年は又疫癘さへ打添へて、飢えても死し、病みても死ぬ。只管思ひ詫びて、事宜しき人も形を窶し、樣を隱して諛ひ行く。さるかとすればやがて倒れ伏して死ぬ。路頭に死人の多き事、

算を亂せるが如し。されば馬車も、死人の上を通る。臭香京中に滿々て、道行く人も容易すからず。斯りければ餘りに餓死に攻められて、人の家を片端より毀ちて、市に持出でつゝ、薪の料に賣りけり。其中に薄朱などの附きたるもあり。是は詮方なき貧人が、古き佛像卒都婆などを破つて、一旦の命を過ぎんとて、斯く賣りけるにこそ。誠に濁世亂漫の折といひながら、心憂かりける事共なり。

賴朝追討の廳宣附秀衡方へ下す事

四月廿八日、又賴朝を追討すべきの由、院廳の御下文をなして、陸奥の國の住人藤原の秀衡が許へ下し遣されけり。其狀にいはく、

左辨官下　奥州住人等

　應㆕早令㆔追㆓討流人前右兵衛權佐源賴朝㆒事

右賴朝、去永曆元年坐辜配㆓流伊豆國㆒。須㆑悔㆓身過㆒宜㆑從㆓朝憲㆒、而猶懷㆓梟惡之心㆒、旁企㆓狼戾之謀㆒、或寃㆓凌國宰之使㆒、或侵㆓奪土民之財㆒。東山・東海道國々除㆓伊賀・伊勢・飛

驒・出羽・陸奧之外、皆趣ニ其勸誘之詞ニ、悉隨ニ彼布略之語ニ。因レ茲差ニ遣官軍ニ、殊可レ令ニ防禦ニ之處、近江・美濃兩國之反者卽敗、續ニ尾張・參河以東之賊衆ニ尙固守。抑源氏等皆悉可レ被ニ誅戮ニ之由依レ有ニ風聞ニ、一姓之輩共發ニ惡心ニ云々。此事尤虛誕也。於ニ賴政法師ニ者、依レ爲ニ顯然之罪科ニ、忽所レ被レ加ニ刑罰ニ也。其外源氏無ニ指過怠ニ。何故被レ誅。各守ニ帝猷ニ抽ニ臣忠ニ、自今以後莫レ信ニ浮讒兼存ニ。此仔細早可レ歸ニ皇化ニ者、奉レ仰下知如レ件。諸國宜ニ承知ニ依レ宣ニ行之。敢不レ可ニ違失ニ之故下。

治承五年四月廿八日　　　　　　左大夫小槻宿禰奉

とぞ書かれたる。秀衡は、下野の國の住人俵藤太秀郷が末葉、亘理權太夫經淸が曾孫、權太郎御館淸衡が孫なり。彼秀衡、此御下文を給びたれども、兵衞の佐には草木も靡きて、容易く傾け難かりければ、由なしとてさて止みぬ。

源平軍物語卷第五終

源平軍物語卷第六

信濃國橫田川原軍の事

越後の國の住人に、城の太郎平の資職といふ者あり。後には資永と改む。是は與五將軍維茂が四代の後胤、奥山太郎永家が孫、城の鬼九郎資國が子なり。國中の者共相隨へて多勢なりければ、木曾の冠者義仲を追討の爲に、同じく廳の下文あり。同く六月廿五日、資永御下文の旨に任せて、越後・出羽兩國の兵を招くと披露しければ、信濃の國の住人にても、源氏を背く輩は、越後へ越して資永に附く。其勢六萬餘騎なり。同國の住人小澤左衛門尉景俊を先として、信濃へ越しけるが、六萬餘騎を三手に分つ。筑摩越には、濱の小平太・橋田の太郎大將軍にて、一萬餘騎を差遣す。上田越には、津波田の庄司太夫家親大將軍にて、一萬餘騎を差遣す。資永は四萬餘騎を

相具して、今日は越後の國府に着き、明日は當國と信濃との境なる、關の山を越えんとす。勝湛房が子息に、藤新太夫・奥山權の頭・其子の横新太夫伴藤、別當家の子には、立川承賀・將軍三郎、信濃武者には笠原平五・其甥に平四郎・星名權八等を始として、五百餘騎こそ參りけれ。信濃の國へ打越えて、筑摩川の端横田川原に陣を取る。城の太郎資永、前後の勢を見渡して、奢る心出で來つゝ、急ぎ寄合せて、聞ゆる木曾を見ばやとぞ罵りける。木曾は、落合の五郎兼行・鹽田の八郎高光・望月太郎・同じき次郎・八島の四郎行忠・今井の四郎兼平・樋口の次郎兼光・楯の六郎親忠・高梨・根井・大室・小室を先として、信濃・上野兩國の勢催し集め、二千餘騎を相具して、白鳥川原に陣を取る。楯の六郎親忠馬より下り、甲を脫ぎ弓脇挾み、木曾が前に畏つて申しけるは、親忠先づ横田川原に打向うて、敵の勢を見て參らんと申候。然るべしとて許されたり。親忠乘替計り打具して、白鳥川原を打出でて、步ませ行きて見渡せば、横田・篠野井・石川に火を懸けて燒拂ひ、軍場の料にしたり。親忠、大法堂の前にして馬より下り、甲を脫いで八幡の社を伏拜み、南無八幡大菩薩、我君先祖崇靈神なり。願は

木曾義仲城資永合戰

くは木曾殿、今度の軍に勝つ事を得せしめ給へ。御悅には、六十六箇國に、六十六箇所の八幡社領を立てゝ、大宮に御神樂、若宮に仁王講、峯兒の御前に、左右に八人づつの神樂女・同じき神樂男、怠轉なく神事勤めて參らせんとぞ祈念しける。乘替を使にて、木曾殿へ申しけるは、城の六郎所々に火を放つて、横田・篠野井・石川邊を燒拂ふ。斯くあらば八幡の御寶殿もいかゞと、危く覺え候。急ぎ寄せ給へとぞ申したる。木曾取敢ず、夜もすがら大法堂に馳付きて、甲を脫ぎ腰を屈めて、八幡の社を伏拜み、樣々願を立てられけり。明けぬれば朝日隈なく差出でて、鎧の袖をぞ照しける。義仲遙に伏拜み、彌勒龍花のあした迄、義仲が日本國を知行せんずる軍の緣日となり給へば、今日は八幡大菩薩の結びて給ひたる吉日なりとぞ勇みける。治承五年六月十四日の辰の一點なり。源氏方より進む輩、上野の國には那和の太郎・物井五郎・小角の六郎・西の七郎。信濃の國には根井小彌太・其子楯の六郎親忠・八島の四郎行忠・落合の五郎兼行・根津泰平が子息根津次郎貞行・同じく三郎信貞・海野の彌平四郎行弘・小室の太郎・望月次郎・同じく三郎・志賀の七郎・同じく八郎・櫻井太郎・同じ

く次郎・石窪の次郎・平原の次郎景能。諏訪の上の宮には、諏訪の次郎・千野の太郎。下の宮には手塚の別當・同じく太郎。木曾堂には中三權の頭兼遠・子息樋口の次郎兼光・今井の四郎兼平・與次・與三・木曾中太・彌中太・檢非違所の八郎・東十郎・進士禪師・金剛禪師を始として、郎等乘替知らず、棟人の兵百騎、鑣を並べて、一騎も先に立たず一騎も下らず、筑摩河をざつと渡して、西の川原に、北へ向けてぞ懸けたりける。城の太郎が四萬餘騎、入替へ〳〵戰ひけれども、百騎の勢に駈立てられて、二三度迄こそ引退きたり。百騎の者共は、馬をも人をも休めんとて、川を渡して本陣に歸りにけり。城の太郎安からず思ひて、信濃の國の住人笠原平五頼直といふ者を招いていひけるは、僅の勢に大勢が、三箇度迄駈散らされたる事面目なし。當國には御邊をこそ深く頼み奉れ。川を渡し、敵の陣を駈散らして、恥を清め給へかし。平家の見參に入れ奉らんと申しければ、笠原鐙ふんばり弓杖ついて、越後・信濃は、境近き國なれば、傳にも聞き給ひけん、頼直今年五十三、合戰する事廿六度、未だ不覺の名を取らず。但年老け盛過ぎぬれば、力と心と相叶はず、今此仰を蒙むる事面目なり。今

日の先駈して見參に入れんとて、我勢三百餘騎が中に、事に合ふべき兵八十五騎勝り出して、太く高く曲進退の逸物共に選び乘つて、筑摩川をざつと渡して名乘りけり。當國の人々は、或は緣者或は親類、知らぬはよもおはせじ。上野の國の殿原は、見參するは少なけれども、さすが音にも聞き給ふらん。昔は信濃の國の住人、今は牢人、笠原平五賴直といふ者なり。信濃・上野に、我と思はん人々は、押並べて組めや組めやと言懸けて、敵の陣をぞ睨みたる。上野の國の住人高山黨、三百餘騎にて喚きてかく。笠原は八十餘騎にて、三百餘騎を駈散らさんと、中に破入りて、面を振らず散々に戰ふ。高山は大勢にて小勢を取籠め、一人も洩さず討止めんと、透間もあらせず戰ひたり。駈けては引き、引きては駈け、寄せては返し、返しては寄せ、入組み入替へ戰ひける有樣は、風に木の葉を廻らすに似たりけり。程なしと見る程に、高山黨が三百餘騎、九十三騎に討なさる。笠原が八十五騎、四十二騎にぞなりにける。兩方本陣に引退く。源平互に感ぜざる者はなかりけり。中にも笠原、城の太郎が前に進んで、軍の先陣は、いかゞ見給ひぬるやといひければ、資永は、兼ての自

稱今の振舞、誠に一人當千とぞ褒めたりける。又源氏の方より、上野の國の住人西七郎廣助は、火威の鎧に白星の甲着て、白葦毛の馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置いて乘りたりけり。同じき國高山の者共が、笠原の平五に多く討たれたる事を安からず思ひて、五十騎の勢にて、川を渡して控へたり。敵の陣より、十三騎にて進み出づ。大將軍は、赤地の錦の直垂に、黑糸威の鎧に、鍬形打つたる甲着て、連錢葦毛の馬に、金覆輪の鞍置きて乘りたりけり。西の七郎是を見て、よき敵と思ひければ、二段計りに歩ませ寄り、和君は誰ぞ。信濃の國の住人富部の三郎家俊。問ふは誰ぞ。上野の國の住人西の七郎廣助、音にも聞くらん目にも見よ。昔朱雀院の御宇承平に、將門を討平らげて、勸賞を蒙りたりし俵藤太秀郷が八代の末葉、高山黨に西の七郎廣助とは我事なり。家俊ならば引退け。合はぬ敵と嫌ふたり。富部の三郎申しけるは、和君は、軍のあれかし、氏文讀まんと思ひけるか。家俊が祖父下總左衞門の大夫正弘は、鳥羽の院の北面なり。子息左衞門大夫家弘は、保元の亂に、讃岐の院に召されて、仙洞を守護し奉りき。但御方の軍破れて、父正弘は陸奥國へ流され、子息

家弘は討たれ奉りければ、源平の兵の數に嫌はれず。正弘が子に、布施の三郎惟俊、其子に富部の三郎家俊なり。合ふか合はぬか組んで見よとて、十三騎鑣を並べて喚きて懸る。十三騎と五十餘騎と、散々に亂れ合ひて戰ひければ、富部が十三騎、四騎討たれて九騎になる。西の七郎が五十騎、引いつ討たれつ十五騎になる。大將軍は、互に組まん〳〵と寄合せけれども、家の子郎等押隔て〳〵て防ぐ程に、共に隙こそなかりけれ。去程に同僚共が、敵の首取り下人に持たせ、手に捧げたりけるを見て、我も〳〵分捕せんと、寄せ合せ〳〵戰ひけり。軍に隙はなし。兩方の旗差は、射殺され切殺されぬ。主の行方を知らざりけり。其間に、西の七郎と富部の三郎と寄せ合せて、引組んでどうと落ちて、上になり下になり、弓手へ轉び妻手へ轉びて、遙に勝負ぞなかりけり。富部の三郎は、笠原が八十五騎の勢に具して、軍に疲れたりければ、終には西の七郎に討たれけり。爰に富部が郎等に、杵淵の小源太重光といふ者あり。此間主に勘當せられて、召具する事もなければ、城の太郎の催促に、主は越後へ越しけれども、杵淵は信濃にあり。されば今の十三騎にも具せざりけるが、主の

富部、城の四郎の手になつて、軍し給ふと聞き、よそにても主の有樣見奉り、又能き敵取つて、勘當許されんと思ひて、陣を廻つて待ち見けれども、主の旗の見えざりければ、餘りの覺束なさに陣を打廻りて、知りたる者に尋ねければ、西の七郎と戰ひ給ひつるが、旗差は打殺されぬ。富部殿も討たれ給ひぬとこそ聞きつれ。冑も馬も印あるらん。軍場を見給へといふ。杵淵小源太、あな心憂やとて、馳廻つて見ければ、馬は放れて主もなし。首は取られて、敵の鞍の取付にあり。杵淵是を見て歩ませ寄せ、あれにましますは、上野の西の七郎殿と見奉るは僻事か。是は富部殿の郎等に、杵淵の小源太重光と申す者にて候。軍以前に、大事の御使に罷りたりつるが、遲く歸參候ひて、御返事を申さぬに、御首に向ひ奉つて、最後の御返事申さんとて進みければ、荒手の奴に叶はじと思ひて、鞭を打つてぞ逃行きける。汚し七郎殿、目に懸けたる主の敵遁すまじきぞ七郎殿とて、追うて行く。七郎は、我身も馬も弱りたり。杵淵は、馬も我身も疲れねば、二段計り先立ちて逃げけれ共、六七段にて馳詰めて、引組んでどうと落つ。重光大力の剛の者なり。西の七郎を取つて押へて首を搔く。

杵淵重光戰死

杵淵主の首を、敵の鞍の取付より切落し、七郎が首に並べ据ゑて、泣々いひけるは、身に誤なしといへども、人の讒言によりて、御勘當聞きも直させ給はず、又始めて人に仕へて、今參りといはれん事も口惜くて、扨こそ過ぎ候ひつるに、今度軍と承れば、よき敵取つて見參に入れ、御不審をも晴さんとこそ存ずる處に、遲參仕つて先立て奉りぬる事、心憂く覺ゆ。さりとも此樣を御覽ぜば、いか計りかは悅び給はんと、後悔すれども今は力なし。去ながら敵の首は取りぬ。冥途安く思召せ。軍場に披露し申して、やがて御供仕らんとて馬に乘り、二の首を左の手に差上げ、右の手に太刀を拔持ちて、高聲に、敵も味方も是を見よ。西の七郎の手に懸けて、主の富部殿討たれ給ひぬ。郎等に杵淵の小源太重光、主の敵をば斯くこそ取れやとぞ罵りける。西の七郎が家の子郎等、鑣を返して、卅七騎喚いて懸り、重光存ずる處ぞ和殿原とて、只一騎にて敵の中に馳入つて、人をば嫌はず、立切にこそ切廻れ。敵十餘騎切落し、我身も數多手負ひければ、今は叶はじと思ひて、主の御供に、剛の者の自害するを見給へとて、七郎が首をば抛つて、猶富部の三郎が首を抱き、太刀を口に銜みて、馬よ

り飛落ちて、貫かれてぞ死に丶ける。敵も御方も惜まぬ者こそなかりけれ。中にも木曾は、あはれ剛の奴かな。弓矢取る身は、斯樣の者をこそ召使ふべけれと、返す返すぞ惜まれける。兩陣軍に疲れて、暫く互に休み居たり。去程に木曾は、信濃源氏に、井上九郎光基といふ者を招きて、斯樣の馳合の軍は、勢による事なれば、御方の勢は少し。いかにも軍兵數盡きぬと覺ゆ。されば敵を謀り落さん爲に、御邊赤旗赤印付けて、城の太郎が陣に向ひ給へ。さあらば敵共、我御方に勢付きたりとて、荒手の武者を差迎へて、軍せさせよとて休み居べし。其間に白旗白印取替へて駈け給はん處に、義仲川を渡して、北南より挾んで駈立てば、などか追落さゞるべきといひければ、然るべしとて、井上九郎光基は、星名黨を相具して三百餘騎、赤旗俄に作り出して、赤印を白印の上に附隱して、木曾が陣を引下りて、靜々と筑摩川を打渡して、城の太郎が陣に向ふ。案の如く城の太郎は、御方に勢付きたり。餘勢は、定めて後馳にぞ來るらんとて、使を立て丶いひけるは、只今參らる丶人は誰人ぞ。返々神妙。御方の兵、軍に疲れたり。川を渡して、敵の陣に向ひ給へといひければ、光基、馬の

鼻を引返すやうにして、赤印かなぐり棄て、白旗さつと差上げて、叉馬の鼻を引向けて、信濃の國の住人井上九郎光基と名乘りて、喚きて懸る所に、木曾、討洩らされたる勢一千五百餘騎にて、川をさつと渡して、聲を合せて、北南より揉みに揉うてぞ攻めたりける。　城の太郎が兵は、軍に疲れてありけるに、只今の勢を賴みて、物具寛げて休まんとする處に、俄に上下より攻めければ、甲冑を捨て逃ぐるもあり、親子を知らで落つるもあり。　山に追籠められ、水に攻入れられ、爰にては打殺され、彼處にては切殺され、落ちぬ討たれぬせし程に、城の太郎資永は、僅に三百餘騎にて、越後の國府に引退いて、息繼ぎて居たりける。

城資永敗軍

北國の軍兵共木曾に隨ふ事

木曾は謀賢くて、城の太郎を攻落す。　越前の國には、平泉寺長吏齋明・威儀師・稻津の新介。　越中の國には野尻・河上・石黑黨。　加賀の國には、林・富樫が一族を始として、寄合ひ〳〵評定して曰く、源平爭を起して國郡靜ならず。　東西に軍始めて、勇士劒

を鋭にす。就中木曾殿、平家追討の爲に、越中の國府にまします。平家、木曾殿を誅戮の爲に、北國下向と聞ゆ。源氏に力をや合すべき、平家に忠をや盡すべきと、樣々議しけるに、東國は旣に兵衞の佐殿に隨ふと聞ゆ。北國又木曾殿に靡けり。平家の方人等、皆國中に安堵せず。されば定めて召されずらん。召すに隨はずんば、平家に同意とて、討手ぞ向けらるべし。如かじ召されて參らんより、同じくは志ある體にて、急ぎ木曾殿へ參らんと議しければ、此儀尤然るべしとて、三箇國の兵、皆我も我もと馳せ參ず。木曾は、各參上の條神妙々々。但召さぬに參る事大きに不審なり。平家の方人して、義仲を謀らん爲にやあるらん。誠の志ましまさば、二心あらじと起請文を書くべしと宣ひければ、命に從うて起請狀を記し、判形添へて奉る。木曾、今は仔細なしとて、御恩の始なり、取敢ずと宣ひて、信濃駒一疋づつこそ引かれたれ。斯りしかば北陸道の國々、悉く木曾に相隨ひけり。

資永中風して死ぬる事附永茂早馬を立つる事

城資永病死

治承五年七月十四日に改元ありて、養和元年と號す。同じき九月廿日、城の太郎資永が弟に、城の次郎資茂といふ者あり。改名して永茂といひけるが、六波羅へ早馬を立てたり。平家の一門馳せ集りて、永茂が狀を見るにいはく、去ぬる八月廿五日、除目の聞書、九月二日到來して、謹んで披覽の處に、舍兄資永、當國の守に任ず。朝恩の忝きに依つて、明くる三日義仲追討の爲に、五千餘騎の軍士を率して、重ねて信州へ進發せんと出立ちぬる。夜の戌亥の刻に、大中風して病に伏し、腕すくみて思ふ狀をも書き置かず、舌こはつて思ふ事をもいひ置かず。明くる巳の時に悶絶僻地して、周章死失せ候ひ畢んぬ。依つて永茂、兄が餘勢を引率して、信濃へ越えんと欲して、軍兵を催すといへども、資永任國の越後は、木曾押領仕る間、國務に及ばず。北陸の諸國木曾に恐れて、一人も相隨はずとぞ申したる。此狀に驚きて、同じき廿八日、左馬の頭行盛・薩摩の守忠度大將軍として、數千騎の軍兵を相具して、北國へ發向し、源氏と戰ひけるが、平家散々に打落され、都へ引退く。十二月三日、皇嘉門院崩れさせ給ひぬ。御年六十一。是は崇德院の后にておはしましき。御善知識に

は、大原の別所・來迎院の本願坊湛快ぞ參り給ひける。靜に最後めでたくて、終らせ給ひけるぞ貴き。昔の御名殘とて、是計りこそ殘らせ給ひたりけるに、世の習とて哀れなり。同じき六日戌の刻に、鳥羽の院の七の宮、前の天台座主覺快法親王、御年四十四、生者必滅の理、始めて驚くべきならねども、打續き哀れなりける事共なり。去程に今年も過ぎて、養和二年正月一日になりにけり。新玉の年の始の御祝なれども、諒闇に依つて節會もなし。十六日に、蹈歌の節會も行はれず。新院の御忌月なればなり。二月廿三日の夜、天變あり。大白昴星を犯す。是重き妖糵なり。四夷蜂起すべき萌なり。四月十五日、前の權少僧都顯眞、日吉の社にして、一萬部の法花經を讀むに依つて、法皇も御幸なる。五月廿七日に、養和二年を改めて、壽永元年とす。法皇の御氣色に依つて行はれけり。

賴朝・義仲中惡き事

壽永二年三月の頃、兵衞の佐と木曾の冠者と、中惡しき事出來れり。甲斐の源氏武

武田信光頼朝に義仲を讒す

田の太郎信義が子五郎信光が讒言に依つてなり。信光に、最愛の娘のありけるに、木曾が嫡子清水の冠者を、聟に取らんと言遣はしければ、木曾無愛に返事するやうは、娘持ち給ひたらば進らせられよ。清水の冠者に宮仕させん。妻迄の事は、思ひ寄らずといひたりけるを、信光遺恨に思ひけり。抑當家は、是清和帝の後胤、多田の新發意滿仲三代の孫、伊豫の守頼義に三人の子ありき。國家を守らん爲め、家門の繁昌を思ふ故に、三社の神に進らする。所謂太郎義家は八幡大菩薩、次郎義綱は賀茂大明神、三郎義光は新羅權現。木曾は太郎の末、頼義より五代の孫。信光は三郎の末、頼義より又五代なり。信光は甲斐の武田の住人。木曾は信濃木曾に居住せり。一門更に勝劣なし。遺恨なる木曾が言葉なり。世の亂なくば、打越えてこそ恕むべきに、惣事に付けて亡さんと思ひて、兵衛の佐殿に内々申しけるは、木曾義仲、去々年越後の城の太郎資永を打落してより以來、北陸道を打領して、其勢雲霞の如し。今平家誅戮の爲に、上洛の由披露あり。實には小松の大臣の女子の十八になり給ふを、伯父の宗盛養子にして、木曾を聟に取らんと、忍び〳〵に文ども通ずと承る。

斯くして平家と一つになつて、當家を亡さんといふ梟惡の企あり。知召されずもやとぞ申したりける。兵衞の佐、大きに驚き給ひけり。折節又十郎藏人行家は、兵衞の佐には伯父なりければ、大場の三郎景親が、平家の設に作りたる松田亭におはしましけるが、兵衞の佐に申されけるは、行家、平家と八箇度合戰して、二度は勝ち六度は負け、家の子郎等多く討たれぬ。彼等が孝養をも營まん。何にても一箇國相計らひ給へと。佐殿返事には、賴朝は十箇國を靡かす。木曾は信濃・上野の勢を以て、北陸道五箇國を靡かし侍り。御邊も、何れの國にても打靡けて、院内へ申されて、打取の國なりとて知行し給へかし。當時賴朝が國奉行は、思ひ寄らずと申されたり。行家本意なき事に思ひて、兵衞の佐殿賴みては、はかばかしからじ。木曾を賴まんとて、千餘騎の勢を引具して、信濃國へ越えにけり。佐殿是を聞き給ひて、木曾と十郎藏人と一になつて、義仲平家に親しみて、賴朝を背かばゆゝしき大事。人に上手せられぬ先に、木曾を討たんとて、十萬餘騎にて打立ち給ひ、上野と信濃との境なる、臼井坂をぞ越え給ふ。木曾斯くと聞きて、今井・樋口等を招き集めて、此事いかゞあ

るべきと問ふ。口々に申しけるは、今は別の仔細侍るまじ。富部・大井に城構して支へ戰はんに、なじかは軍に負くべき。はや〳〵兵を汰へ給へといふ。木曾暫く案じて、さらぬだに源氏は、父を殺し親類を亡して、世にあらんずる者と、人いふなるに、平家追討の大事を擱きて、兵衞の佐と軍するならば、一門の滅亡他人の嘲、最も恥づべき所とて、木曾は越後へ引退く。兵衞の佐は、人の穩便を存ぜんに、賴朝勝に乘るに及ばずとて、引返し給ひけるが、武藏の國月田川の端青鳥野に陣を取つて、天野の藤内民部遠景・岡崎四郎義眞二人を召して下知し給ひけるは、越後へ越えて木曾にいはんやうは、平家、朝威を背き奉り、佛法を亡すに依つて、源家同姓の輩に仰せて、速に追討すべきの由院宣を下され畢んぬ。尤夜を日に續いで、逆臣を討つて、宸襟を休め奉るべき處に、十郎藏人私の謀叛を起し、賴朝追討の企ありと聞ゆ。然るを彼人に同心して、扶持し置かるゝの條、且は一門の不合、且は平家の嘲なり。但御所存を辨へず。若し異なる仔細なくば、速に十郎藏人を出さるゝか。それさもなくば、清水殿を是へ渡し給へ。父子の儀をなし奉るべし。兩條の內、一も承引なく

んば、兵を差遣して誅し奉るべしと、慥にいふべしとて、使にさゝれたり。若し面に負けて、委しくいはぬ事もぞあるとて、添使に安達の新三郎清經を差遣す。岡崎の四郎・藤内民部、越後に行向つて、兵衞の佐の申さるゝ旨、憚る處なく、風情に過ぎて申したり。木曾此事を聞きて、郎等共を招き集めて評定あり。小室の太郎申しけるは、先度の穩便、今更變改あるべからず。若承引なくんば、東國・北國の大合戰、軍兵數盡きて、朝敵追討に力あるまじ。本より御意趣なき上は、早く御曹司を渡し奉るべきかと申す。今井の四郎兼平申しけるは、兵衞の佐殿と、終に御中好かるまじ。故帶刀の先生殿をば、惡源太殿討ち給ひぬ。意趣定めておはしますらんと、佐殿も思召すらん。幼き御曹司を、他所に置き奉りて、所々にて思召さんも心苦し。平家を討たんといふも、御家門の爲なり。たゞ一度に思召し切りて、兎も角もなり給へと申す。此御曹司と申すは、今井の四郎兼平が妹の腹なりけり。されば木曾が爲には、乳人子を思ひて儲けたる子、生年十一になりける。義仲案じて、小室の太郎は今參り、心も剛に計らひよし。多勢の者にて、中違はじと申す處も理なりと思はれけ

れば、子息の清水を呼んで、己れをば兵衞の佐の子にせんと宣へば遣すなり。相構へて惡まれずして、一方の固ともなれといはれければ、清水の冠者、返事をばせず畏つて、父の前を立ち、母や乳母の方にて、我をば鎌倉へ遣され候。歸り參らん程の形見にとて、笠懸を七番射て見せ奉りければ、女房達、是を最後とや思ひけん、涙ぐみてぞ見合はれける。木曾は、兵衞の佐の使に出合ひ、酒進め馬引きなどして、種々にもてなし、返事には、十郎藏人に意趣おはしましけん事は存知せず。又呼越したる事もなし。打賴み見え來り給ひたれば、只自然の情を存ずる計りに候。誠に平家追討の大事を擱きて、何の遺恨ありてか、謀叛の企あるべき。人の讒言に侍るか、信用に及ぶべからず。又清水の冠者が事は、未だ東西不覺の者に候。仰を蒙つて進らせねば、所存を籠めたるに似たり。召に隨つて是を進らす。不便にこそ思召されめ。義仲斯くて候へば、一方の固には賴もしく思召すべしとて、清水殿をば、岡崎の四郞・藤內民部に渡しけり。兩使畏つて鎌倉へ相具し奉る。宇野太郞行氏とて、淸水の冠者と同年になりけるをぞ、供には具して遣しける。木曾は、宗徒の郞等卅餘人が妻

を召して、淸水の冠者をば、汝等が夫の身代りに、鎌倉へ遣しぬ。若冠者惜しむならば、兵衞の佐、東國の家人催し集めて押寄すべし。兩陣矢先を合せば、共に討死すべし。世の中を鎭めんとの計らひにて、冠者をば、兵衞の佐に渡しぬと宣へば、女房共、皆淚を流しつゝ、あな目出度の御計らひや。斯樣に思召す主君の御恩を忘れ奉つて、妻子悲しとて、何處の浦よりも落ち來り、夫共には面を合せじ、父の社の前渡りせじ、照る日月の下に住まじと、各起請を書きて、木曾殿にぞ進らする。

源氏追討使の事

壽永二年四月十七日、木曾追討の爲に、官兵北國に發向す。それより東國に攻入りて、賴朝を誅すべしと聞えけり。大將軍には、權の亮三位の中將維盛の卿・越前の三位通盛の卿。副將軍には、薩摩の守忠度・參河の守知度・但馬の守經正・淡路の守淸房・侍大將には、越中の前司盛俊・子息太郎判官盛綱・同じく次郎兵衞の尉盛嗣・上野の守忠淸・子息五郎兵衞の尉忠光・惡七兵衞景淸・飛驒の判官景家・子息大夫判官景高・上

野の判官忠經・河内判官秀國・高橋判官長綱・武藏の三郎左衞門有國以下、受領・檢非違使・靭負の尉・兵衞の尉・有官の輩三百四十餘人、武勇に携はる者は、大略數を盡して下し遣す。此外畿内は、山城・大和・攝津・河内・和泉・紀伊の國の兵共、去年より催上されたり。東海道には、遠江より東は參らず。伊賀・伊勢・尾張・參河の輩は參りけり。近江・美濃・飛驒三箇國の兵少々參る。北陸道には、若狹より北の者は參らず。山陰道には、但馬・丹後・因幡・伯耆・出雲・石見、山陽・南海・西海・四國の者共は參らず。西國には、播磨・美作・備前・備中・備後・安藝・周防・長門・豐前・豐後・筑前・筑後・大隅・薩摩、此國々の者共まで、其勢十萬餘騎、大將軍六人、宗徒の侍廿餘人、先陣後陣を定め、我先我先と、思ひ〳〵に駒を早めて下りけり。神功皇后より以來、天下に丞相の合戰廿三箇度なり。十萬餘騎の軍兵の、一方に進む爭は、此度共に七箇度なり。されども大將の、六人まで打立つ事は一度もなし。然るに六人の將軍、十萬餘騎を率して、洛中を出でられければ、異國は知らず我朝には、何者か手向ひすべき。源氏等怨に此度亂を起し、今度ぞ跡方なく亡び終りなんずる。あなゆゝしの事やとぞ、京中の

上下罵りける。六人の大將軍、各一色に裝束して打出で給へり。蜀紅の錦の直垂に、金銀の金物、色々に打くゝみたる鎧着て、對面の爲なれば、甲をば着給はず、大中黑の矢に滋藤の弓持ちて、雪よりも白かりける葦毛の馬に、螺鈿の鞍置きて乘り給へり。合戰の道の出立は、冥途の旅の出立なり。再び歸り參りて、見參に入らん事有難し。今朝面々の暇は申しぬ。大臣殿に、最後の暇申さんとて、六人馬の鑣を並べて、西八條の南庭に列參し給へり。女房男房、各或は御簾すだれをかゝげ、或は緣中門に佇みて見給ひけり。容顏美麗の景色、馬鞍錦繡の有樣は、丹師が筆も及ばじとぞ、上下男女褒美しける。盛俊以下の侍共は馬より下りて、鎧の袖を合せて庭上に氣色せり。斯くの如くの次第の禮儀、良久しく敬ひ屈して、暇申して打出で給ふ處に、白淨衣に立烏帽子着たる老翁六人、梅の楉すはへに卷數附けて各捧げて、六人の大將軍に奉る。門出よしとて、弓を脇に挾みつゝ、各卷數を開いて讀み給ひける。

第一維盛卿　堯雨斜灑　平家平國　頓河俄流　源子失源　嚴島明神より

權の亮三位の中將殿と書かれたり。

第二通盛卿　平家庭上　立二不老門一　源氏蓬苑　放二毒箭鏑一　嚴島明神より

越前の三位殿と書かれたり。

第三忠度朝臣　東海榮花　開二平家園一　嚴島神風　破二源氏家一　嚴島明神より

薩摩の守殿。

第四知度朝臣　平家繁昌　白駒滄レ庭　源氏衰浪　漁翁失レ船　嚴島明神より

參河の守殿。

第五經正朝臣　日本放レ日　平家餘風　太白犯レ星　源氏物怪　嚴島明神より

但馬の守殿。

第六淸房朝臣　平家如レ王　源氏能敬　源氏似レ皷　平家打レ之　嚴島明神より

淡路の守殿。

とぞ侍りける。六人各馬より下りて、再拜し候ひけるぞ目出たき。馬引き給はんとしけるに、翁は化して失せにけり。是は誠の嚴島の明神の、嚴重の御示現、希代の不思議なり。明神是程御託宣の上は、平家繁昌源氏衰滅の條、疑あらじと悅び合へり

けれ。後に聞えけるは、彼嚴島の神主、平家を祈り奉る志、心中に深くして、合戰の門出を祝ひ奉る作事（つくりごと）にてぞありける。譬へば正月元旦元三に、長生殿裏不老門前と祈れ共、齡は日に添へて衰へ、命は忽に止まる。嘉辰令月歡無極と祝へ共、福幸もさまでなく、思ひ歎く事は日々に增すが如し。萬事は皆春の夜の夢なり。諸法は只先世の果報なるべし。祈れ共それにも依らず、祝へ共叶はぬは、是我等が有樣なり。片路を給はりて、權門勢家の正稅年貢、神社佛寺の供料供米、奪ひ取りければ、路次の狼藉斜ならず。在々所々を追捕しければ、家々門々安堵の者なし。近江の湖を隔てゝ、東西より下る。粟津が原・勢多の橋・野路の宿・野洲の川原・鏡山に打向ひ、駒を早むる人もあり。山田・矢ばせの渡・志那・今濱を浦傳ひ、舟に棹す者もあり。西路には大津・三井・片田の浦・比良・高島・木津の宿・今津・海津を打過ぎて、あらちの中山に懸つて、天の熊國境疋壇（ひきた）・三口行越えて、敦賀の津に着きにけり。夫より井河・坂原・木邊山を打登り、新道に懸りて、かへる山迄續きたり。東路には、片山・春の浦・鹽津の宿を打過ぎて、能美越・中河・虎杖崩（いたどり）より、かへる山へぞ打合ひたる。軍兵十

維盛等義仲追討の爲め北國下向

萬餘騎、北國に下向と聞えければ、木曾、我身は越後の國府にあり乍ら、信濃の國の住人仁科の太郎守弘・加賀の國の住人林の六郎光明・倉光の三郎成澄・疋田の次郎俊平・子息小太郎俊弘・近江の國の住人甲賀の入道成覺等を大將として、燧の城へ差遣す。其勢追繼々に、越前の國府・大鹽・脇本・鯖波の宿・柚の尾坂・今城迄ぞ續きたる。陣をば柚の尾の峠に取り、城をば燧に構へたり。平泉寺の長吏齋明、木曾が下知に隨うて、門徒の大衆狩催し、一千餘騎にて、大野郡を打過ぎて、池田越に、燧の城に楯籠る。抑此城といふは、南はあらちの中山を境ひて、虎杖崩・能美山・近江の湖の北の端なり。鹽津・朝妻の濱に續きたり。北は柚の尾坂・藤勝寺・淵谷・木邊峠と一つなり。東はかへる山の麓より、長山遙に重なりて、越の白峯に續きたり。西は海路・今道・木津の浦・三國の湊を境ひたる所なり。海山遠く打廻り、越路遙かに見え渡る。磐石高く聳え上つて、四方に峯を連ねたれば、北陸道第一の城郭なり。かへる山の麓、西は經尾(つねを)と名づけ、東は皷の岡といふ。其間二町には過ぎず、南より北へ流れたる山河あり。日野川と名づく。能美・新道の二の谷川の落合なるに、大木を倒し、柵をか

き、大石を重ねて水を堰止めたれば、彼方此方岡を浸し、今城・柚の尾の大道を、平押にこそ湛へたれ。　水南山の陰を浸して、青くして滉瀁たり。　波西日の光を沈めて、紅にしていんりんたり。　彼無熱池の渚には、金の砂を敷きて、八功徳水を湛へ、昆明池の間には、弘誓の舟を浮めて、八重の波に遊びけり。　燧の城のしつらひは、大石を重ねて水を澱み、大木を横へて流を突籠めたれば、遙に見渡して湖の如し。　舟なくしては渡り難かりければ、平家の軍兵は、能美・新道の境なる岩神山に陣を取る。　源氏は柚の尾坂・皷の岡・燧山に陣を取る。　兩陣海を隔てゝ支へたり。　相去る事三町には過ぎざりけれども、容易く落し難ければ、徒に日數を逐うて評定様々なり。

齋明蟇目を射る附源氏燧が城を落つる事

去程に齋明倩案じけるは、平家は十萬餘騎、木曾は僅に十分が一。　されば軍に負けて、平家に生捕られ、憂目を見んよりも、返忠して平家に力を添へんと、思ふ心ぞ付きにける。　薄き切紙に、細々と狀を書きて、蟇目の中に入れて、平家の陣へ射渡した

燧城陷る

り。平家は、此墓目の鳴らぬ事こそ怪しけれとて、取上げ見れば、中に切紙の文あり。大將の御前に參り、開いて是を見るに、曰く、源平の合戰に依つて、心ならず木曾が爲に催されて、此城に籠りて候。身は源氏に加はりて、心は平家に通ず。此城難所にあらず、谷川を塞いで下に堤を築き、締をかき水を堰止めたれば、東西の山の根に湛へて、海の如くに見ゆれども、誠の淵にあらず。夜に入りて、水に心得たらん足輕共を、東の山の根へ差遣して、締を切り下すならば、山川の習にて、水は程なく早落ち候べし。其後案内者して、後矢仕るべし。是は越前の國平泉寺の長吏齋明が申狀なりとぞ書きたりける。平家大きに悅びて、夜に入りて足輕共を廻して、大石を崩し退け、締を切流しければ、夥しく見えける海なれども、山川なれば、水は程なく落ちにけり。さる程に四月廿七日に、平家十萬餘騎、鬨を作つて押寄せたり。源氏鬨を合せて戰ふ處に、齋明忽に心替して、一千餘騎を引分けて平家に付き、後矢を射る。源氏怺へずして引退き、越前の國河上の城に楯籠る。平家は齋明を先として、河上の城へ押寄す。源氏暫し支へて戰ひけれども、兵糧なかりければ、爰を引いて

三條野に陣を取る。平家勝に乘つて押寄する。兩陣鬨の聲を合せず、源氏は寄手の鬨の聲を待兼ねたり。加賀の國の住人林の六郎光明が嫡子に、今城寺の太郎光平といふ者あり。褐の直垂に、袖をば紺地の錦を付けたり。紫糸威の鎧に、丈中黑の矢首高に負ひ、重藤の弓眞中取り、八寸に餘りたる大栗毛といふ馬に、白覆輪の鞍置きてぞ乘りたりける。此馬極めて口强くして、國中には乘從へる者なし。林の六郎光明が郎等に、六動の太郎光景といふ者計りぞ乘從へける。今度も光景を乘すべかりけるを、光平父に逢うて、今度は大栗毛に乘つて軍に出でんといふ。父光明此言を聞きて、弓取は、口の强き馬に乘りては、必ず犬死する事あり。無用なる間、光景を乘せよといひけれども、光平は弓矢取る身は、軍場こそ晴にて候へ。此日頃勞り飼ひ置きて、此大事に乘らでは、いつか乘り候べきとて、父が諫にも隨はず、押して乘つて打出でつゝ、皆紅の扇に、月出したるを開き使ひて、坂の上の利仁公より六代の孫、賀州の住人林の六郎光明が嫡子、今城寺の太郎光平といふ者なり。我と思はん平家の侍共、押並べて組めや〳〵といふ。平家是を聞きて時を作る。源氏時の聲

を合せたり。源平の馬共、時の聲に驚いて、馳せ廻らんとする事夥し。中にも光平が大栗毛、國中第一の口强き馬なれば、引けども〳〵留らず。今は叶はじとて、手綱をくれてぞ馳せ入りたる。平家馬にあたらじとて、左右へさつとぞ引きたりける。此馬を馬も究竟の逸物、主もいみじく乘りたれば、敵も御方も、軍の事をば擱きて、此馬をこそ賞めたりけれ。獅子奮迅の振舞、龍馬醉象の有樣、穆王八疋の天馬の駒、斯くやとぞ見えにける。爰に平家の侍、武藏の國の住人長井の齋藤別當實盛進み出でて申しけるは、加賀の國には、誠に此者共こそあるらめ。彼も齋藤我も齋藤、共に利仁公の末葉なり。恥ある者は、名ある者に合うてこそ、死ぬるとも死なめ。況や一門なり。押並べて組まばやと思ひ、手綱掻繰りて進み寄り、同じ流れの齋藤に、別當實盛と名乘つて、弓を捨て太刀の鞘を外して打組む處に、馬の間無下に近うて、打物ちがふべきやうなければ、押並べて引組んで、馬の間へどうと落ち、上になり下になり、二轉び三轉びしたりけれども、光平は若く實盛は老いたり。既に別當危く見えける處に、郎等二人落合ひて、光平が首を切る。光平が郎等は、押隔てられて、一人も續か

ざりければ、犬死して失せにけり。馬は敵の中より走り歸りけれども、留むる者はなし。親がいひける言、少しも違はざりけり。父の命に相隨ひたりせば、よも犬死はせじと、人皆是を惜みけり。源氏は矢合に光平を討たして、三條野を引く。平家は又續いて攻め懸けゝれば、源氏は引退いて、加賀の國篠原の宿に陣を取る、平家は越前の國長畝の城に籠つて、暫く息を休めけり。越中の國の住人石黑の太郎光弘・高楯の次郎光延・泉の三郎・福滿五郎・千國の太郎實高・向田の次郎村高・水巻四郎安高・同じく小太郎安經・中村太郎忠直・福田の次郎範高・吉田の四郎・賀茂島の七郎・宮崎の太郎・南保次郎・入善小太郎など評定しけるは、抑此事いかゞあるべき。源氏は越前の國燧が城を落されて、既に加賀の國へ入ると聞く。木曾殿は、北國の大將として攻上り給ふなるが、越後の國府に坐しますなり。平家に馳向うて、一軍して引くべきか。只直に木曾殿へ參るべきかといふ。吉田の四郎申しけるは、我等は無勢なり。平家は十萬騎と聞ゆ。中々小勢の分限、見えられても惡しかりなん。急ぎ木曾殿へ馳せ參り、大勢の前をかくべきやらんといふ。石黑太郎申しけるは、弓矢取

る身はさる事なし。大勢小勢をばいふべからず。いかにも御方を後に當て、敵に向ふは武者の法なり。軍せずして參りたらば、定めて尋ね給はんずらん。勢はいくら程ぞ。陣をば何處に取りたるぞ。御方には誰か手負ひ討たれたるやと問はれん時は、いかゞ陳じ申すべきなれば、大將軍の思ひ給はん事も言甲斐なし。又東國の聞えも然るべからず。さらば先づ平家に打向うて、敵をも一矢射、我等も一矢射られて、疵を蒙りて參りたらんこそ、面目なれといひければ、此儀然るべし。さらば平家に向へとて、石黑・宮崎を先として、五百餘騎こそ打立ちけれ。

北國所々の軍附安宅合戰の事

斯りしかば五月二日、平家は越前の國を打隨へ、長畝の城を立ち、齋明を先として、加賀の國へ亂れ入る。源氏は、篠原に城郭を構へてありけれども、大勢打向ひければ、怺へずして、佐見・白江・成合の池打ち過ぎて、安宅の渡り・住吉の濱に引限いて陣を取る。平家勝に乘つて、隙をあらすな者共とて攻懸りたり。其勢山野に充滿せり。

先陣は安宅に着けば、後陣は黑崎・橋立・追鹽・鹽越・熊坂山・蓮か浦・手山が原まで連なりたり。權の亮三位の中將維盛以下、宗徒の人々一萬餘騎、篠原の宿に控へたり。越中・加賀兩國の兵共、安宅の渡りに馳せ集り、橋板三間引落し。城を構へ垣楯をかき、平家を待つ處に、越中の前司盛俊が一黨五千餘騎、安宅の渡りに押寄せ見れば、橋板は引きたり水は深し。南の岸に控へたり。源平川を隔てゝ、只遠矢に射る。日數を經るとも、落すべき樣なし。盛俊、子息の盛綱を招いて、あの渚は、波に碾れて淺かるらん。者を打下して見よといふ。盛綱即打下つて、馬を打入れて見れば、實にも流るゝ砂礫、打波に碾れて、思ひしより淺かりけり。打返して、水は淺く侍りけり。渡され候へと申せば、盛俊打浸し〳〵渡す。源氏是を見て、あはや平家は渚を渡すぞ。陸へ上げずして、川中に射浸せ者共とて、一千餘騎鏃を並べて引取り、差詰め散々に射る。平家の先陣三百餘騎、河中に射浸されて、海の中へ押流さる。水卷の四郎安高此樣を見て、父子六騎勇み喚きて、馬を水に打入れて、散々に戰ふ。飛驒の守景家が一黨の中に取籠められ、三騎は討たれ、三騎は手負うて引退く。石黑の太

郎兄弟五騎、馬の鼻を並べて、太腹の間打入れて、散々に射る。越中の前司盛俊、大の中差取つて番ひ、能引きて兵と射る。其矢石黒太郎にしたゝかに當つて、暫しも堪らず、水の上にざぶと落つ。舍弟福滿五郎打寄せて、水の中より引上げて肩に引懸け、朴の木坂越に石黑に歸つて、灸治よくして、又十日計りあつて、都波の軍に合ひたりけるこそ、ゆゝしき剛の者とは覺えたれ。林・富樫・下田・倉光も、大勢に駈立てられて、安宅の城をも引退く。加賀の國の住人井家次郎範方、十七騎の勢にて、根上りの松の程迄返し合せ〳〵、十一度迄散々に戰ひけるが、大勢に取籠められて、範方終に討たれにけり。根上りの松といふ所は、東は沼、西は海、道狹くして分内なし。源氏數を盡して亡ぶべかりけるに、井家次郎返し合せ〳〵戰ひける間に、希有にして落延びぬ。富樫の次郎家經は、黑糸威の鎧に、鴾毛の馬にぞ乘りたりける。卅餘騎にて落ちけるが、郎等共に防矢射させて、引返し〳〵戰ひける程に、馬の太腹を射させて引落さる。富樫が外戚の甥に、安江の次郎盛高といふ者あり。續いて落ちけるが、家經是を見て、いかに安江殿、家經馬を射させたり。乘りつべき馬や侍るとい

へば、名をば誰とも指さず、四五騎ありける郎等に向ひて、其馬進らせよとて落行きけり。今參りに、新三郎家員といふ者、我乘りたる馬は、鹿毛なる馬の逸物なりけるが、飛下りて、後の奉公に立ち給ふべしとて、富樫の介を掻乘せたりければ、北を指して落行きぬ。家員が馬なくば、家經危ふくぞ見えける。源氏は安宅の湊より落ちて、今湊・藤塚・小河・濱倉・部雙川打過ぎて、大野の庄に陣を取る。平家は林・富樫が館に打入れて、暫く爰に休み居たり。是より飛脚を都へ立つ。平家の一門馳せ集つて狀を開くに、曰く、四月廿七日に、越前の國燧の城にて、當國平泉寺の長吏齋明、降人に參ず。即ち先陣を申請けて、案內者して、當國の輩を打隨へ、五月二日、加賀の國へ亂れ入る處に、源氏の軍兵、安宅の渡に城郭を構ふと雖、彼をも攻落し畢んぬ。林・富樫が二箇所の城を打落しぬれば、北國は、今は手の內と思召さるべしと申上げたりければ、平家の一門大に悅びたりけり。源氏は、木曾殿へ早馬を立て、燧の城をば、齋明が返忠にて攻落され、所所にて討負け、加賀の國へ引き、安宅の城にて、御方の兵多く討たれて、林・富樫が黨

類も打落されぬ。急ぎ勢を付けらるべしとぞ申遣しける。齋明は、黑糸威の腹卷に、長刀脇に挾みて、三位の中將の前に跪いて申しけるは、木曾は此間、越後の國府にと承る。味方軍に勝つて、越前・加賀を隨へさせ給ひ候ひぬれば、敵早馬立てゝ打上り侍らんと存候。越中・越後の境に、寒原(かんばら)といふ難所あり。敵彼を越えて、越中へ入りなば、味方の爲にゆゝしき御大事。彼を切塞いで候ひなば、木曾が爲には大事にて侍るべし。されば急ぎ官兵を差遣して、寒原を切塞ぎて、越中の國を隨へばやと申す。何事も北國の事は、齋明が計らひなりとて、越中の前司に仰す。盛俊五千餘騎を引率して、加賀と越中の境なる礪並山・倶梨伽羅が峯を打越えて、越中の國小矢部川原を打過ぎて、般若野にこそ陣を取れ。木曾早馬に驚きて、今井の四郎に仰せて、六千餘騎を相具して、越中の國へ差遣す。兼平は鬼臥・寒原打過ぎて、四十八箇瀬を渡して、越中の國婦負の郡御服山に陣を取る。

源平軍物語卷第六終

源平軍物語卷第七

般若野軍の事

般若野合戰

五月八日卯の刻に、源氏六千餘騎、白旗卅流差上げて、喚き叫んで般若野に押寄せたり。平家も時を合せて、散々に戰ふ。二百騎三百騎五十騎百騎、出替へ入違ひて、寄せつ返しつ、切りつ切られつ、息をも繼がせず馬をも休めず、未の刻迄戰うたり。夕に及んで、平家防ぎ兼ねて引退く。源氏勝に乘つて追掛けたり。平家は礪並の郡、小矢部の河原迄返し合せ〳〵、散々に戰ひけるが、落ちぬ討たれぬ。二千餘騎は失せにけり。殘る三千餘騎、夜に入りて、礪並山・倶梨伽羅が峯を引越えて、加賀の國へぞ歸りにける。

平家礪並・志雖山二手に配分して寄する事

平家一所に集つて、木曾追討の爲に、十萬餘騎を二手に分けて、越中の國へ入りて、國中の兵を攻隨へんと評定す。搦手の大將軍には、三河守知度・皇后宮佐經正・淡路守淸房。侍には越中の前司盛俊・上總守忠淸・飛驒守景家、三萬餘騎を相具して、志雄の山へこそ向ひけれ。彼山は、能登・加賀・越中三箇國の境なり。能登路白生を打過ぎて、日角・見室尾・靑崎・大野・德藏の宮の腰まで續きたり。追手の大將軍には、三位の中將維盛・越前三位通盛・薩摩守忠度。侍には上總の判官忠綱・河內の判官季國・高橋の判官長綱・越中權頭範高が一黨、五千餘騎を先として、都合七萬餘騎は、加賀と越中の境なる倶梨伽羅山へぞ向ひける。加賀の國井家津・播多・荒井・閑野・竹橋・大庭・崎田・森本まで續きたり。追手搦手十萬餘騎、赤旗赤符鹽風に吹かれて、浦々は錦をさらし、綠の梢を隱して、山々は紅を染めなせり。平家旣に倶梨伽羅・志雄の山二手に分つて下ると聞えければ、木曾は越後の國府を立ちて、越中へ入る。國々の軍

兵馳せ集まつて木曾に加はる。越前には本庄・樋口・齋藤が一族。加賀の國には林・富樫・井家津・播多。能登の國には土田・闕・日置。越中の國には野尻・河上・石黑・宮崎參りけり。

義仲軍評議の事

木曾は六動寺の國府より打上りて、般若野の御河端へ着きにけり。是にて軍の談議あり。平家は大勢と聞く。味方は無勢なり。平家礪並山を越して、松永邊・柳原・小矢部の河原へ打出でなば、馳合の軍なるべし。馳合の戰は、必勢による事なれば、ゆゆしき大事なり。されば先づ義仲、倶梨伽羅山の北の麓に陣を取らんと思ふ。其故は、源氏礪並の郡倶梨伽羅山の麓に陣を取るならば、平家はあはや敵向うたりとて、山の峠を去つて、猿の馬場の邊に控へんずらん。其時義仲搦手へ廻り濟して、追手搦手北南より押合せて、平家を倶梨伽羅の南谷へ攻落さんと思ふなり。さらば急ぎ馳向うて陣を取れとて、信濃の國の住人星名黨を差遣す。巳時計りに、礪並山の北

の麓に着きて、日宮林に旗卅流打立てたり。倶梨伽羅山といふは、加賀と越中との境なり。嶺に一字の伽藍あり。昔越の大德、諸國修行し給ひしに、倶梨伽羅明王を行ひ給ひたりしかば、其よりして此山をくりから嶽とも申すとかや。越中の國礪並の內なれば、礪並山とも申すなり。谷深うして山高く、嶮難にして道細し。馬も人も行違ふ事容易すからず。

源氏軍配分の事

五月十一日に、平家十萬餘騎を二手に分けて、礪並・志雄二の道より、越中の國へ打入ると聞えければ、木曾乳人子の今井の四郎を召して、義仲、信濃國横田河原の軍には、二三千餘騎にて、四萬餘騎をも追落しき。是は敵十萬餘騎、味方五萬餘騎、一人して敵二人に向ふ。彼等は馳疲れたる京家西國の駈武者(かりむしや)なり。是は在國案內の荒手なり。思へば安平なり。吉例に任せて、初は七手に分けて、後は一に寄合せて、揉みに揉うて南の谷に追落すべしとて、方々手分をしたりける。一手は十郎藏人行家・

木曾義仲
平知度對陣

足利矢田判官代義兼・栖の六郎親忠・宇野彌平四郎行平・成合・落合を始として、然るべき者共一萬餘騎、志雄の山の搦手へ差遣す。一手は根井小彌太を大將として二千餘騎、越中の國の住人盤谷の次郎を案內者に付けられて、鷲島を打廻り、松永の西の外れ小耳入を通つて、鷲尾へ打上り、彌勒山を引廻らす。一手は今井の四郎兼平大將として二千餘騎、越中國の住人石黑の太郎光弘・栖の次郎光延、案內者に打具して、松永の日宮林へ差遣す。一手は樋口の次郎兼光を大將にて二千餘騎、加賀國の住人林・富樫を打具して、笠野・富田を打廻り、竹橋の搦手にこそ向ひけれ。一手は信濃國の住人余田次郎・圓子の小中太・諏訪の三郎・小林の次郎・小室の太郎忠兼・同じき小太郎眞光を大將にて三千餘騎、越中の國の住人宮崎の太郎・向田の荒次郎兄弟二人を案內者にて、安樂寺を通り、金峯坂を打上り、北黑坂を引廻し、倶梨伽羅の峠の西の外れ、葎原へ差遣す。一手は巴女を大將にて一千餘騎、越中の國の住人水卷の四郎・同じく小太郎を案內者にて、鷲嶽の許へ差向ひけり。此巴といふ女は、木曾中三權の頭が娘なり。心も剛に力も强し。弓矢取つても打物取つてもすくやかなり。

荒馬乘の上手。さりし養和元年信濃の國横田の軍にも、向ふ敵七騎討取つて、高名したりければ、何處へも召具して、一方の大將には遣しけり。一手は木曾三萬餘騎にて、小矢部河を打渡し、埴生の庄に陣を取り、勢のかさを見せんとて、胡頽子原・柳原に引穩す、平家は礪並山・くりからの峯を打越えて、坂を下りに東に歩ませつゝ、遙に麓を見渡せば、日宮林に白旗四五十流打立てたり。あはや源氏は寄せたるは。此山四方岩石なり。敵左右なくよも寄せじ。能登路・志雄の山をば差堅めぬ。西は味方の勢なり。東は口一方の所なり。高く嶮うして道狹ければ、源氏に矢種を射盡させよとて、倶梨伽羅の堂・國見・猿が馬場の塔橋の邊に控へて、赤旗山々岡々に立並べたれば、龍田山の秋の暮、時雨に染めたる紅葉葉も、斯くやと覺えて面白し。源氏の謀に少しも違はず、平家控へて左右なく寄せず。源平陣を合せて、二町には過ぎざりけり。

礪並山合戰の事

礪並山合戰

木曾は、礪並山・黒坂の北の麓、埴生社八幡林より、松永・柳原を後にして、黒坂口に、南に向つて陣を取る。平家は倶梨伽羅が峠・猿の馬場・塔の橋より始めて、是も黒坂口に進み下つて、北に向うて陣を取る。兩陣相隔たる事、五六段には過ぎず。互に楯を突向へたり。木曾は勢を待ち得ても、合戰をば急がず。平家の方にも、源氏の樣を守つて、進み戰ふ事なし。鬨の聲三ヶ度合せて、後は兩陣靜り返つて居たりける。良暫しあつて、源氏の陣より、精兵十五騎を楯の面に出して、十五の表矢(うはや)の鏑を同音に射さすれば、平家も十五騎を出し合せて、是も十五の鏑を射返す。互に勝負せんと進みけれども、陣より制して招きければ、源氏は楯の内に入る。源氏入れば、平家も同じく入りにけり。廿騎出して射さすれば、又廿騎を出し合せて會釋す。卅騎五十騎出合せ〳〵射けれども、互に勝負はなし。斯くあやつり日を暮らして夜に入りて、後の山より搦手を待つて、追手搦手押寄せて、南の谷へ追落さんと計りけり。平家是をば知らずして、あへしらふこそ無慙なれ。五月十一日の夜半にもなりにけり。五月の空の癖なれば、朧に照らす月影、夏山の木の下闇き細道に、源平互に見え

分かず、平家の方には、源氏若し夜討にする事もこそあれ。打解け寢ぬべからずと催しけれども、草臥れたる武者なれば、鎧の袖を片敷き、甲の鉢を枕とせり。源氏は追手搦手樣々に用意したりける中に、樋口次郎兼光は、搦手に廻りたりけるが、三千餘騎其中に、太皷・法螺の貝、千計りこそ籠めたりけれ。木曾は追手に寄せけるが、牛四五百疋取集めて、角に續松結付けて、夜の更くるをぞ相待ちける。去程に樋口次郎、林・富樫を打具して、中山を打上り、葎原へ押寄せたり。根井小彌太二千餘騎、今井の四郎二千餘騎、小室の太郎三千餘騎、巴女一千餘騎、五手が一手に寄せ合せ一萬餘騎、北黑坂・南黑坂引廻し、鬨を作り太皷を打ち法螺を吹き、木の本萱の本を打はためき、蟇目鏑を射上げて、とゞめき懸りたれば、山彥答へて、幾千萬の勢とも覺えざりけるに、木曾殿、すはや搦手は廻しける。鬨を合せよとて、四五百の牛の角に松明を點して、平家の陣へ追入る。胡頽子原・柳原・上野邊に控へたる軍兵三萬餘騎、鬨を合せ喚ひ叫ぶ。黑坂表へ押寄する前後四萬餘騎が鬨の聲、山も崩れ岩も碎くらんと夥し。道は狹し山は高し。我先々々と進む兵は多し。馬人共に押しに押され

て、矢をはげ弓を引くに及ばず、打物は鞘外し兼ねたり。追手は、搦手に押合せんと攻上る。搦手は、追手と一にならんと喚ひ叫ぶ。平家は、兩方の中に取籠められたり。軍は明日ぞあらんずらんと、取延べて思ひける上、本より夜半の事なるに、俄に鬨を作り懸けたれば、こは如何せんと、東西を失ひ周章騷ぎ、弓取る者は矢を取らず、矢をば負へ共弓を忘れ、冑を着て甲を着ず、太刀一つには、二人三人取付き、弓一張には、四五人摑み付きけり。馬には、倒に乘つて後へあかゞせ、或は長刀を逆に突いて、自ら足を突切りて、立上らざる者もありければ、踏殺され蹶殺さるゝ類多し。主の馬を取つては主を忘れ、親の物具を着ては親を顧みず、只我先々にと爭へども、西は搦手なり、東は追手なり。北は岩石高うして、上るべき樣なし。南は深き谷なり、下すべき便なし。闇さは闇し案內は知らず、いかゞすべきと方角を失へり。此山は、左右は極めて惡所なり。後は加賀御方なり。三方は心安く思ひつるに、後陣より敵の寄せける怪しさよと思ひければ、只いふ事とては、打破つて加賀の國へ引けや者共々々と呼ばはりけれ共、搦手雲霞の如くなり、追手上が上に攻め重ねけれ

ば、先陣後陣に押除されて、道より南の谷へ下る。爰に不思議ぞありける。白裝束したる人卅騎計り、南黑坂の谷へ向きて落せ殿原、過すな〳〵とて、深き谷へ打入れけれ。平家是を見て五百騎、續いて落したりければ、後陣の大勢是を見て、落足がよければこそ、先陣も引返さゞらめとて、劣らじ〳〵と、父落せば子も落す、主落せば郎等も落す。馬には人、人には馬、上が上へ馳重なつて、平家一萬八千餘騎、十餘丈の倶梨伽羅が谷を馳埋みける。たま〳〵谷を遁るゝ者は、兵杖を免れず。兵杖を遁るゝ者は、皆深谷へ落入りけれ。前に落す者は、今落す者に踏殺され、今落す者は、後に落す者に押殺さる。斯樣にしては死にけれ共、大勢の傾き立ちぬる習にて、敵と組んで死なんといふ者は一人もなし。抑倶梨伽羅が谷といふは、黑坂山の峠・猿の馬場の東にあり。其谷の中心に、十餘丈の岩瀧あり。千歲瀧といふ。彼瀧の左右の岸より、杼の木多く生ひたり。谷深うして梢高し。其木半過ぐる程こそ馳埋みたれ。澗河（たにがは）血を流し、死骸岡をなせり。無慙といふも愚なり。されば彼谷の邊には、矢尻・古刀・甲の鉢・鎧のさね、岸の傍木の本に殘り、枯骨谷に滿々（みち〳〵）て、今の世までもあ

りと聞ゆ。さてこそ異名には、地獄谷とも名付け、又馳籠の谷とも申しける。卅人計りの白裝束と見えけるは、埴生の新八幡の御計らひにやと、後こそ思ひ合せける。去程に夜明け、日出づる程になりにけり。十郎藏人行家に、志雄の軍負色に見えければ、越中の前司盛俊、勝に乘つて攻戰ふ。木曾、礪並山を打破り、四萬餘騎を引率して、志雄山へ向はれける。斯る所に參河守知度は、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧に、黑鹿毛なる馬に乘つて、西の山の麓を北に向つて、五十餘騎を相具して、聲を揚げ鞭を打つて、敵の中へ駈入りければ、右兵衞の佐爲盛、魚綾の直垂に、萌黄匂ひの鎧に、連錢葦毛の馬に乘つて、同じく續いて駈入りけり。此兩人共に容貌優美なりける上、鎧の毛直垂の色、日の光に映じて、輝く計りに見えければ、義仲是を見て、今度の大將軍と覺えたり。餘すな者共とて、紺地の錦の直垂に、黑糸威の鎧に、黑き馬にぞ乘つたりける。眉の毛逆に上りて、目の尻悉く裂けたり。其體等倫に異なり。知度朝二百餘騎を率して、北の山の上より落し合せて、押圍み取籠めて戰ひけり。知度朝臣は馬を射させ、下立ちたりけるを、岡田の冠者親義落合ひたり。知度太刀を拔い

平知度爲盛討たる

て、甲の鉢を打ちたりければ、甲脱けて落ちにけり。二の太刀に、首打落しにけり。同じく太郎重義、續いて落重なる。知度朝臣の隨兵廿餘騎折重なつて、大將を討たせじと、中に隔たらんとす。親義が郎等卅餘騎、重義を助けんとて落合ひつゝ、互に戰ひけり。太刀の打違へる音耳を驚し、火の出づる事電光に似たり。爰にて源平兩氏の兵、數を盡して討たれにけり。知度朝臣は遁れ難かりければ、鎧の引合切捨てつゝ、自害して伏しにけり。右兵衞の佐爲盛は、岡田の小次郎久義に組んで、木曾が郎等樋口兼光に首取られたり。伊勢の國の住人館の太郎貞康は、八十餘騎にて控へたり。貞康が叔父小坂の三郎宗綱といふ者あり。名を得たる兵なり。貞康に申しけるは、前陣既に破れ、後陣は又圍まれぬ。宗綱齡既に七旬、命旦暮にあり。戰ひて死ぬるは、兵の法なりといひければ、貞康答へけるは、今度の合戰、官軍は十萬騎、逆徒は五萬騎。然るに軍を敗られて、生きて歸つて、面を人に守られん事、恥の中の恥なり。今示し給ふ趣、日來の本意なりとて、三ヶ度鬨を作つて、伊勢の國の住人館の太郎貞康と乘り、敵の中に懸入り、宗綱を始として、八十餘騎の輩、懸並べ〳〵、組ん

で落ち、差違へてぞ死にゝける。貞康は、太見の七郎光能に組んで、互に討たれけり。八十餘人の輩、敵を得ぬはなかりけり。源氏の兵も、貞康が黨に多く討たれにける。越中の前司盛俊には、追手破れなん上は力なしとて、盛俊是より引返す。平家礪並山を落されて、加賀の國宮の腰佐良が嶽の濱に陣を取り、旗を上げよとて、佐良が嶽の山に、赤旗少々差上げたり。谷々に討殘されたる兵共、五騎十騎廿騎馳集まる。盛俊も、軍兵引率して參りたれば、程なく大勢になりにけり。源氏は左右なく追駈けず、押違へて陸地に懸りて、加賀の國平岡野の木立林に陣を取つて、白旗を揚げたり。源平兩陣に、白旗赤旗立ちたれども、霞を隔てゝ遙なり。五月廿五日の事なり。源平互に馬に草飼ひ、兵糧使ひなんどしてありける。平家は、源氏の草刈三人搦捕りて、軍の謀を問ふ。下蔣なれども、相撲も我方とて、跡形なき事共申して、平家を威して申しけるは、源氏は夜に入りて寄せらるべきとて、内々はひしめかれ候ひつるなりと申す。やゝ斯程に雨降り風吹いて闇き夜半には、いかにして寄すべきぞ。謀をば何と構へたるぞと問ひければ、あの東に見え候森を、木立林と申し、中に一の

板堂あり。彼を破つて平足駄（ひらあしだ）といふ物に作つて、松明を拵へ、すぐ道に懸りて押寄せて、夜討にせんとこそ犇き侍りつれ。斯様に雨風の事をば、いかゞせんと申す人も候ひつるを、夜討といふは、思懸なき時こそよけれ。敵の存知たらんはゆゝしき大事なり。是は然るべき折節なんど、定評候ひつるなり。御用心あるべきにて候といふ。平家此事を聞きて騒ぎ合へり。三位の中将仰せけるは、成合の手に懸りて、安宅の渡の橋を引きて、靜に源氏を待つべかりつるものをと宣へば、侍共心弱く思ひて、我先々にと、藤塚・今湊・安宅を指してぞ落行きける。斯りければ三位の中將も落ち給ひにけり。五月廿五日の夜半なり。さらぬだに五月の空はいぶせきに、降る雨は車軸の如く、吹風は濱の砂を上げて、岸打つ波に驚きては、敵の寄するかと疑はれ、松吹く風を聞きては、鬨の聲かと誤たる。甲冑もしほれつゝ、駒に任せて行く程に、小川大行事の洪水に、先陣流るれども、後陣是を助けず、後陣沈めども、先陣是を顧みず。弱き馬疲れたる人なれば、其夜の中に一千餘騎、水に溺れて失せにけり。無慙といふも愚なり。明くれば廿六日、安宅の湊に着き集まる。橋引き掻楯を

かき陣を取る。爰にて日數を經る間に、或は水に流れたる兄弟、或は敵に討たれたる一族、永き別れを歎きつゝ、悲みの涙を流しける。

源平安宅合戰の事

源氏倶梨伽羅・志雄の山、追手搦手の大將軍一になり、五萬餘騎引具して、六月一日安宅の渡に押寄せたり。平家は橋を引きたり、水は濁りて底見えず。源氏も左右なく渡らずして、北の端に控へたり。越中の國の住人石黑・宮崎申しけるは、我等先に城構へて待ちし時は、平家は、渚をこそ渡して候ひしかば、案内者を以て、渚の瀨踏をして御覽候へかしと申しければ、木曾は加賀の國の住人林の六郎を召して、汝は當國の住人なり。川の案內知りたるらん。瀨踏仕れと仰せける。光明仰承つて、能き馬十疋揃へ、手綱結懸けて追入れたり。鞍爪力革をば過ぎざりけり。木曾殿、河は淺かりけり。渡せ者共〳〵と下知しければ、信濃には、今井・樋口・楯・根井・宇野・望月・諏訪上下。越中には、石黑・宮崎・向田・水卷・南保・高楯・福田・賀茂・島等。加賀の國に

は林・富樫・下田・倉光等五百餘騎、曳聲出して打浸て〳〵さつと渡し、南の陸に控へたり。瀨踏の馬共、平家の陣に馳入りたりければ、源氏が落つるやらん、鞍置き馬共迷ひ來れり。我取つて乘らん〳〵と、面々に追步む。畠山の庄司重能・小山田の別當有重申しけるは、是は落人の馬にはあらず、河の瀨踏の馬なるべし。敵は旣に近付きたるにこそ。重能・有重見て參らんとて、兄弟二人三百餘騎を引具して、安宅の湊に進む所に、案の如く河の南の端に、兵多く控へたり。畠山は、平家へ使者を立て、源氏は旣に湊を渡して候。先陣は重能仕候べし。若き人々に、軍能くせよと仰せ候べしとぞ申しける。木曾、樋口を召して、爰に赤旗三旒四旒差上げたるは、誰なるらんと問へば、是は武藏の畠山と覺え候と申す。何として見知りたるぞと問へば、兼光は、武藏へ時々越え候ひし間、畠山の旗をば見知つて候と申す。此勢何程あるらんと問ふ。三百騎は候らんと申す。木曾宣ひけるは、東國には、畠山こそ棟人の者よ。高見の王より八代の後胤、村岡五郎重門より四代の孫。能き敵ぞ。是は馳合の軍なるべし。敵も味方も、一手々々押寄せ〳〵戰ふべし。先づ畠山には、兼光先陣

代に傳へぬべし。人な寄せそ。勝負は二人といひければ、行親仔細なきとて切合ひたり。兩人よき所なれば、源平人をば寄せざりけり。丁と切れば、はたと合せ、はたと切れば、丁と合す。一時が程戰ひけるに、景高鋼金より太刀打折つて、白砂に落つ。行親いひけるは、爰を切るべき事なれども、互に組んで勝負なりとて、太刀を捨てゝぞ組んだりける。根井は四十計りの男なり。景高は廿五なり。上になり下になり、弓手へ轉び妻手へ轉ぶ。根井終に上になり、景高を押へて切りにけり。敵も味方も惜みつゝ、各涙を流しけり。七番權の亮三位の中將維盛已下、宗徒の大將一味同心に三萬餘騎馳出でたり。木曾又轡を並べて押合せて、互に差詰め〳〵射るもあり、馳合せ〳〵切るもあり。斯くて安宅の城にて、暫し支へて戰ひけれども、平家負軍になりければ、引いて落つ。源氏勝に乘つて、續いて追ふ。長並・一松・成合迄ぞ攻付けたる。先立つ者こそ助かりけれども、返合する者の、遁るゝはなかりけり。

平家敗軍

成合の軍附俣野五郎并長綱亡ぶる事

去程に成合にて、平家又返合せて暫し戰ふ。西陣亂れ合ひて、白旗赤旗相交へ、天に飜る事夥し。馬の馳違ふ音矢叫の聲、雲も響き地も動くらんと覺えたり。蹴立の埃空に滿ちて、朝霧の立つが如くなり。平家の陣より、武者一人進み出でていひけるは、去ぬる治承の頃、石橋の戰に、右兵衛の佐殿と合戰したりし大場の三郎景親が舍弟俣野の五郎景尙と名乘りて、堅ざま横ざま、敵も嫌はず散々に戰ひけり。木曾は、恥ある敵ぞ。餘すなといひければ、我も〳〵と馳籠みたり。景尙、向ふ者共十三騎討取つて、痛手負ひければ、馬より飛下り、腹掻切つて伏しにけり。平家の侍に、高橋判官長綱は、練色の魚綾の直垂に、黑糸威の鎧着て、鹿毛なる馬に乘り、只一騎返合せて、成合の池の北渚に、馬の頭濱の方に打向つて控へたり。然るべき者あらば、押並べて組まばやとぞ窺ひ見ける。源氏の方に、越中の國の住人宮崎の太郎が嫡子入善小太郎安家は、赤革威の鎧に、白星の兜着て、糟毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、只一騎控へたり。是も平家の方に、然るべき者あらば、押並べて組まんとの志なり。成合の池の北の渚に、武者一騎控へたり。安家心惡く思ひて、爰にましますは敵か

味方か、誰と問ふ。是は平家の侍に、高橋判官長綱。かくいふは誰ぞ。越中の國の住人入善小太郎安家、生年十七歳と名乘りも果てず、押並べて組んで落ち、上になり下になり轉びけれども、さすが安家は、廿に足らぬ若武者なり。高橋は、老すげたる大力なりければ、終には入善下になるを、押へて頭をかゝんとする所に、高橋腰の刀を落したれば、詮方なくして、暫し押へてありけるが、爰に入善が伯父に、南保次郎家隆といふ者あり。此軍に打立ちける時、入善が父宮崎の太郎、弟の南保に語りけるは、安家は未だ幼弱なる上、今度始めたる軍なり。相構へて見捨て給ふなといひければ、然るべしとて出でたりけるが、相具せんとて、數萬騎が中を尋ぬれども見えず。南保音を揚げて、入善の小太郎々々々と呼んで、兩陣の中を通りけるに、小音にて、安家敵に組みたり。斯く尋ね給ふは南保殿かといふ。家隆馬より飛下りて、腰の刀を拔き、長綱が鎧の草摺引上げて、柄も拳も通れ〳〵と二刀刺し、甲のてへんに手を入れて、引仰けて頭を切り、左の手には頸を持ち、右の手にて入善を引上げて、いかに誤ありや。軍は後陣を賴み、乘替郎等を相待ちてこそ、敵には組む事なるに、

若き者不覺かな。去ながら神妙々々といふ所に、入善隙を窺ひ、南保が持ちたる首を奪ひ取りて逃走り、木曾が前に行向ふ。南保も續いて馳參り申しけるは、長綱が首をば、家隆取つたりと申す。入善は我が取りたりと論ず。南保重ねて申しけるは、入善高橋に組んで、旣に危ふく候ひつるを、家隆落合ひて入善を助けて、高橋が首をば取つたりと申す。入善陳じ申しけるは、安家高橋に組んで、上になり下になり候ひつる程に、高橋が弱き所を、高名顏に南保側より取りて候。家隆全く取らず、安家が今日の得分にて候ひつるものなりと申しければ、木曾は、入善組む事なくば、南保首を取るべからず。落合ふ事なくば、入善誠に遁れ難し。兩方共に神妙なりとて、高橋が首をば南保に付け、入善には別の勳功を行はる。

妹尾幷齋明生捕らるゝ事

又源氏方より、加賀の國の住人倉光の次郎成澄、廿餘騎にて懸けたり。平家の方より、備中の國の住人妹尾の太郎兼康、是も廿餘騎にて喚ばはつて出づ。妹尾・倉光馳

並べて組んで落つ。上になり下になり、持起しつ押付けつ、互に勝負見えざりけるに、妹尾が郎等、落合はんと進む所に、倉光が郎等、主を討たせじとて、命を捨てゝ懸けゝれば、懸立てられて落つる所に、兼康は倉光に生捕られにけり。又平泉寺の長吏齋明は、平家に忠を盡し、義仲の籠られたる燧の城を落ちけるが、殊に氣色して、今日を晴と出立ちつゝ、門徒の惡僧相具して、五騎にて傍若無人に馳出でたり。木曾いひけるは、自餘の兵は、逃げば逃すとも、齋明餘すな若者共、同じくは生捕にせよ若者共と下知しければ、岡本の次郎成時、是も主從五騎にて歩ませ出して、郎等共に、山寺法師、思ふにさこそあらんずらめ。齋明は我得分ぞ。目を掛けな。四騎の武者を打拂へといひければ、四人の郎等、四人の法師武者を追拂ふ。其間に齋明と成時と、押並べて組んで落ち、兎角あやつり、本意に任せて、齋明をこそ生捕りけれ。されば此齋明は、林・富樫と同心に起請を書き、義仲に奉りしが、燧が城にして、返忠して源氏を背き、忽ちに冥罰を蒙ふるはと、皆人惡みけるとかや。

實盛討たるゝ事

平家の侍、武藏の國の住人長井の齋藤別當實盛は、我れ七十有餘に年長けたり。今は後榮期する事なし。終に遁るべき身にあらず。何れの國にて死なんも、同じ事と思ひ切つて、赤地の錦の直垂に、萌黄威の鎧を着、金作りの太刀を佩き、十八さいたる石打の征矢負ひ、重藤の弓持ちて、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍を置き、只一人進み出で、死生知らずに戰ひける。木曾の手に、信濃の國の住人手塚の太郎光盛といふ者あり。實盛に目をかけて步ませ寄る。實盛も又手塚に目を懸けて、進んでかゝる。手塚近寄りて、誰人ぞ。只一人殘り止まつて軍し給ふは、大將軍か侍か。心惡し名乘れ。斯く申すは信濃の國の諏訪の郡の住人手塚の太郎金刺の光盛といふ者なり。能き敵ぞ。名乘り給へや組み給へといひ懸けて、互に駒を早めたり。實盛申しけるは、あゝさる者ありと聞く。思ふやうあり、名乘るまじ。汝を嫌ふにはあらず。只首を取りて、源氏の見參に入れよ。能き所領の價なるべし。徒に淵瀨に捨つべから

ず。木曾殿は見知り給はんずるなり、思ひ切りたれば、一人止まつて戰ふなり。敵は嫌ふまじ。軍の習は、勝負をするこそ面白けれ。寄合へ手塚といふ儘に、弓をば捨て、無下に近く寄せ合す。手塚が郎等、主に組ませじとて、馬手に並べて中に隔てたり。實盛と押並べてむずと組む。己は手塚が郎等にや、餘すまじといふ儘に、鎧の押付の板をつかまへ、左の手にて手綱かいくり、左右の鐙を強く踏んで引落し、馬の腹に引付けて、提げ持ちて行く。足は地より一尺計り上りたり。手塚是を見て、郎等を討たせじとて、馳並べて、敵の鎧の袖に摑み付きて、曳聲を出して鐙を越え、我先にぞ落ちたりける。實盛、二人の敵にあへしらはんとせし程に、三人組合うて、馬より下へ落ちたりけり。實盛、手塚が郎等を押へて刀を拔き首を搔く。手塚其間に、實盛が弓手の草摺引上げて、柄も拳も通れと刺し、頓て上に乘得て首を搔き、水も堪らず切りにけり。手塚敵の首を郎等に持たせて、木曾の前に持ちて行き申しけるは、光盛、曲者の首取つて候。名乘れと申せば、存ずる旨あり名乘るまじ。木曾殿は御覽じ知るべしと計りにて、名乘らず。侍かと見れば、錦の直垂を着たり。大將

實盛討たる

軍かと思へば、續く者もなし。京家西國の者かとすれば、坂東聲なりき。若き者かと思へば、面の皺七十餘にたゝめり。老者かとすれば、鬢鬚黑うして盛と見ゆ。何者の首なるらんと申す。木曾打案じて、あはれ武藏の齋藤別當にてあるらん。但それは一年、義仲が幼目に見しは、白髮のかすげに生ひたりしぞかし。今は殊の外に、白髮になりぬらんに、鬢鬚の黑きは何やらん。面の老いやうはさもやと覺ゆ。誠に不審なり。樋口は久しく相馴れて、見知りたるらんとて召されたり。樋口髻を取り、引仰のけて一目打見て、はら〳〵と泣き、あな無慙や。實盛にて候ひけりと申す。何鬢鬚の黑きはと問ひ給へば、樋口、されば其事思ひ出られ侍り。實盛日頃申置き候ひしは、弓矢取る者は、老體にて軍陣に向はんには、髮に墨を塗らんと思ふなり。其故は、合戰ならぬ時だにも、若き人は、白髮を見てあなづる心あり。況や軍場にして、進まんとすれば、古老は氣なしと惡み、退く時は、今は分に叶はずと誹る。實に若き人と、先を爭ふも憚あり。敵も甲斐なき者に思へり。悲しき者は、老の白髮に侍ると申候ひしぞかし。人は聊の物語にも、後のかたみに、言葉をば殘し置くべき

事に侍る。いひしに違はず、墨を塗つて候ひけり。年來內外なく、申しゝ事の哀れさに、樋口の次郎兼光、水を取寄せて、自ら是を洗ひたれば、白髮の尉にぞなりにける。さてこそ一定實盛とは知れにけれ。木曾宣ひけるは、親父帶刀先生を、惡源太義平が討つたりける時、義仲は二歲になりけるを、畠山に仰せて尋出して、必ず失ふべしと傳へたりけるに、いかに幼き者に刀を立てんとて、我は知らざる由にて情深く、此齋藤別當が許へ遣して養へといひければ、請取り養はんとしけるが、七ヶ日置きて、東國は皆源氏の家人なり。我れ人に賴まれて、此兒を養ひ立てざらんも人ならず。養ひ置かんも、あたりいぶせしと案じなして、木曾へ遣しける志、偏に實盛が恩にあり。一樹の陰一河の流といふ例もあるなれば、實盛も、義仲が爲には、七ヶ日の養父、危き敵の中を計らひ出しける其志、爭でか忘るべきなれば、此首能く孝養せよとて、さめ〴〵と泣きければ、兵共も各袖を絞りけり。

平氏侍共亡ぶる事

平家は、棟と賴み給へる實盛討たれて、大に力落し、成合を引きて、篠原の宿に着く。源氏同じく押寄せたり。平家怺へずして山に入り、極樂林・小野寺林・須川林に亂れ入りければ、源氏續いて平攻に攻む。福田・熊坂・江沼邊をも攻越えて、濱路までこそ追駈けたれ。平家、並松といふ所にて返合せて、暫し支へて戰ひけり。源平互に亂れ合ひ、兩方より射違へたる矢は、降る雨の如くなり。爰にして平家卅餘騎討たれて、並松を引く。源氏勝に乘つて、餘すな〳〵と追懸け、餘りに手繁く追ひければ、越中權の頭範高、我一人と戰ひけるが、矢數射盡きて、敵に頸の骨射させて、自害して伏しにけり。越中の次郎判官盛綱・洲濱の判官高能・上總の判官忠綱・尾張の守貞安・攝津の判官盛澄等も、思ひ〳〵に戰うて、所々に伏しにけり。武藏の三郎左衞門有國は、手勢三百餘騎にて戰ひけるが、大勢に取籠められて、半時計り打合ふ程に、有國馬を射させて歩立になり、右には太刀、左には長刀を持ちて切合ひける程に、太刀打折つて後は、長刀を十文字に持ちて開き、大勢の中に走り入り、先馬の足を薙ぎ、主が馬より跳落さるゝ所を、落しも立てず首を薙ぎ、弓手に走り妻手に走り、四廻り

五廻り切廻るかとすれば、敵三十餘人切伏せて、我身も痛手を負ひければ、是迄と思ひ、新中納言殿の侍に、武藏の三郎左衞門尉有國と名乘つて、腹掻切つて失せにけり。巢山の兵衞高賴も、手のきは戰うて討たれにけり。東國の者には、ましほの四郎と伊藤の九郎も、爰にして亡びぬ。川に流れ海に入りて、死ぬるは數を知らず。安宅・篠原・並松の間に、竿結び渡して、切つて懸けたる首、三千七百六十人とぞ記したる。生捕には、兼康・齋明計りなり。去ぬる四月十七日の下向には、平家十萬餘騎なりしに、燧・長畝・三條野・並松・鹽越・須川山・長並・一松・安宅の松原・宮腰・倶梨伽羅・志雄山・竹濱、所々の合戰に亡びつゝ、七萬餘騎は失せにけり。然るべき人々も、馬にも乘らず、物具を捨てゝ、北國の浦傳ひ仙道の山傳ひして、今六月の上洛には、三萬餘騎には過ぎざりけり。平家、今度は數を盡して下られけるに、斯く討たれぬるこそ無慙なれ。內大臣宗盛も、棟と賴まれたりし參河守も討たれぬ。高橋判官長綱も討たれぬ。一所にて如何にもならんと、契り給ひし乳人子の大夫判官景高も討たれぬ。かたがた大に力落ちてぞ覺されける。飛驒守景家が申しけるは、相賴みつる子息の景

高に分れぬ。今は出家の暇給はつて、彼が後世を弔ひ侍らばやと、申しけるこそ哀なれ。有國・兼康・實盛なんども歸らず。此者共こそ、野の末山の奥にても、一人當千と賴もしく思召しけるに、大抵亡びにければ、內府も心弱くぞ思はれける。凡そ今度討たれたる者共、父母兄弟妻子眷族等、泣き悲しむ事斜ならず。家々には門戸を閉ぢ、聲々に愁歎せり。彼の村南村北に哭しける雲南征伐も、斯くやと思ひ知られたり。

赤山堂布施論の事

六月十一日に、源氏追討の御祈とて、延曆寺にて、藥師經の千僧の御讀經行はれ、御布施には、布一端づつ、供米袋一つづつ添へられたり。院より別當左中辨兼光朝臣、仰承りて催す沙汰あり。行事は主典代ちやうぐわん、御布施の供米を、西坂本赤山の堂にて是を引きけり。山の下僧共を以て請取りける間に、取る者は一人して、袋四つ五つ布七八反も取りけり。取らざる者は一つにも當らで、手を空しくする者

もあり。一つも取らざる者は、腹立して罵り行く。取り得たる者は、小頸振つて喜ぶ。後には行事主典代と法師原と事を仕出して、上を下に取合せ、主典代ちやうぐわん等が烏帽子打落し、衣裳剝取りなんどして、淺ましき喧嘩に及び、結句は主典代を搦めて、髻放ちなる者を、大講堂の庭に引据ゑたり。大衆是を見て、事穩便ならずと て追下してけり。惣じて平家の行ふ神事佛事に、失禮のなき事はなし。佛神の擁護に拘はらずといふ事顯はれたり。

貞能西國より上洛の事

七月十八日に、肥後守貞能、鎭西より上洛す。西國の輩、謀叛の聞えあるに依つて、彼を鎭めん爲に、去る年下向の所に、菊地城郭を構へて楯籠る。貞能九國の軍兵を催して是を攻むれ共、容易く落ち難き城にて、官兵度々追落さる。重々評定あり、兵糧攻にせよとて、四方を打圍みて、晝夜是を守る。日數積りて兵糧盡きければ、菊地終に降人に出づる。菊地降人になれば、原田も降人になる。菊地・原田參るといひ

ければ、臼杵・戸槻も皆隨ひにけり。此間貞能、九國に兵糧米を宛催す。廳官一人・宰府使一人・貞能が使一人、兩三人が從類八十餘人、權門勢家の庄園をいはず、神社佛寺料所をも嫌はず、譴責しければ、人民の歎き斜ならず。其積り十萬餘石に及べり。貞能は菊地・原田等を召具して、今日未の時に入洛、八條を東へ河原を北へ、六波羅の宿所に着く。其勢千騎には過ぎず。前の內大臣宗盛、車を七條が末に立て見給へり。其中に、鎧武者二百餘ありけるに、薩摩の前司親賴、薄靑の生絹魚綾の直垂に、赤威の鎧着、白葦毛の馬に乘つて、貞能が館の口をぞ打つたりける。頭の刑部卿は憲方の孫、相模守賴憲が子なり。勸修寺の嫡々にて、させる武勇の家にあらず。文筆を取つて、君に仕へ奉るべき人なるに、何事ぞやとて、見る人是をあざみけり。西國は斯く平げたれども、東國・北國は隨はず、源氏の大勢、旣に都へ攻上ると聞えければ、平家今は防ぐに力盡きたり。今は都に跡をも止め難しと見えたりける。大臣は此有樣を聞き見給ひて、一門の人々催集めて仰せけるは、敵は旣に攻近付く、味方の軍兵勢盡きたり。叶はぬ迄も院內を引具し參らせて、西國へ落ちて、一まども

助かりなばやと思ふなりと宣へば、新中納言知盛申されけるは、西國へ落下らば助かるべきか。臣等が曩祖桓武天皇、此帝都を立て給ひてより以來廿餘代、平將軍貞盛より武勇に携はつて八代、未だ一度も名を折らず。先祖の君の、執し思召しゝ都なり。名將勇士の末葉なり。たとひ都にて塵灰となるともいかゞはせん。思召し寄るべき事にあらず。是は何とあるべきと宣へば、平大納言敎盛・修理大夫經盛同心にて、仔細にや及び侍る。運の盡きぬる上は、我朝にも限らず、異國の例是多し。始あるものは終あり。盛にしては又衰ふ。今更申すに及ばざれども、後の世までも名は惜しき事なり。終に邊土にて亡びんより、矢種のあらん程は、射盡しなんず。叶はざらん時は、家々に火を懸けて、自害するより外の事あらじと宣へば、一門の卿相・雲客・郎等・侍に至までも、然るべく候とぞ同じける。されども大臣殿は、心得ずげにぞ居給ひける。

木曾山門牒狀の事

木曾は、北陸道を攻靡かし、越前の國府にありけるが、軍の評議あり。誠や平家、深く山門の大衆を賴む。衆徒又平家に同心の由聞ゆ。譬ひ湖上に舟を浮べ、濱路に駒を早むとも、大衆坂本に下り集まつて、防ぐには容易く攻上り難し。又勢多の長橋引きて支へんもゆゝしき大事、此事いかゞあるべきといひけるに、大夫房進み出でて申しけるは、覺明其上京都にありし時、山法師の心根は、よく聞及びき。平家譬ひ所領を寄せ財寶を抛ち、山門を語らふとも、三千の衆徒一同に、平家を思ふ事よも候はじ。源氏に心ざし思ふ大衆も、などかなかるべき。先づ牒狀を遣して試みらるべし。事の體は聞えなんと申す。然るべしとて、覺明卽ち書札を書く。木曾は、此狀を山門へ上せて後、いかさまにも都近く攻上るべしとて、越前の國府を立ち、今城に着く。敦賀山を右になし、能美山を越え、柳が瀨に打立ちて、高月河原を打渡し、大橋の村八幡の里湖上遙に見渡して、平方・朝妻・筑摩の浦々を過ぎぬれば、千本の松原を打通り、東大通に出でにけり。先陣は近江の國三上山の麓野洲の河原に陣を取る。軍兵在々所々家々宿々に滿々たり。木曾は返狀到來の程、馬の草飼よしとて、蒲

義仲山徒を語らふ

義仲京師に迫る

生に陣を取つて日數を經て、兵糧米なかりければ、使者を百濟寺へ遣して是を乞ふ。住侶衆議して、五百石の兵糧米を送る。木曾其志を感じて、當寺の御油料とて、押立五鄕を寄進せり。

覺明、山門を語らふ事

爰に白井の法橋幸明といふ僧あり。三塔第一の惡僧、衾の宣旨を蒙つて、山門には安堵し難くて、當山千僧供の料所、愛智郡くるみの庄に忍び居たりけるが、大夫房覺明、木曾に付きて都へ上ると聞きて、木曾の陣に行向つて、相尋ねければ、覺明、白井の法橋を請じ入れて見參す。木曾之を見て、何者ぞと問ふ。是は山門に、白井の法橋幸明とて、三塔には名ある大惡僧にて侍り。覺明上洛と聞きて、見參の爲に見え來る由を申す。木曾、幸明を召して見參して宣ひけるは、山門の衆徒、平家の語らひを得て、源氏を背く由其聞えあるに依つて、仔細を記して案內を通はし畢んぬ。未だ是非の左右なし。衆徒の事深く御房を賴み申す。速に登山して、當家同心の祕計

を廻らし給へ。大衆の同心仔細なくば、此河原に遠火を焚くべし。山上又遠火を合せよ。それを以て印として、天台山に攀上つて、同心に平家を攻むべしと語ふ。幸明思ひけるは、我身衾の宣旨を蒙れり。當今平家の御外戚なり。源氏に忠を盡して、平家を追落しなば、自身の難も遁れなんと思ひて、仰承り候ひぬ。心中疎略存知候はず。ひけは仕るべきとて、急ぎ忍び上つて、同時の大惡僧に、慈雲坊法橋寛覺・三上の阿闍梨珍慶といふ者を相語らひて大衆を起し、大講堂の庭に、三塔會合して僉議あり。木曾が書狀、此砌に披露あり。衆徒は書狀披覽の後、木曾義仲申狀、いか體たるべきぞやといふ所に、大衆僉議して曰、當山は是桓武天皇の御願、平家先祖の草創として、帝王卅三代、星霜四百餘歲なり。住持佛法の勤行廢退なく、百王擁護の祈誓今にあらたなり。就中平家誓願を醫王山王の照覽に立て、所願三塔三千のえこに寄す。一門合掌して、深く冥慮のこねんを賴み、諸卿連署して、穴勝に與力を衆徒に乞ふ。然れば爭でか平家懇念の志を失ひて、義仲卒爾の語らひに隨ふべきやといふ大衆もあり、又此儀然るべからずといふ衆徒もあり、又大衆僉義していはく、我山は是

れ鎭護國家の道場として、百王臣公を長生に祈り、四海率土を泰平と唱ふ。然るを平家故太政大臣入道淨海、當代御外戚の威に募りて、ひじゆんの榮華に誇り、不當の高位を穢す。加之惡逆甚しうして、或は雲客卿相の重臣を配流し、或は天子陛下の儲君を誅戮し、或は禪定法皇を、鳥羽の故宮に押籠め奉りて宸襟を動かし、或は堂塔經卷を、南都園城に燒拂つて、法命を斷絶す。是に依つて四夷亂れ起つて、一天安き事なし。入道既に悶絶して、薨去し畢んぬ。積惡家門に傳はり、災害子孫に及べり。諸寺諸山平家を背き、東國・北國源氏に從ふ。爰を以て、討手を諸國に分ち遣せども、軍兵勝負の勇を得ず。是偏に佛神擁護を加へず、運命既に末に及ぶ故なり。源家は近年度々の合戰に打勝つて、管領の國の外、七道諸國皆以て歸伏す。然れば我山獨り宿運の傾く平家に同心して、運命開くる源氏を背くべきや。就中書札の如くば、道理此旨をあらはす。今に於ては、須く平家安穩の祈を改めて、源氏の贔屓の思に住せらるべきやと、僉議したりければ、滿山の大衆も、尤も〳〵と同じければ、さらば返狀あるべしとて下し遣す。又遠火を合せよとて、惣持院の大庭に遠火を焚く。

愛智河原にも遠火焚きたりけり。

平家の軍兵宇治・勢多に向はるゝ事

去程に源氏、近江の國に攻入つて、人を通さずと聞えければ、同じき廿一日、新三位の中將資盛大將軍として、肥後守貞能等を相具して二千餘騎、宇治路より田原路を廻りて、近江の國へ差下さる。今日は宇治に止まる。同じき廿二日に、新中納言知盛・本三位の中將重衡大將軍として三千餘騎、勢多より近江の國へ發向す。今宵は山科に宿す。京中に聞えけるは、十郎藏人行家は、伊勢の國を廻りて、大和の國へ入り、足利の判官代は、丹波路より京へ入り、多田の藏人行綱は、攝津の國を押領して、河尻を打塞ぐと聞えければ、こはいかゞせん。國々道々塞いで、洩れて出づべき方なしと歎きけり。

源平軍物語卷第七終

源平軍物語巻第八

木曾登山附勢多軍の事

木曾は、山門の返狀を見て、加賀の國の住人林・富樫が一黨以下、北陸道の勇士等五百餘騎を引率し、大夫房覺明を先立にて、近江の國湖の浦々より漕渡りて、天台山に打登り、惣持院を城郭とす。惡僧には白井法橋・幸明・じうん坊・法橋寬覺・三上阿闍梨珍慶等を始として、三塔九院の大衆老若も、甲冑を着し弓箭を帶して木曾に同意す。其勢谷々に滿々たり。既に都へ攻入るべきと聞えければ、新三位の中將資盛は、宇治より京へ歸り入らる。勢多の大將軍知盛・重衡兩人の內、重衡の卿は、山科より引返し給ひけり。新中納言知盛の卿は、五百餘騎にて、今夜は粟津の浦に宿し給ひたりけるが、是より京へ歸り上らんとする處に、加賀の國の住人に、太田・倉光等上洛

平知盛、太田兼定等を攻む

しけるが、越前の國より兩人打連れて、北陸道より海道に出で、五百餘騎にて上りける。加州の葦林六郎光明以下、天台山にありと聞きて、三井寺より志賀・唐崎を經て、東坂本に着きて、林・富樫と一手になつて軍せんと思ひ、勢多の長橋打渡り、粟津の濱を打つ程に、新中納言、五百餘騎にて返合せ宣ひけるは、爰は平家の公達の陣の前なり。敵か味方か何者ぞ。名乘りて通れと問はれければ、太田・倉光、名乘りて中々惡かりなんとて、馬の鼻を引返し、勢多の橋二三間を引落して、當國の一の宮建部の社に陣を取る。中納言宣ひけるは、敵なればこそ、名乘はせで引退くらめ。思ふに北國無案内の奴原にてあるらん。追懸けて討取れとて追ひけるが、橋は引きたり、渡すべきやうなかりければ、馬をば西の橋爪に繫ぎ置き、粟津の浦の釣舟共に込乘り、東の濱に押渡し、勢多の在家に火を懸けて攻めければ、源氏も森より出合ひつゝ、矢尻を揃へて射合ひたり。七月廿三日の夜半計りの事なれば、曉懸けて照す月、まだ山の端を出でねども、猛火地を輝かして晝の如し。源平互に亂れ合ひて、二時計りぞ戰ひたる。新中納言の侍に、進藤瀧口俊方といふ者あり。中納言深く賴み給ひた

りけるが、一陣に進んで戰ひける程に、敵二三騎討取りて、我身も敵に討たれにけり。其外死する者十餘人、手負ふ者は數を知らず、源氏方にも、太田の次郎兼定が嫡子に、入江の冠者親定といふ者を始として、七八人討たれぬ。傷を蒙る者も多かりけり。入替へ〳〵戰ふ程に、平家の軍兵打白まされて引退く。知盛の卿、今は力及ばずとて、よもすがら都へ入り給ひにけり。太田の次郎・倉光次郎兩人は、勢多の軍に打勝つて、是も其夜の中に林・富樫を相尋ねて、東坂本へ入りにけり。宇治・勢多の討手、都に歸り上りたりければ、平家の一門、今は度を失つて詮方なし。京中の貴賤周章ふためきて、膽魂も身に添はざりけり。

法皇鞍馬御幸の事

同じく廿四日未の刻に、北面の者一人、竊に院の御所に參じて、承る旨こそ候へと申せば、法皇何事ぞと御尋あり。奏し申けるは、明日巳午の時に、源氏等四方より、數萬騎にて都へ攻入る由聞え候間、平家都の内に安堵し難しとて、三種の神器、院内取

法皇鞍馬へ御幸あらせらる

參らせて、明旦卯の刻に、西國へ下向とて、内々出立ち候と申しければ、神妙に申せり。此事ゆめ〳〵人に披露あるべからず。思召す旨ありとて、其日の夜に入りて、殿上人に、右馬頭資時計り御供にて、北面の下﨟二三人召されて、忍びて鞍馬へ行幸なる。人是を知らざりけり。同じき日の小夜更くる程、大臣殿は、建禮門院に參らせ給ひて、逆徒入洛の事、日頃はさりともと思ひ侍りつれども、今は賴み少く承り候。都にていかにも成果てんと申す方も多く候へども、人々の御爲め、心苦しかるべし。筑紫の方へ赴きて、試みばやとこそ思ひ立ちて候へと、申させ給ひければ、女院御涙をはら〳〵と流させおはしまして、兎も角も能きやうにこそ計はせ給はめ。さては仕慣れし花の都を振り捨てゝ、始めたる旅に浮び立つべきにこそ。吉野の花の詠して、明石の月を見る人、暫しと思ふ旅だにも、故鄕は戀しとこそ聞き侍るに、歸るさ知らぬ波の上に憂身を宿し、焦れて物を歎かん事、兼て思ふこそとて、御衣の袖を御顏に當てさせ給ふぞ痛はしき。然る處に橘内左衞門尉季康といふ者あり。是は平家の侍なりけれども、院にも近く召使はれ參らせけるが、其夜院の御所法住寺殿

に上臥して候ひけるに、御所の方騷しくさゝやき合へり。又女房の聲にて、忍びやかに泣く音などしけり。こは何事なるらんと胸打騷ぎ、怪しく思ひければ、忍びつつ指足して立聞きけるに、法皇の渡らせ給はぬは、何地へ御幸なりけるやらん。誰か知り參らせたるらんと、人は我に問ひ、我は人に尋ね參らすれども、只泣くより外の事なくて、知り參らせたる人もなし。季康淺ましく思ひて、聞き敢ず急ぎ六波羅へ參りたれば、大臣殿、夜部より女院御所へ入らせ給ひたりしが、未だ歸らせ給はずと申す。頓て女院御所に參りて、斯くと申入れければ、大臣殿は周章騷ぎ給ひて、よもさあらじ。僻事にぞあるらんとは仰せけれども、やがて法住寺殿へ馳參らせ給ひて、いかにと尋ね給ひけれども、我知り參らせたりと申す人なし。淨土寺二位殿と申す女房、其時は丹後殿とて、夜晝御身近く候はせ給ひけるより始めて、人々一人も働かずましくけるが、只涙を流し、呆れてぞおはしましける。大臣殿も力及ばず、六波羅へ歸られける。夜も既に明けぬ。法皇失せさせ給ひぬと披露あり。公卿・殿上人・上下の北面馳參る。御所中の騷斜ならず。馬車馳違ひ、塵灰を踏み立て、京中

地を返しけり。ましてや平家の人々の家々には、敵の討入りたらんも限あらば、是には過ぎじとぞ見えける。

主上都落の事

去程に平家は、日頃法皇をも、西國へ御幸なし參らせんと支度し給ひたりけれども、斯く渡らせ給はねば、賴まん木の本に、雨のたまらぬ心地して、さりとては行幸計りなりともあるべしとて、明くる卯の時の終に出御あり。御輿を差寄せければ、主上は未だ幼き御齡なれば、何心もなく召し給ひける。神璽・寶劍取具して、建禮門院御同輿に召さる。內侍所も同じく渡り入り奉る。平大納言時忠の卿庭上に立廻つて、印鎰・時の簡・玄上・鈴鹿・大床子・河霧・御劒以下九重の御具足、一も取落すべからずと下知せられけれども、人皆周章つゝ、我先にくと出立ちければ、取落す物多かりけり。晝の御座の御劔も、殘り止まりけるとかや。御輿出させ給ひければ、內大臣宗盛公父子・平大納言時忠の卿父子・藏人頭信基計りぞ、衣冠にて供奉せられけり。其

主上都を落ちさせ給ふ

外は公卿・殿上人・近衞宮・御繩介の末に至るまで、老いたるも若きも、皆甲冑を着し弓箭を帶して打立ちけり。七條を西へ、朱雀を南へ行幸なる。一年都移りとて、俄に遽しく福原へ行幸なりしは、斯るべき事の驗なりけりと、今こそ思ひ合せけれ。西八條・池殿・小松殿・泉殿以下の人々の家々十六所、皆火をかけて燒亡す。餘煙數十町に及んで、日の光だに見えざりけり。漢家卅六宮、楚の項羽の爲に亡されけんも、爭でか是には過ぐべきとぞ覺えし。盛者必衰の理、眼の前に遮れり。年來日來の振舞は、目ざましくこそ思ひしかども、流石斯く落下り給ふを見ては、貴賤悉く哀の涙を拭ひける。況や住馴れし城を迷ひ出でて、何方を指すともなく旅立ち給ひけん人々の心の中、推量られて無慙なり。其上攝政近衞殿と申すは、普賢寺の內大臣基道公の御事なり。太政入道の御聟にて、平家に親しみ給ひける上に、法皇も西國へ御幸なるべしと、日頃聞召しければ、御供申させ給ふべきにてありけるに、前の內大臣より、行幸既にと告げ申されたりければ、御出ありて、御車を七條の作道迄やらせ給ひたれども、法皇の御幸はなかりけり。如何あるべきと思召し煩はせ給ひける

に、御供に候ひける進藤左衞門尉高範といふ侍、御車の前に進み出でて、供奉し給ふべき平家の一門池殿の公達・小松殿の公達、皆止まり給へり。法皇の御幸もならず。されば何方へとて御出は候やらん。急ぎ還御あるべきにこそと申す。近衞殿の仰には、彼一門にむすぼほれて、年頃の恩も忘れ難く、主上行幸もあり、平家の歸り思はん處如何あるべきと御氣色あり。高範牛飼に向つて、縱ひ主上御幸ありとても、御代は法皇の御代、御運盡き給ひて外家の惡徒に引かれ、花洛を落ちさせ給はん行幸に、供奉せさせ給ひたらば、末賴もしからん御事かとつぶやきて、急度目を引合せたれば、牛飼進まぬ道なれば、牛の鼻を引返し、一すはへ當てたりければ、牛も究竟の牛なれば、作道を上りに東寺迄、それより大宮を上りにと、飛びに飛んでぞ還御なる。越中の次郎兵衞盛嗣、道にて行逢ひ奉り、殿下も落ちさせ給ふに、口惜き御事かな。止め奉らんとて、片手矢はげて追懸け奉る。御車を延さんとて、高範返合せて散々に防ぎ戰ふ。大臣殿之を見給ひて、やゝ盛嗣よ。年來の情を忘れ給ひて、落つる程の人をば、いかでもありなん。急ぎ御供申すべき一門の人々だにも見え給は

す。況や攝政の御事は、申すにや及ぶと制し給ひければ、盛嗣それより引返す。其間に近衞殿は、遙に延びさせ給ひけるが、御目に御覽じけるは、艸童二人、車の左右の轅に取付きて、やるともなくかくともなく、御供に候ひけり。牛の前には、赤衣の官人、春の日と書きたる札を、榊の板に取具して、走るとぞ御覽じける。誠に春日大明神。高範に入替らせ給ひつゝ、斯く計らひ申しけるこそと、感涙を流させ給ひつゝ、西林寺といふ寺へ入らせ給ひたりけるが、其より忍びて、知足院へ移らせ給ふ。人是を知らずして、攝政は吉野の奧にとぞ申しける。

畠山兄弟暇を給ふ事

畠山の庄司重能・小山田の別當有重兄弟二人は、年頃平家に奉公して、都落にも御供申して、泣々淀迄下りたりけるを、大臣殿御覽じて、近く兩人を召して、御供神妙神妙。但何方迄も相具すべけれども、子息家人等皆東國に在て、賴朝に相隨へり。身は御供に候ひても、心は鎌倉に通ふらん。脫売計り下りては、何にかはせん。疾々

罷歸れ。若世にありと聞かば、思ひ忘れず、參るべきなりと宣へば、重能・有重畏つて申しけるは、身は恩の爲に使はれ、命は義に依つて輕しといふ事あり。年來恩を蒙りて、身を助け妻子を養ひ候ひき。今更子が悲しくて、妻が戀しければとて、爭でか見捨て奉るべき。落着ましまさん所までは、御供なりと申せば、人の親の、子を思ふ志、尊きも賤きも變る事なし。されば子は東國にありて源氏に隨ひ、親は西海に落ちて身を亡さん事不便なり。只疾々首を延べて、賴朝に隨ひて、再び妻子を相見るべし。露恨と思ふべからずと、宣ひけるこそやさしけれ。二人の者共、廿餘年の好なれば、名殘は誠に惜しけれども、さすがに身の捨て難さに、泣々都へ歸りにけり。

平家都落の事

權の亮三位の中將維盛・資盛・清經以下兄弟の人々、三百餘騎にて、行幸ははやなりぬ。急げや急げ打てや打てとて、大宮を下りに、東寺・四塚・造道・御吉野・志賀・柳原・淀の津・羽束・六田川原を打過ぎて、關戸の院の邊にてぞ、行幸には追付き給ひける。大

臣殿は、此人々を見給ひて、少し力付きておはします。今迄見えさせ給はざりつれば、覺束なく思ひ奉りつるに、斯くて又見えさせ給へば、嬉しくこそと宣へば、三位の中將は、幼き者共の、あながちに慕ひ侍りつるを、賺し侍りければ、今まで行幸には後れ參らせ候へと宣へば、何とて具し奉り給はぬぞ。止め置き奉りては、如何にしてかおはしまし合する。御心苦しき事にてこそと宣へば、行先とても、賴もしくも候はずと計りにて、問ふに辛さの增りつゝ、いとゞ淚を流されけり。是を聞きける人々は、實にと思ひつゝ、我身の上とぞ悲しみける。他の大納言の一類は、今や今やと待たれけれども、落止まりて見え給はず。落行く平家は誰々ぞ。公卿には前內大臣宗盛・平大納言時忠・平中納言敎盛・新中納言知盛・修理の大夫經盛・右衞門の督淸宗・本三位の中將重衡・權の亮三位の中將惟盛・越前の三位通盛・新三位の中將資盛。殿上人には、內藏の頭信基・但馬の守經正・左中將淸經・薩摩の守忠度・小松新少將有盛・左馬の頭行盛・能登の守敎經・武藏の守知章・備中の守師盛・小松の侍從忠房・若狹の守經俊・淡路の守淸房。僧綱には、二位の僧都全眞・法勝寺の執行能圓・中納言律

平家都落

師ちうくわい・きやうじゆ坊・阿闍梨ゆうゑん。侍には受領・檢非違使・衛府・諸司百六十人、無冠の者は數を知らず。此二三ヶ年の間、東國・北國度々の合戰に、打洩らされたる人々なり。壽永二年七月廿五日に、平家悉く都を落果てたり。

景家、老母并孫を捨行く事

飛騨守景家も、御供にとて出立ちけるが、三歳になる孫に名殘を惜みつゝ、いかゞせんとぞ悲しみける。其孫といふは、北國の軍に討たれし飛騨の太郎判官景高が子なり。其妻は夫に後れて、思に堪へずして、此世空しくなりにけり。父にも後れ母にも別れて、孤なりけるを、祖父飛騨の守景家が、我懷に抱へ懷きて、常は口說き事して、哀れ果報なき身となれる悲しさよ。斯る忘形見を殘し置き、我さへ物思ふ事の無慙さよとて、鳥の雛を温むるが如く育みける程に、平家都を落ちければ、景家も出立ちけり。東西も知らぬ幼き者を、宿定めなき旅の道に具せん事も叶ふまじ。跡に賴むべき者もなければ、誰に預くべしとも覺えず。思詫びて、つくづく是を案じ出

して、鎧の袖に抱きつゝ、八十有餘になりける母の許に具し行きて、此子預け奉る。御爲には曾孫なり。景家西海の波に沈み候とも、生し立てゝ、御形見とも御覽候へとて、打預けつゝ落行きけり。景家が母老々として、庭に杖つき走り出でて、泣々申しけるは、我身縱ひ若く盛なりとも、斯る亂の世の中に、いかにしてか育つべき。況や八十に餘りて、今日明日とも知らぬ命なり。行末遙々の幼き者を、何とせよとて、捨預けては坐するぞ。縱ひ情なく、老いたる母をこそ振捨てゝ出で給ふとも、恩愛の別れの悲しみに打添へて、歎きを重ね給ふ事こそ心憂けれ。いかならん野の末山の奧へも、具し行き給へとて、嬰兒の手を引き、鎧の袖に取付きて、門を遙に出でたりけり。弓矢取る身の哀れさは、人に弱氣を見せじとて、かなぐり捨てゝ出でけれども、涙は先に進みけり。

法皇山門へ御幸の事

去程に廿四日の夜半に、法皇、法住寺殿を御出ありて、賀茂へ入らせ給ひたりけるが、

爰は都もむげに近し。猶惡かりなんとて、御輿にて鞍馬へ御幸あり。御供には左馬の頭資時一人ぞ候ひける。下北面の衞府に、定康・俊兼・知康、僅に三人なり。鞍馬寺も、上下參詣の砌なり。人目繁しとて、是より又横川へ上らせ給ひて、横川の寂場坊に御座ありけるを、大衆僉議して、是猶惡かりなんとて、東塔南谷圓融坊へ渡し入れ參らせけり。さてこそ衆徒も武士も力付きて、法皇も御安堵の御心なり。是を斯くとも知らずして、京都には、院は夜中に失せさせ給ひぬ。主上は惡徒に引かれて西國へ行幸、攝政殿は吉野の奥にと風聞す。其外女院宮々も、世の騷に恐れまし〳〵て、佐賀・太秦・賀茂・八幡邊に付きて、逃隱れさせ給ひぬ。平家は都を落ちたれども、源氏も未だ入替らず。主もなく人もなき所にて、自ら殘り止まりたる人々も、闇に迷へる心地にて、いかなるべしとも覺えず。天地開闢より此方、斯る事聞及ばずと歎く程に、廿六日に法皇は、天台山より渡らせ給ふと披露あり。上下我先にとぞ馳參り給ふ。入道前の關白松殿は、其上攝政內大臣基通なり。左大臣經宗・右大臣兼實・內大臣實定以下、大中納言・宰相・三位・四位・五位・公卿・殿上人・上下の北面迄も、官

に居し職を帶し、先途を期し後榮を望みて、人と算へらるゝは、一人も洩れ給はず參り集まりて、圓融坊には、堂上堂下・門內門外、ひませまりもなく滿々たり。山門の繁昌衆徒の面目とぞ見えける。

義仲・行家京入の事

義仲京師に入る

廿六日の辰の刻に、十郎藏人行家は、伊賀の國より宇治へ廻り、木幡・伏見を經て京へ入る。木曾の冠者義仲は、近江の國勢多を渡して、同日未の刻に京へ入る。是は天台山に上りて、惣持院に城郭を構へたりしかば、西坂本より入るべきか、又東坂本に下つて、志賀・唐崎より大關・小關を經て、京へ入るべきにてあれども、餘り勢數千騎、かゞみ・篠原・野洲川原に陣を取りたるをも打具せんが爲、又順道なり、且は祝の京入なればとて、湖上を押渡して、野路・勢多を經て京へ入る。其外甲斐・信濃・美濃・尾張の源氏等、此兩人に相隨ふ。其勢六萬騎に及べり。行家・義仲都へ入りて後は、武士在々所々を追捕し、衣裳を剝取り食物を奪ひ取りければ、洛中の狼藉斜ならず。

人民の煩多かりき。

法皇天台山より還御附四宮卽位の事

同じき廿八日、法皇天台山より還御。錦織の冠者義廣、白旗差して先陣に候ひけり。公卿殿上人多く供奉して、蓮花王院の御所へ入らせ給ふ。此廿餘年、絶えて久しき白旗を、今日始めて御覽じけり。供奉の人々も、珍らしくぞ見給ひける。去程に主上は、外家の惡徒に引かれて、花の都を出でて、西海の波の上に漂ひおはしますらん事を、法皇御心苦しく思召して、返し上し奉るべき由、平大納言時忠の許へ、院宣を下さるゝといへども、平家是を惜み奉り、許し參らせざりければ、力及ばせ給はず。さらば新帝を祝ひ奉るべしとて、院の殿上にて、公卿僉議あり、高倉の院の御子、先帝の外三所おはします。二の宮をば儲君にとて、平家西國へ取下し參らせけり。今は三四の宮の間を立て奉るべきか、又故高倉の宮の御子おはします。十七にならせ給ひける。是は還俗の人にておはしませども、斯る亂世には、成人の主かたぐ宜

しかるべし。還俗の事、天武の例あり。還俗の人、憚あるべからずとぞ沙汰ありける。されども法皇は、高倉の院三四の御子の間に、思召し定められければ、同じき八月五日、彼三四の宮を迎へ取り奉る。先づ三の宮の五歳にならせ給ふを、是へと仰ありければ、大に面嫌ひまし〳〵て、むづからせ給ひければ、疾々とて速に返し出しおはします。次に四の宮を是へと申させ給へば、左右なく歩み寄らせ給ふ。御膝の上に渡らせおはしまし、御懷しげに龍顏を守り上げ參らせ給ひけり。御年四歳にぞならせ給ふ。法皇は御哀れげに思召し、御髮掻撫でさせ給ひ、御涙組みて、此宮ぞ誠に朕が御孫なりける。すぞろならん者ならば、などか斯る老法師をば、懷しく思ひ給ふべき。故院の幼くおはせし顏立に違はねば、唯今のやうに思ひ出でらるゝぞや。斯る忘形見を止め置かれたりけるを、今まで見奉らざりける事よとて、御涙を流させ給ひけり。淨土寺の二位殿、其時は丹後殿の局とぞ申しける。御前に候ひしが申されけるは、兎角の御沙汰に及ばず、御位は此宮にこそと聞えさせ給ひければ、法皇、仔細にやと仰ありて、定まらせ給ひにけり。内々御卜ありけるにも、四の

四の宮御卽位

宮は、御子孫まで日本國の御主たるべしとぞ、神祇官並に陰陽の頭などトひ申しけり。御母は、七條修理の大夫信隆卿の御娘にておはしけるが、建禮門院中宮の御時、忍びつゝ内の御方へ參られければ、皇子差續きましましけるを、父修理の大夫、平家の鍾愛を憚り、又中宮の御氣色をも、深く恐れ給ひけれども、入道相國の北の方・八條二位殿の計らひにて、御乳人を付けなどせられけり。此宮をば、二位殿の兄法勝寺の執行能圓法印の養ひ奉りけるが、平家に付きて西國へ落ちける時、餘りに周章て我北の方をも具せられず、宮をも京に忘れ奉りたりけるを、法印人を返して、急ぎ宮を具し參らせて、西國へ下り給へと、北の方へ宣ひたりければ、既に下らんとて、西七條まで忍び具し參らせて、出で給ひたりけるを、北の方の御乳人の夫に、紀伊守範光といふ者あり。心賢く思ひけるは、主上は西海へ落ち下らせ給ひぬ。法皇都に止まらせ給ひたれば、御位をば、定めて四の宮にぞ讓らせ給はんずらん。神祇官の御トも、末頼もしき事なりとて、北の方の宿所に參りて尋ね申しければ、西國より御文ありとて、忍びて此御所をば出でさせ給ひぬと答へける間、こは淺ましき事なり

と思ひ、覺束なき所、爰彼探り尋ね參らせて、只今君の御運は開けさせ給ふべし。物に狂はせ給ひて、斯くは出立ち給ふか。西國へ落下らせ給ひたらば、君も御位に立たせ給ひ、御身も世におはせんずるにやとて、大に怒り腹立ちて、取止め參らせたりけるに、翌日法皇より御尋ありて、御車御迎に參らせて、斯く定まらせ給ひけり。そも帝運の然るべき事といひながら、範光はゆゝしき奉公の者なりと、人々申しける。

緒方の三郎平家を攻むる事

八月十七日に、平家は筑前の國御笠の郡太宰府に着き給へり。菊地の次郎高直・宍戸諸卿種直・臼杵・戸槻・松浦黨を始として、主上を守護し奉り、かたの如く皇居を造られたりければ、大臣殿より始めて、人々安堵し給ひける。豐後の國は刑部卿三位頼輔の知行にて、其子頼經、國司代にて在國の間、父の三位追つて言下し給ひけるは、平家惡行年積つて宿運忽に盡きぬ。佛神にも放たれ、君にも捨てられぬ。故に花洛を出でて西海に漂ふ。それに九國の輩受取り弄ぶによつて、國には正祝官物抑留

し、庄には年貢所當を辨へず。其條既に朝家を背き奉り、逆惡を伴ふ科あり。返々不思議の所行なり。自餘は知らず當國に於ては、あなかしこ入るべからず。是私の計らひにあらず、一院の御諚なり。但當國に限らず、九國の人皆院宣に隨ふべき者、一味同心に平家を追討すべし。若忠あらん者は、勸賞は追つて聖斷あるべき由、子息賴經の許へ言下し給ひたりければ、賴經此趣を以て、當國の住人緒方の三郎惟義を召して下知せられたり。惟義仰を蒙りて、卽當國はいふに及ばず、九國二島の弓矢取る輩に相觸れたり。斯りければ臼杵・戶槻・松浦黨以下平家を背き、惟義が下知に隨ふ。原田の四郎太夫種直・菊地の次郎高直が一類計り、猶平家に附隨ひける。抑彼惟義といふは、大蛇の末なれば、身も健に心も剛にして、九國をも打隨へ、西國の大將軍せんと思ふ程の、おほけなき者なりけるに、一院の御諚とて、國司より斯る仰を蒙りける上は、身の面目と思ひて出立ち、數萬騎の兵を引率し、太宰府へ發向す。九國の輩、多く相隨ひけり。平家は此一兩月、安堵の思ありて、今はいかゞして都へ歸入すべしなど、謀を廻らし、寄合ひ〳〵評定しける處に、緒方の三郎が嫡子に小太

郎維久・次男野尻の次郎惟村とて、兄弟あり。次郎惟村を使者として、平家の方へ申しけるは、年頃御恩をも蒙りて、深く相傳の君と賴み參らせて候。其上十善帝王にて渡らせ給へば、二心なく奉公仕れども、平家都を出でて、西海に落下りおはしまし、朝敵となりて人民を惱す。速に九國の中を出し奉るべきの由、一院の院宣とて、國司より仰下さるゝの間、王土に身を入れて、詔命を背き難く候。疾々九國の境を出でさせ給ふべきにて候と申したれば、平大納言時忠の卿は、ひをくゝりの直垂に、紫蘭の袴着て、野尻の次郎に宣ひけるは、それ我君は天孫四十九世の正統、人王八十一代の御門、太上法皇の御孫、高倉の院の后の腹、第一の皇子にて渡らせ給へば、伊勢太神宮入替らせ給ひて、御裳裾川の流忝なく、上神代より傳へたる神璽寶劒内侍所も帶しておはします。正八幡宮も、定めて守り奉らん、九國の人民、爭でか容易く傾け奉るべき。又當家は、是平將軍貞盛が、相馬の小次郎將門を追討して、東八ヶ國を平げしより以來、故入道太政大臣の、右衞門の督信賴を誅戮して、朝家を鎭め奉りしに至るまで、代々國家の固めなり。然るに賴朝・義仲等、東國・北國の兇徒を相語らひ

て、我れ打勝ちたらば、國を取らせん庄を知らせんといふに賺されて打籠る。嗚呼の者共が、誠顏に與力同心して、官兵に向つて軍するを見習ひて、九國の輩、君を背き奉る條、返々不思議なり奇怪なり。就中鎭西の者共は、內種に召使はれ、殊に重恩を蒙るに非ずや。其好を忘れ、忽にはな豐後めが下知に隨ひ、當家を傾けんとの企、甚だ以て然るべからず。後漢の光武皇帝は、王莽に襲はれ、ぎよやうに落ち給ひたりしかども、帝位に卽き、我朝の天武天皇は、大友の王子に襲はれて、吉野の奧に入り給ひたりしかども、天下を治め給ひき。況や三種の神器を御身に隨へ給へり。我君終に都へ歸り入らせ給はぬ事、よも渡らせ給はじ。さればよく〳〵相計らひて、御力を附け參らすべし。後悔爭でか兼て顧みざるべけんやと宣ふ。野尻の次郎立歸つて、此由具にいひければ、父惟義、今は今昔は昔、速に平家を追出し奉るべし。院宣・國宣を下さるゝの上は、仔細にや及ぶべきなれども、流石日頃の好を思ひ奉つてこそ、先づ使をば參らせたるに、左樣に宣ふならば、時刻を廻らさず、追出し奉るべしとて、惟義は三萬餘騎の大勢を率して、博多の津より押寄せて、鬨を吐と作り

緒方維義平家を攻む

たりければ、平家の方には、肥後の守貞能を大將軍にて、菊地・原田が一黨を差向けられて、防ぎ戰ひけれども、大勢攻懸りければ、取る物も取敢ず、太宰府をこそ落ち給ひける。主上は駕輿丁なければ、玉の御輿をも奉らず、御供の公卿・殿上人は、奴の袴の稜を取り、女房・北の方は、裳裾唐衣を泥に引き、いつ習ひたるにはあらねども、恐ろしさの餘りに、悲しき事も覺えず、徒跣にて我先に〳〵と、箱崎の津に逃げ給ひけるぞ無慙なり。斯くて箱崎の津も、始終叶ひ難ければ、これより又兵藤次秀遠に具せらせて、筑前の國山鹿の城へぞ入らせ給ふ。惟義十萬餘騎にて押寄すると聞えければ、又取る物も取敢ず、山鹿の城をも落ちさせ給ひて、高瀨舟に乘移り、豐前の國柳といふ所へ、淀り入らせ給ひけり。澤邊の虫の聲弱り、磯打つ波に袖沾ほす。柳といふ所に着かせ給ひたりけるに、楊梅桃李を引植ゑて、九重の都に少し似たりければ、薩摩の守忠度のかく、

都なる九重の中戀しくば柳の御所を立寄りて見よ

主上女院を始め參らせて、內府以下の人々、豐前の國宇佐の宮へ參詣あり。社頭は

皇居となり、廊は月卿・雲客の居所となる。五位・六位の官人等、大鳥居に候ひ、庭上には九國の輩、弓箭甲冑を帶して並居たり。古りにし朱の玉垣、年經にけりと苔むして、いつも緑の柳の葉に、木綿垂懸けて隙ぞなき。御祈誓の趣は、主上舊都の還幸なり。都は既に山河遙に隔てゝ、雲のよそになりぬ。何事に付けても、心盡しの旅の空、身を浮舟の住居して、焦れて物をぞ覺しける。柳の御所には、さてもと思召して、七ヶ日渡らせ給ひけるが、又惟義寄するなど聞えければ、爰を出で給ふに、蜑の小舟に取乘り、風に任せ波に從ひて漂ひし程に、左中將清經は、舟の館の上に上りつゝ、東西南北見渡して、哀れはかなき世の中よ。いつまであるべき所とて、斯く憂目を見るらん。都をば源氏に落されぬ。鎭西をば惟義に追出されぬ。何れの國へ行くとも、遁るべき身にあらず。心苦しく物思ふこそ悲しけれとて、月曇なく晴れたる夜、靜に念佛申しつゝ、波の底にぞ沈まれける。是ぞ平家の憂事の始なる。

平氏屋島に着く事

平家屋島に籠る

長門は新中納言の國、目代は紀の民部の大輔通資なり。當國の檜物舟とて、まさの木積みたる舟百卅餘艘、てんていし奉る。是に乗移りて、四國の地へ着き給ふ。爰はよき城郭なりと申しければ、讃岐の屋島に下り居給ふ。城構しておはしましけり。あはれなるかな、昔は九重の内にして、金谷の春の花を弄び給ひしに、今は屋島の磯にして、壽永の秋の日を詠め給ふ事を。怪しの賤の臥床を、皇居と定むべきならねば、舟を御所と定め給ふ。大臣殿以下の人々は、舟子の苫屋に日を暮らし、萩の葉むけの夕嵐、ひとり丸寢の床の上、片しく袖は鹽に濡れ、明し暮らさせ給ひけり。波枕檝枕、思ひやられて哀れなり。磯邊の躑躅は紅の、露より折るかと疑はれ、五月の苫の雫は、古里の軒の玉水かと怪しみ給ふ。藻鹽に浸す旅衣、深き思ひに沈みけり。葦の葉に置く露の身の、脆き命も消えぬべし。洲崎に騒ぐ千鳥の聲、曉恨みを添ふるかな。そばゐに懸る梶の音、夜半に心を砕きけり。斯る住居は、上下いつかは習ふべきならねば、男も女も、只涙にのみ咽びて、乾かね袖をぞ絞りける。菊地太夫胤益、阿波の國より材木取らせ、屋島の浦に漕渡して、かたの如く内裏を立て、

主上を入れ奉る。其外大臣公卿の家々も、少々作られたり。阿波の民部成能、一千餘騎にて馳參る。夜晝君を守護し奉る。其上使者を四國に分散して相觸れけるは、一人西海に臨幸あり、三種の神器上下官人、玉體に離れ奉らず。今は是こそ都なれ。各急ぎ參賀して、敕命を承るべし。若忠あらん輩は、豈賞なからんやと披露すれば、四國の兵、皆成能が下知に靡きければ、物賴もしげに振舞ひもてあそび奉る。大臣殿、神妙なり、何事も成能が計らへとて、阿波守になされて、御氣色ゆゝしく見えたりけり。肥後守貞能は、九國を隨へんとて下りたりけれども、追出されて面目なし。菊地の次郎高直、肥前の守に任ず。原田の太夫種直、筑前の守になりたりけれども、惟義に追出され、國務にも及ばざりける上、心變りしたりければ、平家心弱く思はれけるに、成能斯樣に甲斐々々しく申行ひけるに依つて、暫く安堵せられけり。

時光、神器の御使を辭する事

法皇は、三種の神器都を出でさせ給ひて、外都に坐しまして、月日の重なる事を、斜

ならず御歎きあり、追討使を下さんとすれば、異國の寶ともなり、又海底にもや沈み給はんずらんと、兼て歎き思召し、世末になるといひ乍ら、まのあたり斯る不思議のあるこそ御心憂けれ。御慶大嘗會も既に近付く。いかゞして都へ返し入れ奉らんと、種々の御祈あり。又公卿僉議して、先づ御使を下されて、時忠の卿に仰含めらるべしと、各計らひ申しけり。誰か御使を勤むべきと評定ありけるに、修理の大夫時光といふ人は、平大納言時忠の子舅なり。されば此人を下されて、平大納言今歎き仰せらるべきなりと、諸卿申されけるに依つて、時光を御前に召されて、三種の神器、外土の境におはしまして、徒に月日を經給ふ事、御歎き淺からず。我朝の御大事、専ら此事にあり。汝は時忠に相親しみたれば、西海に罷下りて、都へ返し入れ奉るべきの由、彼卿に仰含めよと敕定あり。時光畏つて、院宣の御返事申して曰く、誠に朝家の御大事、何事か是に過ぎ侍るべき。敕定の上は、仔細を申すに及ばず、但今度西海へ下向仕りなば、再び歸り上りて、君を見參らせん事難し。其故は時忠都を落下りし時、西國へ相伴ふべき由、懇に語り申侍りしを、時光、御幸ならせ給はゞ、仔細に

や及ぶべき。さらずば思ひ寄らずと、心中に存せしに、君の御幸も候はざりしかば、止まり候ひぬ。其後も度々恨み口説きて、罷下るべきの由申上せ候ひしかども、縦ひ萬人の肩を越えて、三公の位に至るとても、爭でか君を離れ參らせて、外土の旅にさすらふべき。思ひ寄らざる事かなと存知て、返答にも及ばず能過ぎ候。抑時光下向仕りて、三種の神器事故なく、歸り上らせ給ふべくば、縱ひ身は徒になるとも、勅定に從つて風雲に鞭を打ち、夜を日に繼ぎて、馳下るべくこそ候に、神器の返り入らせ給はん事も有難く、時光安穩に上洛せん事も、又難しと申されければ、申す處も誠に不便なりとて下されざりけり。

頼朝征夷大將軍となる

源平水島軍の事

去程に頼朝は、居ながら征夷大將軍の院宣を下さる。平家追討の賞とぞ聞えし。中原の康定、宣使として關東へ下着す。其體美々しくぞ見えける。又平家は、讃岐の國屋島にあり乍ら、山陽道を打靡かして、都へ攻上るべしと聞えければ、木曾左馬の

頭義仲是を聞きて、信濃の國の住人矢田判官代義清・海野彌平四郎行廣を差遣す。其勢七千餘騎、山陽道の者共、多く源氏に相隨ひけり。平家は千餘艘の兵船を調へて、屋島の磯を漕出したり。源氏は備中の國水島が渡に陣を取りて、三百餘艘の兵船を揃へ、既に屋島へ寄せんとす。源平互に海を隔てゝ支へたり。壽永二年閏十月一日、水島にて源氏と平家と合戰を企つ。源氏等計りけるは、此島の南の地より、島の北の際まで、三町には過ぐべからず。島の東の海上より寄せて、島の北に、舟を陸まで組合せて、軍兵隙を爭ひて攻寄せば、先陣に進まん者、敵の爲に打取らるといふとも、幾干ならじ。後より次第に續きて、島の上へ攻入りて、城に火を懸けば、敵は舟へのみこそ競ひ乘らんずらめ。打物に堪へたらん輩、續きて乘移りて討取れ。島を攻落しなば、舟の寄所なくして、爭でか海上に日を重ぬべき。波に引かれ風に隨つて漂はんを、浦々渚々に、追詰め〳〵討取らんと定めてけり。平氏は又、舟をば島の西南に付けて、城の東北の木戸口を開いて、名を得たらん人々進み出でて、敵を靡かば、舟を並べて攻寄すべし。僞つて引退かば、島の上へ襲ひ來らんか。其時舟を

水島合戰

島の東北へ差廻して、三方より矢前揃へて射取るべし。敵怺へずして引退かば、舟を差並べて乘移り、分捕せんとぞ計りける。源氏の追手の大將軍は、海野彌平四郎行廣、搦手の大將軍は、足利の矢田判官代義清なり。五千餘人の兵共、三百餘艘の兵船、纜解いて押出し、夜の曙に漕寄せて、鬨の聲を上ぐる。平家待儲けたる事なれば、聲を合せて戰ふ。兩方の軍兵一萬餘人なれば、鬨の聲、海上に響き渡つて、寄せたる波の音も、聲を合するかとぞ覺えける。平家は本三位中將重衡・越前の三位通盛の卿を大將軍として七千餘人、二百艘の兵船に乘つて、島の西南より東北へ、二手に差廻す。源氏の兵船、兼て計りたる事なれば、南の地より、島の北の際まで差並べて、當國の住人を前に立てゝ、二千餘人甲を傾け、冑の袖を振合せて、一面に立並びて攻寄する。平家は是を見て、城の東北の木戸口を開く。能登守敎經は、紺に白き糸にて村千鳥を縫ひたる直垂に、紅威の鎧に、長覆輪の太刀を佩けり。越中の次郎兵衞盛嗣は、滋目結の直垂に、耳坐滋の冑を着たり。上總の五郎兵衞忠光は、縫摺の直垂に、赤威肩白の鎧着たり。飛驒の三郎兵衞景家は、褐の直垂に、大袷耳袖を、赤地の錦を

たち入れたるに、黑糸威の鎧を着せり。鎧の毛直垂の色、何れもとりぐ＼に華やかに見えたり。此外村田兵衞盛房・源八・馬之丞・米田を始として、名を得たる勇士卅餘人打出でて敵を招けば、矢田判官代義淸・仁科の次郎盛宗・高梨の六郎高直・海野彌平四郎行廣を始として三百餘人、木戶口へ攻寄せて戰ふ。平氏僞りて引退く。源氏勝に乘つて攻懸る。爰に島の兩方の船、南の沖西の島崎より差寄せて、敵の船を打鉤にて掻寄せ、組合せて乘移る。精兵を揃へて、城中並に兩方の船より散々に射る。源氏の船恢へずして引退く。西風烈しく吹きて、船ども搖れて打合せければ、東國・北國の輩、舟戰は習はぬ事なれば、船に立ち得ずして、舟底へのみ重なり入る。平家の輩は、舟軍自在を得たりければ、亂れ入りて散々に切る。面を向ふる者は少し。舷に近付く者をば、取つて海に入れ、底にあるものをば、冑の袖を踏まへて首を掻き、城の中よりは、勝鼓を打つて罵る。斯る程に天俄に曇りて、日の光も見えず、闇の夜の如くになりたれば、源氏の軍兵ども、日蝕とは知らず、いとゞ東西を失つて、船を退きて、何地ともなく風に從つて遁れ行く。平氏の兵共は、兼て知りにければ、愈鬨

を作り、重ねて攻戰ふ。矢田の判官代義淸は、舟に搖られて立ち得ざりければ、舩に尻を懸けて甲を脫ぎ捨て、太刀を拔いて戰ふ。越中の次郎兵衛盛嗣は是を見て、甲を傾け打つて懸るを、義淸立上りて、甲の鉢を打つ。强く打たれて、甲を脫いで落ちにけり。盛嗣目昏れて、太刀の打所は覺えざりけれども、打違へざりけるに、義淸が右の顏を、筋違に、押付の板に切付けたりければ、打伏に臥しけるを、引仰向けて首を掻きてげり。海野の四郎行廣は、村田兵衛盛房と、舩にて取組みて海へ入りけるを、飛驒の三郎兵衛景家は、勇士の者なりければ、盛房が總角を取りて引返して、抱き合ひたりけるを、兩人ながら船へ投入れてけり。行廣刀を拔いて、盛房が起上らんとするを踏まへて、冑の草摺を引上げて刺す。景家是を見て、行廣が甲を引仰向けて、首を掻きてけり。能登守敎經は、精兵の手利なりければ、一として空矢なし。高梨の次郎高信を始として、十三人射取られけり。源氏の軍敗れにければ、打殘されたる者共、舩に乘移り、飛下り〳〵落行きけるを、平家は船の中に、兼て鞍置馬を用意して、船共の纜切離し渚に漕寄せ、舟腹を乘傾け、馬ども追下しひたと乘る。能

登守一陣に進んで攻めかゝりければ、討たるゝ者は多く、助かる者は少なし。或は備前の國へ落つるもあり、或は都へ上るもあり。海へ入りて死する者は其數を知らず。舟にて討取らるゝ源氏には、矢田・高梨・海野を始として、千二百人が首切かけたり。

木曾備中下向、齋明討たる附妹尾・倉光討つ事

斯りければ當國の住人等、皆平氏に歸伏してけり。都へ落上りたりける者共、木曾に斯くといひければ、義仲安からずとて、一萬餘騎を相具し、夜を日に繼ぎ、備中の國へ馳下る。去ぬる六月、北陸道の合戰に生捕られたりし平泉寺の長吏齋明をば、六條川原にて首を切る。妹尾の太郎兼康は、木を樵り草を刈る迄こそなけれども、二心なく木曾に使はれけり。是はいかにもして再び故鄕に歸り、今一度舊主を見奉り、平家の味方になつて、合戰を遂げんとの謀なり。木曾は是をも知らずして、齋明と同時に切るべかりけれども、西國の道しるべとて、許し具し給ひけり。壽永二年

齋明切らる

閏十月四日、木曾都を出でて、播磨路に懸りて今宿に着く。今宿より妹尾を先達にて、備中の國へ下らんとす。當國の船坂山にて、兼康、木曾にいひけるは、暇を給はりて、先立つて罷下り、相親しむ者共に、御馬の草をも用意せさせ候はゞや。斯る亂れの世なれば、俄の事は、治め難きにも侍るべしと申す間、さもあるべしとて許し遣す。木曾は爰に三ヶ日の逗留といふ。兼康賺し畢せたりと思ひて、子息小太郎兼通・郎等宗俊を相具して下りけるが、加賀の國の住人倉光次郎成澄を招いていひけるは、やゝ倉光殿、我は御邊に生捕られ、遁れ難き命を生き、剩へ西國の尋承（たづねうけたまはり）を給ふ。故鄕に歸つて、再び妻子を相見ん事も、御恩とのみ思ひ奉る。若し人手にかゝりたらば、爭でか命も生き、故鄕へも歸るべき。さても兼康生捕り給ひたる勸賞に、備中の妹尾を、勳功の賞に申給ひて下り給へかし。同じくは打連れ奉らんといふ。倉光次郎誠よと思ひて、木曾に所望しければ、則下文給ふ。倉光喜んで、妹尾に打具して下る。兼康道すがら思ひけるは、妹尾まで行きぬるものならば、新司とて、庄内一はなびにてもてなし、思付く者ありて勢付きなば、いかにも叶ひ難しと思ひて、備前の國

倉光成澄妹尾兼康に討たる

和氣の渡より東に、藤野寺といふ古き御堂に下り居て、兼康申しけるは、やあ倉光殿、妹尾は今は程近し。頓て打具し奉るべけれども、世間も急々に、所も合期せん事難し。兼康先立つて、所の樣をも見廻り、又親しき者共にも相觸れて、斯る人こそ下向し給へとて、御もてなしをも用意させさせんといひければ、倉光は、何やうにも能き樣に相計らひ給へとて、爰に止まる。兼康は賺し畢せて、先立つて草壁といふ所に馳付いて、使を方々へ遣して、親しき者四五人招き寄せて、夜討にせんとぞ出立ちける。倉光爭でか斯くと知るべきなれば、今や〳〵と待つ處に、夜半計りに兼康は、十餘騎の勢にて、藤野寺に押寄せて、倉光次郎を夜討にしてこそ歸りにける。此倉光といふは、隨分健に立ちて、度々の軍にも不覺せず。北國の合戰に、妹尾を生捕りたりし者が、兼康に賺されて、討たれぬることこそ無慙なれ。人の申しけるは、何事も運の盡くるは力なき事なれども、倉光は北國の住人ながら、昔より馬の鼻も向かぬ白山權現の御領、末寺末社の庄園を殄倒し、神事佛事の供米を押領し、剩へ又平泉寺の長吏齋明威儀師が許されしをも、種々に讒訴して、六條川原にて首を刎ねなどしたりし

かば、神の咎人の恨の報にこそ、斯くおめ〳〵とは討たれたるらめとぞ申しける。妹尾の太郎兼康は、倉光を夜討にして、後に人を四方に走らかし、兼康こそ、北國の軍に生捕られたりつるが、平家の御行末の戀しさに、兎角あやつりて、再び故鄉に兎れ歸りたれ。木曾は既に船坂山に着き給へり。平家へ參らんと思はん者、我に志あらん人は、兼康に付きて、木曾を一矢射よやと觸れたりけり。妹尾にも限らず、其邊近き者共、はか〴〵しきは兼て屋島へ參りぬ。馬鞍も持たず、具足も足らはぬ輩が是を聞きて、柿の袴にせめひも結び、布の小袖に東折したり。佩きたる弓矢に、白けたる太刀刀持ち抔して、馬に乘る者は少なく、多くは徒跣にて、爰彼より二人三人と走り集まりたり。其勢三百人計りありけれども、そも物に叶ふべきは、僅に十人廿人には過ぎざりけり。兼康は此勢を相具して、福輪寺の菴を掘切つて、ひしうゑ逆茂木引き抔して、馬も人も通ひ難く構へたり。彼菴といふは、遠さ廿餘町、北は峨々たる山、人跡絕えたるが如し。南に渺々たる沼田、遙に南海に連なりたり。西には岩井といふ所あり。これをば打過ぎて、當國の一の宮をも過ぎ、佐々が迫に懸る。

此佐々が迫といふ所は、東西は高き山、谷に一つの細道あり。左右の山の上に、石弩多く張立てたり。後には津高の鄕とて、谷口は沼なりければ、究竟の城なり。敵何萬騎向うたりとも、容易く攻落し難き所なり。是には兵共を差置きて、我身は唐河の宿・板藏の城に引籠りて、今や〳〵と木曾を待ちけり。

妹尾、板藏の城戰の事

去程に倉光次郎の下人、夜討に打洩られたる者、船坂山に走り歸りて、木曾に斯くと告げければ、木曾驚き騷ぎて、夜討の勢は何程かありつると問ふ。闇さは闇し、夜目にて一定の數は知らず。二三十人にもやと見え侍りき。妹尾が所爲と覺ゆる事は、我身は先立つて、馬の草藁用意して、使を參らせん程は、暫く是に相待ち給へとて、古御堂に下し置き奉り、夜に入る迄使もなし。待てども〳〵人も見えず。結句は斯くなり給ひぬ。一定君をも伺ひ參らせんと覺え候。其上妹尾は國の人なり。勢も付くまじ。ゆゝしき大事なり。急ぎ兼康を討たせ給ふべくや候らんと申す。兼康

が所爲勿論なり。さらば急げとて、木曾三百餘騎にて今宿を立ち、夜を日に繼いで馳下り給ひける程に、其曉に三石に着く。明日藤野寺に着く。倉光爰にして討たれにけりと哀れに思ひ、爰をも打過ぎ、福輪寺の巷を見れば、堀を掘切つて逆茂木引き、容易く爰を通り難し。いかゞして閑道を知らんとて、其邊を打廻つて里人を尋ね、賴隆といふ者を尋出していひけるは、妹尾の太郎兼康を、西國の案内者として、死罪を宥めて古里に返し遣す處に、却て義仲に弓を彎かんとす。彼を攻めんずるに道を得ず。通道ありなんやと宣へば、候なんとて、卽賴隆山しるべして先陣に進み、北路に懸り、鳥が嶽といふ所を廻りて、佐々の井より、鬨を吐と作り懸けて、佐々が迫を攻めたりけり。妹尾は兼て、木曾は今宿に三日の逗留なれば、縱ひ此事洩れ聞えて寄するとも、福輪寺の邊へは寄せ難し。されば只今の事にてはよもあらじと、打延べて思ひけるに、鬨を作りかけて寄せたれば、駈武者共は、一矢射るに及ばず、皆散散に落行きけり。自ら先立つ者は助かりけれども、返し合する者の助かるはなし。深田に追入れ〳〵、切殺し射殺す。佐々が迫を攻落して、妹尾が籠りたる唐河の宿・

板藏の城に押寄せて閧を作る。妹尾思ひ設けたる事なれば、矢束解いて散々に射る。木曾は、妹尾遁すな。兼康餘すな。攻めよ〳〵と下知しければ、郎等共入替へ入替へ射合ひたり。妹尾矢種盡きければ、主從三人山に籠る。それより屋島へ參らんと赴きける程に、子息小太郎兼通は、肥太りたる男にて、徒に合期せざりければ、足を痛みて山中に止まる。兼康は思切り、小太郎を捨てゝ落行きけれども、恩愛の道の悲しさは、行けども〳〵歩まれず。小太郎又父の兼康を呼びければ、兼康歸つて如何にと問ふ。させる用事は侍らず、爰を最後と存ずれば、今一度見奉らんとてと答へ、涙を流しければ、兼康も袖を絞りけり。一年新大納言成親・丹波の少將成經に、情なく當り奉りたりしに、親子の中の悲しさは、今こそ思ひ知られけれ。敵近く攻寄せければ、兼康又思切り、深く山へ落入りけるが、眼に霧降りて進まれず。郎等宗俊を呼びて、兼康は數千人の敵に向ひて戰ふにも、四方晴れて見ゆれども、小太郎を捨てゝ落行けば、涙に暮れて道見えず。兼ては屋島に參りて、今一度君をも見奉り、木曾に仕へし事をも申さばやと思ひつれども、今は恩愛の中の悲しければ、小太郎

妹尾兼康自殺

と一所にて、討死せんと思ふはいかゞあるべきといふ。宗俊、尤さこそ侍ふべけれ。弓矢の家に生れぬれば、人毎に、なき跡までも名を惜む習なり。明日は人の申さんやうは、兼康殿こそ、いつまで命を生きんとて、山中に子を捨て落行きぬれと、いはれん事も口惜き御事なるべし。主を見奉らんと思召すも、子の末の世思召す故なり。小太郎殿亡び給ひなんには、何事も、何かはし給ふべき。只返し合せて、三人同心に一軍して、死出の山をも離れず、御供仕らんといひければ、兼康然るべしとて、道より歸り、足病み居たる小太郎が許に行き、前には柴垣をかき、後には大木を小楯にして敵を待つ處に、木曾左馬の頭三百餘騎にて、後見に付きて尋ねけるに、兼康爰にありとて、幾程助かるべき事ならねば、小太郎を後に立て、我身は矢表に差顯はれて、差詰め差詰め散々に射る。十三騎に手負ふせて、馬九疋射殺し、矢種も又盡きければ、今は斯くとて、腹を搔切りて失せにけり。小太郎兼通も、引取り〳〵射けるが、父が自害を見て、同じ枕に腹切つて臥しにけり。郎等宗俊も、手の定り戰うて、柴垣に上りて、剛の者の死ぬるを見よやとて、太刀の切先口に含み、逆に落貫かれてぞ死しに

ける。木曾は、妹尾父子が首を切り、備中の國鷺の森にかけて引退き、萬壽の庄に陣を取り、後陣の勢を待儲けて、是より平家追討の爲、屋島へ發向をぞ議定しける。

行家謀叛に依つて木曾上洛の事

斯りける處に、木曾西國下向の時、乳人子の樋口の次郎兼光をば、京の守護に候へとて、止め置きたりけるが、十一月二日早馬を立てゝ、十郎藏人殿こそ院宣を給はり、木曾殿を誅し奉るべき由聞え候へと、申下したりければ、木曾大に驚きて、平家を打捨てゝ、夜を日に繼いで馳上りけり。

行家と平氏と室山合戰の事

十郎藏人是を聞きて、千騎の勢にて差違へて、丹波路より、播磨の國へ下る。平家は、折節播磨の室に着き給ひたりけるが、此事を聞きて、門脇新中納言父子・本三位中將重衡一萬餘騎にて、室山坂に陣を取りて、十郎藏人を相待ちけり。討手を五に分けた

り。一陣飛驒の三郎左衞門の尉景經五百餘騎、二陣越中の次郎兵衞盛嗣五百餘騎、三陣上總の五郎兵衞忠光五百餘騎、四陣伊賀の平內左衞門の尉家長五百餘騎、五陣門脇新中納言八千餘騎にて控へたり。十郎藏人是をば知らず、室山を打つ程に、飛驒の三郎左衞門の尉進み出でて、散々に暫く戰うて、景經弓手の小くろの中へ引退く。源氏爰を駈通りて二陣に付く。越中の次郎兵衞道を切つて防ぎけれども、戰ひ兼ねて盛嗣右手の林へ引籠る。源氏是を打破つて三陣に付く。上總の五郎兵衞出塞がつて戰ひけれども、忠光負色になつて、北の麓へ追下さる。源氏爰を破つて四陣に付く。伊賀の平內左衞門の尉、待受けて戰ひけるが、家長も叶はずして、南の谷へ追落さる。源氏四陣を破つて五陣に付く。門脇の新中納言、八千餘騎にて控へ給へり。大勢支へ塞がつて戰ひける中に、新中納言の侍に、紀の七・紀の八・紀の九郎とて、兄弟三人ありけるが、劣らぬ剛の者、精兵の手利なりけるが、死生知らずに進み出でて、矢尻を揃へて、差詰め引取り散々に射ければ、面を向ふべき様なくして、十郎藏人取つて返して落ちければ、五陣の大勢、鬨を作り懸けて攻付けたり。是を聞

きて四陣三陣二陣一陣、道を塞ぎ鬨を合せて待つ處に、源氏四陣を破らんとす。是も矢尻を揃へて射ければ、十郎藏人は、敵に計られにけりと心得て、其時は射るにも及ばず切るにも能はず、錏を傾けて、冑の袖を眞向に當てゝ、弓を脇に挾み、太刀を肩に掛けて、通れ者共よ若黨とて、四陣を駈拔けて見たりければ、千騎の勢、三百騎は討たれて、七百騎になる。能登の守敎經・伊賀の平內左衛門家長・田太の左衛門生職・駿河の兵衛光成・飛驒の三郎左衛門の尉景經を始として五百餘騎、南山の麓より、馬の鼻を並べて、北へ向きて懸り、陣の內より、豐後の右衛門賴弘・越中の次郎兵衛盛嗣・上總の五郎兵衛忠光・矢野の右馬の尉家村・同じく七郎兵衛高村を始として三百餘騎、東へ向きて、源氏を中に挾みて懸る。源氏平家兩陣亂れ戰ひて、或は弓手に駈並べて討取るもあり、或は妻手に相逢うて打落すもあり、四方に馳せ亂れて、懸合ひ懸組み、馬の足音矢叫の聲、山を響かし地を響かす。源氏も平氏も、何の隙ありとも見えざりけり。爰に美作の國の住人惠比入道守信・播磨の國の住人佐用黨・利季・兼知を始として七百餘騎、西の山の端より、鬨を作つて懸りければ、源氏三方より押

行家敗る

圍まれて、軍忽に破れて、東を指して落行きけり。平家勝に乘つて、おもの射にして射取りける。藏人行家は、赤地の錦の直垂に、黑糸縅の鎧着て、鴾月毛の馬に乘り、山田の次郎重弘、三遠雁の直垂に、紫縅の鎧着て、黑の馬にぞ乘つたりける。卅餘騎を相具して、東の原を北へ向きて引退く。景經・忠光・盛嗣・家村等、鞭を打ち鐮を並べて追攻めければ、伊賀の國の住人柘植の十郎有重・美濃の國の住人折戸の六郎重行を始として十一騎、折塞がつて戰ふ。有重は、盛嗣に馳合せて、押並べて組みければ、盛嗣立上りて、左の手にて有重が甲を引落し、髻を取つて鞍の前輪に引付けて首を掻き、太刀の切先に貫きて、馬を控へて歩ませ行く。誠にゆゝしくぞ見えける。重行は景經に組まれて、首取られにけり。此間に行家・重弘は遁れ得て、和泉の國へ越え、それより河内の國長野の城に籠りける。柘植の十郎有重・折戸の六郎重行を始として、百八十八人の首切つて梟けたりければ、備前・播磨兩國の勇士等、皆平家に附きにけり。

木曾洛中狼藉の事

去程に源氏世を取りたりとても、其緣ならん者は、させる何の悦かあるべきなれども、人の心のうたてさは、平家の方の弱く、源氏の軍の勝つといふをば、興に入りて悦び合ひけり。さはあれども、平家西國へ落下り給ひて後は、世の騷に引かれて、貧財雜具東西に運び隱れ、京白川にもてさまよひければ、引失する物も多く、深き井の中に入り、穴を掘りて埋みなどせしかば、打破り朽損じて失せしなり。木曾五萬餘騎を引率して上洛して、武士京中に滿々て、家々に亂れ入り、門には白旗を打立てゝ、家主を追出し、財寶を追捕す。只今食はんとて、箸を立つる飯をも奪ひ取りければ、口を空しうして、命生くべきやうなし。道を通る者も、衣裳を剝がれ、手に持ち肩に荷へる物をも、押へ取りければ、安き心なし。淺ましなどはいふ計りなし。然るべき大臣公卿の御所などこそ、さすが憚りて狼藉をばせざりけれ。平家の代には、六波羅の一家といひしかば、只恐れをなす計りにてありしに、斯樣に目を見合せて、食

物を奪ひ取る事やはある。心憂き事なりと、老いたるも若きも歎きけり。加賀の國の住人井上次郎師方が申行ふに依つて、木曾斯る惡事をするとぞ聞えし。只人民の煩のみにあらず、賀茂・八幡・稻荷・祇園より始めて、神社・佛閣・權門・勢家の御領をも嫌はず、靑田を刈取りて秣に飼ひ、堂塔卒都婆などを破り取りて薪としけり。狼藉斜ならず、殆ど人倫の所爲とも覺えず、遙にかへ劣りしたる源氏なりとぞ沙汰しける。

源平軍物語卷第八終

源平軍物語卷第九

木曾追討すべき由附木曾怠狀山門に擧ぐる事

去程に法皇は、世上の狼藉、人民の侘傺歎き思召して、壹岐判官知康を以て、此由を木曾が許へ仰せ下されけれども、院宣を事ともせず、愈狼藉止まざりければ、義仲を追討して、都の狼藉を鎭めらるべき由、知康申行ひけり。然るべき御氣色なりければ、人にも仰合せられずして、犇々と事定まりぬ。法皇は、天台座主明雲僧正等の長吏八條の宮を、法住寺の御所に招き請じ在しまして、延曆・園城の惡僧等を召參らすべき由仰せけり。公卿殿上人も御催あり。又諸寺諸山の執行別當に仰せて、兵を召されければ、日頃木曾に深く契りたりける源氏共も、思々に參り籠る。山門の大衆、法皇の敕諚とて、座主僧正より催促せられければ、山上坂本の騷動斜ならず、木曾は

北國所々の合戰に打勝つて、都へ上らんとせし時、越前の國府より牒狀を上げ、衆徒を語らひてこそ、天台山に上り、平家をば攻落したりしかば、いつまでも賴まんと思ひけるに、洛中貴賤の歎き、山門庄園の煩なる間、大衆院宣に隨ひ奉りて、木曾を討つべきと聞えければ、義仲怠狀を以て、山門へ上げ、色々理りけれども、山門の衆徒是にも鎭まらず、彌蜂起の由聞えけり。

木曾、法皇を推籠め奉る事

義仲、法住寺殿へ押寄す

去程に木曾義仲は、院の御所法住寺殿を攻むべき由申す。今井・樋口諫めけるは、十善の君に向ひ奉りて、弓を引き給はん事、神明豈許し給はんや。只幾度も過なき由を申させ給ひて、首を延べて參り給へと諫めける。木曾は、我年來多くの軍をしけれども、一度も敵に後を見せず、十善の帝にて在しますとも、甲を脫ぎ、おめ〳〵と降人には參るまじ。只打立てとて、都合其勢六千餘騎、十一月十九日に、院の御所法住寺殿へ押寄せける。官軍一萬餘騎籠りけれども、僧法師冠者原、あるに甲斐な

主上、閑院殿へ御幸あらせらる

き者共を召されければ、物の樣にも立たず、官軍打負け、御所に火懸りければ、法皇御輿に召され、五條の内裏へ御幸なる。公卿殿上人も打伏せられ、衣裳剝取られ、淺ましかりし事共なり。されども豐後の少將宗長一人、法皇の御供には候ひける。斯くて主上の御事は、沙汰し申す人もなかりけるに、七條の侍從信清・紀伊の守範光只二人附參らせて、汀にて御舟に乘せ奉り、池の中へ差出す。御舟へ矢の來る事、降る雨の如し。信淸聲を上げて、是は内の渡らせ給ふぞ。何とて斯く狼藉は仕るぞとありければ、木曾は、國王を内と申すといふ事を知らざりければ、内とは、己等が妻をいふぞと心得て、内とは妻が事にや。只皆射殺せと下知しければ、いとゞ矢をぞ參らせける。信淸心得て、船底に主上を抱き參らせて、高聲に申しけるは、御舟には國王の渡らせ給ふぞやと叫びけるにこそ、武士も靜まりける。されども舟の中に抱へ參らせて、夜に入りて、坊城殿へ入れ參らせつゝ、それより閑院殿へ行幸なる。木曾は軍に打勝つて鬨を作り、其後はいよ〳〵惡行を致しける。三條中納言朝方の卿以下、四十九人の官職を止めければ、平家の惡行には、猶超過せりとつぶやきける。

木曾平家に與せんと擬す幷維盛歎きの事

平家は、室山・水島二ヶ度の合戰に打勝つて、木曾追討の爲に、西國より攻上ると聞えけり。左馬の頭義仲は、東西に攻立てられて、いかゞせんと案じけるが、兵衛の佐に、始終中よかるまじ。今は平家と一つになつて、兵衛の佐を攻めんと思ふ仔細を、讃岐の屋島へ申したりければ、大臣殿は、大に喜び給ひけり。日頃祈の甲斐ありて、帝運の重ねて開け、再び故鄕に行幸あらん事目出たければ、申す處本意に思召し、御迎に參るべきと宣ひけるを、新中納言計らひ申されけるは、都に歸り上らん事は、誠に嬉しく侍れども、木曾が爲に花洛を攻落され、今又義仲と一にならん事然るべからず。賴朝が存知思はん處恥かしかるべし。弓矢取る身は、後の代迄も名こそ惜しけれ。十善の君、斯くて渡らせ給ひければ、冑を脫ぎ弓を平めて降人に參り、帝王を守護し奉るべしと仰あるべしとこそ存ずれと宣ひければ、尤此儀然るべしとて、其定めに返事せられけり。木曾是を聞きて、降人とは何事ぞ。武士の身と生れて、手

を合せ膝を屈めて敵に向はん事、身の恥家の瑕なり。昔より源平力を並べて、士卒勢を爭ふ。今更平家に降を乞ふべからず。賴朝歸り聞かん事も、後代の人の口も面目なしとて、降せざりけり。木曾都へ打入りて後は、在々所々を追捕して、貴賤上下安堵せず、神領寺領押領して、國衙庄園浪々せり。果は法住寺の御所をも燒亡して、法皇を押籠め奉り、高僧侍臣を討害し、公卿殿上人を縛め置き、四十九人の官職を止めける事、平家傳へ聞きて、寄合ひ〳〵口々に申されけるは、君も臣も、山門も南都も、此一門を背きて、源氏の世になしたれども、人の歎きはいやましなりと、嬉しき事に思して、興に入りてぞ笑ひ勇み給へる。權の介三位の中將維盛は、月日の過行く儘に、明けても暮れても、故鄕のみ戀しく思しければ、假初なる人をも語らひ給はず、與三兵衞重景・石童丸など、御傍近く伏して、さても此人々は、如何なる有樣にて、いかにしてか在すらん。誰かは哀れいとほしともいふらん。我身の置所だにあらざる故、幼き者共をさへ引具せで、いか計りの事思ふらん。振捨てゝ出し心强さ、急ぎ迎へ取らんと賺し置きし事も、程經ればいかに怨めしく思ふらんなんど宣ひ

續けて、御淚せき敢ず、流し給ひけるぞいとほしき。北の方は、此有樣傳へ聞き給ひて、唯如何ならん人をも語らひ給ひ、旅の心をも慰め給へかし。さりとても愚なるべきかは、心苦しくこそとて、引かづき伏し給ふ。盡きせぬものは御淚計りなり。

木曾、內裏守護の事

木曾は五條の內裏に候て、嚴しく法皇を守護し奉る間、上下恐をなして、參り寄る人なし。合戰の時の生捕の人々も、縛め置きたりければ、只今如何なる目にか合はんと、膽魂を消す。此木曾、押して松殿の御聟になりたりければ、松殿いみじとは思召さゞりけれども、法皇の御事、御痛はしく思召し、內々義仲を召されて、御意見ありとかや。木曾もさすが木石ならねば、理と思ひて、縛め置きたる人々をも許し、騷しき事をも止めてけり。十二月十日、法皇は五條の內裏より、大膳の大夫業忠が六條の西の洞院の家に御幸なる。頓て其日より、歲末の御修法始め行はれけり。松殿の御教訓の末にやと覺えたり。十三日木曾除目行ひて、我身は左馬の頭兼伊豫守なり

し上に、院の御厩の別當になつて、丹波の國五ヶの庄知行し、畿内近國の庄園、院宮原の御領・神田・佛田をいはず、思ふ様に管領して、憚なく振舞ひけり。

京・屋島朝拜無レ之附義仲將軍宣の事

壽永三年四月十六日、改元あつて元暦といふ。元暦元年正月一日、院は去年の十二月十日、五條内裏より、六條西の洞院の業忠が家に在しましけれども、彼家板葺の門、三間の寢殿階陰なかりければ、禮義行はれ難うして、拜禮も止められけり。又朝拜もなし。節會計りを行はれける。院の拜禮なければ、殿下の拜禮も行はれず、平家は讃岐の國屋島の磯に春を迎へて、年の始なりけれども、元日元三の儀式事宜しからず。主上おはしましけれども、四方拜もなし。朝拜もなし。小朝拜もなし。節會も行はれず、氷の様も參らず、はらかも奏せず。世は亂れたりしかども、都にては、斯くはなかりしものをと哀れなり。靑陽の春も來りしかば、花の朝月の夜、詩歌・管絃・鞠・小弓・扇合・繪合、様々御遊覽召出して、男女差集ひては、只泣くより外の事ぞなき。

同じき六日、義仲正五位の下に敍す。官位既に賴朝に進む。是凶害の源、亂を招くの端にやと後怖ろし。正月九日平氏和親の由を申請け、是に依つて仙洞より所存を申すべきの由、義仲が許へ仰遣されけり。此事義仲許容せざりけるにや、同じき十日、木曾、平氏追討の爲め、西國へ下らんとて、門出すと聞えし。去程に東國より、蒲の御曹子・九郎御曹子兩人を大將軍として、數萬騎の軍兵を差上すと、豫ては聞えしかども、さしてやと思ひけるに、範賴・義經既に美濃の國に着き、着到勢揃して、不破の關にて二手に分けて、宇治・勢多より攻入るべしと聞えければ、義仲、西國の發向を止む。又平家、四國・西國の軍兵を率して、福原迄攻上つて、既に都へ打入らんとする由聞えければ、木曾、安堵の思ぞなかりける。同じき十一日、左馬の頭義仲、征夷大將軍たるべきの由宣下せらる。是は木曾ひたすら荒えびすにて、禮義を亂り法度を失つて、心の儘に振舞ひければ、必ず洛中にして、僻事出で來りなん。されば東國の武士、代り入らん迄の御計らひなりけり。是をば木曾、いかでか知るべきなれば、只今亡びんとする義仲、大に畏り嬉びけるこそ哀れなれ。同じき十七日、備前の

行家兵を擧ぐ

守行家、河內の國に住して叛心あるの由聞えければ、木曾彼を追討の爲に、樋口兼光を差遣す。其勢五百餘騎なり。同じき十九日に、長野の城に寄せて合戰す。藏人判官家光、兼光が爲に討たれにけり。行家軍敗れて逃げ落ちて、高野山に籠りける。生捕三十人、切つて懸くる首七十人とぞ聞えし。去程に範賴・義經數萬騎の軍兵、伊勢の國に着くと聞えしかば、木曾大に驚き、宇治・勢多の橋を引きて、軍兵を差遣す。

行家敗る

範賴・義經京入の事

範賴義經等義仲追討

大手・搦手、尾張の國熱田の社より相分つて、宇治・勢多へ向ひけり。大手の大將軍は、蒲の冠者範賴、相隨ふ輩には、武田の太郎信義・かゞみの次郎遠光・一條の次郎忠賴・小笠原の次郎長淸・伊澤の五郎信光・板垣の三郎兼信・逸見の冠者義淸・稻毛の三郎重成・榛谷の四郎重朝・森の五郎行重・千葉の介經種・子息の小太郎胤正・相馬の次郎成種・國府の五郎胤家・金子の十郎家忠・同與一近範・源八廣綱・渡柳の彌五郎淸忠・

多々羅の五郎義春・同六郎光義・別府の太郎義行・長井の太郎義兼・筒井の四郎義行・葦名の太郎淸高・野與・山口・山名・里見・太田・高山・仁科・廣瀬、家の子郎等打具して三萬五千騎餘、東海道を上りに、宿々山河打過ぎて、近江の國勢多の長橋に着きにけり。搦手の大將軍は九郎冠者義經、相隨ふ輩には、安田の三郎義定・大内の太郎維義・佐々木の四郎高綱・畠山の次郎重忠・河越の太郎重賴・子息小太郎重房・師岡兵衛重經・梶原平三景時・子息源太景季・同平次景高・同三郎景家・曾我の太郎祐信・土屋の三郎宗遠・土肥の次郎實平・嫡子彌太郎遠平・佐原の十郎義連・和田の小太郎義盛・敕使河原の權三郎有直・庄の三郎忠家・勝太八郎行平・猪俣金平六範綱・岡部の六彌太忠澄・後藤兵衛實基・新兵衛の尉基淸・鹿島の六郎維明・片岡の太郎經春・弟八郎爲春・澁谷の右馬の尉重助・平山の武者所季重・奥州の佐藤三郎繼信・弟四郎忠信・伊勢の三郎義盛・江田の源三・熊井太郎・大内の太郎・長野の三郎を始として、家の子郎等相具して、二萬五千餘騎とぞ聞えし。　抑九郎義經は、伊勢の國より、伊賀路に懸つて攻上りけるが、音に聞ゆる鈴鹿山の麓關を通るにも、去年の白雪村消えて、谷の氷も猶殘れり。

見る儘に跡絶えぬればすゞか山雪こそ關のとざしなりけり

と詠じけるを思續けて、八十瀬の白波分け過ぎつゝ、加太山にぞ懸りける。此山の體たらく、峯高うして峙てゝ上る。巖嶮うして身を峙てゝ傳ひ、谷深うして漲り落つる水早ければ、足を危くして渡る。河を渡りては山路に上り、山を越えては河瀬に浸る。輿を催す所もあり、心を碎く砌もあり。斯くて山路を出でぬれば、當國の一の宮、南宮大菩薩の御前をば、心計りに再拜して、暫く新居川原に控へたり。西に平岡あり。九郎義經里人を招きて、是より宇治へ向はんには、何地か道はよきと問ひ給へば、西に見え候平岡をば、あをだ山と申す。それより先に首落の瀧といふ所を通るをば、近く候と申す。其外又道はなきかと問ひ給へば、是より長田の里、花園といふ所を廻りて、射手の大明神の御前を、笠置に懸つても、道よく候と申す。射手の大明神とは、如何なる神にておはしますぞと問ひ給へば、それ迄の事は爭でか知り候べき。いとゝとは射手と書きて候なれども、申易きに付きて、いとゝと申し候といひければ、九郎義經は、戰場に向ふに、あをだ山・首落の瀧禁忌なり。射手の明神然る

義經義仲宇治川合戰

べしとて、長田の里・花園を廻り、射手の大明神の御前にて下馬し給ひ、所願成就と祈誓して、當來だうしの彌勒菩薩の笠置寺、今日みかの原・和泉川、河風寒く打過ぎて、はうその森を弓手になし、高倉の宮の討たれさせ給ひし光明山の鳥居の前を右手に見て、山城の國宇治の郡平等院の北の邊、富家の渡へ着き給ふ。元曆元年正月廿日、大手搦手六萬餘騎、宇治・勢多兩所に着きにけり。去程に木曾義仲は、折節勢こそなかりけれ。樋口の次郞兼光は、十郞藏人行家を攻めんとて、河內の國へ越しぬ。今井の四郞兼平・方等の三郞先生義弘五百餘騎にて、勢多の手に差遣す。根井の小彌太行親・楯の六郞親忠・しんの六郞親直・仁科・高梨三百餘騎にて、宇治の手に差遣す。木曾は力者廿人揃へて、關東の兵强くば、院を取り參らせて、西國へ御幸なし參らせんと支度して、上野の國の住人那和の太郞弘澄を相具して、院の御所を守護し奉る。其勢僅に百騎許りには過ぎざりけり。九郞義經、川端に押寄せ見給へば、橋板を破り取つて、向の岸に搔楯かき、櫓構へたり。水は增して底見えず、其上亂杭逆茂木隙なく打つて、大綱小綱引張りて流し掛けたれば、鴛鴦・鴨などの水鳥も、容

易く潜り通るべしとも見えざりけり。川の端分内狹くして、打望みたる者、四五千騎には過ぎず。二萬餘騎は寄付くべき所なければ、只徒に後陣に控へたり。河のやうをも見ず、橋を引きたるも知らぬ者のみ多ければ、渡るべき評定にも及ばざりけり。御曹子は、雜色・歩走(かちばしり)の者共を集めて、家々の資財雜具一々に取出させて、川端の在家を悉く燒拂ひ、大勢を一所に集むべしと下知し給ふ。此由走り散つて罵りけれども、兼て山林に逃隱れたりければ、家々には人もなし。此上は手々に松明を差上げて、宇治の在家を燒拂ふ。行歩に叶はぬ老者幼き者共、さりともと忍び居たりけれども、猛火に燒死に、たまたま遁れ出でたれども、馬人に踏殺さる。まして牛馬の類は、助かる物もなければ、其數を知らず燒死にけり。廣々と燒拂ひたりければ、二萬五千餘騎、殘る者もなく、川端に打臨みたり。御曹子、川の邊近く高櫓を作らせて、其上に上つて、四方を下知し給ひけり。矢立の硯を取寄せて、宇治川の先陣と剛の者とを、次第明々に記して、鎌倉殿へ見參に入るべしと仰せられければ、軍兵各勇をなして、忠を抽んでんとぞ色めきける。御曹子は櫓の上にて、樣々の事下知し給

ひけれども、大勢思々にとゞめきければ、打紛れて聞えざりけり。平等院の御堂より太鼓を取寄せ、櫓の下にて打ちければ、大勢靜まりて、何事やらんと鳴を靜めて、軍將に目を懸くる時、大音上げて下知し給ひけるは、二萬五千餘騎の勢の中に、海の邊川端に住みて、水練の輩多かるらん。郎等・家の子・舍人・雜色迄も、斯る時こそ群に拔けたる高名をもすれ。我と思はん者共は、物の具脫ぎ置きて、瀨踏して、川の案內試みるべし。向の岸を見るに、矢筈を取りたる者、四五百騎と見えたり。瀨踏する者あらば、定めて引取り〳〵射んずらん。かうの座に着かんと思はん人々は、馬をも捨てゝ、橋桁を渡り、向の岸の軍兵を追拂つて、水練の輩を、思ふ樣に振舞はせよと下知せられければ、平山馬より飛下り、橋桁の上に走上り弓杖を突き、扇はら〳〵と使うて申しけるは、二萬五千騎の其中に、橋桁の先陣渡りは、武藏の國の住人平山武者所季重といふ小冠者なりとぞ名乘りける。抑當河の有樣、深淵たん〳〵として、巨海の波に浮べるが如し。下流渺々として、流水の漲り落つるに臨めるに似たり。虹の橋桁危うして、鵬齒の構怪しければ、渡り得ん事難けれども、軍將の下知を

背かば、命を惜むに似たり。身をば宇治川の底に沈むとも、名をば後代の末に流さんとて、平山是を渡る處に、佐々木の太郎定綱・澁谷の右馬の允重助・熊谷の次郎直實子息小次郎直家、已上五人ぞ續きて渡りける。矢頭も近くなりければ、向の岸の軍兵、弓を強く引かんが爲に、わざと甲を脫いで、思々に引取り〳〵放ちける矢は、雨の如く飛び來りけれども、甲冑をゆり合せ〳〵、矢間をたばひて振舞へば、鎧は重代の重寶なり。裏かく矢こそなかりけれ。熊谷橋桁渡らんとて、子息の小次郎を招きていひけるは、汝は今年十六歲、心は猛く思ふとも、さねは未だ堅まらじ。直實だにも、平に渡付く事難かるべし。汝は大勢の川を渡さん時、惣を力にして渡るべしと敎へければ、小次郎打笑ひて、秋の菓にこそ、さねの固まる固まらぬと申す事は侍れ。十歲以後の者、さねの固まらぬ事やあるべき。若し又固まらざらんに付きても、父をばいかでか離れ奉るべき。恐らくは、父こそ常は風氣とて、目の暈ひ膝の振ふとは仰せられ候へば、此大河に向つて、橋桁を渡り給はん事、危く覺え侍り。目暈ひ足振ひ給はゞ、直家を賴み給へ。渡し申さんといひければ、父是を聞きて、さらば

續け小次郎とて、親子連れてぞ渡りける。誠の瀨には、子に過ぎたる寶なし。死出の山・三途の川の旅の道も、親子ぞ互に助けゝる。五人の兵、さすが目まひ足振うて、水は逆に流るゝかとぞ覺えける。各弓をば手にかけて、はう〳〵渡る有樣、誠に餘りの命とぞ見えし。熊谷は、我身の事はさる事にて、小次郎が事の心苦しさに、續くか小次郎、過すな〳〵と呼びければ、直家は、心許し給ひて、落入り給ふな〳〵とぞ敎へける。父子の情の哀れさに、熊谷は是よりして、發心の思はありけるとかや。

高綱宇治川を渡す事

去程に直實、大音あげていひけるは、抑此川固めたる輩は、木曾殿の樹根の郎等にはよもあらじ。一旦附隨ひたる人共にこそあるらめ。命は惜しき習なり。詮なき合戰に與力して、大事の命失ふな。落ちば助けんといふ儘に、引取り〳〵放つ矢に、木曾殿の郎等に、藤太左衞門の尉兼助といふ者、倒に射落されけり。是を始として、水練の者あらば、防ぎ矢射んとて、五人進み寄つて散々に射ければ、多くの郎等手負ひ

討たれけり。其間に佐々木が郎等に、常陸の國の住人鹿島與一とて、無雙の水練あり。鎧脫ぎ置き、肌袴をかき、腰には鎌を差し、手には熊手を以て、河の底に入り、良久しく沈み潜りて、亂杭・逆茂木引落し、大綱小綱切捨てけり。誠に器量と見えたりけり。されども未だ川を渡す者はなし。いかゞあるべきと、評定樣々なりけるに、武藏の國の住人畠山の庄司次郎重能が子息重忠生年廿一、青地の錦の直垂に、赤威の鎧着て、鬼栗毛といふ馬に乘り、進み出でて申しけるは、事新し。此河は近江のみづうみの末、今始めて出で來る川にあらず。春立つ日影の習にて、細谷川の氷解け、比良の高峯の雪消えて、水の嵩は增せども、水の減ずる事あるべからず。足利の又太郎忠綱も、高倉の宮の御謀叛の御時は、渡せばこそ渡しけめ、鎌倉殿の御前にて、さしも評定ありしは是ぞかし。始めて驚くべき事にあらず。兼ての馬用意其事なり。重忠渡して見參に入れんといふ處に、平等院の小島が崎より、武者二騎馳出でたり。梶原源太と佐々木の四郎と二人なり。景季が裝束には、木蘭地の直垂、黑皮威の鎧に、三枚甲の緖をしめ、滋藤の弓の中を取り、廿四差したる小中黑の矢負ひ、

煉鐔の太刀佩いて、鎌倉殿より給はりたる摺墨といふ名馬に、黑塗の鞍置いて乘りたり。高綱は褐の直垂に、小櫻を黃に返したる鎧に、鍬形打つたる甲に、笛藤の弓の眞中取り、廿四差したる石打の征矢頭高に負ひ、いかもの作りの太刀佩いて、是も鎌倉殿より給はりたる生月に、黃覆輪の鞍置きてぞ乘りたりける。誰か先陣と見る處に、源太ざつと打入りて、遙に先立ちけり。高綱いひけるは、いかに源太殿、馬の腹帶は以ての外弛まつて見え候ぞ。此川は、大事の渡なり。川中にて鞍踏返して、敵に笑はれ給ふなといひければ、さもあらんと思ひて馬を止め、鐙踏張りて立上り、弓の弦を口に咬へ、腹帶を解いて、引締め〳〵しける間に、高綱ざつと打渡して、二段計り先立ちたり。源太、たばかられけりと安からず思ひて渡しけるが、馬の足、綱に懸つて、思ふやうにも渡されず。いかに佐々木殿、水の底に大綱あり。心得給へといひければ、高綱は、さもあるらんと思ひ、太刀を拔き、大綱小綱切流す。宇治川速しといへども、究竟の逸物に乘りたれば、淵瀨をいはずさゞめかして、一文字に渡し、向の岸近くなりて、高綱が馬の足、綱に懸つて步みのけゝれば、元より期する事な

佐々木高綱先陣

れば、大綱小綱三筋ざつと切流し、向の岸へ打上り、鐙踏張り弓杖突いて、佐々木の四郎高綱、宇治川の先陣渡したりやと名乘りも果てぬに、梶原源太も、流れ渡りに上りにけり。源太・佐々木、鎌倉へ早馬を立て、何れも劣らじ負けじと馳せて行く。源太が早馬は先立ちけるが、いかゞしたりけん、足柄の山中にて、高綱が早馬先立ちぬ。三日と申すに馳着いて、高綱宇治川の先陣と申したり。同時に梶原が使又來つて、景季先陣と申しけり。右兵衞の佐殿は、安立新三郎淸恒を召して、佐々木・梶原生きたりやと問ひ給へば、共に候と申す。其後は尋ね給ふ事なし。義經の注進に、宇治川の先陣は、高綱と記されたりけるを見給うてこそ、言葉と心と相違なしとは宣ひけれ。佐々木・梶原、一陣二陣に渡すを見て、秩父・足利・三浦、鎌倉黨も高家も、我も我もと打浸し〳〵渡しけり。庄の五郎廣賢・かすやの藤太、是等は馬より下り弓杖つき、橋桁を渡らんとしけり。重忠は手勢五百餘騎、ざつと川に打入りたる。此川外に聞きしには數ならず思ひしに、水面遙にして、上は白波流れ速く、底は深うして水漲り下れり。瀨伏の石も高うして、馬の足立つべきやうなし。軍兵等皆危く思ひけ

るに、畠山は、渡せ殿原〳〵、佐々木・梶原も鬼神にあらず。渡せばこそ、一陣二陣に渡らめ。馬の足立たん程は手綱すくへ、馬の足はづまば、手綱をくれて泳がせよ。水しとまば、さうづに乗下り、鞍壺を去つて水を通せ。強き馬をば上手に立てゝ、烈しき流れを防がせよ。弱き馬をば下手に立て、ぬるみに付けて渡すべし。川中にして弓引かざれ。射向の袖を眞甲に當てゝ、鐙を常にゆり合せよ。弓に弓を取違へて、先なる馬の尻輪・さうづに、後の馬の頭を持たせて息を繼がせよ。息はづめば、馬の弱るに隙をあらせて、押並べ〳〵て、馬にも人にも力を添へ、かねに渡して過すな。水の尾に付いて、渡せや〳〵と下知したり。是に續きて、黨も高家も力を得て、打浸し打浸し渡しけり。爰に木曾が方より、信濃の國の住人根井の小彌太行親と名乘つて、褐の直垂に、小櫻縅の腹卷に、洗革の大鎧重ねて、三尺六寸の大太刀に、廿四差いたる黒羽の征矢負うて、白星の五枚甲を猪首に着、塗籠藤の弓眞中取り、黒糟毛の馬の、太う逞きに、金覆輪の鞍置きて乘りたりけるが、垣楯の表へ進み出で、弓杖突き敵の陣を見渡し、軍の掟する事柄を見るに、容儀人に勝れたり。定めて大將軍に

て在しますらん。行親が今日の得分と思ひて、十四束を取つて番ひ、引堅めて兵と放つ。畠山が乘りたりける鬼栗毛がふきあれをぞ射通しける。行親一の矢射損じて、味方の運は早盡きにけり。大將軍たる者が、一の矢を放つは、弓矢の運の盡くる所なり。一の矢射損じて、二の矢射る事なし。敵に鎧の毛見知られぬ先にとて、垣楯の内へ引退く。畠山が鬼栗毛も、天馬の駒と逸りしかども、手負ひぬれば、傷を痛みて弱りければ、重忠馬より下り、前足二つ取つて、妻手の肩に引懸けて、水の底を潜りたりける。よそ目には、早畠山流れぬと見けるに、只一度弓杖突き、浮上つて息をちと繼ぎ、猶水の底を潜りて、向の岸へ渡りけるに、草摺重く覺えてければ、黑皮縅の鎧着たる武者、然るべくは助け給へといひければ、何者ぞ、名乘れ。向の岸へ投げつべしといひければ、其を好む者なり。投げられ奉らば、名乘らんと申す。さらばとて鎧の揚卷摑んで、提げ持ちて行く。又赤縅の鎧着て、流れ行く者あり。あな無慙、何者ぞ。是に取付けとて、弓の筈を差出したり。鹽治小三郎維廣と名乘りて、弓に取付き弓を引寄せ、其馬の鞦・鞍の間に取付けと敎へければ、維廣鞦に取付きつゝ、

淺き所に上りにけり。其後川端一段計りに近付きて、汝何者ぞ、好まば投ぐるぞ。過すなと、件の提げ持ちて行きつる大の男を、ゆらりと投ぐ。投上げられて、弓杖に縋り立直つて、只今歩にて宇治川渡りたる先陣は、武藏の國の住人大串次郎と名乘りけり。敵も味方もどつと笑ふ。惡くいひぬとや思ひけん、一陣畠山、二陣大串とぞいひ直したる。畠山向の岸に打上つて、何、和君は重忠に助けられ、重忠をなさものにして、一陣とは名乘るぞといひければ、大串申しけるは、殿に助けられ奉る。いかでか其恩を忘るべき。餘りに音もし侍らねば、おめて見え候らんとて、名乘りたりと陳ずれば、弓取の法なり。神妙なりとぞ感じける。扨鹽治に如何にと問へば、八箇國の輩、誰か殿の家人ならぬ人侍る。されども今命を助けられ奉りぬれば、行方深く賴み奉り候と申す、神妙なりとて、馬は流れぬ、是に乘つて京入し給へとて、小鴾毛とて、祕藏の馬を與へたりけり。鹽治は、今日流れたるが高名にて、却て馬まさりとぞ申しける。佐々木・梶原一陣二陣と申せども、畠山、馬人三人、水の底にて助けゝることそゆゝしけれ。重忠乘替に打乘りて喚いて駈く。敵は矢先を揃へて、散々

に射けれども、重忠鐙を傾けて攻寄する處に、木曾が從弟に、信濃の國の住人長瀨の判官代義員と名乘りて駈出でたり。赤地の錦の直垂に、黑糸縅の鎧の鍬形の中に、白房懸けたる馬に、白覆輪の鞍置いてぞ乘りたりける。金作りの太刀を拔いて向ひけるに、畠山は、是ぞ宇治路の大將なるらんと見て、拔設けて步ませ寄れば、義員いかゞ思ひけん引退いて、垣楯の中に入りにけり。返し合せ〳〵戰はんとはしけれども、畠山にや恐れけん、引退きて落行きけり。中にも根井の小彌太行親は、七八度迄返し合せて戰ひけるが、暫息を繼がんとて、思ひ坂の邊に控へたりけるに、武藏の國の住人河口源三といふ者と、駿河の國の住人、舟越の小次郎といふ者と二人、先陣に進みたりけるが、落武者の身として、敵に後を見せじと、返し合せ〳〵戰ひけるこそゆゝしけれ。今日の大將軍と見えたり。いざや組んで首取らんと、二騎喚いてかゝる。行親は、矢種は射盡したり。太刀打には、一人にこそあへしらはめ、二人を一度に取らんと思ひて、左右の手をばはだけて待かけたり、舟越・河口、弓手に廻り妻手に廻り、左右の脇よりつと寄り、得たりやとてむずと抱く。行親は、二人を脇に挾ん

で、強く締めたれば、ちとも働かず。先づ妻手の脇に取付きたる舟越が鎧の上帶を取つて、むずと引上げ、妻手の深田へ向けて投入れたれば、冑は重し田は深し。起きん起きんとしけれども、叶はずして死にゝけり。其後弓手の脇なる河口を、前後の上帶取つて、えい〳〵と引きけれども、鐙を馬の腹に踏廻し、強く乘つて上らざりければ、小彌太、弓手の肱を馬の下腹に差やりて、馬と主とを中に上げ、弓手の深田へ、えいというて投げたれば、河口泥の中にて、馬に敷かれて死にゝけり。馬も深田に打込まれて、主と共にぞ失せにける。東國の兵是を見て、舌ぶりして進まざりければ、小彌太は、いかに殿原、續き給はぬぞ。されば都に上り、木曾殿と一所にて待ち奉らんと罵り懸けて、木幡の庄へ入りにけり。九郎義經宣ひけるは、今度大將軍として、郎等に先陣を渡されて、二陣に續かん事然るべからずとて、橋より引下りて、橋の小島に馬を控へ、爰は水は速けれ共、遠淺なり。渡せ〳〵と下知し給へば、我も〳〵と進みけり。是は大事の川、斯様の川を渡すには、馬筏を組み、強き馬をば上手に立て、弱き馬をば下手に立てよ。馬の足屆かん迄は、手綱をくれて泳がせよ。馬の足はづま

ば、弓手の手綱をさしくつろげて、妻手の手綱をちとしゝめよ。四つ居に乘り、こぼれて泳がせよ。手綱強く引いて、馬に引かれて過すな。尾口沈まば前輪に縋れ。常に鐙を合せよ。我等渡ると見るならば、敵は定めて矢衾を作りて射るらん。敵は射るとも射返すな。相引して錏射らるな。痛く伏しててへん射らるな。射向の袖を差翳せよ。物具に隙間あらすな。水強くして下らん武者をば、弓の筈を差出して、取付けて泳がせよ。かねに渡して過すな。馬の頭を水面に引立て、えい聲を出して、馬に力を添へよ。渡せ者共〳〵と下知しつゝ、眞先かけて渡しけり。二萬餘騎の大勢、一度に颯と打入れて渡しければ、漏るゝ水こそなかりけれ。前後の外れの水にこそ、何れもたまらず流れけれ。大勢川を流しぬれば、千騎二千騎、五千六千、二百騎三百騎、七百八百、思ひ〳〵心々に、或は木幡大道・醍醐路に懸つて、阿彌陀が峯の東の麓より攻入るもあり、或は小野の庄勸修寺を通つて、七條より入る者もあり、或は櫃川を打渡り、木幡山深草の里より入るもあり、或は伏見・尾山・月見の岡を打越えて、法性寺一二の橋より入るもあり、道は互に替れども、同じく都へ亂れ入る。行

親・親忠等、宇治橋を引いて防ぎ戰ふといへども、義經川を渡して合戰す。行親等が軍、忽に破れて四方に馳せ散ず。義仲大に驚いて、先づ使者を院の御所へ奉つて申しけるは、東國の凶徒、既に宇治川を渡して都へ攻入る。急ぎ醍醐寺の邊へ御幸あるべきと申したりければ、更に此御所をば御出あるべからずと仰遣されけり。爰に義仲赤地の錦の直垂に、紅の衣を重ねて、石打の胡簶に、紫縅の鎧を着て、隨兵六十餘騎を率して、院の御所に馳せ參じ、劍を拔きかけ目を瞋らかして、砌下に立つて御輿を寄せて、臨幸あるべき由を申す。上下色を失ひ貴賤魂を消す。公卿には花山院大納言兼雅・民部卿成範・修理の大夫親信・宰相中將定能。殿上人には實敎・成經・家俊・宗長伺候したりけるが、各皆草鞋を着す。御供に參ぜんとて、庭上に下立たれたりければ、人々涙に咽びて、東西を失ひ給へり。叡慮只推量り奉るべし。義仲が郞等一人馳せ來り、敵既に小木幡・伏見迄攻め來れりと申しければ、義仲は臨幸の事を拋ち、門下にして馬に乘り罷出でぬ。法皇は、内々諸寺諸社へ御祈を懸けさせ給ひける上、御所中の女房男房、立てぬ願もなかりける驗にや、事故なく罷出でたれば、

手を合せて喜び合へり。其後は門をさせとて、さゝれにけり。木曾は院の御所をば出でたれども、軍場には出でざりけり。五條内裏に歸りて、貴女の名殘を惜みつゝ、時移る迄籠り居たり。彼貴女と申すは、松殿殿下基房公の御娘、十七にぞならせ給ひける。類なき美人にておはしましければ、女御后にもと勞り冊き參らせけるを、木曾聞及び奉りて、押して掠め取り奉る。御心憂くは思召しけれ共、只管荒夷にて、法皇をも押籠め參らせ、傍若無人に振舞ひければ、御力に及ばざる事なりけり。賤が編戶の女にも、馴れなば情深うして、別れ路は猶悲しきに、又見もなれぬ御有樣、さてこそ名殘は惜しかりけめ。かゝる處に越後の中太能景馳せ來つて、敵は既に都に亂れ入れり。いかに靜に打解け給ひ、かくはといひけれども、引物の中に籠り居て、猶も名殘を惜みけり。能景、弓矢取る身の、心移すまじきは女なり。只今恥見給はん事の口惜しさよとて、今年卅六になりけるが緣より飛下り、腹搔切つて失せにければ、義仲力及ばず、川原を指して駈出で、散々に戰ひける。根井行親・楯の六郎親忠、二百餘騎にて木曾に行逢ひ、主従三百餘騎、鑣を並べて戰ひけるが、行親も親

忠も、共に討たれて死にゝける。

東使、木曾と戰ふ事

木曾は六條川原の軍に負けて、又院の御所に參り、法皇を取參らせて、西國へ御幸なし參らせんと思ひけれども、門を閉ぢられたりける上、義經の兵共に攻立てられて、又川原に出でて、三條を指して落行きけり。其勢七八十騎には過ぎず。義經の軍兵は、黨も高家も雲霞の如くにして、我先々々と、隙をあらせず進みけり。義仲も、今日を限りと思ひければ、命を惜まず散々に戰ふ。武藏の國の住人鹽谷の太郎兄弟三騎、四條川原の東の端に控へたりけるが、兄の太郎、弟の三郎にいふやうは、御邊は、栗子山にてよき敵に組んで、物具剝取りて高名せんといひしは、忘れたりやと勵ませば、三郎いかでか忘るべきとて、馬を川に打入れて、西へ向けて渡る處に、木曾方より、信濃の國の住人長瀨の判官代といふ者、黑糸絨の鎧に、葦毛の馬に乘つて、川の西の端より打入りて、東へ向けて渡りたり。長瀨・鹽谷東西より、川中に歩ませ寄り、

馬と馬とを打並べて、組んでだんぶと落ちにけり。手に手を取組み、腹に腹を合せて、上になり下になり、浮きぬ沈みぬ、俵の轉ぶ如くに、四五段許り流れたり。敵も味方も目を澄して是を見る。深き所に流れ入りて、水の底にて組合ひたり。良暫く見えざりけるに、水紅に流れければ、誰討たれぬらんと思ふ處に、鹽谷は、左の手に敵の首を捧げ、右の手には、敵の物具剝取つて、口に刀を咬へつゝ、東の陸へ颯と上り、武藏の國の住人鹽谷の三郎某、長瀨の判官代が首取つたりやと名乘る。ゆゝしくぞ聞えし。義仲は上野の國の住人、那和の太郎弘澄・多胡の次郎家包・越後の中次家光等を引具して落ちけるが、家光は、終に遁るまじきもの故に、人手に懸らんよりはとて、馬より飛下り腹搔切つて、三條川原に伏しにけり。軍兵追懸け〳〵戰ひければ、八十餘騎とは見えしかど、五十餘騎になりにけり。武藏の國の住人敕使川原權三郎有直は、木蘭地の直垂に、黑糸縅の鎧に、白星の甲、二十四さいたる黑布露の矢、黑塗の弓に、黃黑き鬣の馬に、黑塗の鞍置いてぞ乘りたりける。同じく四郎有則は、ひらけりの直垂に、赤縅の鎧、同じ色の甲に、十八さいたる鴇の石打、頭高に負

ひ、三所藤の弓の中取つて、黑斑の馬に、金覆輪の鞍置いて乘りたりけり。兄弟二騎、三百餘騎にて追懸けて申しけるは、北陸道の大將軍、朝日將軍と呼ばれ給ひし人の、正なくも後をば見せ給ふ者かな。源氏の名折とは思召さずや。亡き跡迄も名こそ惜しけれ。返し合せ給へや〳〵。斯く申す兵は、武藏の國の住人敕使川原權三郎有直、生年卅一。同四郎有則、廿八と名乘り懸け、鑣を並べて喚いてかく。木曾五十餘騎、馬の鼻を引返し宣ひけるは、有直慥に承れ。義仲には合はぬ敵と思へ共、弓矢取る身は、大將軍の詞は、一も得るこそ嬉しけれ。現世の名聞、後生の訴にもせよとて、弓をば脇に挾み、太刀の切先打延べて、敕使川原餘すなとて、蜘手十文字堅樣橫樣切廻りければ、三百餘騎の大勢も、五十餘騎に驅立てられて、馬の足、立つる暇こそなかりけれ。只小勢に付いて、五廻り六廻りが程廻りけるが、有直弓手の肱打落されて、神樂岡を指して引退く。五十餘騎の勢も討取られて、廿五騎にぞなりにける。木曾危く見えけるを、左近五郎・岡津平六兵衞・城の小彌太郎兄弟二人・佐竹の者共、防矢射てこそ遁れけれ、又秩父・師岡打圍みて、散々に攻めければ、木曾方にも根井の次

郎行直・進の六郎親直等、思切つて大勢の中へ打入りて、命を惜まず、我一人と戰ひたり。小勢懸れば、大勢颯と引退き、大勢懸れば、小勢颯と引退く。寄つて返しつせし有樣は、辻風の塵を卷くにぞ似たりける。其手をも打破つて落行けば、横山黨に與次・彌次と、三浦黨に佐原の十郎・三浦の次郎三百餘騎にて、洩らすなとこそ攻め戰ひけれ。廿五騎と見えしかども、僅十三騎になりにけり。

巴信濃下向の事

大將軍九郎御曹子義經、軍をば軍兵共にせさせ、我身は、院の御所覺束なし。守護し奉らんとて、ひた甲五六騎にて、院の御所六條殿へ馳せ參る。畠山も、九郎義經と、院の御所を守護しけるが、木曾洩れやしぬらん覺束なしとて、三條河原の西の端まで打出でたり。義仲は三條白河を東へ向けて引きけるを、重忠は、本田・半澤左右に立て歩み出し、東へ向けて落ち給ふは、大將と見るは僻事か。武藏の國の住人、秩父の流れ畠山の庄司次郎重忠なり。返し合せ給へや〳〵といひければ、木曾馬の鼻を

義仲、畠山重忠と戰ふ

引返し、誰人に遭うて軍せんより、一の矢をも、畠山をこそ射め。恥かしき敵ぞ。思切れと下知して、川を隔てゝ射合ひたり。さすが敵は大勢なり。木曾は僅十三騎。畠山が郎等の放つ矢は、雨の降るが如くに飛びければ、僅の小勢堪へ兼ねて、三條小川へ引退く。重忠勝に乘つて攻懸りければ、木曾も引返し〳〵、弓矢になり打物になり、追つつ返しつ半時計り戰ひける。其中に木曾方より、萌黄威の鎧に、射殘したりける鷹の羽の征矢負うて、重藤の弓の眞中取り、葦毛の馬の太う逞ましきに、小き巴摺りたる鞍置きて乘りたりける武者、一陣に進みて戰ひけるが、射も強く切るも強く、馳合せ〳〵攻めけるに、さしも名高き畠山、川原へ颯と引いて出づ。畠山、半澤六郎を招きて、いかに成淸、重忠十七の年、小坪の軍に合そめて、度々の戰に合ひたれども、是程軍立の嶮しき事に合はず、木曾の內には、今井・樋口・楯・根井、是等こそ四天王と聞えしに、是は今井・樋口でもなし。さていかなる者やらんと問ひければ、成淸、あれは木曾の御乳人に、中三權の頭が娘巴といふ女なり。よき弓の手垂、荒馬乘りの上手、乳人子乍ら妾にして、內には童を使ふやうにもてなし、軍には一方

の大將軍して、更に不覺の名を取らず。今井・樋口と兄弟にて、恐しき者にて候と申す。畠山、さてはいかゞあるべき、女に追立てられたるも言甲斐なし。又攻寄せて、女と軍せん程に、不覺しては永代の瑕、多き者共の中に、巴女に合ひけるこそ不祥なれ。但木曾の妾といへば懷しきぞ。重忠今日の得分に、巴に組んで生捕にせん。返せ者共とて取つて返し、木曾を中に取籠めて散々に懸け、畠山は、巴に目をぞ懸けたりける。進み退き、廻り合はん〳〵と廻りければ、木曾、巴を組ませじと懸隔て〳〵、二廻り三廻りが程廻りける處に、畠山・巴、あながちに近く廻り合ふ。是は得たる便宜と思ひ、馬を早めて馳せ寄りて、巴女が弓手の鎧の袖に取付きたり。巴叶はじとや思ひけん、乘りたる馬は春風とて、信濃第一の強馬なり。一鞭當てゝあふりたれば、鎧の袖ふつと引切りて、二段計りぞ延びにける。畠山、是は女にはあらず、鬼神の振舞にこそ。斯樣の者に矢一つをも射込められて、永代の恥を殘すべからず。引くに過ぎたる事なしとて、川原を西へ引退き、院の御所へぞ歸りける。木曾は爰彼を打破つて、大津へ向けて落ちられけるが、四の宮川原にて見給へば、僅に七騎殘り

たり。巴は七騎の内にあり、生年廿八、身の盛なる女なり。さる剛の者なりければ、北國度々の合戰にも手をも負はず、百餘騎が中にて、七騎になる迄付きたりけり。四の宮川原・神なしの社・關の清水・關の明神打過ぎて、關寺の前を粟津へ向けてぞ進みける。巴は都を出でける時は、紺むら紅に、千鳥の鎧直垂を着けたりけるが、關寺の合戰には、紫裾濃を織付けたる直垂に、菊綴しげくして、萌黄糸威の腹卷に袖付けて、五枚甲の緒をしめ、三尺五寸の太刀に、廿四さいたる眞羽の矢の射殘したるを負ひ、重藤の弓に關弦懸け、連錢葦毛の馬に、金覆輪の鞍置きてぞ乘つたりける。七騎が先陣に進みて打ちけるが、何とか思ひけん甲を脱ぎ、長に餘る黑髮を後へ颯と打越して、額に天冠を當てゝ、白打出の笠を着て、みめも形も優なりけり。年廿八とかや。爰に遠江の國の住人内田次郎家吉と名乘りて、卅五騎の勢にて、巴女に行逢うたり。内田敵を見て、天晴武者の景氣かな。但女か童か、覺束なしとぞ問ひける。郎等よくよく見て、女なりと答ふ。内田聞敢ず、さる事あるらん。木曾殿には、葵・巴とて、二人の女將軍あり。葵は去年の春、戸波山の合戰に討たれぬ。巴は未だあ

りと聞く。是は强弓精兵、あきまを數ふる上手、岩を疊み金を延べたる城なりとも、巴が向ふには落ちずといふ事なし。去曲者と聞召して、鎌倉殿、彼女相構へて生捕にして參らすべき由、仰を蒙りたり。巴は荒馬乘の大力、世の常の者に非ずと聞く。いかゞすべきと思ひ煩ひけるが、郎等共にいふやうは、女强しといふも、百人が力によも過ぎじ。家吉は六十人が力あり。殿原卅餘人、既に百人に餘れり。殿原左右より寄せて、左右の手を引張れ、家吉中より寄らば、などか巴を取らざらんといひけるが、内田又思ひ返すやう、まて〳〵暫し、槿花の朝に咲きて夕に萎むだにも、己が盛はあるものを。八十九十にて死なん命も、二十三十にて亡びん命も同じ事、女程の者に組むとて、兎角謀を出しけるよと、殊に後陣に控へたる甲斐の一條の、思はん事こそ恥かしけれ。殿原一人もいらふべからず。家吉一人打向うて、巴女が首取らんといひければ、卅餘騎の郎等は、日本第一に聞えたる恐しき者に、組むまじき事を喜び、尤も〳〵といひければ、内田唯一人、駒を早めて進む處に、巴是を見て、先づ敵を褒めたりけり。天晴武者のかたちかな。東國には小山・宇都の宮か、千葉・足利か、三

浦・鎌倉か覺束な。誰人ぞ。斯く問ふは、木曾殿の乳人子に、中三權の頭兼遠が娘に、巴といふ女なり。主の名殘の惜しければ、行方を見んとて、御供に侍るといふ。内田いひけるは、鎌倉殿の仰を蒙り、勢多の手の先陣に參る。遠江の國の住人内田三郎家吉と名乘りて進みけり。巴は、一陣に進むは剛の者、大將軍にあらずとも、物具毛の面白きに、押並べて組み、しや首捻切つて、軍神に祭らんと思ひけるこそ遲かりけれ。手綱かい操り歩ませ出でぬ。されども内田が弓を引かざれば、女も矢をば射ざりけり。互に情を立てたれば、内田太刀を拔かざれば、女も太刀に手を懸けず、主は急ぎたり、馬は逸りたり。巴・内田、馬の頭を押並べ、鐙と〱蹴合はする程に寄せ合せ、互に聲を擧げて、鎧の袖を引違へてぞ組んだりける。聞ゆる沛艾の名馬なれども、大力が組合ひたれば、二疋の馬は中に止まつて働かず。内田、勝負を人に見せんと思ひけるにや、弓矢を後へ差廻し、女が黑髮三匝にからまへて、腰の刀を拔出し、中にて首を搔かんとす。女是を見て、汝は内田三郎左衞門とこそ名乘りつれ。まさなき今の振舞かな。内田にはあらず、其手の郎等かと問ひければ、内田、我身こ

内田家吉巴に討たる

そ大將よ。郎等にはあらず。振舞いかにと申せば、女答へていはく、女に組む程の男が、中にて刀を拔き、目に見するやうやはあるべき。軍は敵に依つて振舞ふべし。故實も知らぬ内田かなとて、拳を握り、刀持ちたる肱のかゝりを、したゝかに打つ。餘りに強く打たれて、取る刀を打落さる。やあ家吉よ。日本一と聞えたる木曾の山里に住みたる者なり。我を軍の師と賴めとて、弓手の肱を差出し、甲の眞額取つめて、鞍の前輪に攻付けつゝ、内甲に手を入れて、七寸五分の腰刀拔出し、引仰向けて首を掻く。刀も究竟の刀なり。水を掻くよりも猶易し。馬に乘直り、一當あふりたれば、むくろは下へ落ちにける。首を持ち、木曾殿に見せ奉れば、あな無慙や。是は八ヶ國に聞えし男、美男の剛の者にてありつる者を、討たれけるこそ無慙なれ。是も運盡きぬれば、汝に討たれぬ。義仲も運盡きたれば、何者の手に懸り、敢なく犬死せんずらん。我れ討たれて後、木曾こそ幾程命を生きんとて、最後に女を先陣懸けさせたりと、いはれん事こそ恥かしけれ。汝には暇を給ふ。疾々落下れとぞ宣ひける。巴申しけるは、我幼少の時より、君の御内に召使はれ參らせて、野の末山の奥

迄も、一つ道にと思切り侍り。今斯る仰を承るこそ心憂けれ。君のいかにもなり給はん處にて、首を一所に並べんと、搔口說きいひければ、木曾、誠にさこそは思ふらめ共、我去年の春、信濃の國を出でし時、妻子を捨置き、又再び見ずして、永き別を道に入らん事こそ悲しけれ。さればなからん後迄も、此事を知らせて、後の世を弔はゞと思へば、最後の供よりも、然るべきと存ずるなり。疾々忍び落ちて信濃へ下り、此有樣を人々に語れ。敵も手繁く見ゆ。はや〳〵と宣ひければ、名殘は樣々惜しけれども、主命に從ひて、落つる涙を拭ひつゝ、上の山へぞ忍びける。粟津の軍終りて後、物具脫ぎ捨て、小袖裝束して信濃へ下り、女房公達に斯くと語り、互に袖をぞ絞りける。世靜まつて、右大將家より召されければ、巴即ち鎌倉へ參りける。賴朝宣ひけるは、巴は女なれども、世に類なき剛の者、打解け難き者なりとて、森の五郎に預けらる。和田の小太郎是を見て、事の景氣も尋常なり。心の剛も無雙なり。あの樣の種を繼がせばやとぞ思ひける。明くる日首切るべしと沙汰ありけるに、和田の義盛、申預からんと申しけるを、女なればとて、心許しあるまじ。正しき主親が敵

なり。さる剛の者なれば、隙もあらば、窺ひ思ふ心あらん。叶ふまじと仰せられけるを、三浦の大介義明が、君の爲に命を捨て、子孫眷族二心なく、君を守護し奉りて、年頃奉公し奉る。いかでか思召し忘れ給ふべき。義盛相具して候とも、僻事更にあるまじきと樣々申立て、預かりにけり。即妻と賴みて男子を生む。朝比奈三郎義秀とは是なりけり。母が力を繼ぎたりけるにや、剛も力も並びなしとぞ聞えける。和田合戰の時、朝比奈討たれて後、巴は泣々越中に越し、石黑は親しかりければ、爰にして出家して、巴の尼とて、佛に花香を奉り、主親朝比奈が後世弔ひけるが、九十一迄保ちて、臨終目出度して終りにける。

巴、尼となる

粟津合戰の事

範賴は、勢多の手に向ひ給ひたりけれども、橋は引かれぬ底は深し。渡るべき樣なければ、稻毛の三郎重成・榛谷の四郎重朝を先として、田上の供御瀬を渡しつゝ、石山通りに攻上る。今井の四郎兼平、五百餘騎にて、國分寺の毘沙門堂に陣を取りたり

けるが、出合ひ防ぎ戰ひけり。方等三郎先生義弘、爰にして討たれぬ。三萬餘騎の兵、雲霞の如くに重なりければ、何とも防ぎ難かりける上に、宇治の手既に破れ、軍兵都へ亂れ入ると聞えければ、兼平心弱く覺えて、木曾殿は、北國へぞ赴き給ふらんと思ひければ、湖の西の渚を、三百餘騎にて北へ向けて歩み行く。義仲は、關山・關寺打過ぎて、南を指して行く程に、粟津の濱にて行逢ひぬ。木曾いひけるは、都にて、いかにもなるべかりつるに、今一度互に逢ひ見んとて、多くの敵に後を見せ、是迄來れりとて、涙ぐみけり。今井も、勢多にていかにもなるべう候ひつれども、御行方覺束なく侍りて、是迄遁れ參りたりと申しけり。義仲・兼平馬を打並べて宣ひけるは、川原の合戰に、高梨・仁科・根井も討たれぬ。身も既に疵を蒙り、心疲れ力盡きて、進退歩みを失ふ。敵の爲に得らるゝ事、名將の恥なり。軍破れ自害するは、猛將の法なりと申しければ、兼平申しけるは、勇士は食せざれども飢えず、疵を蒙りても屈せず。軍將は、難を逃れて勝つ事を求む。死を去つて恥を決す。就中平氏西海にあり、軍將北州に入り給はゞ、天下三つに分れて、海內發亂せんか。先づ急いで越前の

國府迄遁れ給へ。兼平爰にて敵を相防ぐべしといひて旗を揚ぐ。義仲が隨兵共、多くは北國の輩なれば、北を指して落ちけるが、旗の足を見て、五十騎卅騎、爰彼より馳集まる。勢多より落來る者、廿騎卅騎集まり加はりければ、四五百騎に及ぶ。兼平力を得、左右を顧みて曰く、各恩を報じて命を捨てん事、此時にあり。防ぎ矢射て、延し奉らんと申しければ、五百餘騎の輩、心を一つにして、西の山を後に當て、東の濱を前に得て、馬の足を輕うして、矢筈を取りける程に、武石の三郎胤盛・猪俣金平六範綱等を始として七百餘騎、攻め來りて鬨の聲を發す。兼平以下の軍士又聲を合す。木曾宣ひけるは、是等は源氏の郎等共なり。我と思はん若き者共、駈出でて追散らせと下知し給ひければ、三河の次郎賴重といふ者、卅餘騎にて鞭を打つて、敵の中へ割入りて、兩方互に亂れ合うて相戰ふ。範綱已下の輩も勢を押包み、中に取籠めてければ、賴重を始として、洩らさず皆討取りにけり。其後甲斐源氏に一條の次郎忠賴・板垣三郎兼信、七千餘騎にて先陣に進み、粟津が濱に打出でたり。木曾、赤地の錦の直垂に、薄金といふ鎧着て、射殘したるもり田鳥尾の矢負ひて、步ませ出して

名乘りけるは、清和帝に十代の後胤、六條の判官爲義には孫、帶刀先生義賢、次男木曾左馬の頭兼伊豫守、今は朝日將軍源の義仲、生年卅七。甲斐の一條と見るは僻事か。雜人の手に懸けんより、組めや組めとて、鑣を並べてらうしやうたり。一條の次郎忠頼も、同じ流れの源に、伊豫の守賴義の三男、新羅の三郎義光が孫、武田の太郎信義が次男に、一條の次郎忠賴、同じく三郎兼信、兄弟二人と名乘つて進み出でつつ、木曾と一條と、魚鱗鶴翼の戰をぞ並べたる。一條忠賴は、鶴翼に陣を張り、小勢を中に取籠めんとぞ構へたる。木曾義仲は、魚鱗に陣を立てたりけれ。一條・板垣は、甲斐源氏、木曾義仲は信濃源氏なり。共に清和の苗裔、同じく多田の後胤なり。一門弓箭を合せ、同姓勝負を決せんとす。義仲魚鱗の構にて五百餘騎、鑣を並べて颯と駈入れたれば、忠頼鶴翼の支度にて、大勢の中に小勢を取卷き、馳せ合せ馳せ返し戰ひたり。義仲は、今を限りの軍なり。いつまで命を惜むべき。一條の次郎よき敵ぞ。餘すな者共とて、駈破つて出で、呼ばつては入り、五六度迄戰ひ拔けて出でたれば、二百餘騎は討たれにけり。次に同じき甲斐源氏に、武田の太郎信義・加々見の

次郎遠光兄弟二人、大將軍にて二千餘騎、木曾を中に取籠めて、散々に戰ひ、駈入り駈出で、四廻り五廻り戰ひて、先へ拔けて見れば、八十餘騎は討たれけり。次に同じき國源氏、逸見の四郎有義・伊澤の五郎信光兄弟二人、從弟に小笠原の小次郎長淸三人、大將軍にて三千餘騎、木曾を中に取籠めて戰ひ、追入れ追出し、一時戰ひて駈拔けて見れば、五十餘騎は討たれにけり。次に武藏の國の住人、稻毛の三郎重成・榛谷の四郎重朝兄弟二人、大將として二千餘騎、木曾を中に取籠めて、餘すなとて散々に戰ふ。蛛手十文字に駈破つて、拔けて見たれば、五十餘騎は討たれにけり。次に下總の國の住人、千葉の介經胤大將軍三千餘騎、木曾を中に取籠めて、遁すな者共とて、隙間なくこそ戰ひたれ。思切りたる木曾なれば、命も惜まず振舞ひけり。散々に駈破つて、後へ通つて見たれば、七十餘騎は討たれて、僅に廿餘騎にぞなりにける。次に大將軍蒲の冠者範賴七千餘騎にて、木曾を中に取籠めて、ましぐらにこそ戰ひたれ。木曾は、此大勢を追つつ返しつ、粟津が原より打出の濱迄、引退き〳〵こそ防へたれ。廿餘騎とは見えしかど、落ちぬ討たれぬする程に、主從五騎になりたりけるが、信濃

の國の住人手塚の太郎討たれければ、手塚別當も落ちにけり。上野の國の住人多胡の次郎家包と名乘りて打出でければ、大勢の中を打廻り、我と思はん人々は、家包討取りて、勳功の賞に預かれやといひて、散々に切廻りけり。鎌倉殿兵共に相觸れられけるは、多胡の次郎家包、木曾に付いてあるなれば、相構へて生捕りて參らせよと、仰含められたる事なれば、家包大に狂ひ廻り切廻りけれども、軍兵疵をつけじと、射もせず切りもせず、手を廣げて、取らん〳〵としけるこそ、ゆゝしき大事なりけれ。兵の中より申しけるは、家包甲を脫ぎ太刀を納めて降人に參れ。助けん。木曾殿も今は主從三騎なり。和君一人命を捨てたりとも、木曾殿の、軍に勝ち給ふべしや。只降人に參れといひければ、家包申しけるは、弓矢取る身は、主は二人持たず。軍の習、討死は期する處なり。命惜み降人になつて、斯くいふ人々に面を合すべしや。正なし〳〵。敎訓も事に依るべし。それよりも唯寄せ合せ、組んで討取り給へや殿原とて、切廻りけれども、大勢錏を傾けて押寄せ、終に生捕りにけり。扨木曾殿、心は猛く思へども、運の極めの悲しさは、主從二騎になりにけり。況して中有の旅の

多胡家包生捕らる

空、一人行くなる道なれば、思ひやるこそ哀れなれ。木曾殿鐙踏張り弓杖つきて、今井に宣ひけるは、日頃は何と思はぬ鎧が、今は重く覺ゆるなりと宣へば、兼平、何條さる事侍るべき。日來にかねもまさらず、べちに重き物も付けず、御年卅七、御身盛なり。味方に勢なければ、臆し給ふにや。兼平一人をば、世の者千騎萬騎とも思召し候べし。終に死すべき物故、わるびれ見え給ふな。あの向の岡に見ゆる一村の、松の下に立寄り給ひて、心靜に念佛申して御自害候へ。去程は防ぎ矢仕りて、やがて御供申すべし。あの松の下へは、廻らば三町、すぐには一町にはよも過ぎ侍らじ。急ぎ給へと、泣々涙を押へ口說きければ、木曾は名殘を惜みつゝ、都にていかにもなるべかりつれども、是まで落ち來つるは、汝と一所にて死なんとなり。何までも同じ枕に討死せんと思ふなりと宣へば、今井、いかに斯くは宣ふぞ。君自害し給はゞ、兼平郎ち討死なり。是をこそ一所にて死ぬるとは申せ。兵の剛なると申すは、最後の死を申すなり。さすが大將軍の宣旨を蒙る程の人、雜人の中に打伏せられて、首を取られん事心憂かるべし。疾々落ち給へて、御自害あるべしと勸めければ、木曾

誠にと思ひ、向の松を指して馳行きけり。今井は木曾を先立て〻、引返し〳〵命も惜まず戰ひけり。木曾は今井を振捨て、繩手に任せて步ませ行く。頃は元曆元年正月廿一日の事なれば、峯の白雪深くして、谷の氷も解けざりけり。向の岡へ筋違に心ざす。つら〻結べる田を横に打つ程に、深田に馬を馳せ入れて、打てども〳〵行かざりけり。馬も弱り主も疲れたりければ、兎角すれども甲斐ぞなき。木曾は今井や續くと思ひつ〻、後へ見返りたりけるを、相模の住人石田の小次郎爲久が、よつ引いて放つ矢に、內甲を射させて、額を馬の頭に當て〻、俯伏に伏しにけり。爲久が郎等二人馬より飛んで下り、深田に入りて木曾を引落し、やがて首をぞ取りてける。今井是を見て、今ぞ最後の命なる。急ぎ御供に參らんとて、進み出でて申しけるは、日頃は音にも聞くらん、今は目にも見よ。信濃の國の住人中三權の頭兼遠が四男、朝日將軍の御乳人子、今井の四郞兼平なり。生年卅三。鎌倉殿迄も知召したる兼平ぞ。首取つて見參に入れよやとて、數百騎の中に駈入りて、散々に戰ひけれども、大力の剛の者なりければ、寄つて組む者なし。只開いて遠矢にのみぞ射ける。されど

今井兼平自害

も鎧よければ裏かゝず、あきまを射ねば手も負はず、兼平は、箙に殘る八筋の矢にて、敵八騎射落しける。太刀を拔いて申しけるは、日本一の剛の者、主の御供に自害する。見習へや東八ヶ國の殿原とて、太刀の切先口に銜へ、馬より倒に落ち貫きてぞ死にゝける。兼平自害して後は、粟津の軍もなかりけり。樋口の次郎兼光は、十郎藏人行家を追討の爲に、五百餘騎にて河內の國へ下りたりけるが、行家をば討洩らして、兼光、女共生捕にして、京へ上りける程に、淀の大渡にて、木曾殿旣に討たれ給ひぬと聞きて、生捕をば追放して、兵共にいひけるは、木曾殿、早討たれ給ひにけり。御內には今井・樋口とて、一二の者なり。終に遁るべき身にあらず、我身は京に上つて討死すべきなり。命も惜しく故鄕も戀しからん人々は、是より落つべしといひければ、五百餘騎の兵共、木曾殿さやうに討たれ給ひける上は、誰が爲に命をも捨つべきとて、思々に落失せて、僅に五十餘騎にて上りけるが、鳥羽殿の秋の山の程にて見ければ、卅騎には過ぎざりけり。作道・四つ塚・東寺の門へ步ませ行く。樋口の次郎、京へ入ると聞えければ、九郎義經の郎等共、七條を西へ、朱雀大宮を下り、

作道へ馳せ向ふ。信濃の國の住人茅野の太夫光家が子茅野の太郎光弘といふ者は、樋口の次郎兼光が甥なり。木曾殿誅罰の爲に、東國より討手上ると聞きて、山道より只一騎上りけるが、今日都に着きて聞けば、木曾殿は、既に討たれぬ。樋口今日京へ入ると聞きて、急ぎ四つ塚の邊へ馳向つて、兼光が勢に打具して戰ひけり。いつ迄助かるべきにはなけれども、親しき中こそ哀れなれ。光廣矢先に塞がつて、散々に戰ふ處に、筑前の國の住人原の十郎高綱と名乘つて駈出でたり。光弘申しけるは、何れの十郎にてもあれ、敵をば嫌ふまじとて、間近き程に攻寄りて、太刀を拔いて戰ひけるが、茅野の太郎が手に懸り、原の十郎討たれにけり光弘が父、上の宮の茅野の太夫光家・光弘が弟茅野の七郎光重も、兄弟鼻を並べて戰ひけるが、敵四人切殺して、我身も討死してぞ失せにける。兒玉黨團扇の旗差して、百餘騎の勢にて出來れり。樋口を中に卷籠めて、軍をばせず申しけるは、やあ樋口殿軍を止め給へ。和殿計りは助け奉らん。廣き中に入りて聟になるは、斯樣の時の料なり。詮なし〳〵とて、心ならず取籠めて、具して京へ上り、軍將義經に斯くと申しければ、奏聞してこ

そ助けめとて、院の御所に引いて參り、此旨申入れければ、今日は切られざりけり。

木曾首渡さるゝ事

同じき正月廿四日に、伊豫の守義仲が首大路を渡さる。法皇は御車を六條東の洞院に立て御覽ぜらる。九郎義經、六條川原にて檢非違使の手に渡す。檢非違使是を受取つて、東の洞院を北へ渡して、左の獄門に梟けらる。其首四つ、伊豫の守義仲郎等に、信濃の國の住人高梨の六郎忠直・根井の四郎行親・今井の四郎兼平なり。此三人は、四天王に數へられて、一二の者なりければ、義仲と同じく梟けられたり。何者が仕業にか、獄門の木の下に、札を書きて立てたりけるは、

信濃なる木曾の御料に汁懸けて只一口に九郎義經

伊豫の守の首、劔に貫きて、赤布を切つて、賊首源の義仲と銘を書きて、髻に付けたり。義仲左右の眉の上に疵を蒙りたれば、粉米をぞ塗りたりける。次に降人中原兼光、くずこんの水干、葛袴の練色絹に、引立烏帽子を着す。步跣にて渡しけり。法皇

御車の先にして、召止められて御覽あり。上下市をなして見物す。兼光死を遁れて降人となり、大路を渡され面を曝す。其心勇士にはあらざりけりと、皆人恥しめ合へりけり。度々の合戰に功ありしかば、其名を得たる兵なりしに、今人の嘲を招きけるも、然るべき運の極と覺えたり。されば兒玉黨が歎き申すに依つて、義經奏聞せられければ、死罪を許し大路を渡し、禁獄せられたりけるを、院の御所法住寺殿の軍の時、然るべき上﨟・女房達抔を捕へて、衣裳を剝取り裸になして、五六日取籠め奉り、恥を見せ奉りたりける故に、彼の女房達、口惜しき事に思召して、傍の女房達を相語らひ、兼光男を生置かせ給はゞ、尼にならん御所を出でん、淀川・桂川に身を投げんなど、樣々に訴へ申させ給ひければ、法皇も力及ばせ給はず、公卿僉議ありて、女房の訴訟も默し難し、兼光は木曾が四天王の隨一なれば、死罪を許さるゝ事、虎養の恐ありと、殊に沙汰ありて、明くる廿五日に獄舍より取出して、五條西の朱雀に引出されて切られけり。

中原兼光切らる

源平軍物語卷第九終

源平軍物語卷第十

一の谷城構の事

平家一の谷に籠る

平家は、播磨の國室山・備中の水島二ヶ度の合戰に打勝つてぞ、會稽の恥をば淸めける。かゝりければ山陽道八ヶ國・東海道六ヶ國都合十四ヶ國の住人等、悉くに靡きて、軍兵十萬餘人に及べり。木曾討たれぬと聞きければ、平家の人々は、讃岐の國屋島をば漕ぎ出して、攝津國と播磨との境、難波潟一の谷に籠りける。去ぬる正月より、是よき所なりとて城郭を構へたり。東は生田の森を大手の城戸口とし、西は一の谷を城戸口とす。其中三里は、須磨の板宿・福原・兵庫・明石・高砂、隙なく續きたり。北は山の麓南は海の汀、人馬隙ありと見えず、陸には爰彼に堀を掘り、逆茂木を引き、二重三重に櫓をかき、垣楯を構へたり。海上には數萬艘の舟を浮めて、浦々島々に

滿々たり。一の谷といふ所は、口は狹くして奥廣し。南は巨海漫々として波繁く、北は深山峨々として岸高し。屏風を立てたるが如くなれば、馬も人も通るべきやうなし。誠にゆゝしき城郭なり。海には兵船數萬艘を浮めて、算を散らせるが如く、陸には赤旗立並べて其の數を知らず。春風に吹かれて天に飜るは、猛火の燃え上るに似たり。誠に夥しともいふ計りなし。縱ひ敵寄せたりとも、免かれ出づべきやう見えず。平家年來の伺候の人、伊賀・伊勢近國に死殘りたる輩、北陸・南海より拔け拔けに來り附きければ、山陽・山陰・四國・九國に、宗と聞ゆる者共はいふに及ばず、阿波の民部の大輔成良が口狀を以て、安藝の守基盛の息男左馬の頭行盛執筆して、交名記して催されたり。先づ播磨の國には津田の四郎高基、美作には江見の入道・豐田權の頭、備前には難波の次郎經遠・同じく三郎經房、備中には石賀の入道・多治部太郎・新見のけいし、備後の國には奴賀の入道、伯耆の國には小鴨の介基康・村尾海、和泉の國には鹽谷の太夫・多久七郎・朝山の記次・横田兵衞維行・福田押領使、安藝の國には源の五郎兵衞朝房・周防の國には石國の源太維道・野介太郎有朝・周防の介高綱、

石見の國には安主太夫・横川の郡司、長門の國には郡東司秀平・郡西太夫良近・厚東入道武道、鎭西には松浦の太郎高俊・郡司權の頭眞平・佐伯の三郎維康・坂の三郎維良・山鹿の兵藤次秀遠・坂井兵衛胤遠なり。伊豫の國には河野の四郎通信が伴類の外は、弓矢に携はる宗徒の輩、大略參りければ、其次々の者共も必ず志はなかりけれども、人並に出立ちて、洩るゝ者はなかりけれ。

能登の守所々高名の事

四國・九國の輩、我も〳〵と參りける中に、讃岐の國の在廳等、平家を背きて源氏に心を通じ、舟卅餘艘に、二千餘騎乘連れて、都へ上りけるが、抑源氏へ參るに、いかでか平家に一矢射ずしては通るべきとて、門脇中納言敎盛の、備中の國下道の郡に、五百餘騎にて在しましける處へ押寄せて、鬨を作り懸けたり。敎盛事ともし給はず、昨日迄は平家に奉公して、馬の草刈り水吸みし奴原なり。今當家を背き源氏に心を交す條奇怪なり。一々に射殺せやとて、子息に越前の三位通盛・能登の守敎經大將

軍にて、舟十四艘に乘りて、押向うて散々に防ぎ戰ひ給ひければ、在廳等追散らされて、はかぐ〵しき矢一も射ず、おきがかりに淡路の國福良といふ所に着く。淡路の國に、淡路冠者・掃部冠者とて二人あり。故六條の判官爲義が孫共なり。淡路冠者は爲義が四男、左衞門の尉賴賢が子。掃部冠者は同じく五男、掃部の介賴仲が子なり。兵衞の佐殿には、共に從弟なり。當國の住人等、此兩人が下知に隨ひければ、讃岐の國の在廳も、同じく彼に靡き付きけり。通盛・敎經是を聞き、淡路の國へ押渡り、一日一夜攻め戰ひける程に、淡路冠者・掃部冠者共に討たれぬ。大將軍二人討たれしかば、殘る輩、爰彼に追詰められて、一々に切殺され射殺さる。能登の守は、百卅二人が首を取つて、姓名書添へ、福原へ參らする。門脇の中納言は、下道の郡より、福原へ歸り給ふ。通盛・敎經二人は、伊豫の國の住人河野の四郞通信を攻めんとて、二手に分けて四國へ渡る。越前の三位は、阿波の國北郡花園に着き給ふ。能登の守は、讃岐の國屋島の御崎にぞ着き給ふ。河野の四郞此事を聞き、安藝の國奴田の太郞は、源氏に志あり。一になりて軍せんと思ひて、奴田尻へ渡りけるが、今日は備後

の簑島に懸つて、翌日は簑島を漕ぎ出して、奴田尻に着く。能登の守是を聞き、奴田の城に押寄せて、一日一夜攻戰ふ。奴田の太郎矢種射盡して、叶はじとや思ひけん、鎧脱ぎ弓をはづして降人に參りけり。河野が郎等皆討たれて、主從七騎になり、細谿を濱へ向けて落ちけるを、能登の守の郎等に、平八爲員といふ者、引詰め〳〵射ける矢に、六騎射落されて、二人は卽ち死す。四人は半死半生なり。河野は、口惜しき事なり。敵一人に、六騎迄射殺されて、我一人生きたらば、何の甲斐かはあるべきと思ひ切つて、太刀を額に當てゝ、手負の上を飛越え〳〵打懸る。平八、爲員を討取つて小舟に乘り、伊豫の國へぞ渡りにける。能登の守は、河野をば討洩らしたれども、大將軍奴田の太郎を生捕つて、福原も覺束なしとて歸られけり。淡路の國の住人に、安摩の六郎忠景、源氏に志あつて、淡路の冠者・掃部の冠者に同意したりけれども、兩人討たれければ、忠景忍びて五十餘騎にて、兵船六七艘に乘つて、都へ上ると聞えければ、能登の守百五十騎にて、十二艘に漕ぎ連れて追ひけるが、西の宮の沖にて追詰め、前を切つて散々に射る。安摩の六郎河尻へは入らずして、紀伊の路

を指して落行きけり。紀伊の國の住人園部の兵衞忠康も、源氏に志ありけるが、淡路の安摩の六郎、能登殿に追返されて、和泉の國吹井谷川といふ所に着きたりと聞きて、其勢百騎計りにて、和泉の國へ打越えて、安摩の六郎と一になつて上洛す。能登の守是を聞きて押寄せ、散々に追拂ひ、安摩・園部兩人は、叶はじとや思ひけん、都を指して逃上る。殘る者共卅六人が首を切り、姓名を記して福原へ參らする。伊豫の國河野の四郎・豐後の國緒方の三郎・海田兵衞宗親・臼杵の次郎維高等が一になつて、備前の國今木の城に籠る。能登の守三千餘騎にて押寄せて、一日一夜戰ひ、今木の城を追落す。緒方・臼杵は豐後へ漕戻す。河野は伊豫へ渡しにけり。能登の守は、今井の城を追落して、福原へ歸り給ふ。能登殿所々の高名、大臣殿感仰せられけり。誠にゆゝしくぞ見えし。平家は浦々島々にて、朝夕の軍立に、過ぎ行く月日も忘れて、憂かりし春にも廻り合ふ。世が世にてあらましかば、故禪門相國の遠忌を迎へて、兼て堂塔をも起立し、佛經をも用意して、後世菩提を弔はるべけれども、斯る亂れの世の中なれば、そも叶はずして、只男女の人々差集ひては、泣き給へる計りなり。

維盛の住吉詣并明神垂跡の事

權の介三位の中將は、月日の過ぐる儘に、明けても暮れても故鄕のみ覺束なくて、軍の事も心に入れ給はず。弟の新三位の中將を招き具し奉りて、深く身を窶し、住吉の社へ參り給ひつゝ、一夜の通夜をぞ申されける。祈誓は、今一度都へ歸り、再び妻子見せしめ給へとなり。抑此明神と申すは、本は是高貴德王の變身として、名を佛敎に顯はし、今は卽ちえいてつ聖主のしうゐとして、化を神州に蒙らしめ給へり。本地の悲願垂跡の化導を仰ぎ奉り、御祈念あるぞ哀れなる。明けぬれば住の江殿の釣殿に在しまして、つくづくとうそぶきて、彼住吉の姬君、昔誰が松風の絕えず吹くらんとて、琴掻ならし給ひけるを思ひ出して、無常の句をぞ頌せられける。山に入り市に交りても、遁れ難きは無常の使、關固め兵を集めても、防ぎ難きは生死の敵、漢の高祖、三尺の劍を提げし獄卒の猛きをば征せず、張良一卷の書に携はりしも、ゑん王の攻には靡きけり。名利身を助くれども、野原の末に棄てられて、雨露は屍を

濕せり。恩愛心を惱ませども、中有の旅に出でぬれば、黒葉魂に隨ふと、口には誦し給へども、心は都に通ひけり。

忠度名所々々を見る附難波の浦賤の夫婦の事

薩摩の守忠度は、源氏も未だ寄せざりければ、よき隙と覺して、攝津の國の名にしおふ、名所々々を廻り見給ふ。山には王坂山・有馬山・待兼山をも見給ひけり。河には玉川・三島・いな川・あくた川とかや。江には三島江・住の江・堀江・玉江・難波江、浦には須磨の浦・長井の浦・ふたはこの浦、野にはいな野・こや野とかや。森には生田の森・てくらの森、瀧には布引の瀧、關には須磨の關、橋には長柄の橋、島には砥島・豊島・たみの丶島、里には長井の里・玉川の里、爰に移り彼に渡つて見給ふ中にも、難波の浦こそ、古の事思ひ出しつ丶哀れなれ。村上天皇の御宇、天暦の頃とかや。此浦に或人夫婦相住む。さしもの賤の女なりけれども、妻は情ある女にて、生死無常を恐れ、慈悲心に深くして、乞食貧人に物を施し、夫は邪慳放逸にして、更に憐れみの思なし。

我貧は、汝が寳を費す故なりと、大に之を怒りけれども、女是を用ひずして、隱れ忍びて與へければ、夫今は制するに及ばずとて、永く其妻を去りてけり。女はいみじき心ありければ、諸天の加護を蒙りて、卽ち國主の妻室となりぬ。男は其後佛神にや捨てられたりけん、貧しくなつて、すべき方のなかりければ、日々に難波堀江に行きて、葦を刈りて世を過ぎけり。此女輿に乘つて道を過ぎける時、元の夫は葦を刈りて立ちたり。女輿の中にて是を見て、最哀れに無慚に思ひ、彼男を召寄せて、いかに汝、我を捨てぬれ共、斯くこそはあれといひければ、男限りなく恥かしく思ひて、

君なくて葦刈りけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住憂き

女の返事には、

葦刈らじとてこそ人はわかれしが何か難波の浦は住憂き

と詠みたりければ、男卽ち消え入りにけるとなん。彼の夫婦の住みける所とて、里人の敎へけるを見給へば、今は家の跡だにも見えず、ひたすら野にこそなりにけれ。物思ふ所なれば、思ひ知られて哀れなり。浦々島々の名所記し給ひけれ。

維盛北の方歎きの事

三位の中將維盛は、日重なり年隔たりぬるに從つて、故鄕に止め置きし人々も戀しく、聞かまほしく思召しけるに、偶商人の便を得て、北の方より御文あり。珍らしとて開き見給へば、相構へて迎へ取り給ふべし。人知れず歎き悲しむ心の中、いかでか知らせ奉るべきとまで、せめての事には覺えて候。只推量り給ふべし。幼なき者共の、斜ならず戀しがり奉れば、我身も思に打添へて、詮方なく思ひ侍れば、永らへ候べしとも覺えず、生きて物を思ふも苦しければ、消えも入らなばやと思へども、又憂世に立廻らば、などか今一度見もし見えもし奉る事なからん。つれなき心に繫がれて、今迄は斯くて侍れども、終に如何なるべしとも思分かず。若し昔語どもなりなば、幼き者共が、父にこそ捨てられ奉らめ。母にさへ後れて、賴む方なき者となつて、誰に育まれ奉らんと、兼て思ふも悲しくこそ侍れ。さてもいかに唯一人は在しまし候なるぞ。心苦しくこそ。いかならん人をも相語らひ給ひて、旅の御徒然をも

慰さみ給へかし。契はそれにしもよるべきかはと、細やかに書き給ひたりければ、いと悲しく覺えて、伏沈み給ひけるこそ哀れなれ。是をば斯くとも知り給はず、三位の中將は、他の大納言の如く、二心あるにこそとて、大臣殿も打解け給ふことなければ、ゆめ〳〵さはなきものをとて、いとゞ味氣なしとて、さらば迎へ取つて、一所にていかにもならばやと、常は思立ち給ひけれども、我身こそかく憂からめ。人の爲めにいとほしければとて、明し暮らし給ひけるぞ、せめての志の深さと覺えて哀れなれ。

九郎義經勢汰の事

九郎義經は、平家追討の爲に、西國へ發向すと聞召しければ、義經を院の御所六條殿へ召して、我朝には、神代より傳へたる三種の御寶あり。卽ち神璽・寶劒・內侍所是なり。天津御神の國津主に傳へて、百王鎭護の神寶・萬民豐饒のれいちんなり。相構へて事故なく、都へ返し入れ奉れと仰含められける。義經畏つて、いと事易げに、仔

細や候べきとて罷立たれければ、法皇御嬉しげに思召されけり。同じき四日卯の刻には、源氏既に發向す。追手の大將軍には、蒲の冠者範頼、相從ふ輩には、武田太郎信義・稻毛の三郎重成・同じく舍弟榛谷の四郎重朝・同じく五郎行重・長野の五郎淸重・梶原平三景時・子息源太景季・同じく平次景高・同じく三郎景家・曾我の太郎祐信・千葉の介經胤・子息太郎胤正・小次郎成胤・相馬の次郎師常・子息國分の五郎胤通・同じく六郎胤賴・武石の三郎胤盛・舍弟大すかの四郎胤信・佐貫の四郎太夫廣綱・海老名の太郎兄弟四人・中條の藤次家長・兒玉には庄の太郎家長・同じく三郎忠家・同じく四郎高家・鹽谷の五郎維廣・小林次郎・同じく三郎・小河の五郎・秩父武者四郎行綱・太田兵衞重平・廣瀨の太郎實氏・太田の四郎重治・安保の次郎實能・中村小三郎時經・玉の井四郎助重・高山の三郎・八木の次郎・同じく小次郎・川原の太郎高直・同じく次郎盛直・小代の八郎行平・久下の次郎實光・小野寺の太郎道綱等を先として五萬餘騎、二月四日の辰の一天に都を立つて、播磨路に懸つて、其日攝津國に着き、昆(こや)湯に陣を取る。搦手の大將軍は九郎義經、相從ふ輩には、安田の三郎義定・一條の次郎忠賴・逸見の冠

者義淸・武田の兵衞有義・畠山の庄司次郎重忠・久下の權の頭直光・大內の冠者維義・齋院の次官親能・山名の太郎よしのり・土肥の次郎實平・子息彌太郎遠平・三浦の別當義澄・和田の小太郎義盛・佐原十郎義連・多々良の五郎義春・同じく次郎光義・かすやの權の頭重國・同じく藤太有季・川越の太郎重賴・同じく小太郎重房・後藤兵衞實基・猪俣の金平六範綱・平の佐古の太郎爲重・熊谷の次郎直實・子息小次郎直家・平山武者所季重・大川戶の太郎廣行・もろ岡の兵衞重經・金子の與一近範・源八廣綱・小川の小次郎助茂・山田の太郎重澄・原の三郎きよます・片岡の太郎經治・長井の小太郎義兼・筒井の次郎義行・伊勢の三郎義盛・葦名の太郎淸高・蓮沼太郎忠俊・同じく六郎國長・岡部の六彌太忠澄・同じく三郎忠康・渡柳の彌五郎淸忠・江田の源三・熊井太郎・蒲原の太郎正重・同じく三郎正成・池上の次郎・香河の五郎・諏訪の三郎・藤澤の六郎・平賀の次郎景宗・封戶の次郎・同じく六郎正賴・奧州の佐藤三郎兵衞繼信・同じく四郎兵衞忠信・城の三郎・片岡の八郎爲春・備前の四郎・鈴木の三郎重家・龜井の六郎重淸・武藏坊辨慶等を始として、一萬餘騎にて、是も同じき四日の寅卯の刻に都を出でて、丹波

路に懸つて、二日路を一日に打つて、播磨・丹波・攝津三ヶ國の境なる氷上の郡三草山の東の山口、小野原といふ里に、戌の刻に馳付けて、卽ち爰に陣を取る。但關東の評定には、梶原平三は、侍大將にて九郞義經に付き、土肥の次郞は侍大將にて、蒲の冠者に相隨ふべしと定められたりけるに、實平は範賴を捨てゝ、九郞義經に附き、景時は義經を離れて、五百餘騎を引分けて、蒲の冠者に付きにけり。畠山は、元は九郞義經に打具して、宇治川を渡したりけるが、京にては、蒲の冠者に伴ひけり。今度一の谷へ發向には、畠山又範賴の手を引分けて、五百餘騎にて義經に屬し、其故は、梶原、兵衛の佐殿の氣色誇りして、諸國の侍共を手に握り、我儘にと振舞ひければ、景時に下知せらるゝ事、目ざましく思ひける上、蒲の冠者の軍將のやう、九郞御曹子には、雲泥を論じて劣り給へりとて、搦手にぞ付きにける。九郞義經は、是等が出入を見給ひて、梶原が、義經を惡しとて出でたれども、畠山又返り入りたれば、よし〳〵利もなく損もなし。同じく五百餘騎、武と剛も同じ事なり。されども力はいかでか畠山に並ぶべきなれば、猶かへまさりとぞ宣ひける。三草山は、山の内三里なり。

源平三草山對陣

源氏既に東の山口に陣を取ると聞えければ、平家は西の山口を固むべしとて、大將軍には、新三位の中將資盛・左少將有盛・備中の守師盛、副將軍には平內兵衞淸家・江見の太郎淸平を始として七千餘騎、三草山の西の山口に馳向ひて陣を取る。源平互に大勢にて、三里の山の中に隔て支へたり。

義經三草山に向ふ事

去程に四日の戌の刻計りに、九郞義經、土肥の次郞を召して、平家は是より三里隔てて、三草山の西の山口に、大勢にて控へたり。軍はいかゞあるべき。夜討にやすべき、曉や寄すべきと問ひ給ふ。土肥未だ物もいはざる前に、伊豆の國の住人田代の冠者信綱といふ者申しけるは、平家はよも夜討の用意はあらじ。是程の大勢なり。定めて夜明けにぞ軍はあらんずるとて、馬の足休め、物具寬げなんどして休むらん。されば夜討はよく候ひぬと存ず。敵は七千餘騎と聞ゆ。味方は一萬餘騎、何者かあるべき。夜の紛れに押寄せ給へかしと申されければ、土肥は、田代殿の御儀然るべ

く候。實平も斯くこそ存候へ。先づ人を制して後、人の爲めに制せらるゝともいふ。一陣破れて、殘黨全からずとも申せば、先づ夜討に追落して、勝に乘るには如かじと同じければ、元より義經が所存なり。さはあれども、一義二義を出して、惣に味はゝするは故實なり。さらば疾々急ぎ給へと宣ひける。彼田代の冠者と申すは、俗姓は後三條の院第四の皇子の御子、左皇有佐五代の孫とぞ承はる。父爲綱の卿朝恩を蒙りて、伊豆の國司を給はり、任國の神拜に下し給ひたりけるが、暫く在國の間、工藤の介茂光が娘を思ひて、儲けたりし子なり。爲綱は上洛しけれども、信綱は未だ嬰兒の事なれば、外戚の祖父工藤の介夫婦是を憐みて、伊豆の國にて養ひ奉る。生年十一歳より、流人兵衞の佐の見參に入りて、內外なき事にて在しましけり。石橋山の合戰にも、兵衞の佐の軍破れて、杉山へ入り給ひけるに、祖父狩野の介が首を取り、伯父甥連れて荻野五郎を射拂ひ、佐殿の方へ馳參りたる剛の者なり。木曾追討の時、軍兵多く差上されけるに、此田代の冠者をば、自然の用心にとて、鎌倉に止められたりけるが、木曾が合戰に、勢多の討手負けて無勢なり。猶軍兵を添へらるべし

と、關東へ申されたりけるに依つて、九郎都に候へば、何事も仰合せられ候べしとて、遲れ馳せに狩野の五郎に打具して、五百餘騎にて上洛せり。文は父方を學び、武は外方を傳へつゝ、兼帶公家武家文武一さうの達者なりければ、かく計り申されけり。九郎義經は、さらば夜討にせよとて、一萬餘騎にて、三草山を山越に、西の城戸へと打ち給ふ。平家の方には、先陣こそ自から夜討もやと用心しけれ。後陣は明日の軍とて、甲を脫ぎ箙を解いて枕として、打重り〳〵、前後も知らず伏したりけり。源氏の兵は、微なる山中を、しかも無案內にて、木の本いぶせき闇の夜に、過ぐる事こそ難儀なれ。上下歎き思ひけるに、軍將眞先懸けて打ち給ふ。大將もさすが始めたる山なれば、武藏房々々々と召す。辨慶先に進み出でたり。例の大松明用意せよやと宣ふ。軍兵等は、其心を得ざりけれども、辨慶は用意仕りて候とて、大勢に先立ちて、道の邊の家々に追着き〳〵火をさしけり。火焰天に輝きて地を照しければ、山中三里は、此光にて越えにけり。誠に大松明とは、今こそ人々心得けれ。旣に子丑の刻にもなりぬれば、闇さは闇し、東西も見えざりけるに、源氏一萬餘騎、三草山の西の

山口に押寄せて、鬨の聲を上げたりける。夜討の聲に驚きて、平家、取る物も取敢ず、甲を着て鎧をば捨て、矢をば負うて弓をば取らず。馬一疋には二三人取付きて、我先にと爭ふ。弓一張には四五人取合うて、引折りたり。主は從者を知らず、親は子を顧みず、たまたま太刀を拔きて、敵を切ると思へども、目ざすとも知らぬ闇なれば、多くは友討にぞ亡びけれ。大將軍新三位の中將資盛・同少將有盛は、大勢に追散らされて、一矢を射る迄は思ひ寄らず、罵り落ちて遁れ給ひたりけるが、面目なしとて、福原へは入り給はず、舟に取乘り、讃岐の屋島へ渡り給ふ。源氏は軍の手合に、門出よしとて勇みけり。生捕共の首切つて、西の山口に竿結ひ渡して、百八十人を梟けたりける。

平氏手向を嫌ふ事

同じき五日、備中の守師盛・平内兵衞淸家、大臣殿へ參り給ひて、味方の兵共、兼て夜討あるべきとも存ぜざるの間、曉迄とて休み伏したる處に、源氏等夜半に押寄せて、

散々に駈廻せば、思ひ寄らず俄事にて、我先々々にと落失せぬ。山の手、ゆゝしき大事の所に候。猶も手を向へらるべきにて候と申されければ、大臣殿、淺ましき事にこそとて、安藝右馬の介基康を使にて、方々へ仰せられけれども、面々に辭退申さる。能登殿へ仰せられけるは、三草山旣に夜討に破られぬと申す、一の谷をば、貞能・家仲に仰付けぬれば、さりともと存ず。生田をば、新中納言・本三位の中將固め候ひぬれば、心安く覺ゆ。山の手には、盛俊を遣しぬれども、大事の所々と承はれば、心苦しく存ずる間、猶手を向へばやと思ひ侍るに、兵共が、大將軍一人も在しまさでは惡かりなんと、歎き申すに付いて、人々に申せば、いづれの殿原も惡所なれば、向はじと申合する。いかゞし侍るべき。且は身々の御大事なり。向はれ候て、兵共をも御下知あれかしと仰せられたり。能登の守の返事には、軍は相構へて、我一人が大事と存じて振舞ふだにも、時に臨んで惡き樣の事多し。それに心々にて、惡所をば行かず固めずと嫌ひ、よき方へは向はん守らんと申されんには、終によかるべしとも覺えず。惡所とて嫌はるゝは、兵の命を惜むにこそ。身をたばらんには、軍場へ向

はぬには如かじ。源平東西に爭ひて、命を限りの軍なれば、身命を惜むべからず。死はいつも同じ事なり。人々の强し惡しとて嫌ひ給ふ處をば、敎經に預け給へ。幾度も固むべく候。御心安く思召せとて、能登殿は、三草山へぞ向はれける。誠にゆゆしくぞ聞えし。同じき六日、義經、田代の冠者を招きて宣ふやう、土肥の次郎實平等を具して、七千餘騎にて、一の谷の西の城戸口、山の手を破り給へ。義經は鵯越を落すべしとて、佐藤三郎繼信兄弟・江田の源三・熊井の太郎・伊勢の三郎義盛・畠山の庄司重忠・熊谷の次郎直實・同じく小次郎直家・平山の武者所季重・片岡の八郎爲春・佐原の十郎義連・後藤兵衞實元・源八廣綱・武藏坊辨慶等を始として、手に立つべき究竟の兵三千餘騎を選み勝り、一萬餘騎が中より、三千餘騎を相具して、三草山の奧へ入り、綱下り峠打過ぎて青山にかゝり、折部山・鉢伏峯・蟻戸といふ所へ向ひけり。軍將其日の裝束には、赤地の錦の直垂に、黃返しの鎧着て、さび月毛の馬の太く逞きが、尾髮足れるに乘り給ふ。名をば靑海波とて、東國第一の名馬なり。太夫といふ黑馬には、白覆輪の鞍置きて、勞りて引かせらる。此馬は今度の上洛に、鎌倉殿より得給

へり。本の名は薄墨とぞ申しける。彼山道は、長山遙に續きて、人跡殆んど絶えたり。鵯越とて、ゆゝしき嶮難の石岩なり。自ら鹿計りこそ通りけるに、軍將前に進んで宣ひけるは、義經が乘りたる大鹿毛は、陸奥國にて名を得たる、氣高き逸物なり。敵に合はん時は、必ず此馬に乘るべしとて、平泉を立ちし時、秀衡が我に得させたりき。鎌倉殿のたびたる薄墨にもまさりてこそあるらめ。されば宇治川を渡りし時も、此二疋の馬共は、鞍取より上を濕せざる逸物なり。さても我朝の名馬には、三日月・和琴・鳥形・浦々・荒磯・望月・宮木・大耳子・小耳子・夏引・小花なんどなり。或は長七尺に餘り、或は八尺なんどありけりといふ。滿政が赤六、貞任が大黑にも劣るべしとも覺えず。音に聞ゆる鵯越の岩石、此馬のかけらざるべき所にしもあらじ。明日卯の刻の矢合なり。急げや〳〵とて、伏木砕道をも嫌はず、木すきを守つて打ち給へば、我も〳〵と續きたり。九郎御曹子下知し給ひけるは、此山の足立、極めて惡し。惡所に懸つて、馬をも人をも損ずべからずとて、武藏房辨慶と召す。辨慶、候とて進參す。裝束には、褐の直垂に、黑皮縅の鎧に、同じ毛の甲に、三尺五寸の黑塗の太刀

佩いて、黑羽の征矢負ひて、塗籠の弓に、好む長刀取具して馬より下り、軍將の前に參る。本より色黑く長高き法師なり。身の色より上の裝束迄、牛驚く程にありければ、燒野烏に似たりけり。やあ辨慶承れ。日も漸く傾けば、木陰繁りて道見えず。山の案內者尋ねてんやと宣へば、畏つて馬に乘り、戌亥に向つて十餘町步ませ下つて、谷の底を窺ひ求むるに、微に火の見えけるを打寄りて見れば、けしかる萱屋あり。內に七十餘りなる翁と、六十餘りなる姥と、腹搔出して火に當り居たり。辨慶聲づくろひして、事々しく申しけるは、鎌倉兵衞の佐殿、朝敵追討の院宣を給はり在しますにより、軍兵を差上さるゝ間、平家都を落ちて此山に籠る。卽ち御弟の蒲の御曹子、大手に向ひ給ひぬ。九郞御曹子搦手として、此上の山に在します。案內者に參れとの御使に、武藏房辨慶とて、古山法師が來れり。疾々參るべきなりといふ。老人急ぎ起上り、烏帽子打着て申しけるは、若く侍りし時は、攝津の國丹波の山々、木の根岩の角、知らぬ所は候はず。年長け身衰へて、此廿餘年は弓引かず、行步叶はず候。子息の小冠者は不敵の奴、案內よく知つて候らん。召具せらるべしとて、片屋

にありけるを呼起して、心を合せて參らせけり。柿の衣物に同じ色の袴、節卷の弓に猿の皮の鞘、鹿矢數多さして、辨慶に相具して參りたり。頰骨荒れて面がまち高く、まかぶらおほうて勢大なり。御曹子は、いかに汝が居所をば何といふぞ。年はいかにと問ひ給へば、年は生年十七、居所は山のはなが差覆つて、鷲の顏に似たりとて、鷲の尾と申付けて候。扨汝が親には嫡子か末子か、名乘はいかにと問ひ給へば、名は未だ付かず、親は鷲の尾の庄司武久、親には三郎に相當り候と申す。かたじく聞召して、佛の正法解き給ひし處、鷲に似たれば、鷲峯山と號せらる。達多が邪法を弘めける砌は、象の頭に似たりとて、象頭山と呼びけり。震旦には、香爐に似たる山とて香爐山、龍の伏したるに似たりとて驪龍山。我朝には、比叡山は長ければ長柄の山、金嶽は金の多ければ、金峯山と名を得たり。例なきにあらず。されば汝をば、鷲の尾の三郎義久といふべし。只今烏帽子親の引出物とて、花艣木のつかに、白金筒の金入れたる刀に、鹿毛の馬に鞍置いて、赤皮威の甲冑、小具足付けて給びたりけり。是より思付き奉りて、一の谷の案内者より始めて、八島文司の關判官、奥州へ落下り

給ひし時、十二人のそら山伏の其一なり。老いたる親をも振捨て丶、悲しき妻をも別れつ丶、奥州平泉の館にして、最後の供をしたりしも、情ある事とぞ聞えし。或人のいはれけるは、攝津國源氏にて、かたの如く所領のありけるを、難波の次郎に押領せられ、山林を狩りて、爰に住みけるとぞいひける。異説にいはく、三草山の夜討の時、生捕多かりける中に、切るべきをば切棄てられ、許さるべきをば木の本に結付けて、山の案内者にとて、兵具をば許さずして、召具し給ひたりける男あり。引出し問ひ給ひけるは、抑和俗は、平家伺公の家人か、國々のかり武者かと問ひ給へば、是は平家の家人にもあらず、又かり武者にも侍らず。播磨の國安田の庄の下司多賀菅六久利と申す者にて候が、重代の所領を、平家の侍越中の前司盛俊に押領せられて、年來訴へ申候へども、理訴を權威に押され、妻子を養ふ便なければ、此山に住み、鹿鳥を取りて、世を渡り侍りつる程に、斯る源平の御合戰と承れば、軍に交はつて疵をも蒙り、命をも失ひたらば、子孫の安堵にもなり候べきかとて、自然に供たりと申す。倩は汝を、深く山の案内者には賴む。所領の安堵仔細あらじとて、縛を許して、馬鞍

兵具給びて、召具せられたりけり。問答鷲の尾の三郎が如し。平家亡びて後、九郎判官判形を加へ、安田の庄の安堵を給ふと云々。御曹子は、いかに鷲の尾、山の案内はと問ひ給ふ。此山をば鵯越とて、極めたる惡所にて、左右なく馬人通るべしとも覺えず、上七八段は、屏風を立てたるやうにて、白砂混りの小石なれば、草木生ひず、馬の足止め難し。それより下五六段は、岩磯にて、人だにも通り難しと申す。さて此山には鹿はなきか。彼惡所をば、鹿は通らずやと問ひ給ふ。鹿こそ多く候へ。世間寒くなり候へば、雪のあさりに喰はんとて、丹波の鹿が一の谷へ渡り、日影溫になりぬれば、草の繁みに伏さんとて、一の谷より丹波へ歸り候なりと申す。さて其下には、落し堀ひしなど植ゑたりやと問ひ給へば、去事承らず。御景跡候へかし。馬も人も通るべき所ならねば、いかでか其用意侍るべきと答ふ。御曹子は是を聞き給ひ、殿原、さては心安し。やあ鷲の尾、鹿にも足四つ、馬にも足四つ。尾髮のあるとなきと、爪の分れたると圓きと計りなり。西國の馬は知らず、東國の馬は、鹿の通る所は馬場ぞ。打てや殿原とて、岩のはな岸のひたひ、馬の足を手綱に合せて、馳落

し馳上せ、尻輪に乘懸り、前輪にひらみ、引すゑ引つめ、鞭と鐙と打合せ打亂し、猨の如くにかけり、虎の如くに走りて、北の山の下にぞ至りける。義經兵法其術を得て、軍將其器に足れり。相隨ふ者、又孟賁が類、樊噲が輩なりければ、續いて同じく通りにける。二月上の六日の事なれば、月は宵よりはや入りぬ。木陰山陰暗うして、夜も五更に及びけれども、鷲の尾に具せられて、敵の城の後なる鵯越をぞ上りける。鷲の尾東を指して申しけるは、あれにほの見え候は、河尻大物の濱・難波の浦・こや野・打出の濱・西の宮・葦屋の里と申す。南は淡路島、西は明石の浦、汀に續いて火の見えしは、平家の陣の篝火。此下の社は一の谷なり。東西の城戸の上、東の岡をば平曖とて、海路遙に見渡して、眺望殊に面白ければ、望海樓をも構へぬべし。西の岡をば高松原とて、春の鹽風身に泌みて、秋の嵐の音凄じき所なりとぞ申したる。軍兵をまん〳〵たる海上に見渡し、渚々の篝の火、あまの苫屋の燈火やと、いと興ありと思ひけるに、鷲の尾斯く申し續けたれば、御曹子は、猛き事柄も優なる詞をも感じ給ひつゝ、皆紅に日を出したる扇を以て、鷲の尾に給び、是にて敵を招き高名仕れ。

勳功は乞ふに寄るべしとぞ宣ひける。空も未だほの闇かりければ、暫く爰にて馬の足をぞ休めける。

熊谷父子城戸口へ寄す并平山・成田同所へ來る事

熊谷父子、西の城戸口に攻寄せて、大音上げていひけるは、武藏の國の住人熊谷の次郎直實・同じく小次郎直家、生年十六歳。傳へても聞くらん、今は目にも見よや。日本第一の剛の者ぞ。我と思はん人々は、楯の面へ駈出でよといひて、鏃を並べて馳廻りけれども、只遠矢にのみ射て、出合ふ者はなし。熊谷、城の内を睨みて申しけるは、去年の冬、相模の國鎌倉を出でしより、命をば、兵衞の佐殿に奉り、屍をば平家の陣に曝し、名をば後代に止めんと思ひき。其事一の谷に相當れり。軍將も侍も、我と思はん人々は、城戸を開き打出でて、直實・直家に落合ひ、組めや〳〵といへども、出づる者もなく、名乘る者もなかりければ、此城戸口には、恥ある者もなきか。父子二人はよき敵ぞ、室山・水島二ヶ度の軍に、高名したりといふなる越中の次郎兵衞・惡

七兵衞等はなきか。所々の戰に打勝ちたりと宣ふなる能登殿は在せぬか。高名も、敵によりてする者ぞ。さすが直實父子には叶はじものを。あな無慙の人共や。いつまで命を惜むらん。出でよ組まん出でよ組まんといへども、高櫓の上より城戸を隔てゝ、雨の降るが如くにぞ射ける。熊谷、小次郎に敎へけるは、是ぞ初軍、敵寄せぬればとて騷ぐ事なかれ。射向の袖を眞甲に當てよ。あきまを惜みて搖合せよ。常に鐙つきせよ。立働らきて裏をかゝすな。仰のきかけて內甲射さすな。差俯きててへん射らるなとぞ申しける。直實は、小次郎を矢先に當てじと、鎧の袖を翳して立隱せば、直家は父をはごくみて、前に進みて矢面に立つ。武き心の中にも、親子の情ぞ哀れなる。斯く寄せて一軍したりけれども、夜は猶深し城戸口は開かず、味方も未だ續かねば、死する命は、いづれも同じ事なれども、暗闇に證人もなく、死にたらんは正體なしと思ひければ、明くるを遲しと待ち居たり。平山も、熊谷が心に少も違はず、先陣を心に懸けて、三草の閑道に懸りて、浦の手に打出でて、後陣を待ちて城戸口を破らんと思ひ、大勢をば弓手に見なし、三草の山を打過ぎ、尾一つ越え

て、須磨の浦を指して打つ程に、先立ちて武者一人歩ませ行く。あれは誰ぞと問ひければ、家正と答ふ。成田の五郎にてぞありける。成田思ひけるは、平山が馬は、聞ゆる逸物なり。我馬は弱ければ、打連れて先陣かくる事叶ふまじ。たばかり歸さんと思ひて、家正、馬の鼻を引返して、平山にいひけるは、高名は、大手搦手によるまじ。平家の大勢、猶三草・小野原越に向つて、兩方より差合せ、源氏を中に取籠めて、洩らさじと支度すると聞く。誠に取籠められなばゆゝしき大事なり。其上大勢の中を忍び出でて、先を駈けたりとても、誰かは證人に立つべき。後陣の勢を相待ちて、先陣をこそ懸くべけれといひければ、平山聞きて實にもさあるべしとて、暫く休み居たれば、成田、あからさまなる様にもてなして、甲の緒をしめて進み行く。平山は、我をたばかるにこそと思ひて、馬に打乘り、鞭に鐙を合せて行きければ、成田、今は叶はじと思ひて、やらぬ體にもてなし、誠は我れ馬弱ければ、いかにも御邊に先ぜられぬと思ひつれば、たばからんとて申したり。强からん乘替一疋給べ。命生きたらば、後の證人にもし給へかしといひけれども、平山耳にも聞入れず、成田を弓手に見

なして打て通りけるが、遙に延びて思ひけるは、成田が馬を乞ひつれども、餘りの憎さに、返事いはざりつる事情なし。見合ひたらば取つて乘れかしとて、さび月毛なる馬の五臟太なるが、七寸に餘りたるに鞍置きたるを、道の端なる木に繫ぎ付けてぞ通りける。成田此馬を見て、同じくれば早くくれて、共に打連れて行きなましと、獨言して乘りつゝ、鞭を打てぞ馳行きける。熊谷暫し休みて、小次郎にいひけるは、誠や平山も、打込の軍をば好まず、一定爰へぞ來らんずる。城戸口開く事あらば、相構へて先駈らるなといひ敎ふ。平山は、成田をば打捨てゝ、山の細道分行けば、闇さは闇し、差俯き〳〵見れば、薄氷を踏破つて、馬の通りし跡あり、熊谷に先駈られぬよと本意なくて、いとゞ馬をぞ早めける。其日の裝束には、滋目結の直垂に、赤威の鎧着て、二引量の母衣を懸けて、目かすげの馬にぞ乘りたりけれ。熊谷は、西の城戸口濱際に控へて、誰かは先をば懸けべき。はや城戸口を開けかしとぞ相待ちける。後の方に、馬の足音、人影のするやうに覺えければ、雲透に是を見るに、武者二騎馳せ來れり。近付くを見れば平山なり。案に違はずと思ひて、いかに平山殿か。季重聞

きて、問ふは誰ぞ。熊谷殿か。直實と名乘り合ひ、共に一所に寄せ合ひたり。平山、熊谷に語りけるは、打込の軍は剛臆見えず。いかにも追手にて、はがねあらはさんと思ひて、子の時に、山の手を忍び出でたりつれば、寅の時には、爰へ來り着くべかりつるを、成田來りて申すやう、御邊は西の木戶口へ向ひ給ふか。誰もまかるぞ、打連れ給へ。只一人敵の中へ打入りたりとも、證人なき所にて死したらば、何ともなき徒ら事、犬死なり。味方の續きたらん時に、先を懸け命を捨てゝこそ、我も人も高名にて、子孫に勳功もあらんずれ。闇打に射殺されては詮あるまじ。卯の始の矢合といへども、辰の始にぞあらんずる。是非軍は夜のしのゝめ、暫く爰にて馬勞り、後陣を待ち給へ。家正も休むといひつれば、實にもと思ひて、暫し峠に下り居て、はるび寬げ甲脫いで、人やどりに休む所に、暫したゆらひて、成田甲打着て馬に乘り、坂を上り先に進む。我をたばかる惡き事なり。其儀ならば劣るまじと、言葉をかけて馬に乘り、一鞭當てゝ追ひ並べ、鐙のはなにて、成田が馬を一摺摺らせて先立ちぬ。馬を所望したる間、惡けれども、道に馬を繫がせて先立ちたり。彼は谷川を下りに、

西の尾を北へ廻りつれば、今十町は下りぬらん。さればいかにも弓矢取る身は、よき馬を持つべきことなり。季重は、武藏の國の姉埣立の名馬なり。左の目にちとしのづきのあれば、目かす毛と申す。熊谷殿の御馬と、勝劣あらじと語りつゝ、共に夜の明くるをぞ待ち居たる。さる程に成田の五郎も、主從三騎にて追ひ來れり。各濱際に打並べて、渚に寄り來る白波に、馬の足洗はせて、城の內を聞けば、櫓の上に伎樂を調べ管絃し、心を澄して遊ばれけり。夜深更に及んで、山路に風止み海上に水靜なれば、寄手の者共も、弓杖に縋りて是を聞く。熊谷感じていひけるは、誠や大國にこそ。軍の庭にして管絃し、歌を詠じ調子を正し、勝負を知るといふことはあるなれ。我朝には未だ其例を聞かず。哀れ今に上﨟都人は、情深く心もやさしき事かな。斯る亂れの世の中に、龍吟鳳鳴の曲を調べ、詩歌管絃の興を催す事の面白さよ。我等いかなれば、邪慳の夷と生れ、いつまで命を生きんとて、身には甲冑を離たず、手には弓矢を携へて、斯樣の人に向ひ奉り、とうじやうの劒を磨く事の悲しさよとて、淚ぐみけるこそ哀れなれ。去程に、夜もほの〴〵と明けにけり。平山、熊谷にい

ひけるは、城の構へやうを見るに、二重の櫓には、平家の侍・國々の兵共並居たり。高岸に添へて館を並べて、大將軍在します。海には石を疊み重ねて、大船共を片寄せ置けり。上に櫓をかけり。城戸口には逆茂木重々に引廻して開かねば、容易く駈入る事叶ひ難し。いかゞすべきといふ程に、城の内の兵共の評定しけるは、熊谷父子と名乘りて、組まん〳〵と罵るを、此陣固めながら、洩らさん事言甲斐なし。さりとて大勢にもあらず、只三騎なり。偖又後陣の大勢の續くにもあらず。東國には、實に此等こそ名ある者にてあるらめ。日本第一の剛の者と名乘るをば、いかゞ空しく返すべき。いざ殿原、熊谷父子生捕にして、大臣殿の見參に入れんといふ。然るべしとて、越中の次郎兵衞の尉盛嗣・上總の五郎兵衞忠光・同じく惡七兵衞景淸・飛驒の三郎左衞門景經・後藤内定綱以下、逸雄の若者共廿三騎、城戸口の逆茂木を引退け、鑣並べて喚いて駈出でける處に、平山は、波打際より馬を出して、主從二騎駈出でつゝ、武藏の國の住人平山武者所季重、かくこそ先をば駈くれとて、城戸口へぞ馳せ入りたる。城内の者共は、熊谷鬼神なりとも、廿餘騎の勢にては、手捕にせんと見る處に、

差違へて平山と名乘りて駈入りければ、廿三騎も、平山に付いて內に入る。城の中には、源氏の大勢に、城戶口を破られぬと心得て引退く。櫓の上より是を見て、敵は二騎ぞ。いたくな騷ぎそとて、矢をはげ射んとすれども、味方は多し敵は二騎、一所にたまらず、いなびかりなんどのやうなれば、弓を引きては許し、引きては許しけれども、矢の當て所はなかりけり。櫓にて下知しけるは、平山と名乘るは、本所經たる名ある侍、よき敵ぞ。其男取つて引落せ。坂東者は、馬の上にてこそ口はきけども、組んで後には物ならじ。落合へ〳〵殿原と、兩方の櫓の上より進めけれども、平家の侍の乘りたる馬は、船に搖られ、飼ふ事は稀なり、乘る事は暇なし。日數は遙に經たり。平山が目かすげの馬は、勇みいばひたる大馬の、狂象の猛るやうに、弓手妻手を嫌はず、一所に留らず馳せければ、相構へて當てられじとぞためらひける。ましてや落合ふ迄は思ひ寄らず。熊谷父子は、廿三騎が後を守つて喚きて懸る。廿三騎は、平山をばうちはになして、取つて返して熊谷に向へば、平山又喚いてかゝる。廿三騎は、熊谷を外樣になして、取つて返して平山に向へば、熊谷又喚いてかく。三廻り

四廻り、くるり〳〵と廻りたれども、いづれも組まずして、終には敵五騎をば外樣になしてぞ防ぎたる。熊谷は平山を休めんとて、暫く和殿は氣を繼ぎ給へとて、父子二人面に立つて、散々に戰ふ。左右の櫓より射ける矢は、雨の足の如くなれども、冑に立てば裏かゝず、あきまを射ねば手は負はず、越中の次郎兵衞の尉盛嗣、紺村濃の直垂に、赤糸威の鎧着て、白星の甲に、葦毛の馬に乘り、先に進みて、熊谷に打並べて組まんずるやうにはしけれども、熊谷父子は上食しつゝ、隙もすかさず待かけて、父に組まば直家落合ひ、子に組まば直實落重なるべき氣色にして、少しも退かざりけるつらだましひ、叶はじとや思ひけん、盛嗣一段計りを隔てゝ申しけるは、大將軍に逢うてこそ、命をも捨てめ。和君に組む事あるべからずといふ。熊谷勝に乘つて、きたなし盛嗣よ。直實をだにも恐れて組まぬ者が、大將軍に組まんといふは、へらぬ體の言葉か、先づ直實に組んで、源氏の郎等の手の程見よやといひけれども、盛嗣終に組まずして、さらぬ體にて控へたり。惡七兵衞景淸は、盛嗣が組まざりけるを、惡しとや思ひけん、次郎兵衞をば妻手になし、渚の方より、熊谷に組まんと喚いて懸

りければ、直實父子、景淸に目を懸けて進みける。旣に組まんとしけるを、次郞兵衞、やあ七兵衞殿、君の御大事、是に限るまじ。あれ程の者に會うて、命を捨てん事無益なり。留まり給へ。詮なし〳〵と制しければ、惡七兵衞も、事柄には出でたりけれども、いかにして留まらんと思ふ處に、斯く制しければ、立留まりて組まざりけり。其外廿三騎の者共、口々に罵りけれども、熊谷・平山に近付き寄る者はなし。共に武藏の國の住人直實・季重、日本第一の剛の者、一人當千の兵と名乘つて、逸物の馬共に乘りたれば、爰かとすれば彼にあり、彼かとすれば爰にあり。二三疋が走り廻りける有樣は、四五十疋が馳せ違ふに似たり。平家の侍、組む事は叶はずして馬を射る。熊谷馬の腹を射させて、頻に跳ねければ、足を越えて下り立ち、落合へ〳〵といへども、終に人落合はず。小次郞は、父が馬に矢立ちぬと見てければ、今は最後と思ひ切つて、二の垣楯の際迄押寄せて、熊谷小次郞直家、生年十六歲。軍は今日ぞ始めなる。組めや者共、落合へ人共といひければ、平家の侍共、狐の子は面白と、親に似たる不敵者かな。聞けば十六といふ。誠にさ程にぞなるらん。餘すなとて、散々に

射ける矢に、小肱を射させて引退く。熊谷は、小次郎手負ひぬと思ひ、打寄せて見ければ、直家父に向うて、此矢拔いて給べといふ。熊谷、是は痛手にあらず、暫し休へよ。隙のなきぞといひ捨てゝ、又喚いて攻め入り戰ひけり。平家追討の軍兵、今度上洛の時、鎌倉殿の侍所にて評定あり、十五六は幼し。十七以上は上洛すべしと定められたりけるに、小次郎は十六なり。ありの儘に申しては、御免あらじ。十七と名乘つて、父が供せんと思ひければ、鎌倉にて、其定に申す。父も、我身の助にもせん、軍をもし習へかしと思ひければ、同じく十七と申して、西國まで具したりけれども、一の谷にては、實正に任せて、十六歲とぞ名乘りける。平山は暫し休みて、馬の氣を繼がせけるに、熊谷は馬を射させて步立になる。小次郎も手負ひぬと見ければ、又入替つて戰ひけり。平山が旗差は、黑糸縅の鎧に、三枚甲を着たり。馬より眞倒に射落されたりければ、安からず思ひて、餘の者には目をかけず、旗差が敵に押並べ、引組んで馬の上にて首を切り手に捧げ、一人當千の兵、平山武者所季重、一陣懸けて敵の首取つて出づる。剛の者の振舞見よや殿原。我と思はん者、組めや者共と

て、城の外へこそ出でにけれ。誠にゆゝしくぞ見えたりける。平山が二度の駈とは是なりけり。平家の侍共、平山一人をば、安く討つべかりけるを、後に熊谷ありけるをいぶせく思ひて、終に洩らして出だしにけり。後日に關東にて、一陣二陣の爭ありけるに、熊谷は、城戸口へ寄する事は一陣、平山は城の內へ駈入る事一陣。而も敵の首を取り、功はいづれもとりどりなれども、平山先陣に定まりけり。其後成田の五郎、三騎にて押寄せて、一戰して出でにけり。次に白旗一流上げて、五十餘騎にて馳せ來る。熊谷誰人ぞと問へば、信濃の國の住人村上の次郎判官代基國と名乘りて、一時戰うて出づ。是等を始として、高家には秩父・足利・三浦・鎌倉・武田、吉田黨には小澤・橫山・兒玉黨・猪俣・野與・山口の者共、我もわれもと白旗さゝせて、十騎卅騎百騎二百騎入替へ入替へ、劣らじ負けじと戰ひけれども、西國第一の城なれば、落つべきやうこそなかりけれ。赤旗白旗相交はり、風に靡ける面白さは、龍田の山の秋の暮、白雲かゝる紅葉や、梅と櫻と搔交へて、花の都に似たりけり。喚き叫ぶ音山を響かし、馬の馳せ違ふ音雷の如し。太刀長刀のひらめく影、いなびかりの如し。組んで落つ

る者もあり、矢に當つて死する者もあり、刺違へて伏す者もあり、疵を蒙りて退く者もあり、源氏も平氏も、暇ありと見えず、源平爰にて多く討たれにけり。

梶原父子城に入る、景時秀句の事

さる程に追手の大將軍蒲生の御曹子、後陣に控へて、武藏・相模の若者共、敵に息な繼がせそ。攻めよ懸けよと下知し給へば、三百騎五百騎入替へ〳〵、喚き叫びて戰ひけり。天帝修羅の合戰も、斯くやと覺えて恐ろしや。敵の首取る者は、氣色して城戸に出づ。主親を討たせたる者は、涙を流して引退く。馬を射させたる者は、歩立にて出づるもあり、疵を蒙る者は、人に助けられて出づるもあり。寄する時には、旗差上げて入りけれども、引く時は、又旗掻卷きて出づるとかや。梶原平三景時が次男に平次景高、一陣に進んで攻め入る。大將軍宣ひけるは、是は大事の城戸の口、上には高櫓に、四國・九國の精兵共を集め置きたるぞ。過すな。楯を重ね馬に冑を着すべし。無勢にしては惡かりなん。後陣の大勢を待ちて寄すべしと下知し給へば、

人々承り次ぎて、大將軍の仰なり。勢を待設けて寄せ給へといへば、梶原さらば見歸りて、

武士の取り傳へたる梓弓引きては人の返すものかは

と詠じて、城戸口近く押寄せて、散々に戰ふ。是を見て黨も高家も、面々に鏃を並べて三千餘騎、我先々々にと攻付けたり。白旗其數を知らず差上げたれば、白鷺の蒼天に羽を並べたるが如し。平家は高櫓より、矢衾を作りて散々に射る。城は究竟の城なり。生田の森を一の城戸と定めて、三方には堀を掘り、東の方に引橋渡して、重重に逆茂木を引き、北の山本より、南の海の際まで垣楯かき、矢間をあけて、一口こそ開きたれ。城の内へ入るべきやうもなかりけるに、武藏の國の住人篠黨に河原太郎高直・同じく次郎盛直兄弟二人馳せ來りて、馬より飛下り、城戸口に攻寄せて、今日の先陣と名乘りて、逆茂木を上り越え〳〵、城の内へ入りけるを、讃岐の國の住人眞鍋の五郎助光、弓の上手精兵の手足なりければ、城戸口に選み置かれたりけるが、差顯はれてよつ引き、暫し固めて放つ矢に、河原太郎が弓手の草摺の餘りを射させ

て、弓杖に縋りて立竦みたりけるを、弟の次郎つと寄り、肩に引懸けて歸りけるを、助光二の矢を以て、腰の骨かけて、鎧かけず射込みたりければ、兄弟逆茂木の本に、太刀の柄取つて並み居たり。眞鍋が下人是を見て、櫓の下よりつと出でて落合ひけれども、二人ながら痛手なれば、兎も角も戰ふに及ばずして、二人が首は取られにけり。心の剛は、熊谷・平山に劣らずこそ思ひけれども、運の極めになりぬれば、敵一人も取らずして、討たれけるこそ無慙なれ。同じき國猪俣黨に、藤田の三郎太夫行安、續きて逆茂木を上り越えんとしけるを、眞鍋引固めて放つ矢に、同じく爰にて討たれにけり。藤田が妹の子に、江戸の四郎といふ者あり。今年十七になりけるが、續いて駈入り、散々に戰ふ程に、鎧の胸板射られて弱る所を、阿波の民部の大輔成能が伯父に、さくらまの外記大夫能連が手に討たれぬ。人見の四郎も、爰にして討たれにけり。眞鍋の五郎は矢倉より下り、河原兄弟二人が首を手鋒に貫き、城戸の上に上り高く捧げて、源氏の殿原是を見よ。進む敵をば、斯くこそ取續けと招きたり。梶原是を聞き、口惜しき人共なり。續く者がなければこそ、河原兄弟二人は

討たれたれとて、五百餘騎にて押寄せつゝ、足輕四五十人に腹卷着せ、手たてつかせて、えい聲出して、逆茂木を引退けゝり。爰に討たれたる鎧武者一人あり。見れば藤田の三郎太夫行安なり。あな無慙敵に首取らすな隱せとて、砂の中に掘り埋めて、後に斯くといひければ、子息郎等共掘り起して、生田の庄に納めてけり。櫓よりは、逆茂木を引かせじと、矢衾を作つて是を射る。寄手は是を引かせじと、差詰め〳〵櫓を射る。是や此の天帝須彌より刃を降らし、修羅大海より矢を飛ばす戰も、是なるらんと夥し。兩方の矢の行違ふ事は、村鳥の飛集まれるが如し。斯りけれども、足輕共一つ二つと引く程に、逆茂木終に引退け、梶原は、今は軍場平なり。寄せよ者共とて、子息の源太相具して五百餘騎、喚いて中へぞ入りにける。此手には、新中納言父子・本三位中將大將として在しましけるが、敵内に亂れ入ると見給ひて、二千餘騎を差迎へて、梶原が五百餘騎を中に取籠めて、餘すな洩らすなとて、一時計りぞ戰ひける。いづれも互に引かざりけるが、さすが無勢なれば、梶原下手に廻つて、ざつと引いてぞ出でたりける。源太はいかにと問へば、味方を離れて、敵の中に取籠め

られ給ひぬといふ。あな心憂や。さては討たれぬるにや。景時生きて何かせん。景季が敵に組んで死なんとて、二百餘騎を相具して、平家の大勢駈散らして内に入り聲を上げて、相模の國の住人鎌倉の權五郎平の景政が末葉、梶原平三景時ぞ。彼景政は、八幡殿の一の郎等、奧州の合戰の時、右の目射られながら、其矢を拔かずして、當の矢を射返して敵を討ち、名を後代に止めし末葉なれば、一人當千の兵ぞ。景季が行方覺束なくて、再び返し入りたるぞ。我と思はん大將も侍も、組めや〳〵と名乘りかけて、鏃を並べて攻入りければ、名にや誠に恐れけん、左右へざつと引退く。源太尋ねよとて攻入り見れば、景季未だ討たれず、始めは菊地の者共と射合ひけるが、後には太刀を拔合せて名乘りけり。和君は誰ぞ。菊地の三郎高望。和君は誰ぞ。梶原源太景季と名乘りて切合ひたり。源太は甲を打落され、大童にて、卅餘騎に取籠められて切合ひけるが、菊地の三郎に押並べて引組んで、馬の際に落重なつて、菊地が首を取り、太刀の切先に刺貫きて、馬に乘り出でけるが、父の梶原に行合うたり。平三景時、源太を後になして、矢面に進み防ぎ戰ふ。其間に源太に鎧着せ、暫し休め

て、寄せつ返しつ戰ひけり。城戸口に、眞鍋の四郎五郎と名乘つて出合ひけるが、四郎は梶原に討たれぬ。五郎は手負ひて引退く。平家の兵共も、入替へ〳〵戰ひけれども、景時は、源太が死なぬ嬉しさに、猛く勇みて、堅さま横さま戰ひけり。暫し息をも繼ぎければ、父子相具して、引いて城戸へぞ出でにける。さてこそ梶原が、生田の森の二度の駈とはいはれけれ。詩歌管絃は、公家仙洞の弄び物。東夷いかでか敷島難波津の言葉を存ずべきなれども、梶原は、心の剛も人に勝れ、すきたる道も優なりけり。咲亂れたる梅が枝を、胡簶に添へてさしたりける。かゝれば花は散りけれども、匂は袖にぞ殘りける。

吹風を何厭ひけん梅の花散りくる時ぞ香はまさりける

といふ古き言葉迄も思ひ出でければ、平家の公達は、花箙とていうなり優しゝと、口口に感じ給ひける。此梶原、右大將家の奧入し給ひける時、名取川にて、

我ひとり今日の軍に名取川

と繰返し〳〵詠じ給ひければ、大名小名うめきすめきけれども、付くる者なかりけ

るに、梶原、

君諸共にかちわたりせん

と付けたりけり。又京上の御供に、相模の國圓子川を渡り給へりけるに、梶原少し用ありて、片方に下り居たりけるが、御供に下りぬと、一鞭當てゝ打つ程に、此川の河中にて、馳付き奉りたりけるに、沛艾の馬にて、鎌倉殿に水をさゝとかけ奉り、御氣色惡くて、きと睨み返り給ひけるに、梶原、

圓子川蹴ればぞ波はあがりける

と仕りて、手綱を搖りすゑければ、御氣色直り給ひて、打うそぶき、蹴ればぞ波はあがりけると、二三返詠じ給ひて、向の岸に打上り、馬の頭を梶原に引向けて、

かゝりあしくも人や見るらん

と附け給ひ、いかに發句脇句、いづれまさりとぞ仰せける。かゝる優しき男なりければ、さしもの戰場にて、思寄るべきにあらねども、折知り顏の梅が枝を、箙に挿して寄せたれば、源氏の手折れる花なれども、平家の陣にぞ匂ひける。東國の兵共、百

騎二百騎入替へ〳〵、我も〳〵と戰ひけり。爰にて源平の兵多く討たれけれ。東西の城戸口、人種は盡くるとも、落つべきやうとは見えざりけり。

源平軍物語卷第十終

源平軍物語卷第十一

義經鵯越を落す并畠山馬を負ふ事

九郎義經は、鷲の尾を先陣として、一の谷の後鵯越へぞ向はれける。頃は二月の始つ方、霞の衣立阻て、綠を添ふる山の端に、白雲たえ〴〵聳えつゝ、先づ咲く花かと誤たる。歩み馴れぬ山路なり。行末そこと知らねども、征馬の足に任せつゝ、各先にと進みけり。まだほの暗き程なり。道にはなづみけれども、矢合せ時を定めたれば、明くるを待つに及ばずして、谷に下り峯に登り、引懸け〳〵打ちけるに、一の谷の後篠が谷といふ所に人の音しければ、押寄せて何者ぞと問ふ。名乘る事はなくして、散々に射ければ、此奴原は平家の雜兵にこそあるらめ。一々に搦め取つて首を切り、軍神に祭れとて、源氏も散々に射ければ、平家多く討たれにけり。其後鷲の

尾尋承にて、下り上り打つ程に、辰の半に、鵯越・一の谷の上なる鉢伏・磯の道といふ所に打上る。兵遙に差覗きて谷を見れば、軍陣には栅を突並べ、士卒は矢束を寛げたり。前は海後は山、波も嵐も音合せ、左は須磨右は明石、月の光も優ならん。追手の軍半と見えたり。喚き叫ぶ聲、射違ふる鏑の音、山を穿ち谷を響かし、赤旗赤印立並べて、春風に靡く有樣は、篝火の地を焚くらんも、斯くやと覺えて夥し。追手に力を合せんとて、谷のやうを見下せば、誠に上七八段は、小石交りの白砂なり。馬の足留まるべきやうなし。歩にても馬にても、落すべき所にあらず。さればとてさてあるべき事ならねば、義經乘りたりける大鹿毛には、佐藤三郎兵衛を乘せ、我身は太夫といふ馬に乘替へて、谷へ打向け給ひ、鹿の通路は馬の馬場ぞ。各落せ〳〵と進め給ふ。兵共、我も〳〵と馬をば谷へ引向けて、心は先陣と遁れども、さすがいぶせき碊(かけ)なれば、手綱を控へて休らへば、馬も恐れて退けり。互に顔と顔とを見合せて、いづくを落すべしとも見えず。軍將宣ひけるは、一は馬の落ちやうをも見、一は源平のうらかたなるべしとて、葦毛の馬に白覆輪白ければ、白旗に準へて源氏とし、鹿

毛の馬に黄覆輪赤ければ、赤旗になぞらへて、平氏とて追下す。各木の間より是を見下すに、七八段は小石交りの白砂なれば、轉ぶともなく落つるともなく、巖の上にぞ落着きたり。良暫くあつて、岩の上より轉び下り、越中の前司盛俊が假屋の後に落付きて、葦毛の馬は這ひ起きつゝ、峯の方を守り、二聲嘶いて身振ひし、篠草食んで立ちたりけり。鹿毛の馬は身を打損じ、伏して再び起きざりけり。城中には是を見て、敵の寄すればこそ、鞍置馬は下らめとて、騷ぎ迷ひける所に、御曹子は御覽じて、占形こそ目出たけれ。平家の軍さやうあるべし。人だに心得て落すならば、過更にあるまじ。落せ〳〵と宣へども、我だに恐れて落さねば、人も恐れて得落さず、呆れ果てゝぞ居たりける。義經宣ひけるは、守つて時を移すべきにあらず。馬に乘り硋を落すには、手綱に數多の法あり。一つに心、二つに手綱、三つに鞭、四つに鐙とて、四つの義あれ共、所詮心を持ちて乘る者ぞ。若き殿原は、見も習ひ乘りも習へ。義經が馬の立樣を手本にせよとて、眞倒に引向け、續け〳〵と下知しつゝ、馬の尻足引しかせて、流れ落に下したり。三千餘騎の兵共、大將軍に續けとて、白旗卅流、城

の上へ差覆ひ、鏃を並べて手綱かいくり、同じやうに尻足しかせて、さつと落して、壇の上にぞ落留まる。　夫より底を差覗いて見れば、石岩峙つて苔蒸せり。刀の刃に草掩へるやうなれば、いといぶせき上、十二十丈もあるらんと見え渡る。　下へ落すべきやうもなし。　上へ上るべき便もなし。　互に堅唾を呑みて思ひ煩へる處に、三浦黨に、佐原の十郎義連進み出でて、我等甲斐・信濃へ越えて、狩し鷹使ふ時は、兎一つ起ひても、鳥一つ立ちても、朋輩に見落されじと思ふには、斯様の所は馳歩く。　義連先陣仕らんとて、手綱かいくり鐙踏張り、只一騎眞先懸けて落す。　御曹子是を見給ひて、義連討たすな。　續け者共〳〵と下知して、我身も續いて落されけり。　畠山は赤縅の鎧に、護田の鳥の毛の矢負ひ、三日月といふ栗毛馬の、太う逞しきに乗りたりけり。　此馬鞭打に、三日月程なる月影のありければ、三日月と名を得たり。　壇の上にて馬より下り、差覗いて申しけるは、爰は大事の惡所、馬轉ばして惡かるべし。　今日は馬を労らんとて、手綱腹帯縫合せて、七寸に餘りて大きに太き馬を、十文字に引からげて、鎧の上にかい負ひて、椎の木のすだち一本捻切りて杖につき、岩の迫を靜

源氏鵯越を落す

靜とこそ下りけれ。東八ヶ國に大力とはいひけれども、只今かゝる振舞、人倫にはあらず、誠に鬼神の仕業とぞ、上下舌を震ひける。されば畠山は、此岩石に馬損じては不便なり。日頃は汝にかゝりき。今日は汝を育まんといひける。情深しと覺えたり。其後三千餘騎、手綱かいくり鐙踏張り、手を握り目を塞ぎ、馬に任せ人に從つて、劣らじ〳〵と落しけるに、然るべき八幡大菩薩の御計らひにや、馬も人も損ぜざるこそ不思議なれ。落しも果てず、白旗卅流颯と捧げ、三千餘騎同時に鬨を作り、山彥答へて夥し。平家の城郭に亂れ入りて、堅樣横樣蛛手十文字に馳せ廻り、喚き叫びて戰ひければ、城中には、東西の木戶口計りこそ防ぎけれ。さしも恐しき岩石より、敵寄すべしとも思はざりければ、打延べて左右の木戶口の弱からん時軍せんとて、鎧物具脫ぎ置きて、小具足計りにて居たる所へ押寄せて、吐と鬨を作りたれば、弓矢を取り馬に乘る隙を失ひ、周章迷ひ、味方の兵も、皆敵に見えければ、たま〳〵馬に乘り、弓矢を番ひける者も、味方討に討殺され切殺されて、上になり下になつて、肝も心も身に添はず、度を失ひ騷ぎふためきける有樣は、少魚の溜水に集まり、寢

鳥の技を爭ふに異ならず。御曹子下知し給ひけるは、城郭廣莫なり。賊徒數を知らず。多く官軍を亡さん事尤不便なり。火を放てと宣へば、武藏坊辨慶館に打入り、假屋に火をさす。折節西の風烈しくして、猛火城の上へ吹掩へば、平家の軍兵煙に咽び、火に攻められて、今は敵を防ぐに及ばず、取る物も取敢ず、濱の汀に逃出でつつ、海の藻鹽に馳入りて、舟に乘らんとぞ迷ひける。助舟もありけれども、そも然るべき人々をこそ乘せけれ。次々の者共をば、追拂ひ乘せざりければ、乘らん乘せじとする程に、多く海にぞ沈みける。猛火の煙蹴立の灰、逃去る道も見えざりければ、皆敵に討たれけるゝ。されば助かるは稀に、亡ぶるは多し。無慙といふも愚なり。

一の谷落城の事

かゝりける處に、一の谷を中に挾み、追手五萬餘騎は、東の城戸口より攻寄せける。上に熊谷・平山、一陣二陣に駈入りぬ。今は防ぐ者なし。搦手は一萬餘騎の內、七千餘騎は三草山の山口、西の城戸口へ廻りて攻む。三千餘騎は鵯越より落して攻む。

平家敗走
一谷陷る

東生田の森をば、二三千餘騎にて固めたれども、館々は猛火燃え廣がりて夥し。東西より火に攻められ人に攻められて、皆舟に乘らんと、渚に向けて落行きけるも、海へのみこそ馳入りけれ。助舟ありけれども、餘りに多く込乘りければ、大船三艘は、目の前に乘沈めける。然るべき人々をば乘すれども、次樣の者をば、乘すべからずと罵りけれども、暫の命も惜しければ、若やくとて、舟に乘らんと取付きけるを、太刀長刀にて薙ぎければ、手切落され足切折られて、皆海にぞ沈みける。斯くはせられて死にければども、敵に組んで死する者なし。多くは味方討してぞ亡びにける。先帝を始め參らせて、女院・北の政所・二位殿・三位殿已下の女房達、大臣殿父子以下の人々は、兼てより御舟に召して、海上に出浮うて、是を御覽ぜらる。いか計りの事をか思召しけんと哀なり。本三位の中將重衡は、國々の狩武者取集めて、二千餘騎にて、生田の森を固め給ひたりけるが、城中亂れつゝ、火焰館に滿々て、黑煙空に覆ひ、軍兵散々に駈隔てられて、東西に落失せぬ。恥を知りたる者は、敵に組んで討たれぬ。走り付の奴原は、海に入り山に籠りけれども、生くるは少く、死するは多く、敵

重衡生捕らる

忠度通盛經俊經正敦盛師盛知章等討たる

は雲霞の如し、味方の勢なかりければ、重衡の卿今は叶はじとて濱路に懸り、渚に打添ひて、西を指して落ち給ふが、庄の四郎高家に生捕られ給ひ、京鎌倉を引渡され、終に南都の衆徒の手に切られけるこそ哀なれ。薩摩の守忠度、渚に付きて落ち給ふが、岡部の六彌太追懸けて、終に首を打落す。越前の三位通盛は、佐々木の木村成綱に討たれ給へり。哀れなりし事共なり。若狭の守經俊は、那和太郎に組んで討たれ、但馬の守經正は、川越の小太郎重房に討たれ、無官の大夫敦盛は、熊谷に組んで討たれ、備中の守師盛は、本田の次郎親經に討たれ、武藏の守知章は、父知盛を落さんとて、兒玉黨と組んで終に討たれ給ひぬ。其外藏人の大夫成盛・尾張の守清定・淡路の守清房も皆討たれ給ひたり。九郎義經は、一の谷にて宗徒の首共數へらるゝに、二千二百とぞ記したる。大將軍には、越前の三位通盛・藏人の大夫成盛・薩摩の守忠度・武藏の守知章・備中の守師盛・若狹の守經俊・但馬の守經正・無冠の大夫敦盛、侍には越中の前司盛俊以下、京都邊土の輩、四國・西國の者共なり。其外はさのみ名を記すに及ばず、矢に當り劍に觸れて巷に伏す族、一の谷の城廓の内、東西の城戶の邊、死

人の多き事、麻を散らせるが如くなり。水に溺れ山に隱れし者は、幾千萬といふ事を知らず。主上・女院・二位殿・内大臣・平大納言以下、並に人々の北の方御舟に召して、まのあたり是を御覽ぜらる。如何計の御事思召しけんと、推量られて哀れなり。船中の波の上、一生の悲、譬へん方こそなかりけれ。親は波の上に漂へば、子は陸の砂に倒れ、妻は舟の中に焦れて、夫は渚の傍に亡びぬ。友を忘れ主を忘れて、片時の命を惜み、兄を怪しみ弟を怪んで、暫の身をぞ貯へたる。小水の魚の、泡に息繼ぐが如く、客舍の羊の、屠所に歩むに似たり。いつまで命を生きんとて、各身をぞ惜しみける。打洩らされたる人々は、水主楫取、八重の潮路に棹して、波にぞ搖られ給ひける。或は生田の沖を漕過ぎて、雀の松原・こやの松・南宮の沖に懸り、紀伊の地へ移る舟もあり、或は葦屋の沖に懸つて、九國へと急ぐ舟もあり、鳴戸の沖を漕過ぎて、屋島へ渡る舟もあり、明石の浦の波間より、淡路の瀬戸を漕過ぎて、島隱れ行く舟もあり、未だ一の谷の沖に漂ひて、波に搖らるゝ舟もあり、霜枯の小竹が上の青綠、紫野に染返し、細谷川の水の色、薄紅にて流れたり。汀の波湊の水、錦を洗ふに似た

りけり。

熊谷、敦盛の頸を送る并返狀の事

熊谷の次郎直實は、敦盛の首をば取りぬれども、嬉しき事をば忘れて、只悲の涙を流し、冑の袖を濕らしけり。倩事の有樣を案ずるに、愚なる禽獸鳥類迄も、子を思ふ道は志深し。炎の中に身を亡し、矢先に當つて命を失ふ事も、子を思ふ情にあり。人倫いかでか憐れまざらん。弓矢取る身とて何やらん、子孫の後を思ひつゝ、他人の命を奪ふ事、蜻蛉のあるかなきかの身を以て、何思ふべき世の末を。是程若く美しき上﨟を、失ひ歎き給ふらん。父母の心の中こそいとほしけれ。縱ひ勳功の賞には預からずとも、此首遺物返し送り、今一度變れる姿をも見奉らばやと思ひければ、實檢にも合せ、懸首にもしたりけれども、大將軍に申請けて、馬・鞍・冑・甲・弓矢・漢竹の笛、一も取落さず、一紙の消息狀に相具して、敦盛の首をば、父修理の大夫へぞ送りける。其狀にいはく、

直實謹言上。不慮奉參會此君之間、挿吳王得句踐秦皇遇燕丹之嘉、直欲決勝負之刻、依拜容儀、俄忘怨敵之思、忽拋武威之勇、剰加守護奉供奉之處、大勢襲來之間、始雖辭源氏參平家、彼多勢也、此無勢也。樊噲之威還縮、養由之藝速約。爰直實適禀生於弓馬家、幸眩武勇於日域、廻謀落城、靡旗虛敵、雖天下無雙之得名、如蟷螂合力而覆車、螻蟻一心而穿岸。愁挽弓放箭、空被奪愚命於同軍之戟塵、覃干憂名於傍輩之後代、自他背身之本望、非家之面目。然間奉仰此君御素意之處、早賜御命可訪菩提之由依被仰下、乍抑落淚不謀而賜御頸畢。恨哉此君、與直實奉結緣於惡世。悲哉宿運久萌、至今成怨讎之害。雖然翻此逆緣者、爭互截生死之紲、不成一蓮之實哉。然則偏卜閑居之地形、懇可奉祈御菩提。直實所申眞僞定後聞無其隱候歟。以此趣可有御披露候。恐惶謹言。

二月十三日　　直實狀

進上　平左衞門尉殿

とぞ書きたりける。修理の大夫經盛は、此首遺物を得て、夢現分け兼ねて、物も覺え

ず泣き給ふ。公達數多在しましけれども、此殿は末の子にて、殊に憐れみ給ひつゝ、前にて生立ちて、みめも心も世にあり難き人にて、分くる方なく思はれしに、軍場に出でて、其後敵にや取られけん、深き海にや沈みけん、遁れて餘所にあるらんと、其行末を知り給はねば、忍びの涙を拭ひて、神に祈り佛に誓ひて、存命せるか死せるか、知らばやと思はれけるに、今は不審は晴れたれども、見ては歎ぞ增りける。生しき首を膝の上に搔乘せて、いかにや〳〵敦盛よ。かゝる顏を見する事こそ悲しけれとて、流るゝ涙は雨の如し。御前に候ひける女房も兵も、只夢の如くに思ひつゝ、袖をのみこそ絞りけれ。使の待つも心元なしとて、泣々返事せられけり。其狀に曰く、

敦盛幷遺物等給候畢。此事自出花洛之古鄕、漂西海之波上以降、兼所存也。今非可驚。故望戰場之上者、何有再歸之思哉。盛者必衰、無常之理也。老少前後者穢土之習也。然而爲親爲子、世之契不淺。釋尊愛羅睺之存、樂天悲一子之別。應身權化猶以如此。況凡夫、爭不歎哉。而去七日自討立于戰場之朝、迄于後旅船之暮、其面影未放身、來燕之聲幽、歸鴈之翅空、死生無告者、而迷行方、存亡聞音信

而知ニ由緒一。仰レ天伏レ地訴レ之、碎レ心焦レ肝祈レ之。偏仰ニ神明之納受一、併待ニ佛陀之感應一之處、於ニ七日之內一今見ニ此之貌一、佛神之効驗有レ誠而不レ虛。內哀傷徹レ骨、外感淚洒レ袖。生而不レ劣ニ再來一、蘇而相ニ同重見一。抑非ニ貴邊芳恩一者、爭今得ニ相見一哉。一門風塵猶捨退。況於ニ軍徒怨敵人一乎。訪ニ和漢兩國之儀一、顧ニ古今數代之法一、未レ聞ニ其例一。此恩深厚須彌頗下、蒼海還淺。進酬自過去遠々、退難レ報。未來永々者歟。萬端雖レ多難レ盡ニ筆紙一。謹言。

二月十四日　　左衞門尉平公朝

熊谷次郎殿御返事

直實遁世

とぞ書かれたる。直實は此返事を給はりて、いとゞ淚を流しつゝ、詮方なくぞ思ひける。穢土の習を悲しみて、遁ればやと思ひけるが、西國の軍靜まりて、黑谷の法然房に參りつゝ、髻を切り、蓮生と名をつきて、終に世をこそ背きけれ。

賴朝・重衡對面の事

重衡鎌倉に入る

兵衞の佐殿、折節伊豆の奥野の燒狩とて、狩場に在しましけり、此由斯くと申したりければ、北條へ入れ奉れとなり。翌日は北條へ具し奉り、其日は淨衣を着せ奉つて、白き帶を以て、左右の手をしたゝかに縛め奉る。中將打涙ぐみ、罪深き罪人の、冥途へ赴くにこそ、白き物を着て、焰魔の廳へは臨むと聞く。それに少も違はぬ重衡が有樣かなと、心細くぞ思はれける。北條へ入れ給ひたりければ、一法房を使にて、是迄御下向、返々難有覺え侍り。此間燒山狩仕りて、狩場の灰などかゝりて、見苦しく候へば、靜に見參に入るべしと宣ひ捨て、鎌倉へ入り給ひけり。廿五日に、梶原平三景時は、三位の中將相具し奉り、同じき廿六日に、鎌倉へぞ入りにける。廿七日に、兵衞の佐殿、三位の中將と對面あるべきの由披露あり。大名小名門前に市をなし、其日になりければ、三位の中將相具し奉りて、兵衞の佐の宿所へ參る。佐殿の館新しく作りて、未だ門をば立てられず、四方に築地つき、三方は覆(おほひ)したりけれども、今一方せざりけり。寢殿に引續きて、内侍七間十六間にしつらはれたり。内侍の上十二間を拵へ、中に障子を立切つて、六間づつにしつらひ、上の六間に、高麗緣の疊

頼朝重衡對面

を敷き、三位の中將を据ゑ奉り、内には國々の長・大名小名並居たり。外侍には、若侍其數來り集れり。内外の侍を見給へば、古平家に仕へて、重恩深き者も多くあり、歴々としたる所に、只一人ぞ在しける。良久しくあつて、白き直垂着たる法師來り、三位の中將の向うて在する御簾を半に上げ、錦の縁さしたる疊押直して返しにけり。一法房昌寛是なり。良ありて兵衞の佐、澁塗の立烏帽子に白直垂着して、寢殿に出でて着座。空色の扇開き使うて、梶原平三景時を使にて、三位の中將殿に申されけるは、頼朝、故入道殿の御恩、山よりも高く海よりも深く、罷蒙りて候へば、御一門の事露疎ならねども、朝敵とて、追討の院宣を下さるゝ上は、私ならねば力及ばず、斯樣に思ひ寄らぬ世の習にて候へば、何樣にも屋島の大臣殿の見參にも入りぬとこそ覺え候。斯樣に申せばとて、御意趣あるべきにあらず。猶々是迄の御下向思ひ寄らず、難有喜び入りて候と申すべきと宣ふ。梶原、三位の中將の前に畏つて申さんとしければ、何條申繼ぐとや思はれけん、一門運盡きて都を落ちし上は、西國にていかにもなるべき身の、是迄下向思ひ寄らざりき。誠に故入道の芳恩忘れ給はず

ば、今一兩日の內に、兵に仰せて首を刎ねらるゝ事、いと安き事に侍り。但事の心を案ずるに、殷の紂は夏臺に捕はれ、文王は羑里に捕はるといふ文あり。上古猶斯の如し。況や末代をや。王者又遁れ難し。況や凡夫をや。就中我朝には、源平兩家、昔より牛角の將軍として、帝位を守護し奉り、互に狼藉を戒めき。然るに重衡、一の谷にして討たるゝにもあらず、遁るゝにもあらず。過つて生捕られて、再び故鄕に歸つてうき名を流し、今此恥を蒙る。昨日は人の上、今日は我にかゝれり。身の恥に似たりといへども、弓矢取の敵に生捕らるゝ事、先例なきにあらず。是先世の宿業なり。又怨憎の果てぬ所なり。只御芳恩には、急ぎ首を召すべしと宣ひければ、大名小名皆淚をぞ流しける。景時、又佐殿に申さんとしければ、佐殿、よしや皆聞きつるぞ。昌寬參れと召されたり。一法來り畏る。宗茂召して參れと宣ひければ、狩野の介召されて參る。四十計りなる男の小ひげなるが、淺黃の直垂着て前に進む。やあ宗茂、三位の中將入れ奉り、能々慰め參らせよ。疎に當り奉つて賴朝怨みな。南都の衆徒も、申す旨ありとて入り給ひぬ。宗茂、武具したる者五十人計り具し來

つて、中將を中に取籠め、我館へ入れ奉つて守護しけり。重衡の卿、一の谷にては、庄の四郎に生捕られ、都へ上るには、九郎義經に具せられ、京中にては、土肥の次郎に守護せられ、關東下向の時は、梶原に渡され、今は狩野の介に預けらる。縱へば娑婆世界の罪人の、冥途中有の旅にして、七日々々に十王の手に渡さるらんも、斯くやと思ひ知られたり。

維盛屋島を出でて高野に參詣
附粉川寺、法然房に謁する事

權の介三位の中將維盛は、故鄕は、雲井のよそになり果てゝ、思を妻子に殘しつゝ、人なみ〳〵に西國へ落下り給ひたりけれども、晴れぬ歎にむすぼほれ、其身は屋島にありながら、心は都へ通ひけり。三月十五日に、與三兵衞の尉重景・石童丸といふ童、舟に心得たる者とて、武里と申す舍人、此三人を具し給ひ、忍びて屋島の館を出でて、阿波の國由木の浦にぞ着き給ふ。心憂き波路の旅といひながら、今までも一

門の人々に相具して、明し暮したりつるに、今日を最後と思はれければ、御名殘惜しくて、海士の苫屋の柱に、

折々は知らぬ浦路の藻鹽草書きおく跡をかたみとも見よ

重景御返事申しけり。

我戀は空吹く風にさも似たりかたぶく月に移ると思へば

石童丸、大臣殿の御事を思ひ出し給ふらんと思ひ奉りて、

玉鉾や旅行く道の行かれぬは後にかみの留るとおもへば

さても御舟に乘移り給ひ、音に聞く阿波の鳴戸の沖を漕ぎ、紀伊の路を指して楫を取る。頃は三月十日餘りの事なれば、尾上にかゝる白雲は、殘りの雪かと疑はれ、磯吹く風に立つ波は、旅の袖をぞ濡しける。曉鷄のうかれ聲をし、明方になりしかば、八重立つ霞の隙より、御舟汀に押寄せたり。爰はいづくなるらんと尋ね給へば、名にしあふ紀伊の國和歌の浦とぞ聞き給ふ。それより吹上の浦を過ぎ給ひけるに、一門を離れ兄弟にも知らせねば、一は怨に似たれども、かゝらざらましかば、斯る名所

維盛高野山に赴く

をばいかでか見るべしと、聊慰み給ひけり。彼和歌の浦と申すは、衣通姬の居をしむ。山の岩松磯打波、沖の釣舟月の影、しら〻の濱の砂に、吹上の濱千鳥、日前國懸の古木の森、面白かりける名所かな。されば衣通姬、王津島姬明神とあらはれて、此所に住み給へる、理なりとぞ思召す。由良の湊に舟を着け、是より下り給へり。山傳ひに都へ上りて、戀しき人共をも、今一度見ばやとは思召しけるが、御樣を窶し給へども、猶尋常の人には紛ふべくもなし。本三位の中將の生捕られて、京田舍恥をさらすだに心憂きに、我さへうき名を流さんも、口惜しく思はれければ、千度心は進みけれども、心に心をからかひて、泣々高野へ赴き給ふ。思召し出す事ありければ、此次に粉川寺へぞ參られける。此寺は大伴の小手といひし人、我朝の補陀落是なりとて、菴を結べる所なり。去ぬる治承の頃、小松殿熊野參詣の次に、彼の寺に參り給ひたりけるに、書置き給へる打札あり。今一度父の手跡を見給はんと、思出で給ひけり。彼札を御覽ずれば、落つる涙に墨消えて、文字の形は見えねども、重盛といふ字計りは、彫りて墨を入れたれば、ありし乍らに替らねば、泣々是をぞ見給ひける。

手跡は千代のかたみなりと、いひ置きたる言の葉も、げに哀れにぞ思召す。御堂に入り、觀音の御前に念誦して在しましけるに、僧一人來りて、共に念誦してありけるが、怪しげに見奉りて、是はいづくより御參りぞと問ふ。京の方よりと答へ給へば、法然上人の入り給へるを聞召して、御參りかといふ。三位の中將は、其事兼て知らず、何事に入寺し給へるぞと返し問ひ給へば、此間念佛法門の談議なりと申して、細に問答して立ちぬ。中將は與三兵衞を招きて、態とも都に上り、法念房に遭ひ奉り、後世の事をも尋ね聞くべきにこそあれども、道狹き身なれば力なし。上人たまく此寺に在すなり。憚あれども見參し奉らん事、いかゞあるべきと宣へば、重景畏つて、何の御憚か候べき。上人をば生身の佛と承る。然るべき善知識にこそ、後世菩提の御爲に、御聽聞あらん折節、縱ひ災害に逢はせ給ふとても、悼み思召すべからず。闘諍合戰の場にして、身を失つて、修羅の惡所にも生き候なるぞかし。況や聞法隨喜の窻にして、命を亡す事あらば、彌陀の淨刹に往生せんと思召さるべしなど、小賢しく申しければ、然るべしとて夜に入つて、重景を御使にて、法然上人へ申されける

は、維盛高野參詣の志あつて、屋島を忍び出でて、是迄罷傳へて侍るが、折節然るべき事と存候、出離の法門、一句承らばやと仰せられけり。上人哀れに思して、頓て三位の中將を請じ入れ奉り、見參し給ひて、いかにや〳〵有難くこそ思ひ奉れ。都を出で給ひて後、人々爰彼にて亡び給ふと承るに付きては、御身いかゞなり給ひぬらんと、心苦しく思ひ奉るに、入れ奉り再び見參の御事、哀れに喜び入り侍り。さてもさしもの世の亂れの中に、遙々高野參詣の御志、目出度も思召し立ちける御事かなとて泣き給ふ。中將宣ひけるは、家門の榮花、既に身に極りて、先帝を始め參らせて、一族悉く西海に落下りし上は、人なみ〳〵にあこがれ出でて候ひぬ。うき事も多かりし中に、難波潟・一の谷にて、卿相雲客數亡びぬ。たま〳〵討殘されたる者も、あるそらも侍らず。夜は夜もすがら、今や水の底に沈むと歎き、晝は終日(ひねもす)に、今や敵に失はるゝと悲しむ。兎にも角にも靜なる心なし。されば終に遁るまじきものの故に、貴き結戒の地と承れば、高野に參りて出家をもして、其後いかにもならばやと思ふ事侍りて、屋島を出でて、是迄傳ひつゝ、見え奉るこそ嬉しけれとて、其夜は庵室

に留まり給ひ、泣口說き物語し給ひけるが、曉方に、維盛幼きより身を放たず、日所作に讀み奉る御經在します。水の底にも沈まん時は、同じく沈め奉らん事、罪深く覺え候。若し世になき身と聞き給はん時は、思出して後世弔ひ給へと宣ひて、是を渡し奉る。上人請取り給ひて、縱ひ是なしとも、いかでか忘れ奉るべきなれども、かく思召し入りて承れば、開き見ん折々は、必らず弔ひ奉るべしとて拜み奉る。四半の小草子に、金泥に書きたる小字の法華經なり。いと哀れにぞ思しける。三位の中將は、今日は留まりて、名殘をも惜みたく侍れども、維盛をば平家の嫡々とて、賴朝殊に相尋ぬべしと披露あり。人の口も恐ろし。戒を保ち暇申さばやと宣へば、上人は、此間說戒の程、御聽聞もあれかしと存ずれども、御急ぎと承れば、戒授け奉るべしとて、圓頓無作の大戒・梵網の十重禁をぞ說き給ひ、其後念佛の法門・彌陀の本願細細と說き給ひ、樣々敎化せられければ、維盛然るべき善知識と嬉しくて、泣々庵室を出で給ひけるが、契あらば後生には必ず參會と宣ひて、それより高野へ參り給ふ。上人も哀れに思ひ、遙に見送り奉り、衣の袖を濡らし給へば、見る人袂を絞りけり。

三位の中將は、高野山に參りつゝ、時賴入道にぞ尋ね合ひ給ひける。

維盛高野山に於て出家の事

時賴入道と橫笛

扨も時賴入道と申すは、三條齋藤左衞門太夫茂賴が子に、齋藤瀧口時賴といふ者なり。本は小松の內大臣殿の侍たりしが、高倉の院の宮女橫笛と申す女房と、深く契りし事世に隱れなければ、父茂賴、瀧口を近付け、ひたすら敎訓しければ、あはぬ浮世かなと無常を觀じ、嵯峨の奧法輪寺に入りて、年十八にして出家して、法名は阿淨とぞ申しける。橫笛此事を傳へ聞き、泣々法輪寺に來りしかども、時賴も思切りたる事なれば、出でて逢はず。橫笛猶も悲しくて、とても永らへんもの故にとや思ひけん、桂川に身を投げ、十七歲を一期とし、終に空しくなりければ、時賴此事を聞き、急ぎ死骸を上げ、懇に弔ひ、兎角都近き所に住めばこそ、かゝる憂目も見れとて、それより法輪寺を出でて、高野山に籠り、五六年にぞなりける。然るべき人々は、瀧口入道といひけるを、一家の者共は、高野の上人とぞいひける。さしも華やかなりし

有様なりしが、今は黒き衣に、同じ色の袈裟に窶れにけりと哀れなり。卅に足らぬ若入道の、いつしか老僧の姿になり果てゝ、麻の衣香の煙にしみ薫り、思入りたる道心者、羨しくぞ見給ひける。入道は、三位の中將を見奉りて、夢か現かと、呆れ迷ひたる有様なり。泣く涙に咽せて物も申さず。三位の中將も袖を絞りて宣ふ事もなし。入道良久しくありて申しけるは、屋島に御渡りと承り待りしかば、世の中、今は昔に變り行く有様、御一門の人々思召さるらん、御心の中も推量り候へば、罷下つて、浮世の有様を承り、又歎き申入ればやと、折節毎に思ひ出し侍りつれども、愁に出家入道して、斯様に引籠りて、身は松の煙にふすぼり、形は藤の衣に窶れて、御前に參り、御目に懸るべき有様にもあらねば、中々にと身に憚りて、罷過ぎ侍りき。いかにして是迄は傳ひ在しましけるやらん。更に現とも覺え候はず。故殿の常の仰には、賢人は榮華に誇らず、草庵にト居すと仰せしものを、只今思ひ合せられ候ぞやと申し、墨染の袖を顏に當てゝ歎きければ、中將宣ひけるは、都にて、いかにもなるべかりしに、人なみ〳〵に西國へ落下りたりつれども、肝心も身に添はず、留め置きし者

共も、理に過ぎて戀しく、覺束なければ、何事に付けても、世の中あぢきなければ、思ひほれて年月を經る程に、是をばかくとも知り給はで、大臣殿も、池の大納言のやうに、二心ある者と思して打解け給はねば、いとゞ心も留まらで、あこがれ出でて是迄來れり。いかにもして故鄕に傳ひ、變らぬ姿を今一度見えばやと思ひつれども、本三位中將の如く、生きながら捕はれて、父の屍に血をあやす事もうたてければ、是にて髮を下して、水の底にも入りなんと思ふなり。但熊野へ詣でんとの志ありと宣ひもあへず泣き給へば、上人、誠に夢現の世の中は、とてもかくてもありなん、永き世の闇こそ苦しかるべけれ。目出度くも思召し立ちける御事なりと申す。夜明けにければ、三位の中將は、入道を先達として、先づ本寺より始めて、院々堂塔に巡禮あり。彼高野山は、帝城を去つて二百里、鄕里を離れて無人聲、晴嵐梢を鳴らして、夕日の影も靜なり。金剛八葉の峯の上、祕密瑜伽の道場なり。一度參詣の輩は、永く三途の苦しみを離る。十三大會の聖衆には、肩を並べて隔なし。卅七尊の聖容は、心の中にぞ座し給ふ。八の尾八の谷に、衆生本覺の心の蓮花をかたどり、或は上り

或は下る。行願證義菩提心を現せり。金堂と申すは、嵯峨の天皇の御願なり。或は釋尊涅槃の像を映せる道場もあり、在世の昔を慕ふかと哀れなり。彌陀來迎の裝を畫く靈場もあり、終焉の夕を待つかと覺えたり。若は說法衆生の庭、座禪入道の窻もあり、若は祕密修行の室、念佛三昧の砌もあり、顯敎密敎かき交へ、聖道淨土各なり。峨々として高き山、渺々として遠き峯、霖霧の底に花綻び、尾上の霜に鐘響き、嵐に紛ふ鈴の音、雲井に上る香の煙、とり〴〵にこそ貴けれ。それより檜原杉原百八十町分過ぎて、奥の院に參り給ふ。大師の御廟を拜み給へば、瓦に松生ひて垣に蔦生へり。庭に苔深うして、軒にしのぶ繁りたり。是や此仁明天皇の御宇、承和二年三月廿一日の寅の一天に、入定し給へる石室なるらんと、過ぎにし方を數へければ、三百餘歲に越えにけり。彼迦葉尊者の鷄足洞に入り、弘法大師の高野の石室に籠り給ひしより此方、五十六億七千萬歲の春秋を隔てゝ、慈尊三會の曉を待ち給ふこそ遙なれ。三位の中將は、御廟の前に良久しく念誦して、又もと思ふ參詣も、心に任せぬ我身なり。遠うして又遙なり。維盛進んでは釋迦の出世に會はず、退いては

慈氏の下生期し難し。恨むらくは其中間に留まつて、空しく三途に歸らん事を。今暮雲の心つなぎ難し。朝露の命、旣に消えなんとす。願の妄執を廟松の風に拂つて、永く煩惱を法水の波に洗ふ。三界の火宅を出でて、無苦の寶刹に生れんとぞ拜み奉られける。さても維盛が身は、今日か明日かと思ふものをと宣ひて、左右の袖を顏にあて、さめ〲と泣き給へば、阿淨も重景も、共に袂を絞りけり。其後時賴入道が庵室に歸り、持佛堂に差入りて、拜廻し給へば、本尊かた〲に安置し奉り、閼伽をしな〲備へ奉る有樣、淨名居士の方丈に、三萬二千の床を立てゝ、三世十方の諸佛を崇め奉りたりけんも、斯くやと覺えていと貴し。行儀の作法を見給ふにも、昔は世俗奉公の袖をかきおさめしに、至極甚深の床の上には、心地の玉を磨くらんと覺え、後夜晨朝の鐘の聲には、生死の眠を覺すらんと聞えけり。尾上の嵐烈しくて、軒の忍に露亂れ、雲井の月さやけくて、苔むす庭も靜なり。夜も旣に明けにければ、三位の中將、時賴入道に仰せけるは、故鄕に留め置きし少き者共の、さしもわりなかりしをも、其母が强ちに慕ふをも、今一度見もし見えばやとこそ思ひて、屋島をば忍び

出でしかども、そも今は叶はず。さらば出家して、熊野へ參らばやと思ふなりと語り給へば、入道涙ぐみて、此世は夢幻の所、うき事も悲しき事も、始めて驚き思召すべきにあらず。都に留め置かせ給ふ公達北の方の御事、尤思召し切らせ給ふべし。分段輪廻の境に生れたる者、誰か死滅の怨を免かれたる。妄想如幻の家にあふ輩、終に別離の悲みあり。彼沙羅林の春の空を尋ぬれば、萬德の花しぼみて、一化の緣永く盡きぬ。觀喜園の秋の風を聞けば、五衰の露消えて、巨億の樂み早く空し。況や下界泡沫の姿に於てをや。不定短命の國に於てをや。是に依つて老いたるも若きも、去つて大小の前後定めなし。貴きも逝き賤きも逝きて、上下の昇沈知り難し。三界廿五有の住家、何者か此苦を脫れん。五蟲千八百の類、いかでか其憂を離るべき。厭ふべきは浮世なり、悲しむべきは此身なり。君御一門の餘執に引かれて、西海の旅に赴き給へる上は、敵の爲に捕はれ在しますか、水底に沈み給ふべきか。大師入定の靈地なり、兩部結戒の道場なり。此峯にして忽に俗服脫ぎ、法衣を着し在しまさん事、卽身に安養の淨刹に詣し給へりと、思召しなすべしと申しければ、三

位の中將淚を流し、打うなづき給ひて、誠に都を出でし日より、敵の爲に亡されて、屍を山野の道の邊に曝して、名を西海の底に沈むべしとこそ思ひしに、斯るべしとは、かけても思ひ寄らざりき。是も善業の催す所といひながら、いかにも故鄕の少き者共の事のみ思ひ出でつれども、其事思ひ捨てゝ參詣せし程に、粉川にて法然上人に對面して、念佛往生の法門を聽聞し、大乘無作の大戒を授けられ、剩へ上乘瑜伽の靈峯に上り、大師草創の佛閣を拜み、堂塔巡禮して、六道輪廻の業を滅すらんと存ずる上、斯樣に目出度く貴き事ども承れば、昔は家門の主從の禮儀たりしかども、今は菩提の大善知識とこそ思召せ。さらば急ぎ出家をと宣ふを見奉るに、潮風に黑み、盡きせぬ御物思ひに瘦せ衰へ給ひて、其人とも見えずなり給ひたれども、猶人には勝れて紛ふべくもなし。いかなる仇敵なりとも、哀れと思ひぬべし。御戒の師には、東禪院に理覺坊の心蓮上人と申す僧を請じ奉り、時賴入道、出家の御具足取り整へ、本尊の御前に香を焚き、花を供し設けたり。三位の中將は、髻を左右に結ひ分けて、四恩師僧を拜し給ふ。心蓮上人剃刀を取り、泣々御後に立寄りつゝ、流轉三界中、

恩愛不能斷、奇恩入無爲、眞實報恩者と三偏唱へて、剃り給ひけるにも、北の方に今一度變らぬ形を見せて、斯くもならば思ふ事なからましと思すぞ、愛執煩惱罪深しといひ乍ら、誠にと覺えて、最惜しき御髮、剃り落し奉りければ、御衣を召替へて、心蓮上人、大哉解脱服、無相福田衣、被服如戒行、廣度諸衆生と唱へて、御袈裟を授け奉る。法名淨圓とぞ申しける。與三兵衞も石童丸も、一度に髮を剃りたりける。三位の中將も與三兵衞も、同年にて廿七。石童丸は十八なり。三人共に盛をだにも過ぎ給はぬ人々の、斯く剃り給ひつゝ、居並びたるを見渡して、心蓮上人も時頼入道も、墨染の袖を絞りけり。中將入道、舍人武里を召して宣ひけるは、我れ兎も角もなりなば、都へは向ふべからず。後のかたみに、今一度日頃戀しかりつる事をもいひ、又樣を變へ、身のなる果を書きやらばやとは思へども、早世になき者と聞くならば、思ひ歎きに堪へず、髮を落し形を窶さんも不便なり。それはせめてもいかゞはせん。淵川に身をも沈めて、少き者共が便なく、父には生きて別れぬ、母には死して後れぬと、小賢しく歎き悲まんもいとほしかるべし。終には隱れあるまじけれども、いつ

しか知らさじと思ふなり。急ぎ迎へ取らんと拵へ置きし事も、空しくなりぬ。如何計かは辛く思ふらん。都に留まりて、歎き思ふらんよりも、旅の空にあこがれて、詮方なく悲しき心をば知らず、うらみん事もいと痛はしとて、御涙せき敢ず、只是より屋島に行きて、新三位の中將・左中將達に、有の儘に申せ侍共、いかに覺束なく思ふらん。誠に斯くとも知らせねば、誰々も、さこそ恨み給ふらめ。唐皮といふ鎧、小烏といふ太刀は、當家代々の重寶として、我迄嫡々に相傳はれり。肥後の守貞能が許に預け置きけり。それをば取りて、三位の中將に奉れ。若し不思議にて、世も立ち直らば、後には必ず六代に讓り給へと申すべしとて、さめぐ\とぞ泣き給ふ。

唐皮・小烏・拔丸の事

抑唐皮といふは、凡夫の製にあらず、佛の作り給へる鎧なり。桓武天皇の御伯父に、慶圓とて、眞言の奧義を極め給へる貴き上人在しましき。綸言を給はつて、紫宸殿の御前に壇を拵へ、胎藏界の不動の前に智印を結び、心を安平になぞらへて、彼法を

加持せらる。七日とふ未の刻に、紫雲起りて渦巻き下り、其中より、荒らかに壇上に落つる物あり。雲消え壇晴れて是を見れば、一兩の鎧あり。櫨の匂に、白く黄なる兩蝶を裾金物に打つて、糸縅にはあらずして、皮縅なり。裏を返して見るに、實(さね)のあひあひ虎の毛あり。圖り知んぬ、虎の皮にて縅したりと。故に其をば、唐皮とぞ申しける。帝御尋ありければ、慶圓申させ給ひけるは、是はこれ本朝の固めなり。是れ不動降伏の冑なり。彼明王は、外に降魔の相を現ずといへども、内に慈悲哀愍を具足せり。火焔を身に現ずれば、女我の相をあらはす。女我の相とは、大日胎藏の身を現ずるなり。大日胎藏の身といふは、大藏の腹體を垣斷(かきこむ)るなり。彼垣は冑に如かず。されば不動に七兩の鎧あり。兵頭・兵體・兵足・兵腹・兵背・兵指・兵面なり。皆是五大・五國・五花・相承相對せり。人の五體を圍はん料なり。然れば州中の守、甲冑に如かず。此鎧は、七兩が中の兵面といふ鎧なり。本朝の守には、何者か是に増るべき。人甲冑を着せし時は、專國の家壁と思ひて、我物の想をなさじ。國をかこはん時は、偏に州頭の壁とのみ思はざれ。皇の御衣と思ふべきなりと、奏聞せられけり。され

ば此鎧は、眞言祕敎の中より、不動明王の化現し給へる所なり。國家の守として、六代迄は大内の御寶なりけり。其後武道に遣して、將軍に持すべき由、日記に留め給ひたりけるを、高望の王の御孫平將軍貞盛に、下し預けられしより以來、維盛迄は嫡嫡九代に傳はれり。今の唐皮といふは是なり。又小烏といふ太刀は、彼唐皮出來て後、七日と申す未の刻に、主上南殿に在しまして、東天を御拜ありける折節に、八尺の靈鳥飛び來りて大床に侍り。主上御笏を以て招き召されけり。烏敕命に依つて躍り上り、御座の御緣に嘴をかけて奏し申さく、我は是れ太神宮より、劒の使者に參れりとて、羽づくろひして罷立ちけるが、其懷より一つの太刀を御前に落し留めけり。主上自ら此劔を召されて、八尺の大靈鳥の中より出でたる物なればとて、小烏とぞ名付けさせ給ひける。唐皮と共に、寶物に執し思召す。されば太刀も胄も、同佛神の御製作なり。本朝守護の兵具なり。是に依つて代々は、内裏に傳はりけるを、貞盛が世に下し預けて、此家に傳はりて、希代の重寶なり。又平家に拔丸とて劔あり。池の大納言賴盛の卿にあり。中古伊勢の國鈴鹿山の邊に、賤しく貧しき男あり。

身の乏しき事を歎きて、常に精進潔齋して太神宮に詣で、世にあらん事を祈り申す。年頃日來怠る事なかりければ、神明其志を憐んで、汝深山に遊獵して、獸を得て妻子を養へと示現し給ひければ、御託宣を賴み、鈴鹿の山を家として、夜晝狩して、獸物を取り得たる時は妻子を養ひ、得ざる時は口を空しくす。是を以て、一期活命の便となるべしとも覺えざりけれ。我れ年頃參詣の功に依つて靈夢を感ず。神慮に任せ、深山に遊獵すれども、身を助くる謀なるべしとも覺えず。太神宮いかにと御計らひあるやらんと、愚にも冥慮を怨み思ひ奉りける折節、三子塚といふ所にて、奇き太刀を求め得たり。此太刀を設けて後は、聊も目にかゝる禽獸鳥類遁るゝ事なし。然るべき寶なりけり。我聞く漢朝の高祖は、三尺の劔を以て、座ながら諸國の王を從へり。日本の愚獵一振の劔を求めて、帶きながら山中の獸を得たり。是れ天照太神の冥恩なりと思ひければ、晝夜に身を離さず。或夜鹿を待ちて、大なる木の下に宿す。太刀を大木に寄せ立て、其夜を明す。朝に此木を見れば、古木の如くして、枝葉皆枯れたり。獵師不思議にぞ思ひける。月頃日頃も、此木の下を住家とせ

しが、よべ迄は綠の梢さかりにこそありしに、今夜此太刀を寄せかけたる故にや。一夜が內に枯れぬるこそ怪しけれ。是定めて神劍ならんとて、木枯とぞ名付けたる。其頃刑部卿忠盛、伊勢の守にて在しけるが、ほの聞きて件の獵師を召し、此太刀を見給ふに、異國にはそも知らず、我朝には有難き劔なりとて、世に欲しく思はれければ、栗眞の庄の年貢三千石に替へて取られけり。さてこそ獵師、家富み身豐にして、彌太神宮の御利生ども思ひ知りけり。忠盛都に歸り上り、六波羅の池殿の山庄にて、晝寢して前後も知らず在しけるが、此木枯の太刀を枕に立てゝ置きたり。大蛇池より出で、口を張り泳ぎ近づき、忠盛を呑まんとす。木枯鞘より颯と拔けて、がばとまろぶ。倒るゝ音に驚きて、忠盛起直つて見給ふに、劔は拔けて蛇に向うたり。蛇は劒に恐れて、水底に沈みにけり。太刀がばと倒るゝは、主を驚かさんが爲、鞘より拔くるは、主を守つて大蛇を切らんが爲なりけり。それよりして木枯の名を改めて、拔丸とぞ呼ばれける。平治の合戰に、三川の守賴盛、熊手に懸けられて、討たるべかりけるにも、此太刀にて鎖金を打切つて、遁れ給ひけり。かゝるめでたき劒なれば、

嫡々に傳はるべかりけるを、賴盛當腹にて相傳ありければ、淸盛・賴盛兄弟なれども、暫しは仲惡しく在しけりと聞えきなんど、細かに物語し給ひて、唐皮・小烏は重代の重寶、家門の守なり。世立直らば、必ず六代に傳へ給へと、能々仰含められけり。

維盛入道熊野詣最後の事

是より熊野參詣の志ありとて、修行者の樣に出立ち給ひければ、いかにもなり給はん樣を見奉らんとて、時賴入道も御供申して參りけり。紀の國三藤といふ所へ出で給ひ、藤代王子に參り、暫く法施を奉り給ふ。所願成就と祈誓して、峠に上り給へば、眺望殊に勝れたり。霞籠めたる春の空、日數は雲井を隔つれど、妻子の事を思ひ出で、故鄕の方を見渡して、涙の垢離をぞかき給ふ。和歌の浦・玉津島の明神を伏拜み、吹上の濱・與田の浦・日前國懸の古木の森・沖の釣舟・磯打波、あはれ何れもとりどりなり。蕪坂を打下り、鹿瀨の山を越過ぎて、高家の王子を伏拜み、日數漸く經る程に、千里の濱も近付きけり。岩代の王子を通り給ふ。其邊にて狩裝束したる者、

七八騎計り會ひたりけり。敵人來り搦め捕らんとするにやと、肝心を迷はして、各腰の刀に手をかけて、自害せんとしければ、ばら〳〵と馬より下り、深くひらみて通りにけり。見知りたる者にこそ。誰ならんと淺ましく、いぶせく思ひ給ひければ、いとゞ足早にぞさし給ふ。當國の住人に、湯淺の權の頭入道宗重が子息、湯淺の兵衞の尉宗光といふ者なり。郎等共も怪しげに思ひて、此道者は、誰人にて在しまし候ぞと問ひければ、宗光、あれこそ平家の故小松の大臣の御子に、權の介三位の中將殿よ。一門の人々に落ちつれて、西國にとこそ聞き奉りしに、いかにして屋島より、是迄傳ひ給ひけるやらん。小松殿の御時は、常に奉公申して御恩をも蒙り、此殿をも見馴れ奉りたれば、近く參りて、見參にもと思ひつれども、道狹き御身となりて、憚り思召す御氣色あらはなりつれば、さて過ぎぬ。あな痛はしの御有樣や、變る世の習といひながら、心憂かりける事かなとて、馬を止めてはら〳〵と泣きければ、郎等共も、皆袖をぞ絞りける。三位の中將入道は、日數經れば、岩田川に着き給ひて、一瀬のこりをかき給ふ。我れ都に留め置きし妻子の事、露思ひ忘るゝ隙なければ、さこ

こそ罪深かるらめども、一度此川を渡る者、無始の罪業悉く滅するなれば、今は愛執煩惱の垢もすゝぎぬらんと、賴もしげに仰せられて、

岩田川誓の舟にさほさして沈む我身も浮びぬるかな

と詠じ給ひても、父小松の大臣の、熊野詣の喜の道に、兄弟此川水、あみたはぶれて上りたりしに、權現に祈り申す事あり。淨衣脫ぎ替ふべからず、御感應ありとて、是より重ねて奉幣ありし事、思出で給ひても、脆きは落つる淚なり。其日は瀧尻に着き給ひ、王子の御前に通夜し給ひ、後世をぞ祈り申されける。彼王子と申すは、本地は不空羂索爲衆生利益とて、垂跡の此砌、當來慈尊の曉を、待ち給ふこそ貴けれ。明を出でて三所權現の巡禮を遂げ、那智の浦にて入水し終んぬ。

壽永三年三月廿八日、生年廿七。

と書き給ひ、奧に一首を殘されけり。

生れては終に死ぬてふ事のみぞ定なき世に定ありける

其後又島より舟に移り乘り、遙の沖に漕ぎ出で給ひぬ。思ひ切つたる道なれど、今

を限の波の上、さこそ心細かりけめ。三月の末の事なるに、西に向ひ手を合せ、念佛百遍計り唱へつゝ、海へ飛入り給ひける。與三兵衞・石童丸も、同じく續いて入りにけり。舍人武里も、續いて入らんとしけるを、時賴入道、何とて御遺言をば違ゆるぞ。下﨟こそ口惜しけれとて、抱き止めければ、舟の中に伏轉び、聲を上げて歎きける。時賴入道も、さすが別れの悲しくて、墨染の袖を濕しける。若し浮上り給ふかと、暫し舟を廻し見けれども、三人共に深く沈み給ひければ、空しく舟を漕戻し、高野へこそ歸りける。或說にいはく、三山の參詣を遂げられにければ、高野へ下向ありけるが、さてしも遁れ果つべき身ならねばとて、都へ上り院の御所へ參りて、身謀首にも侍らねば、罪深かるべきにもあらず、命をば助けらるべき由をぞ申入れける。事の體不便に思召されて、關東へ仰遣されけり。賴朝御返事に、彼卿を下し給はつて、體に從つて申入るべしと申したりければ、罷下るべき由、法皇より仰下されける。後は飮食を斷ちたりけるが、廿一日といひけるに、關東へも下着せず、相模の國湯の下の宿にて入滅ともいへり。禪中記に見えたり。或說には、紀伊の國の住人湯淺宗

光、那智の客僧等是を憐みて、瀧の奥の山中に、庵室を作りて隱し置きたり。其所今は廣き畑となつて、彼人の子孫繁昌しておはす。每年に香を一荷那智へ備ふる外は、別の公事なし。故に爰を香疁といふ。入海は僞なりと云々。時賴入道は高野へ上り、武里は讃岐の屋島に下りにけり。御弟の新三位の中將に逢ひ奉り、三位の中將入道殿の宣ひける事共、ありの儘に語り申せば、あな心憂や。いかなる事なりとも、などか資盛には知らせ給はざりける。さあらば御供申して、同じ水底にも入りなましものを。我が賴み奉る程は、思ひ給はざりける恨めしさよ。一所にて、いかにもならんとこそ申しゝがとて、涙をせき敢ず流しけるこそ無慙なれ。三位の中將をば、池の大納言の如くに、賴朝に心通はして、京へ上りにけりと、大臣殿も心得給ひて、資盛にも打解け給はざりつるに、さては身を投げ給ひける事の悲しさよ。云置き給ふ事はなしやと問ひ給へば、武里泣々申しけるは、京へはあなかしこ上るべからず。屋島へ參りて、ありつる事ども詳しく申せ。一所にて、いかにもならんとこそ思ひ侍りしかども、都に止め置きし少き者共の、餘りに覺束なくて、あるそらも

なかりしかば、若しや傳ひ上つて、今一度見んと思ひて、あくがれ出でたりしかども、叶ふべき樣なければ、斯く罷りなりぬ。備中の守も討たれぬ。維盛も斯くなりぬれば、いかにも便なく思召すらんと、心苦しくこそ侍れ。又唐皮・小烏までの事、細々と申したりけるを聞き給ひて、今は資盛とても、永らふべきにあらずと宣ひも敢ず、御涙を流し給ふ。故三位の中將にゆゝしく似たれば、武里も見奉りては、共に袖をぞ絞りける。

源平軍物語卷第十一終

源平軍物語巻第十二

義經關東下向附親能、義廣を搦む并除目の事

元暦元年三月廿八日の除目に、兵衞の佐賴朝、正四位の下に敍せらる。義仲追討の賞とぞ聞えし。五月四日、池の大納言賴盛、關東へ下向せらる。賴朝見參し給ひ、本の知行庄園は一所も相違なし。其外所領八ヶ所與へらる。池の尼公の賴朝を助けられし恩報とぞ聞えける。同じき六月一日、源九郎義經、身の暇を申さず、竊に關東へ下向す。梶原平三景時が爲に讒言せられて、誤なき事を謝せん爲とぞ聞えし。義經、平家追討の事を抛つて下向したりければ、人皆傾け申しけり。同じき三日、前の齋院次官親能は、前の明經の博士廣季が子、賴朝の臣、專一の者なり。雙林寺にして、前の美濃の守義廣を搦め捕る間、兩方疵を蒙る者多し。木曾義仲に同意して、去ぬ

義經、景時に讒せらる

源義廣捕はる

る正月合戰の後、跡を晦ましてなかりけるに、今在所あらはれて、終に搦め捕られけり。此義廣といふは、故六條の判官爲義が末子なり。されば武を以ては夷賊を平らげ、文を以て政務を正すとこそいふに、親能は明經の博士なり、義廣は源家の勇士なり。今重代武勇の身と生れて、儒家の爲に生捕られけるこそ口惜しけれと、人皆脣を返して爪彈す。實にもとぞ覺えたり。同じき六日、前の大納言賴盛の卿、大納言に還任す。蒲の冠者範賴、三川の守に任じ、源の廣綱、駿河の守に任じ、源の義延、武藏の守に任じけり。是等は内々賴朝朝臣、吹擧申されけるとぞ聞えし。

三日平氏附維盛舊室夫の別を歎く幷平氏歎の事

同じき八日、去ぬる晦日、平氏備前の國に攻め來る。甲斐源氏に、板垣冠者兼信は、信義の次男なり。美作の國を出でて、備後の國に行向うて合戰しけり。平氏の舟十六艘を打取る間、兩方命を失ふ者、其數を知らず。是に依つて兼信、美作の國司に任すべき由言上しけり。伊賀の國山田の郡の住人、平田の四郎貞繼法師といふ者あ

り。是は平家の侍、肥後の守貞能が弟なり。平家西國に落下つて、安堵し給はずと聞えければ、日頃の重恩を忘れて、多年の好を思ひて、當家に志ある輩、伊賀・伊勢兩國の勇士催し、平田の城に衆會して謀叛を起し、近江の國を打隨へて、都へ攻入るべしと聞えければ、佐々木源三秀義驚き騷ぎ、我身は老體なれば、東國・西國の軍には、子息共を差遣して下向せず。近き程に敵の籠りたるを聞きながら、默止すべきにあらずとて、國中の兵を催し集めて、伊賀の國へ發向しければ、甲賀上下の郡の輩馳せ集つて相隨ひけり。秀義は、法勝寺領大原の庄に入り、平家は、伊賀の壬生野・平田にあり。行程三里に過ぎざりけり。源平互に、勝に乘るべきか、敵の寄するを待つべきかと評定しけり。平家の方に、伊賀の國の住人壬生野新源次能盛といふ者の計らひ申しけるは、當國は分限狹し。大勢亂れ入りなば、國の煩ひ人の歎きなり。近江の國へ打出でて、鈴鹿山を後に當てゝ軍せんに、敵弱らば駈けてんず、敵すこやかならば山に引籠り、などか一戰せざるべきといひければ、然るべしとて、源次能盛・貞繼法師、三百餘騎の兵を引率して、柘植の鄕與野・道芝打分けて、近江の國甲斐の

佐々木秀義戰死

平能盛戰死

郡上野村・椛窪・篠鼻田・堵野に陣を取つて、北に向つて控へたり。佐々木は、大原の庄油日(あぶらひ)の明神の續き下野に、南へ向けて陣を取る。源平小河を隔てゝ控へたり。兩陣七八段には過ぎざりけり。互に名乘つて、散々に射殺しぬる者もあり、手負ふ者も多し。平家は思切りたりければ、命も惜まず戰ふ。源氏の軍忽(ゆるかせ)なりければ、源三秀義一陣に進んで、平氏は宿運既に盡きて、西海に落ち給ひぬ。殘黨いかでか源家を傾くべき。懸けよ若黨、組めや者共と下知しける處に、壬生野の新源次能盛、十三束三伏(よつび)能引き固めて放つ矢、隙間を射させて馬より落つ。秀義が郎等、敵を洩らさじと目にかけて、暫し固めて放つ矢に、能盛馬より下へ射落さる。敵に首取られじと、乘替の童、馬より飛んで下り、主の首を掻落して、壬生野の館に馳歸る。源氏の郎等共も、今日の大將軍源三秀義を討たせて、五百餘騎鑣を並べて、川を颯と渡して、揉みに揉うでぞ懸りたりける。平家の兵、散々に駈立てられて、自ら先立つ者は遁れけれども、後陣は多く討たれにけり。今は返し合するに及ばずとて、鈴鹿山に引籠る。それよりちりぢりにこそなりにけれ。平家重代の家人なり、相傳恩顧の好忘

れ難うして、思立ちける志は哀れなれども、大氣なしとぞ覺えたる。三日平氏と笑ひけるは此事なり。同じき十七日、平氏軍兵等舟に乘り、攝津の國福原の故郷に襲ひ來る由、梶原平三景時、備前の國より飛脚を以て申上げたりければ、都の騷ぎ斜ならず。去程に權の亮三位の中將入道の北の方は、自らの言傳も絶え果て、風の便の音信をも聞き給はで程ふれば、覺束なくぞ思召しける。月に一度などは、必ず文をも待ち見給へども、春も過ぎ夏もたけぬ。いかにとなり給ひぬるやらんと、思召しけるに、三位の中將は、屋島には在しまさずといふ人ありと聞き給ひて、淺ましさの餘りに、人を屋島へ奉りたりけれども、それも急ぎ歸り上らず、はや秋にもなりにければ、いとゞ詮方なくぞおぼされける。七月七日、御使歸り上れり。いかに御返事はと尋ね給へば、御使涙を流して、去りし三月十五日に、屋島を出でさせ給ひて、高野へ參り給ひたりけるが、時頼入道の庵室にて御髮下し、それより熊野へ傳ひ給ひつゝ、三山拜ませ給ひて後、那智の沖に御身を投げさせ給ひければ、重景も石童丸も、出家し侍りけるが、後世迄の御供とて、同じく水に入りぬと、熊野迄御供申したりけ

る舍人武里、確に語り申し侍りしが、是を最後の御文、言傳申し侍るとて參らせたれば、北の方取上げ、開き給ふに及ばず、さればこそ怪しかりつるものをと計り宣ひて、倒れ伏し喚き叫び給ふ事、理にも過ぎ給へり。若君・姫君も、聲々に悶え焦れ給へり。消えも入り給ひぬと見えければ、若君の乳人の女房、泣々慰め申しけるは、今更驚き思召すにあらず。是皆兼て思召し儲けし御事なり。本三位の中將殿のやうに、生きながら捕られて御恥を曝し、又弓矢の先にかゝり御命を失ひ給はゞ、同じ御別と申しながら、如何計かは悲しく侍るべきに、高野にて御髮下し、御戒保ちて熊野へ參り在しまして、故小松殿の御樣に、後世の事を厭はしく申させ給ひつゝ、臨終正念にて、沈み入らせ給ひにければ、願うてもあらまほしき御事なれば、御心安くこそ思召すべけれ。痛はしき御歎候まじ。今はいかなる山の中岩の迫にても、少き人々を生立て、御形見にも御覽ぜんとこそ思召さめ。なき人の御爲に、心を盡し身を苦しめさせ給ひても、何の詮かは侍るべき。泣き歎き在しますとも、歸り來り給ふべきにあらず。都を落ちて、道狹き御身となり在しましゝ上は、畏くも御計らひ候ひけりと

こそ思召し候はめなど申しければ、女房涙の隙より、御文を開き見給ふに、

古郷にいかに松風恨むらん沈む我身の行方知らずば

と詠み給ひては、其文を顔に當て胸に當てゝ、忍び兼ね給へる有樣なり。樣をも窶し身をも投げ給ふべき迄に、見え給ふぞ無慙なる。三位の中將、高野に上り出家し、那智の沖に沈みぬと聞えければ、兵衞の佐宣ひけるは、あゝ賢かりし人の子にて、賢き計らひし給ひけり。但隔なく打向ひ來りたりせば、命をも許し申してまし。小松内府の事疎ならず、池の尼御前の御使として、賴朝を流罪に申宥められしは、偏に彼人の芳恩たりき。いかでか其恩を忘るべきなれば、其子息達疎に思はず、殊に入道出家し給ひけん上は、仔細にや及ぶべき。高野に籠りて、心靜に後世をば祈り給はで、いとほし〳〵とぞ宣ひける。平家は屋島に歸り給ひて後、又東國より討手廿萬餘騎、旣に都に着きて、西國へ攻め下るとも聞ゆ。九國の輩緒方の三郎を始として、臼杵・戶槻・松浦黨等、二千餘艘にて四國へ渡るべしとも聞ゆ。是を聞き彼を聞くにも、心を迷はし肝を碎く。一門の人々は、一の谷にて多く討たれ給ひぬ。賴み給へ

る侍共も、又殘り少なく討たれにき。今は力盡き果てゝ、只阿波民部の大夫成能が、四國の輩を語らひたる計りを、深く賴み給へるぞ危き。そも東西より攻むるには、おだしからん事あるまじと、兼ておぼすぞ悲しき。女院・二位殿を始め奉りて、女房達差集ひつゝ、淚にのみぞ咽び給ふ。七月廿五日には、平家去年の朝までは都にありしものを、あわたゞしく去年の今日、花の棲を迷ひ出でて、草の枕に假寢して、明けぬれば磯打つ波に袖を濡らし、暮れては藻鹽の煙に肝を焦す。つながぬ月日といひながら、斯くて程なく廻り來りにけりと思召すにも、いと都の戀しさに、各袂を絞りけり。

新帝御卽位附義經使宣を蒙る幷伊勢瀧野軍の事

七月廿八日には、新帝太政官廳にて御卽位あり。大極殿未だ作らねば、是にて行はるゝ。治曆四年七月に、後三條院の御卽位の例とぞ聞えし。神武天皇より以來八十二代、神璽寶劍なくして御卽位の例、今度始めとぞ申す。八月六日、九郞義經、左衞門

の尉になりて、即使の宣を蒙つて、九郎判官と申しけり。是は一の谷合戰の勸賞とぞ聞えし。同じき十一日、九郎判官義經は、和泉の守平の信兼が伊勢の國瀧野といふ所に城郭を構へて、西海の平家に同意すと聞えければ、軍兵を差遣はして是を攻む。信兼に相隨ふ郎等百餘人城内に籠りて、皆甲冑を脱ぎ捨て、大肩脱になり、楯の面に進み出でて、散々に射ければ、義經の郎等多く討取られけり。矢種盡きにければ、城に火を放ち、信兼以下自害して、炎の中に燒死にけり。誠にゆゝしくぞ見えし。薏苡の譏を負ひ、終に亡びけるこそ無慙なれ。又九月十八日に、九郎判官義經、從五位下に敍す。檢非違使もとの如し。

屋島八月十五日夜附範頼西海道下向の事

八月十五日、屋島には秋も既に半になりにけりと哀れなり。いつしか稻葉の露も置きましつゝ、荻吹く風も身に入るに、海士人のたく藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、哀れを催す便なり。さらぬだに秋の空は物憂きに、宿定めぬ旅なれば、何事に付けて

も、心痛ましめずといふ事なし。此春より後は、越前三位の北の方のやうに、波の底に身を沈むる迄こそなけれども、女房達の、明けても暮れても伏沈み泣き給ふもいとほし。故鄕を萬里の雲外に顧み、舊儀を九重の日前を忍ぶ。今夜は名を得たる月なれば、人々隈なき空を詠めけるに、左馬の頭行盛、斯くぞ詠み給ひける。

君住めば是も雲井の月なれど猶戀しきは都なりけり

と。是を聞ける人々、皆涙を流しけり。

範賴平家追討の爲西海道に下向

九月十二日、三川の守範賴、平氏追討の爲に西海道に下向す。相隨ふ輩には、足利藏人義兼・武田の兵衞有義・板垣冠者兼信・齋院次官親義・佐々木三郎盛綱・北條の四郎時政・土肥の次郎實平父子・千葉の介經胤・其孫境平次經秀・三浦の介義澄・子息平六義村・土屋三郎宗遠・澁谷の庄司重國・長野の三郎重清・稻毛の三郎重成・弟榛谷の四郎重朝・葛西の三郎重淸・宇都の宮の四郎武者所茂家・子息太郎朝重・小山の小四郎朝政・同じく七郎朝光・中沼の五郎宗正・比企の藤内朝宗・同じく藤四郎能員・大多和の次郎義成・安西の三郎秋益・同じく小次郎秋景・公藤一郎祐經・同じく三郎秋茂・宇佐美の三郎祐能・天野藤内遠景・大野の太郎實

秀・小栗の十郎重成・伊佐の小次郎友政・淺沼の四郎弘綱・安田の三郎義貞・大河戸の太郎弘行・同じき三郎弘政・中條藤次家長・一法房昌寛・土佐房昌俊・小野寺禪師太郎通綱等を始として、其勢十萬餘騎、軍舟千餘艘にて室の泊に着く。されども十二月廿日の頃までは、室・高砂に逗留して、遊君に遊宴して、國には正稅官物を費し、所には人民百姓を煩はしけれ。上下是を甘心せず、大名も急ぎ四國に渡つて、敵を攻められよかしと思ひけれども、大將軍の下知に依る事なれば、力及ばず。

盛綱藤戸を渡し兒島合戰附海佐介海を渡す事

同じき十八日に、平家は讚岐の屋島にありながら、山陽道を打靡かして、新三位の中將資盛・左馬の頭行盛を大將軍として、越中の次郎兵衞盛嗣以下の侍を相具して、二千餘艘にて、備前の國兒島に着く。三川の守範賴も、室の泊にありけるが、舟より上りて、同國西川尻藤戸の渡に押寄せて陣を取る。源平海を隔てゝ控へたり。海上四五町には過ぎざりけり。同じき廿五日、平家海を隔てゝ、扇をあげて源氏を招く。是

を見て、海を渡せといふこそ。舟なくして叶ふべきならねば、是も扇を以て招き合ふ。源平遙に見渡して、其日も徒に暮れにけり。爰に佐々木の三郎盛綱、夜に入りて案じけるは、渡すべき便のあればこそ、平家も招くらめ。遠さは遠し、淵瀨は知らず。いかゞはせんと思ひけるが、其邊を走り廻りて、浦人を一人語らひ寄せて、白鞘卷を取らせていひけるは、向の島へ渡す瀨はなきか、敎へ給へ。喜は猶も申さんといへば、浦人答へていはく、瀨は二つ候。月頭には東が瀨になり候。是をば大根の渡と申す。月尻には西が瀨になり候、是をば藤戶の渡と申す。當時は西こそ瀨にて候へ。東西の瀨の間は二町計り、其瀨の廣さは二段は侍らん。其內一所は深く候といひければ、佐々木重ねて、淺さ深さをば、いかでか知るべきと問へば、浦人、淺き處は、波の音高く侍ると申す。さらば和殿を深く賴むなり。盛綱を具して瀨踏して見せ給へと、懇に語らひければ、彼男裸になり、先に立ちて、佐々木を具して渡りけり。膝に立つ所もあり、腰に立つ所もあり、脇に立つ所もあり。深き所と覺ゆるは、鬢鬚を濕らす、誠に中二段計りに深かりける。向の島へは、淺く候なりと申して、そ

れより歸る。佐々木陸に上りて申しけるは、闇さは闇し海の中にてはあり、明日先陣を懸けばやと思ふに、いかゞして只今の通をば知るべき。然るべくは人にあやめられぬやうに、澪標を立てゝ得させよとて、又直垂を一具給びたりければ、浦人かゝる幸に合はずと喜びて、小竹を切集めて、水の面よりちと引入れて立てゝ、歸つて斯くと申す。佐々木喜んで、明くる日を遲しと待つ。平家是をばいかでか知るべきなれば、廿六日の辰の刻に、平家の陣より、又扇を上げてぞ招きたる。佐々木の三郎盛綱は、黃生衣の直垂に、緋縅の冑白星の甲、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍置きてぞ乘りたりける。家の子和比の八郎・小林の三郎、郎等に黑田の源太を始として、十五騎、鑣を並べて海へ颯と打入れてぞ渡しける。三川の守範賴、馬にて海を渡す事やはある。佐々木制せよと宣ひければ、土肥・梶原・千葉・畠山承り、續いて過し給ふな。返せ返せと聲々に制しけれども、兼て瀨踏して、澪標を立てたれば、耳にも聞入れず渡しけり。馬の鳥頭、草脇鞅づくしに立つ所もあり、深き所をば手綱をくれ泳がせて、淺くなれば、物の具の水はしらかし、弓取直し、向の岸へざつと上り、鐙踏張り弓杖に

縋りつゝ名乘りけるは、今日海を渡し、敵陣に進む大將軍をば誰とか見る。宇多天皇の王子一品式部卿敦實の親王より九代の孫、近江の國の住人佐々木の源三秀義が三男に、三郎盛綱なり。平家の方に我と思はん者は、大將も侍も落合ひて、組めや組めやと呼ばはつて駈入り、散々に懸る。源氏の兵是を見て、海は淺かりけり、佐々木討たすな、渡せ者共とて、土肥・梶原・千葉・畠山、我先々々と打入り〳〵、五千餘騎向の岸へ颯と上る。平家は扇を以て度々に招かれけれ共、さすが海なれば、爭でか渡すべきと思ひ延びてありけるに、斯く押寄せ鬨を作りければ、互に鬨を合せ、喚き叫びて戰ひけり。遠きをば弓にて射、近きをば熊手にかけて取り、或は射殺され切殺され、源平互に亂れ合ひて、隙をあらせず息を繼がず、討つもあり討たるゝもあり、取るもあり取らるゝもありければ、兩方八百餘騎にぞ亡びけれ。佐々木の三郎の家の子に、上總の國の住人和比の八郎と、平家の侍讃岐の國の住人加部の源次と組合ひて馬より落ち、上になり下になり、弓手にまろび妻手にころびからかひけるが、源次は遙に力まさりにて、和比の八郎を取つて押へて首を搔く。源平目を澄してぞ見

たりける。八郎が從弟に、小林の三郎重隆といふ者、加部の源次に落合ひて引組んで、是も上になり下になり轉びけるが、海の中へぞ轉び入りける。郎等に黑田源太、續きけれども、共に海へ入りたりければ、水の底へ續くに及ばず、汀に立つて、今や上る〳〵と待ちけれども、此者共は猶水底にて、上になり下になり轉びければ、波の荒き所へ弓の鋒を差入れて、彼是を搜りければ、敵の源次、弓の筈に取付きたり。引上げ見れば敵なり。主の小林も、源次が腰に抱き付きて上りければ、敵の源次をば首を切り、主をば取上げ助けてけり。平家是を見て、今は叶はじとや思ひけん、舟に取乘り漕退き、矢先を揃へて、差詰め〳〵散々に射る。源氏は勝に乘り、汀を廻りて是も散々に射ければ、平家は兒島の城を落ちて、讃岐の屋島へ漕歸れば、源氏は馬を泳がせて、藤戸の陣へ歸りにけり。佐々木の四郎高綱が、宇治川の先陣を渡したりしをこそ、高名といひたりしに、同じく三郎盛綱が、馬にて海を渡す事、漢家本朝例なきとぞ、源平共に感じける。誠にゆゝしくぞ見えたりき。右大將家の御自筆の御下文にいはく、古より川を渡す事、先例ありといへども、未だ遙に海を渡すの例を聞

かずと。即ち彼島を給ふの上に、伊豫・讃岐兩國を給ひ畢んぬ。昔備前の國に海佐介といひける者、兵の聞えありければ、西戎を鎭められんが爲に、官兵を差添へられけるに、官軍は舟に乘りけれども、佐介は馬に乘りながら、先陣に進みて海上を渡る。程なく賊徒を攻め隨へて又馬に乘り、海の面を歩ませて本國に歸りけるか、備前の内海にて、海鹿といふ魚に、馬をあやまたれけれども、馬少しも怯まずして、佐介を陸地に着けて、後に馬は死にけり。其所に堂を立てゝ孝養しけり。馬塚とて今にあり。時の人いひけるは、馬は龍なり。佐介只人にあらずとぞ申しける。佐介は波の上を歩ませて西戎を隨へ、盛綱は水底を渡して平家を落す。

御禊供奉并實平西海より飛脚の事

十月三日に、大嘗會の御禊あり。源九郎大夫判官義經本陣に供奉す。色白うして長短し。容貌優美にして進退優なり。木曾などが有樣には似ず、殊の外に京馴れて見えしかども、平家の中に、ゑりくつとといひし人にだにも及ばねば、心ある者は、皆昔

を忍びて袖を絞る。豐の御衣、今年ぞせさせ給ひける。節下は、後德大寺內大臣實定公勤め給ひける。敷政門を入りて着陣せられける有樣、いとゆゝしくぞ見え給ひける。去々年先帝の御禊には、節下は前の內大臣宗盛勤め給ひき。作法進退優美に見え給ひしに、今は公庭にて、再び見奉るべきにあらずと申出して、涙流す者多かりけり。平家一族の人々、公事の庭には、とりどりに華やかにのみ見え給ひしに、今日は一人も見え給ばず、移り行く世の有樣、いく程を經ざれども、變り果てにけりと哀れなり。土肥の次郎實平が許より飛脚を立てゝ、九郎判官へ申送りけるは、前の平中納言知盛の卿、既に文字の關に攻め入り、安藝・周防以下皆平氏に隨ふ。其勢甚だ多し。兵船は百餘艘を以て每度に襲ひ來る。船中には大楯を組みて、其身をあらはさず、陸地より馳向ふ時は、矢間を開きて馬の腹を射、乘る人馬より落つる時は、步兵の輩數百人、舟より降りくだりて討取る間、度々の合戰に官兵皆破れ畢んぬ。親族の者共も多く討取られ畢んぬ。實平老體の上重病を受け、當時の如くば敵對に叶はず、急ぎ軍兵を相添へらるべしと申上せたり。平家は兒島の軍に打負けて、屋島

の館へ漕戻し、屋島には、大臣殿を大將軍として、城郭を構へて待かけたり。新中納言知盛は、長門の國彥島といふ所に城を構へたり。是をば引島とも名付けたり。源氏此事を聞きて、備前・備中・備後・安藝・周防を馳せ越えて、長門の國にぞ着きにける。當國の國府には三の御所あり。濱の御所・黑戶の御所・上矢の御所といふ。三川の守範賴は、此御所を見んとて、今夜は爰に控へたり。蒼海漫々として、磯越す波、旅の眼を驚かし、夜の月明々として、水に映る影、鎧の袖を照しけり。同じく征馬の旅なれども、殊に興ありてぞ覺えける。明けなば引島の城を攻むべしと議定ありけるに、文字・赤間の案內知らでは叶はじとて、豐後の地へ渡り、緖方の三郞を先として攻むべしとて、先づ使を維義が許へ遣しけり。維義五百餘艘の兵船を揃へて、三川の守範賴を迎へ奉りければ、範賴是に乘つて、豐後の地へ渡りにけり。去程に十月の末にもなりしかば、屋島には、浦吹く風も烈しく、磯越す波も高ければ、舟の行通ひも稀なり。空搔曇り打時雨れつゝ、日數經るまゝには、都のみ思ひ出でて戀しかりければ、新中納言知盛、

住馴れし都の方はよそながら袖に波こそ礒の松風
と口ずさみ給ひて、脆きは只涙なり。三川の守範頼追討使として、既に發向すと聞
えければ、いとゞ心を迷はしけり。

大嘗會を行はる附賴朝條々奏聞の事

十月十八日には、大嘗會遂げ行はれたり。大極殿燒失しにければ、去々年は紫宸殿
にして行はれたりけるが、先帝西國へ落下らせ給ひたれば、今度不吉の例を去らん
が爲に、治曆の嘉例に任せて、太政官廳にして行はれけり。去ぬる治承四年より以
來、諸國七道の人民百姓、或は平家の爲に追捕せられ、或は源氏の爲に却略せられけ
れば、家煙を捨てゝ山林に交はり、妻子に分れて道路に迷うて、春は東作の企を忘れ、
秋は西收の營を捨てゝければ、國衙も庄園も、正稅官物の所濟なければ、いかにして
か斯樣の大禮も行はるべきなれ共、偖又默止すべき事にあらざれば、かたの如く遂
げ行はれけり。平家は西海の波に漂ひて、死生未だ定まらず、東國・北國は靜まりた

れども、花洛の上下西國の人民、是非に迷つて安堵せず。是に依つて兵衞の佐より、條々奏聞あり。其狀にいはく、

源賴朝謹奏聞條々事

一、朝務以下除目等事

右守先規、殊可被施德政。但諸國受領等尤可有計御沙汰候歟。東國・北國兩國道之國々、追討謀叛輩之間、土民不安堵。於于今者、牢人如元可令歸住舊里候。然者來秋時被仰含國司被行吏務者可宜候。

一、平家追討事

右畿內近國號源氏平氏、携弓箭之輩幷住人等、早任義經之下知可引率之由、可被仰下候。海路雖不幾。殊急可追討之旨、可被仰付義經候也。於勳功之賞者、遂可計申上候。

一、諸社事

我朝者神國也。往古之神領、不可有相違候。其外今度又始於諸社神明可被

新加所領候歟。就中去頃鹿島大明神御上洛之由、風聞出來之後、賊徒追討神戮不空、兼又諸社若有破壞顚倒之事者、隨破損之分限、可被召付受領之功候。其後可被裁許候。

一、恒例神事

守式目無懈怠可勤行之由、可被尋沙汰候。

一、佛寺事

諸山御領如舊例勤行、不可退轉。如近年者、僧家皆存武勇忘佛法之間、堅閉修學之樞、併失行德之譽、尤可被禁制候。兼又於濫行不信之僧者、不可用公請。至僧家之武具者、自今以後爲賴朝之沙汰、任法奪取、可與賜朝敵追討之官兵等之由、所思給候也。

以前條々言上如件。

元暦元年十一月日　　從四位下　源　賴　朝

とぞ申されたる。大膳の大夫成忠の卿、此旨を奏聞せらる。法皇叡覽あつて、賴朝

は賢人なりけるにやとぞ仰せられける。

義經院參、西國發向附三社諸寺祈禱の事

去程に冬も過ぎて、元暦二年正月十日、九郎大夫判官義經は、平家追討の爲に西國へ發向す。先づ院の御所に參り、大藏卿康經の朝臣を以て奏聞しけるは、平家は榮華身に極り、宿報忽に盡きて、神明にもはなたれ奉り、君にも捨てられ進らせて、西國に漂ひ、三ヶ年が間多くの國々を塞ぎ正税官物を押領し、人民百姓を惱亂す。是西戎の賊徒にあらずや。今度罷下りなば、人は知らず、義經に於ては、彼輩を悉く討取らずんば、王城へは歸り上るべからず。鬼界・高麗・新羅・百濟迄も、命を限りに攻むべきの由を申す。ゆゝしくぞ聞えし。院の御所を出でて、西國へ下りけるにも、國々の兵共に向つて、後足をも踏み命をも惜しゝと思はん人々は、是より歸り下り給へ。打連れては中々源氏の名折なり。義經は鎌倉殿の御代官なる上、忝く敕宣を奉はりたれば、斯くは申すなりとぞ宣ひける。同じき二月三日、九郎大夫判官、都を立つて

義經平家追討の爲め西國へ發向

渡部へ向ふ。相隨ふ輩には、佐渡の守義定・大内の太郎維義・畠山の庄司次郎重忠・佐々木の四郎高綱・平山武者所季重・三浦の十郎能連・和田の小太郎義盛・同じく三郎宗實・同じく四郎義胤・多々良の五郎能春・梶原平三景時・子息源太景季・同じく平次景高・同じく三郎景能・比良左古太郎爲重・伊勢の三郎義盛・庄の三郎家永・同じく五郎弘方・椎名の六郎胤平・横山の太郎時兼・片岡八郎爲春・鎌田の藤次光政・武藏房辨慶等を始として、其勢十萬餘騎なり。同じき十四日、伊勢・石淸水・賀茂三社へ奉幣使を立てられ、平家追討の御祈の上、三種の神器事故なく返し入れ給ふべきの由、宣命に載せられけり。上卿は堀川の大納言忠親の卿なり。今日より神祇官人、並に諸社司等本宮本社にして、追討の事祈り申すべきの由、院より仰せ下されけり。又延暦・園城寺・東寺・仁和寺にして、七佛・藥師・五壇の法・大元延命熾盛光等の祕法數を盡し、調伏の法も行はれけり。

平家の人々歎附梶原逆櫓の事

屋島には、隙行く駒の足早く、止まらぬ月日明暮れて、春は賤が軒端に匂ふ梅、庭の櫻も散りぬれば、夏にもなりぬ。垣根續きの卯の花、五月の空の郭公、鳴くかとすれば程もなく、秋の色に移りて、稻葉に結ぶ露深く、野邊の虫の音弱りつゝ、涼しき頃も過暮れて、冬の景氣ぞすさまじき。麓の里時雨して、尾上は雪も積りけり。斯くて春を送り春を迎へて、既に三年にもなりぬ。東國の兵の攻め來ると聞えければ、女房達は差集ひつゝ、只泣くより外の事ぞなし。內大臣宣ひけるは、都を出でて既に三年になりぬ。浦傳ひ島傳ひして、明し暮すは事の數ならず。入道の世を讓りて、福原へ下り給ひたりし其後に、高倉の宮取逃し奉りたりし程、心憂かりし事はなしと仰せられければ、新中納言は都を出でし日より、少しも後足を引くべきとは思はず、東國・北國の奴原も、隨分に重恩をこそ蒙りたりしかども、今は恩を忘れ契を變じて、悉くに賴朝に隨ひ附きぬ。西國とても賴もしからず。さこそはあらんずらんと思ひしかば、只都にて弓矢太刀刀の續かん程は防ぎ戰ひて、討死射死をもして、名を後の世に止め、家々に火をもかけて、塵灰ともならんと思ひしを、身一人の事なら

ねばとて、人なみ〳〵に都をあくがれ出でて、終に遁るまじき物故に、かゝる憂目を見るこそ口惜しけれとて、大臣殿の方をつたなげに見給ひて、涙ぐみ給ひけるぞ哀れなる。同じき十五日に、源氏は西國へ發向す。日頃渡邊・神崎兩所にて、舟揃しけるが、今日既に纜を解いて、南海道より四國へ渡るべしとて、大物が濱にあり。平家は又屋島を以て城郭とし、彦島を以て軍の陣とす。前の中納言知盛の卿、九國の兵を率して、門字の關を固めたり。大夫判官は、大物の浦にて、大淀の江内忠俊を以て舟揃して、軍の談議ありけるに、梶原平三景時申しけるは、舟に逆櫓と申す物を立て候て、軍の自在を得るやうにし候はゞやと申しけり。判官、逆櫓とは何といふ事ぞと問ひ給へば、梶原申しけるは、逆櫓とは、船の舳に、艫へ向けて櫓を立て候、其故は、陸地の軍は、進退逸物の馬に乘つて、心に任せて、懸るべき所をば懸け、引くべき折は引くも安き事にて侍り。舟軍は押早めつる後、押戻すはゆゝしき大事にて侍るべし。敵つよらば、舳の方の櫓を以て押戻し、敵弱らば元の如く艫の櫓を以て押渡し侍らばやと申したりければ、判官、軍といふは、大將軍が後にて懸けよ攻めよといふだ

にも、引退くは軍兵の習なり。況や兼て逃支度したらんに、軍に勝ちなんやと宣へば、梶原、大將軍の謀の能しと申すは、身を全うして敵を亡す。左樣に前後を顧みず、向ふの敵計りを討取らんとて、片趣なるをば、猪武者とて危き事にて候。君は猶ほ若氣にて、斯樣には仰せらるゝにこそと申す。判官少し色損じて、知らずとよ、猪鹿は知らず。義經は只敵に打勝ちたるぞ心地はよき。軍といふは、家を出でし日より、敵に組みて死なんとこそ存ずる事なれ。身を全うせん、命を死なじと思はんには、本より軍場に出でぬには如かず、敵に組んで死するは、武者の本意なり。命を惜みて逃ぐるは人ならず。されば和殿が大將軍承りたらん時は、逃設して百挺千挺の逆櫓をも立て給へ。義經が舟には、忌々しければ、逆櫓といふ事、聞くとも聞かじと宣へば、あたり近き兵共是を聞きて、一度に吐と笑ふ。梶原よしなき事申出してけりと赤面せり。判官は、抑景時が、義經をむかふ樣に、猪鹿に譬ふる條こそ奇怪なれ。若黨共景時取つて引落せと宣へば、伊勢の三郎義盛・片岡の八郎・武藏房辨慶等、判官の前に進み出でて、既に取つて引はるべき氣色なり。景時是を見て、軍の談議に、兵

共が所存を述ぶるは常の習、能き儀には同じ、惡しきをば捨て、いかにも身を全うして平家を亡すべき謀を申す景時に、恥を與へんと宣へば、却て殿は、鎌倉殿の御爲には不忠の人なり。但年頃は主は一人、今日又主の出來ける不思議さよとて、矢さしくはせて判官に向ふ。子息景季・景高・景茂續きて進む。判官腹を立て、太刀を取つて向ふ處を、三浦の別當能澄、判官を懷き止む。畠山の庄司次郎重忠、梶原を抱きて動さず。土肥の次郎實平は源太を懷く。多々良の五郎能春は平次を懷く。各申しけるは、此條互に穩便ならず。友爭ひ其詮なし。平家に洩聞かんも嗚呼がまし丶。又鎌倉殿の聞召さる丶も其憚あるべし。當座の興言、苦しみあるべからずと申しければ、判官誠にと思ひて靜まれば、梶原も、勝に乘るに及ばず、此意趣を結びてぞ、判官終に梶原には、いよ〳〵讒せられける。判官は、都を出でし時も申し丶やうに、少しも命惜しと思はん人々は、是より上り給へ。敵に組んで死なんと思はん人々は、義經に附けと宣へば、畠山の庄司次郎重忠・和田の小太郎義盛・熊谷の次郎直實・平山武者所季重・澁谷の庄司重國・子息右馬の尉重助・土肥の次郎實平・子息彌太郎遠平・

佐々木の四郎高綱・金子の十郎家忠・伊勢の三郎義盛・渡部の源五・馬の丞眤・鎌田の藤次光政・奥州の佐藤三郎兵衞繼信・其弟に四郎忠信・片岡八郎爲春・武藏房辨慶等は判官に付き、梶原は逆櫓の事に怨を含み、判官に付いて軍せん事、面目なしと思ひければ、引分れて三川の守範頼に附き、長門の國へ向ひけり。

義經纜を解き四國に渡る附資盛・淸經首京都に上すべき由の事

十六日午の刻に、判官既に纜を解いて舟を出す。南風俄に吹き來つて、長船渚々に吹上げて、七八十艘打破る。それを繕ふとて今日は逗留、今や〳〵と侍ちけれども、風いよ〳〵烈しうして、二日二夜ぞ吹きたりける。十七日の夜の寅の時に、空掻曇り急雨して、南の風は靜まりて、北風烈しく吹き出したり。木折れ砂を揚げたり。判官は、風既に直れり。急ぎ舟共出せと宣ふ。水主楫取等申しけるは、是程の大風には、いかでか出し候べき。風少し弱り候ひてこそと申す。判官大きに怒つて、向

ふたる風に出せといはゞこそ僻事ならめ。斯様の順風は願ふ所なり。日なみもよく海上も靜ならば、今日こそ源氏の渡らめとて、平家用心嚴しくして、浦々島々に、大勢差向ひ〳〵待たん所へ、僅の勢が寄せたらば、物の用にや叶ふべき。かゝる大風なれば、よも渡らじ舟も通はじなんど思ひて、打解けたらん所へ渡りてこそ、敵をば誅すれ。疾々此舟共出せ。出さゞるものならば、己等こそ朝敵なれ。射殺せ切殺せと下知しければ、伊勢の三郎、大の中差打くはせて、射殺さんと馳廻りければ、水主楫取共、いかゞはせん、是程の風に舟出したる事未だなし。舟を出しぬるものならば、一定水の底に沈まんず。出さずんば、矢に當つて死なんず。死はいづれも同じ事、さらば出して馳死にせよとて、寅卯の間に判官の舟を出す。兵船は數千艘ありけれども、本より夥しき大風なれば、舟を出す者なかりけるに、只五艘を出す。一番判官の舟、二番畠山が舟、三番土肥の次郎舟、四番和田の小太郎舟、五番佐々木の四郎舟なり。五艘の舟に馬乘せ、兵糧米積む。それに隨ふ下部歩走なんど乘りければ、一百餘騎には過ぎず、是等は皆一人當千の兵なり。判官は、義經が舟計りに篝を

焚くべし。それを本船として各馳せよ。自餘の舟に篝ともすべからず。敵に舟の數を見せまじ爲なりと下知して、渡邊より舟を出す。吹く風木の枝を折り、立つ波蓬萊をあぐ。水主楫取吹倒されて、足を踏立つるに及ばざりけれども、究竟の者共にて、舟を乘直しく、帆柱を立て帆を引く事たかゝらず、手打かくる計なり。風彌強く當りければ、帆の裾を切つて結び分け、風を通す。纜三筋十丈計りにより下げて、錨綱あまた下して、脇楫面楫を以て、舟をちやうと挾み立てゝ、傍風來れば、風面に乘り懸り、眦になれば中に乘り、隙なく湯をとらす。舳へ打つ波碎けて、艫を洗ひ艫を渡す。波いかにも叶ひ難けれども、究竟の楫取なり、波の手風の手を作りて、大きなる波をばつゝいくゞり、小波をば飛越えく、馳せよ者共漕げや者共とて、曳聲を出して馳せければ、押して三日に漕ぐ所を、只三時に、阿波の國はちまあまこの浦にぞ馳着きたる。五艘の舟、一艘も誤なく、皆一所に漕並べたり。汀より五六町計り上つて、岡の上に赤旗數多立並べて、敵籠れりと見ゆ。判官宣ひけるは、平家此浦を固めたり、各物具し給へ。舟に搖られて立竦みたる馬共なり。左右なく下して過す

な。沖より追下して、舟に付いて泳がせよ。馬の足とつかば、舟より鞍を置くべし。其間に鎧物具取付けて、舟より馬には乘移れ、敵寄すると見るならば、平家は汀に下立つて、水より上げじと射ずらん。波の上にて相引して、脇壺内甲射さすな。射向の袖を眞甲に當て、急ぎ汀へ馳せ寄せよ。敵近付けばとて、騒ぐ事なかれ。今日の矢一は、敵百人防ぐべし。隙間を數へて弓を引き、あだ矢射なとぞ下知し給ふ。軍兵共軍將の下知に隨ひ、磯五六町より沖にて馬を追下し、舟に引付け〳〵泳がせたり。馬の足屆きければ、鎧物具取付けて、舟より馬にひたと乘り、一百五十餘騎の兵共、射向の袖を甲の眞甲に當て、鑣を並べて、汀へ颯と馳上りたり。判官先陣に進み、此浦固めたる大將は誰人ぞや。名乘れ〳〵と攻めけれども、答ふる者なし。此浦をば、阿波民部の大夫成能が伯父櫻間外記の大夫能連軍將として、三百餘騎にて固めたりけれども、何とか思ひけん、名乘らざりければ、判官は、此奴原は近國の歩兵にこそあるらん。若者共攻入りて、一々に首切りかけて、軍神に奉れと下知しければ、河越小太郎茂房・堀の彌太郎親弘・熊井の太郎忠元・江田の源三弘基・源八廣綱五騎、

鏃を並べ鞭を打つて駈入りけり。城中よりは、簇を揃へて散々に射る。源氏は一百餘騎、後陣に支へて、攻めよ懸けよ。隙あらせそとゞめきければ、五騎の者共、郎等乘替相具して三十餘騎、錏を傾けて攻入りければ、三百餘騎も怺へずして、颯と開いて通しけり。取つて返して、竪樣橫樣、おもの射に射ければ、木の葉を風の吹くが如く、四方へ颯と逃走りけるを、駈立てつゝ、つよる者をば首を切り、弱き者をば生捕にす。大將軍外記大夫も防ぎ兼ね、鞭を上げて逃げけれども、延べやらずして生捕られけり。首共四五十切かけて軍神に奉り、喜の鬨二度作り、西國の軍の手合なり。物能し〳〵とぞ勇みにける。備前兒島の城は、去りし冬、土肥の次郎實平・佐々木の三郎盛綱、鹽干に渡り瀨を求めて、暗の夜五十餘騎を率して攻め寄せて、鬨の聲を起しければ、平氏の軍兵働かざりける程なれば、防ぎ戰ふに及ばずして、舟に爭ひ乘つて逃げけるを、或は生捕り或は首を切りければ、其後は備中・備前の輩、悉く官軍に相隨ひける處に、此春、又平氏二百餘艘の兵船を調へて、夜半に彼城へ寄せて合戰しける程に、實平の軍敗れて、息男遠平傷を蒙り、家人多く討取られけり。舟軍の事、西

國の賊徒は自在を得たり。東國の官兵は、寸步を失ひて、實平每度に敗られけり。かゝりし程に、豐後の住人維義等、舟を艤して、官兵を迎へければ、三川の守範賴以下、彼國へ入りにけり。又三位の中將資盛入道、並に左中將淸經朝臣を、當國の輩討取つて、首を範賴の許へ送りけり。平家は、源氏の討手下ると聞えしより、讃岐の國屋島の浦に城郭を構へ、軍兵を儲けて相待ちけり。前の內大臣宗盛・前の平中納言敎盛・前の權中納言知盛・前の修理の大夫經盛・前の右兵衞の督淸宗・小松の少將有盛・能登の守敎經・小松の新侍從忠房以下、五十餘騎とぞ聞えし。浦々島々差塞ぎて、君を守護し奉る。

勝浦合戰附勝磨幷親家屋島尋承の事

判官、生捕の者に問ひ給ひけるは、平家の軍兵は、屋島より此方には、いづれの所にかあると宣ふ。是より卅餘町罷り候ひて、阿波の民部の大輔の弟に、櫻間の介能遠と申す者こそ、五十餘騎計りにて、陣を取りて候へと申す。さては小勢や、打てや打

てやとて押寄せ鬨を作る。城の内にも鬨を合せたり。能遠は大堀を掘つて水を湛へ、岸に菱植ゑ、櫓かいて待ち受けたり。容易く攻落し難かりけるを、源氏の兵、其邊の小家を毀ち、堀に入れ浸して鉦を傾け、一味同心に攻入りければ、城内亂れて、我先にと落行きけり。能遠を延ばさんとて、家の子郎等卅餘騎、殘り留りて防ぎ矢射けるが、一々搦め捕られて、忽に首刎ねられ、軍神に祭らる。兩陣を追落して後、又浦人召して、此所は何といふぞと問ふ。勝浦と申すと答ふ。軍に勝ちたればとて、色代して矯飾を申すにこそ。斯樣の奴原が、不思議の事をばし出すぞ。返忠せさすな。義盛はなきか。しや首切れと宣へば、伊勢の三郎、太刀を拔き進み出でたり。浦人大きに恐れおのゝきて、其儀は候はず。此浦は御室の御領五箇の庄にて、文字には勝浦と書きて候なるを、下郎は申し易きに付きて、かつらと呼び侍りき。上臈の御前にて侍れば、文字の儘に申上候といふ。判官是を聞きて、扨は神妙々々。さる例あり。昔天武天皇の末、東宮位におはしましける時、大友の皇子に、天智子襲ひて、近江の國湖水に舟を浮べて、東の浦に着き給ふ。葦の下葉を漕分けて、舟を岸に

寄せ給ふ。田作る男一人あり、春宮問うていはく、汝何者ぞ。爰をばいづれの所といふぞと。田夫答へて申さく、是をば勝浦といふ。我身をば、日の下の勝磨と申すなりとて、賤が藁屋に請じ入れ奉り、樣々供御進め參らせたりければ、春宮大きに御悅ありて、朕勝浦に着きて勝磨に逢へり。軍に勝つて、帝位に卽かん事疑なし。御卽位の後に、御願寺を立てらるべしと御誓ありけるに、果して帝位に卽いて、彼所に寺を建てられけり。月上寺とて、今にありと傳へ聞く。義經軍の門出に、はちまあまこの浦にて軍に勝つて、又勝浦に着きて敵を亡す。末賴もしとぞ悅びける。判官又浦人に問ひ給ふ。此勝浦より屋島へは、行程何程ぞと問ひ給へば、二日路候と申す。さらば敵の聞かぬ先に打てや〱とて、鞭障泥を合せて打つ處に、大將軍と覺しくて、黑皮縅の鎧に、黑馬に乘つて、一百餘騎にて步ませ來る。笠符も付けず旗も差さず。判官宣ひけるは、見來れば、軍兵源平いづれとも見分けず、敵の謀やらん、心許しあるべからず。義盛罷向うて仔細尋ねて、將ゐて參れと下知しければ、伊勢の三郎仰承りて、十五騎にて行向ひて、何とかいひたりけん、安々と具して參る。判

官、汝は何者ぞ。源平何れとも見えずと問ひ給へば、是は阿波の國の住人、臼井近藤六親家と申す者にて侍るが、近年源平の亂逆に安堵せず、波にも磯にも付かぬ風情なり。いづれにても日本の主となり給はん方をも、君に賴み奉らんと相待つ處に、平家都を落ち、源氏の軍將の、院宣を蒙り給ふと承る間、白旗を守つて馳せ參ずと申す。判官宣ひけるは、神妙なり。源氏の大將軍鎌倉の兵衞の佐殿の弟に、九郎大夫判官といふは我なり。平家追討の院宣を蒙り、西國に發向せり。親家を西國の案內者に賴み、屋島の尋承せよ。但所存を知らん程は、物具をば許すべからずとて、甲冑を脫がせて召具しけり。やゝ親家、屋島には勢幾程とか聞くと宣へば、よも千騎には過ぎ候はじ。凡そは五千餘騎とこそ承はりしかども、臼杵・戶槻・松浦黨・緖方の三郞等が背くに依つて、平家、彼輩を誅せられんとて、此間は、軍兵等多く所々へ分け遣さる。其外阿波・讚岐の浦々島々に、五十騎卅騎百騎二百騎差遣さるゝ間に、勢は少なしと承ると。さて屋島より此方に敵ありやと問へば、近藤六申しけるは、今卅町計り罷りて、勝宮といふ社あり。彼に阿波の民部の大輔成能が子息傳內左衞門の尉

成直、三千餘騎にて陣を取りたりつるが、此間河野四郎通信を攻めんとて、伊豫の國へ越したりと聞ゆ。餘り勢などは少々も候らんといひければ、判官急げ〳〵とて、畠山の庄司次郎重忠・和田の小太郎義盛・佐々木の四郎高綱・平山武者所季重・熊谷の次郎直實・奥州の佐藤三郎兵衞繼信・同じく弟四郎兵衞忠信・鎌田の藤次光政等、一人當千の者共を先として、打てや〳〵とて、勝宮に押寄せて見れば、傳内左衞門の尉が、兵士に置きたりける歩兵等、少々ありけれども、散々に蹴散らして、逃ぐるはたまま遁れけり。向ふ奴原一々に首切りかけて打つ程に、新八幡の寶前をば、判官下馬して再拜すれば、郎等も又斯くの如し。判官は勝浦の勝もかつと讀み、勝宮の勝もかつと讀む。かた〴〵の軍に打勝つて、今大菩薩の御前に參り、源氏の吉瑞顯然なり。平家の滅亡疑なし。八幡三所、遠き守と守り幸し給へとて、馬に打乘り馳せつ控へつ、讃岐の屋島へ打通りけり。

金仙寺觀音講附六條北の政所の使義經に逢ふ事

斯る處に、中山といふ所の道の端より、二町計り右に引入りて竹林あり。中に古き寺あり。栗守の后の御願、金仙寺といふ伽藍なり。本尊は觀音、所の名主百姓が集りて、月次の講營とて、大饗盛り並べ盃据ゑて、旣に行はんとしけるが、長百姓はよしとほめ、若者共は惡しと嫌ふ。善惡と賞め誹る程に、百餘人の講衆とゞめきけり。軍兵是を聞きて、敵の籠りたるぞと心得て、弓取直し片手矢はげて、鬨を吐と作つて押寄せたれば、講衆を始めて、汁御菜持運びたる尼公女童、下し取らんとて集りたる子孫童部に至るまで、取る物も取敢ず、蛛の子を散らしたる如く逃迷ひける。幼少の子孫が、尻に隨ひたるをも打棄て、老耄の親祖父が、杖にかゝるをも助けず、我先我先と、爰彼に隱れ忍びて是を見る。軍兵緣の際迄打寄せて、御堂の内に下居て、我物顏に講の座に着す。五種御菜に三升盛を、百二三十前計り組調へたり。座上に盃据ゑ、大桶に汁入れ、樽二に濁酒入れて、座中に搔据ゑたり。佛前には花香供じ、佛供燈明備へたり。机の上に卷物一卷あり。講式と覺ゆ。判官は座上に着す。兵共思ひ〳〵に列座せり。武藏房辨慶座より立つて、判官の前に、五本立に取並べて、あ

ゐ今月の講、隨分尋常に營み出して覺え候。來頭は誰人ぞ。此定め候ぞよといふ。判官、誠に此講めでたし。來頭は、義經營み侍るべしと宣へば、兵皆吐とぞ笑ひける。飯酒共に行つて、佛壇の中より老翁を尋ね出して、是は何講ぞと問へば、翁震ひ〳〵、是は月並の觀音講にて候が、只今は御景氣の恐しさに、わなゝくとぞいひける。講食うてたゞあるべきにあらず。誰か式讀むべきといひければ、辨慶、黑皮縅の鎧に矢負ひ大刀佩きながら、禮盤に上つて、聲高に觀音講の式をたゝめかして讀む。判官は、式は觀音講、形は毘沙門講。あなたつと恐しといひければ、兵共皆笑ひけり。さても勇士等、西國の軍の門出に、勝浦・勝宮に着く。今また講座に着す。事に於て勇あり。昔八幡殿の、奥州を攻められけるにこそ、剛臆の座をば分けられけれ。今の軍兵、一人も洩れず講座に着く。平家を亡さん事、仔細なしとぞ罵りける。それより屋島へ打つ程に、中山路の道の末に、貲布の直垂に、立烏帽子立文持ちて、足早に行く下種男あり。宗家の者と見ゆ。判官馬を早めて、追付き問ひけるは、汝は何者ぞ。何れの所へ行く人ぞと。此男、判官とは夢にも知らず、國人ぞと思ひて、是は

京より屋島の方へ下る者なりと答ふ。京よりは、誰人の御許より、屋島の何れの方へぞと問へば、いや只というて、最分明ならず。判官賺し問はゞやと思ひ、是は阿波の國の者にてあるが、屋島の大臣殿の御催に依つて參る者ぞ。誠や九郎判官といふ者が、源氏の大將にて下るなるが、淀の河尻にて舟揃して、今日明日の程に、屋島の內裏へ寄すべしと聞けば、御邊は京より下り給へば、定めて見給ひぬらん。勢いくら程とか申すなど問ひて、晝の破子食はせ、よく〳〵心を取つて後、さても御邊は、誰人の御使ぞと問ふ。是は六條攝政殿の北の政所より、大臣の味方へ申させ給ふ御文なりと申す。御文には、何事をか仰下さるゝらんと問へば、下﨟は、いかでか御文の中を知り奉るべき。御詞には、源氏九郎大夫判官、既に西國へとて都を立ちぬ。波風靜まりなば、一定渡るべし。さしも鬼神の如くに畏恐しゝ木曾も、九郎上りぬれば、時日を廻らさず亡びぬ。恐しき者に侍り。城をもよく構へ、兵をも催し集めて、御用心あるべしとこそ申させ給ひつれば、御文も、定めて其御心にこそ候らめ。誠に淀の川尻には、軍兵滿々て雲霞の如し。六萬餘騎が二手に分けて、三川の守九

郎判官兄弟して、四國・長門より挾みて、下るべしと披露しき。波風止みなば、今日明日の程には、軍は一定あるべし。急ぎ〳〵屋島へ御參りあるべしとて、ぬけ〳〵と判官に相積きて行く。さて御邊は始めて下る人か。先々も下り給へる人かと問へば、六條攝政殿基通公の北の政所と大臣殿とは、御兄弟の御中にてましませば、西國の御住居御心苦しく思召し、源氏上洛の後は、都の有樣、人の披露聞召すに隨うて仰せらるれば、常に下向するなりといふ。さては屋島の城の有樣は、よく知り給ひたるらん。誠や竟究の城にて、敵も左右なく寄せ難き所と聞くは誠か。あはれさやうの城にて高名をして、勳功に預からばやといへば、男がいひけるは、是は敵に聞すべき事にあらず。味方へ參らるれば申す。源氏が知らでこそ能き城とは申せ。事もなき所なり。あれに見ゆる松原は、むれ高松と申す。彼松原の在家に火をかけて、鹽干潟に付いて、山の側に打添うて渡らば、鐙鞍つめのびたる程なり。百騎も二百騎も、鹽花蹴立てゝ押寄せば、あは大勢の寄するはとて、平家は、汀に設け置きたる舟に乘りて沖へ押出さん。內裏を城にして戰はゞ、無念の所なりと、細々と語りけり。

判官是を聞き、誠や。無念の所や、然るべき八幡大菩薩の御計らひなりとて、都の方を拜みつゝ、やあ男め。我れこそ九郎大夫判官よ。其文參らせよとて奪ひ取り、海の中に投入れて、男をば、中山の大木に縛り上げてぞ通りける。其日は阿波の國坂の東西打過ぎて、阿波と讃岐の境なる、中山の山口の南に陣を取る。翌日は引田浦・入野・高松の鄕をも打過ぎて、屋島の城へ押寄せたり。

源平軍物語卷第十二終

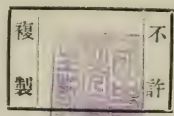
大正三年八月十二日印刷
大正三年八月十五日發行

國史叢書 源平軍物語 一

定價金一圓

不許複製

編者 黒川眞道

發行者 國史研究會
右代表者 小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地

印刷者 椚山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 國史研究會
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番